

昭和31年度 国立国語研究所年報

雑誌名	国立国語研究所年報
巻	8
発行年	1957-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1328/00001168/

昭和 31 年度
国立国語研究所年報

— 8 —

国立国語研究所

1957

は　じ　め　に

昭和31年度は、国立国語研究所の設置法が出てから第9年目に当る。創立当初から、研究所では国民の言語生活の実状を明かにし、国語問題解決の基礎資料を得るために課題を定め、グループ研究によって仕事を進めて来た。

その仕事のなかで、まとまった研究については、研究所報告、研究所資料として、別に公刊して来ているが、研究所で一年間にどのような仕事をして来たかの全体を明かにするのが、この年報の役割である。本年報によって、昭和31年度の研究所の研究活動の全容をとらえていただきたいと思います。年報には、研究方法、手続き等についても記してある。大方の批判をいただくことが出来ればまことにしあわせである。

昭和 32 年 12 月

国立国語研究所長　西　尾　実

目 次

はじめに

昭和31年度の調査研究のあらまし 1

話しことばの調査研究

話しことばの文型の研究 5

書きことばの調査研究

総合雑誌の用語の調査 30

雑誌一般の用語の概観調査 31

用言30語の用法 32

地域社会の言語生活の調査研究

日本言語地図作製のための準備調査 54

琉球首里方言辞典の編修 84

国語教育に関する調査研究

言語能力の発達に関する調査研究 89

言語の効果に関する調査研究

新聞の文章の漢字使用に関する実験的研究 131

国語の歴史的発達に関する調査研究

明治時代語の調査研究 187

特殊問題の調査研究 195

国語関係文献の調査 200

図書の収集と整理 201

庶務報告 212

昭和31年度の研究のあらまし

本年度も、大体、前年度からの継続の研究が多い。

話しことばの研究が重要であって、しかも急を要することは、各方面から叫ばれていることであるが、先年話しことばの特性について調査したのに引き続いて、話しことばの文法を明かにすることを始めた。これまでの文法研究は、その資料を主として書きことばに仰いでいる。しかし、話しことばは書きことばとかなり違った特性を持つものであることは、先年の研究でも明かである。そこで現実にわが国で行われている話しことばを資料としてその文法を考察して、話しことば特有の現象を明かにすると共に、従来の文法研究がとかく書きことばに傾いていることに対して新しい光を当てようとするものである。特に話しことばでは音声上の表現が大きな働きを持つ。音声上の表現のしかたに注目しながら、話しことばの文法を研究する。本年度は、まず、話しことばの文型（センテンス・パターン）がどのようなものであるか、イントネーションがどのような働きをしているかなどを中心題目として調査に取りかかった。イントネーションは一般にまだ十分な調査が行われていない分野であり、研究方法の上で、多くの困難のあることが予想される。

日本語の基本語彙を設定するための語彙調査は、書きことば研究で先に婦人雑誌を資料として日常生活の語彙を明かにしようとしたのであるが、次いで、総合雑誌を資料として、文化的な語彙についての知見を得ようとした。総合雑誌の用語については、すでにカード採集も終り、その結果を整理して、“総合雑誌の用語(前編)”を、本年度刊行した。この前編は、使用度数に基づく語彙表を中心として載せたが、細かい分析・考察は後編にゆづった。後編は、次年度（昭和32年度）に刊行する予定である。これまで、語彙調査の方法として、雑誌の種類別に従って調査・分析を行って来たが、われわれの使っている語彙全体に対しての知識を得る必要がある。そこで、文部省科学研究費の補助を受けて、本年度から、あらゆる種類の雑誌を取り上げ、そこに用いられる語彙全体についての概観をしようと試みた。社会全体に行われるすべての語彙を知る

ためには、もちろん、話しことばについても調査する必要がある、書きことばに限るとしても、単行本、新聞その他あらゆる資料に当る必要がある。しかしこのように一時に一切の資料に当ることは事実として不可能である。そこで、一応雑誌を資料とすることとした。雑誌を取り上げたのは、雑誌にはあらゆる文体の記事があり、また内容的にも、あらゆる方面のものが含まれているから、単行本や新聞に現われるようなものも、大体において包含されていると考えられるからである。話しことばに関するものは将来、何等かの方法を考えて、これをとらえることを試みようと思っている。

わが国のことばが地域によってかなりの変異があることは言うまでもないが、この地域の変異について、全国的視野に立って調べたものは必ずしも多いとは言えない。先に国語調査委員会が明治30年代に大規模な調査を試み、その成果が、“口語法分布図” “音韻分布図” として刊行されたが、その後、調査法を整備して大正年間に行われた文部省の調査は、大正の震災によって全資料を失ってしまった。そこで、地方言語研究室では、世界各国の方言調査法を検討して新たに全国的な言語変異の調査を行うことになり、調査地点の設定、調査項目の選定を行った。昭和32年度から、地方調査員に委託してこの言語地理学的研究を実施するためのあらゆる準備を本年度行った。秋田県花輪町・和歌山県新宮市・宮崎県高城町で研究所員の行った調査もこのためのものである。

国語教育研究室では、引き続き小学生の言語能力の発達についての調査を行った。これは、入学の時から卒業するまでの六年間、同一人について、その言語の各方面の能力を追跡調査しようとするものである。本年度は、その第四年目に当り、第四学年になった児童について、観察、テストを行った。中間報告として、第一・二学年当時のものについては“低学年の読み書き能力”を刊行したが、第三・四学年の分をまとめて“中学年の読み書き能力”として次年度に刊行する予定である。

言語効果研究室では、新聞文章の理解度について調査した。新聞文章を読みやすくする手段の一つとして、横書きが考えられる。この横書きが果して読みやすいものかどうかを調べると共に、漢字の字種を減らすことが読みやすさの大きな原因になるのではないかという予想から、仮にいわゆる教育漢字 881 字

で新聞の表記をまかなった場合、どれほど読みやすくなるかを調べた。被験者には中高の学生、大学生をあて、特別に作った新聞を読ませると共に、一部の人間については、オフサルモグラフを利用して読みやすさの度合を知ろうとした。

国語の歴史的研究の一つとして、現代と最も関係の深い明治時代語の調査を先年来行って来たが、本年度も、引き続き、明治十年の郵便報知新聞の語彙調査を行い、カードの収集を終って整理の段階にはいった。明治十年ごろは、文体模索時代とも言うべく、各種の文体が試みられて、まだ一般通用の文体を持たなかった時代である。そして文体と用語とはある程度関連を持っている。この当時の用語は、現在のわれわれの用語に安定するまでの過渡期の姿を示していると言える。また一面から見れば、明治以後の急激に発展して来た日本の政治や社会の成長期に発生した混乱の姿を、用語がまざまざと示している。なお表記法についても、いろいろの試みが行われて必ずしも安定していない。このような文体・用語・表記の苦悶時代を経て、やがてある程度の統一が見られるようになるので、現在または将来の日本語、またはその表記を考えるのに大きな参考資料であると思われる。

このような仕事を実施するに当って、本年度次のような研究機構をとった。

第一研究部	(部長) 岩淵悦太郎		
	話しことば研究室	(主任) 大石初太郎	飯豊毅一 宮地 裕 吉沢典男
	書きことば研究室	(主任) 林 大	斎賀秀夫 水谷静夫 石綿敏雄
	地方言語研究室	(主任) 柴田 武	野元菊雄 上村幸雄 徳川宗賢
第二研究部	(部長) 興 水 実		
	国語教育研究室	(主任) 興 水 実	芦 沢 節 高橋太郎 村石昭三
	言語効果研究室	(主任) 永 野 賢	林 四 郎 渡辺友左
第三研究部	(部長心得) 山 田 巖		
	近代語研究室	(主任) 山 田 巖	見坊豪紀 広浜文雄 市川 孝 進 藤 咲 子
資料調査室	(主任) 岩淵悦太郎		
	調 査 室	(主任) 松 尾 拾	村 尾 力 寺 島 愛
	編 集 室	(主任) 上 甲 幹 一	高 田 正 治
	文 献 室	(主任) 高 橋 一 夫	有 賀 憲 三 芳 賀 清 一 郎

なお、本年度刊行の運びに至ったものは次の通りである。

国立国語研究所年報 7

国立国語研究所報告 総合雑誌の用語（前編）

〃 敬語と敬語意識

そのほか、一年間の国語に関する諸事項を記録した "国語年鑑" を刊行し、また日本新聞協会と共編で、"高校生と新聞"（秀英出版刊）および "青年とマス・コミュニケーション"（金沢書店刊）を刊行した。また、月刊雑誌 "言語生活" は本年度末までに第66号に至った。

（岩淵悦太郎）

話しことばの文型の研究

総 説

A 調査の目的

話しことばの構造が書きことばのそれに比べて種々著しい相違をもっていることは、先年話しことば研究室が行った日常の談話語に関する概観的な調査によっても、ある程度明らかにされるところがあった。現代語の上の多くの問題が話しことばに関連をもつことはいうまでもないところだが、話しことばが構造の上に独自のものをもっているとすれば、その構造を分析整理して話しことばを確実に把握しようとすることは、現代語の改善のために欠くことのできない基礎作業である。そこでわれわれの話しことば研究室では、本年度からあらためて、話しことばの文法についての調査研究を課題として取り上げることになった。そして、その第一段の作業として、話しことばの文型をとらえることを目標として、文の構成の研究に着手した。

これまで、特に話しことばについて文法の研究が試みられたということはきわめて少ないが、上のような考え方からすれば、それは大きな問題を残してきたものといわなければならない。ただし、抽象的論理体系として文法を考えるとすれば、文法の上に話しことば独自の要素がはたしてどれだけとらえられるものか、予測は困難である。しかし、現実の話しことばの文法的事実をとらえようという立場で臨むとき、相当著しい結果が得られるであろうというのが、われわれの見通しである。なお、もちろん、この作業は話しことばの構造を解明するための作業にほかならず、やがてまた、話しことばの文体研究等にもつながって成果をもたらしことの期待されるものであると考えられる。

日本語について、文型の研究はこれまでほとんど教育・学習のためという立場でなされてきたが、われわれの今意図するところはもちろんこれと異なる。われわれの文型研究は、文法研究の一環として行われるものであって、特殊な実用的目的による限定をあらかじめ負うものではない。すなわち、話しことば

の文の形式の類型をもれなくとらえて、話しことばの文の構成について体系的秩序を見いだそうとするものである。しかし実目的による作業がこの成果の上に成り立つ可能性もじゅうぶんに見通されるところである。

B 調査の計画

文を、その内容としての表現の意図と外面に実現される形式との対応においてとらえることを基本の態度とし、外形を構文およびイントネーションの二つの面において見ることにした。すなわち、表現意図と構文・イントネーションとの組合せにおいて文の構成をとらえ、その類型を文型と見ようとするのである。

さて、われわれの作業対象のいわば要素となる表現意図・構文・イントネーションについては、それぞれ、あらかじめ解決を必要とする根本的課題が小さくない。表現意図に関しては、従来開拓されているところはきわめて少ない。内外の学者の試みもごく基本的な分析をいわず、その分類も大別にとどまっている。日本語について文の性質上の種類として一般に行われてきたものも、厳密な検討の上に成ったものとは見られず、事実の処理に当たっても決して有力ではない。構文に関しては研究が多いが、文法論の基盤の相違に従って異なる立場が示され、またそれぞれに批判がある。ことに話しことばの構文のためには、この際方法についてのじゅうぶんな吟味を欠くことができない。イントネーションについては、従来その限定のしかたもさまざまであり、型としての把握も不じゅうぶんであるといった、未整理の状態にある。このような状況に従ってわれわれはまず根本的な諸問題に取り組むことを必要とし、それらの解決あるいはそれらに関するわれわれの立場の限定の上に、作業を進めなければならない。すなわち、方法研究的な段階のために多くの努力を注ぐことを必要とする立場に置かれているということが出来る。また、方法研究的な作業がわれわれの文型研究においてははなはだ大きな比重をもつと言っていい。

こうした事情で、われわれは3か年と予定した研究計画の中で、その進行を次のようにもくろんだ。第1年度すなわち本年度においては、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれについて基礎的研究を行い、第2年度以降、それを終えた上で、それぞれの面からの文の把握の組合せによって文の構成を

明らかにし、文型をとらえる。

以上のような計画によって作業を進めるに当たり、さらにいくつかの基本的な問題が、われわれの課題の上にはある。その一、二について態度を述べる。

第一に、対象「話しことば」の範囲の限定についてである。それについて目下の文型研究に際しての態度を具体的限定のしかたで述べるとすれば、そのあらましをを次のような二、三か条で示すことができる。

- (1) 共通語の話しことばについて調査研究する。
- (2) 話しことばの特徴的領域と見られる日常的な談話語について調査研究する。
- (3) 児童語を除く。

次に、話しことばにおいては、とりわけ、それが行動として実現される場面にとばが依存する傾きが強いといえよう。発表の立場も理解の立場も、場面によって制約されるところが大きい。さらにまた、意味ないし意図とことばの形式との対応にゆれが多く、またその間に個性的なものがあらわれやすく、話しことばの表現の個性的傾向という一般的現象もある。このような事情のために、話しことばについては、場面との関連、表現の個性性あるいは個人性というような点がたいせつな着眼点になるともいえる。したがって、それらの特殊性を捨象して操作しようとする場合は、話しことばにおいてはそれに関する用意が必要である。しかし、今われわれが目ざす文型研究においては、結論として、これらの特殊性を捨象してかからなければならない。すなわち、一般的表現という限定のもとでことばを取り上げ、これを分析していかなければならない。そのための用意をもちながらわれわれは作業を進めようとしている。

C 調査の担当者

話しことば研究室の次の4名の共同研究であるが、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの基礎的研究は付記するような分担により、随時共同討議にかけて作業を進めた。

大石初太郎 飯豊毅一（構文） 宮地 裕（表現意図）

吉沢典男（イントネーション）

なお、常時、臨時筆生2名が所員を助けた。

D 調査の経過

1. 最初に調査研究の目的・計画を方針として決定し、ひきつづき、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの研究の進め方について考えた結果、あらまし、次のように定めた。

まず、表現意図・構文・イントネーション・文型に関連する従来の研究文献を検討して、われわれの計画の細部や研究方法の樹立のための参考にする。

表現意図および構文の研究のためには、初めに書きことばの資料によってあらましの見通しをつけ、次いで談話資料によってしあげを行うということを大体のいき方とする。(前記のような特殊性が濃く、表現の不整の多い談話資料によって最初から作業しようとする、非能率的な混乱を起すことも予想されるので、まず表現の比較的整理された書きことばの資料によって大体的見通しを得ることが得策であり、また、それでさしつかえない部分があると考えられるからである。)表現意図については、理論的考察によって、原理的な立場を定め、意図の分類を進めるが、具体的なことばの資料が理論的考察を支え、分類の妥当性をたしかめるために使われることになる。構文については、理論的考察と具体的なことばの資料の分析との照合によって解明に迫る。

イントネーションのためには、談話資料を用いると同時に、実験による実現について観察する。また、観察者の耳によって分析する作業に合わせて、音声分析の機械を用いてそれらの資料を観察する作業を加える。

2. 上記の方針に従い、まず関係する研究文献を検討した。最初に文献のリストを作ってそれを吟味したが、その後も逐次追加された。そのおもなものはのちの表現意図・構文・イントネーションそれぞれの報告に付記した。

3. 表現意図の作業のために、具体的なことばの資料を次のように採って吟味した。

日本文芸家協会編 創作代表選集 第2～16巻(第4巻欠)

同 戯曲代表選集 第1～4巻

うちの会話文から、対話単位700余、これを文単位に直して2,200余。

雑誌「言語生活」の「録音器」欄(談話語文字化資料)

話しことば研究室保管の談話語録音テープ

から文単位 700 余。

すべてカードに書き取って操作したが、分類の便のため、エッジパンチカード (edge punched card) を使用した。文型研究の仕事には今後すべてこのカードを使用する予定である。

4. 構文の作業のためには、次のようにことばの資料を採って取り扱った。

柳田国男	新しい国語	} (小学校用国語教科書)
山本有三	国語	
長沼直兄	改訂標準日本語読本	(外国人向日本語教科書)

から会話の文 2,100 余, 地の文 1,500 余。

このほか、談話語録音テープの資料の吟味にもとりかかった。

なお、表現意図と構文のそれぞれのために採った資料は相互に利用することもあった。

5. イントネーションについては、はじめ、談話資料、演劇のせりふ等の観察によって考察を進め、次に実験作業を行った。すなわち、次に示すような要求によって被験者に発音してもらい、そこに実現されたものを分析した。被験者は劇団「葦」の俳優男女各 3 名、すべて、20~30 歳台で東京生れ東京育ち。

実験テキストの一部

○「イワシ (鯛)」ということばを、次に書いたような気持で言ってみてください。

a. コレガイワシダ。 b. イイカ、コレガイワシダゾ。 c. コレハ
イワシカ。 d. ナルホド、コレガイワシカ。 e. ナニナニ、コレガ
イワシダッテ。(バカナヤツダ。) f. ニ、ナニナニ、「イワシ」ッテ言ッ
タカ。 g. 今夜ノオカズハマタイワシカ。ヤレヤレ。

.....

○次の文は、その時のそれぞれの気持や場合によって、調子がいろいろに違います。どんな調子があるでしょうか、一つ一つについて、できるだけ多くの調子で言ってみてください。

a. 書イテハイケマセン。 b. ソレハ鳥デハアリマセン。 c. 書イ
タラ見セテ。 d. 聞イタノニチットモ教エナイヨ。 e. ソンナコト
デキルモノデスカ。 f. アナタ、オキレイデスコト。 g. コレデイ
イノ。 h. アイツモテルンダ。 i. ダメジャナイカ。 j. コレ

デドウヤライイカナ。

.....

○「コッチヘイラッシャイ。」

- (1) 何か悪いいたずらをした子供を、母（父）親が呼びます。
- (2) その子供が自分の子供でない場合。
- (3) 子供が通りで遊んでいます。自動車が通るんで危なくて見ていられません。で、母（父）親は心配のあまり思わず……
- (4) その他。

〔注〕 以上の実験は、イントネーションをあらかじめ限定して、その範囲内について行ったものでなく、各種の音声の要素のあらわれをも見て、それらとの関連においてイントネーションの限定を考えるための資料ともしようとしたものである。

実験によって得た資料その他の分析のために、ピッチレコーダーを使用した。ピッチレコーダーは東北大学電気通信研究所永井研究室のものを借用し、吉沢が同研究室に出張して永井健三教授・佐藤利三郎助教授・大学院特別研究生佐藤利男氏らの指導協力を得て、分析された音声の波型の撮影を行った。

なお、ソナグラフによるイントネーションの分析も試験的に行ってみて、これがある程度有効であることをたしかめた。

6. 以上の作業により、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれについて成果を得たが、その内容については別項にゆずる。

7. 次年度の作業の資料として、談話語の録音を行い、これを文字化した。中学校の授業、診療室の問答、交番の問答、高校生の雑談、電話のやりとり、その他、各種の談話を採ったが、そのほか、NHKから「ことばの研究室」「朝の訪問」「婦人の時間」の対談・座談会等のテープを借用することができた。さらに、研究室保管の、先年の録音にかかる資料からも選んで加えた。文字化はカナタイプの専門業者に頼んだ。この文字化資料は、次年度において録音テープに照らして厳密な補訂を加えた上で、録音テープと併せ利用する予定である。

8. 次年度においては、本年度進めてきた基礎的研究の続行からスタートするが、次いで予定されている表現意図・構文・イントネーションの組合せによる文の構成——文型のとらえ方の具体的な見通しを早期に立てることが必要とされる。

資料は本年度採集のものに対する補充が行われなければならない。その選定

は、本年度採集のものの一応の吟味の上に方針を立ててなされなければならない。談話語資料の処理の段階にはいって、文の切り方、資料としての取捨の基準等、具体的決定を要するいくつかの課題に直面することになる。

(大石)

表現意図の研究

1. 文型は、結果として、文の形式の類型であるが、われわれは、文を、単に現象的に切り取って、その類型的形式を記述することで満足しようとするのではない。話しことばの文は、話し手がどういう意図をあらわそうとして表現するのか、その文に籠められる話し手の意図は何なのか、ということをも扱おうとしている。もともと、文は、話し手の発言のなかにあって、話し手の何らかの意図を担って表現され、聞き手において、それが正当に理解されてはじめて、その真の意味をあきらかにするとも言う。われわれは、文を扱う以上、単語の連続としての、文の外的形式を記述するばかりでなく、文が文として表現され理解される実態を、本質的に把握せねばならないが、そのすくなくとも一つと思われる重要な観点として、話し手の文表現の意図ということ、かんがえるべきではあるまいか、と思うからである。

もちろん、文は、話し手の側からの問題としてのみ、取りあげられて、本質的な問題が、万事片づくものではない。その聞き手の側からの究明も重要であり、その両者の総合をまわって、はじめてあきらかになる問題もあるにちがいない。また、とくに話しことばとしては、言語主体において、内的にも外的にも大きくはたらくところの、いわゆる「場面」についても、考慮を深くはらうべきであろう。一方、われわれは、文の内部の、こまかい要素としての、単語や文節について、その結合や関係の法則をも、無視してはならないであろう。話しことばの本質、また、その文における法則の探求者にとって、配慮しなければならない要素は、ほかにもあるであろう。

文型は、それらの要素のうちの、どれを重視するか、また、一次的にどの要素を把握して現象を整理し、二次的にどれとどれとの要素をとりあげて、こまかく整理するか、それぞれ、ことなる観点と、ことなる目的に応じて、結果の

まとめかたが、ことなつて来るはずのものである。ここに、われわれは、文型を、話し手の表現意図に対応する文の形式の類型として、とらえることをころみようとしているのである。それは、ひとつには、文型を、結果として明示することにより、究極の目的を置かず、話しことばの文法的研究の一環として文の形式の類型をかんがえよう、としているからでもある。いずれにせよ、この、話し手の表現意図を、いかにかんがえ、いかに分類するか、それが本年度の仕事の重要な一部であつた。その概要を、以下に、述べようとする。

実は、しかし、その前に、われわれは、言語主体としての「話し手」「聞き手」という概念の、雑多な様相を直視し、ここに扱おうとする話し手は、そのうちの一様相であるところの、表現者一般としての話し手であることを、あきらかにせねばならない。聞き手に関しても同様である。また、これらにかかわる「場面」の問題についても、類似の事情がある。論述されねばならない基礎的課題は多く、決定を迫られる、いくつかの基本的態度がある。これらについては、その一部に触れるほかは、他日を期して、ここには述べない。

2. われわれは、表現の意図を、つぎのごとく分類しようとおもっている。

○言語主体の表現意図	A. 話し手の表現意図	I. 聞き手にもとめるところのない表現意図	(1) 感覚・感情の表明 (2) 叙述・判断の表明
		II. 聞き手にもとめるところのある表現意図	(3) 発言要求の表明 (4) 行為要求の表明
	B. 聞き手の表現意図	III. 受け手・答え手としての表現意図	(5) 受容応待の表明 (6) 返答の表明

これは、一見、二分法をとるようであるが、対立的な二項の分類という二分法をとるものではない。「A. 話し手の表現意図」の分類は、話し手が聞き手に対して、文表現を以て、何ごとかを求めるところがあるか、ないかで二分してある。ⅡはⅠよりも、相手に迫る力の強いものであり、内部での、(1)(2)(3)(4)も、この順に、次第に相手に迫る力の強い表現意図の表明となる。また、ⅠⅡおよび(1)(2)(3)(4)の名称については、その代表的ないし特長の内容を名称としたのであって、この名称が、よくその内容の全般を、おおうものではない。

例えば、呼びかけの「山本君！」は、注意をこちらに向けることを求めること、対話関係を結びうるような状態を構成するのを求めること、などがその特

徴的意図である。これは、いずれにせよ、特定の状態を求めるのであって、発言の要求が目的ではない。しかし、聞き手が話し手の方に注意を向けるということをするのが求められ、その点で、行為要求的である。ただ、きわめて内的消極的行為要求の表明と言わねばならない。また「きっと明日は雨だ」は、事実に対する推定を述べているから、叙述判断の一種であることは、いうまでもないが、「きっと明日は雨だね。」は、事実に対する推定に、さらに、聞き手にこれを持ちかけ、または、聞き手にその推定を押しつける、などの意図が、くわわっている。「ね」という終助詞のはたらきは複雑で、ニュアンスは雑多なものがあるが、これを要するに、かような表現意図は、ⅠからⅡへの移行の段階にあるものということができる。さらに、「きっと明日は雨だね？」という表現は、この事実に対する推定について、その確認に関する判定を、聞き手に要求するところの質問である。つまり、Ⅱの(3)発言要求の表明に属し、「きっと明日は雨だね。」よりも一層聞き手に求める意図が強いのである。

かように、移行的段階的区分として、Ⅰ・Ⅱの各項は位置し、その名称も、もっともおおきな特徴的部分の所有するものを代表とするのであるが、AとBとの関係は、そのような移行的段階的区分の関係に立っていない。「B. 聞き手の表現意図」とは、話し手の文表現を受けとめ、これに、なんらかのかたちで応答する言語主体の表現意図を言う。ゆえに、AとBとは、発言の主体と発言の方向を異にし、その点で、異質な表現意図である。ここに問題とすべきは、「聞き手」の概念規定である。例えば、「こっちへおいで」と話し手に言われて、その表現の内容を、そのまま表面的に、＜コチヲノ方向ニ来ナサイ＞ということだと理解するにとどまる主体であるばあいと、話し手の要求に応じて、行為として《行ク》前段階で、「行きます」と答える主体であるばあいと、すくなくとも、ふたつの言語主体の様相がある。実は、それに応じて、「話し手」という言語主体も、また、言語的「場面」も、それぞれの区別されるべき様相が、みとめられる。いまは、便宜、「話し手」「聞き手」「場面」を以て、一括しておくにすぎない。

3. さて、以上のような、表現意図の分類は、日本語の文表現に籠められる、言語主体の表現意図の、すべての可能態を、話し手が聞き手に対し、また逆に

聞き手が話し手に対して、表現し応答するという点から、分類したのであるが、K. Bühler の「表出」「演述」「訴え」という言語の三機能についての考えや、A. Marty の「判断表現」「情意表現」の二区分についての考察や、W. Wierver のコミュニケーション理論などを参照しても、日本語ばかりに有効な分類であるとは、おもわれない。しかし、当面、日本語のはなしことばに関してはどうか。これらの表現意図に対応して、文はどのような形をとってあらわされるのか。また、あるいは、意図に対応する文は、類型的差別がなく、きわめて自由に種々さまざまな形をとるにすぎないのか。これを、おおまかに見ると、要するところ、やはり、表現意図に対応して、ことなる文の類型的形式があるようである。

例えば、(1)「ひどい雨!」、(2)「雨がひどい」、(3)「雨はひどいかい?」、(4)「うんと降れ」、(5)「ふん、ふん」、(6)「ひどいよ」などの文がありうるが、これを、なんらかの観点から、類型化するならば、その対応する文形式が見いだされるとおもわれる。われわれは、そこに、構文およびイントネーションの形式という、二つの観点を設定した。だから、もしも、(1)から(6)までが、すべて、文節関係として、たとえば二文節を二項とする文（たとえば、「ひどい雨」）という構文しか持たないとするならば、構文の面からは、意図に対応する文の類型的形式は、見いだせないかもしれない。しかし、それでも、たとえば

(1) ヒ┐フ┐イ┐ア┐メ (2) ヒ┐フ┐イ┐ア┐メ (3) ヒ┐フ┐イ┐ア┐メ などのよ

うな、イントネーションでの区別が、一般的に、みとめられるとするならば、イントネーションにおいて、意図に対応する文の類型的形式が、見いだされるであろう。万一、このような、イントネーションによる区別さえも存在しないとすれば、この二つの観点からは、文の類型的形式を取りだすことができない、ということになる。しかし、日本語では、大体のところ、このいずれかひとつまたは両方で、表現意図に対応する文の類型的形式を持つようである。それではなければ、意図の伝達理解に苦しむか、すくなくとも、あまり便利ではないだろうから、日本語ばかりでなく、相当おおくの国語では、おそらく、このいずれかで、意図に対応する文の類型的形式を持つのではあるまいか。

とにかく、大体のところで、対応があるとすれば、こまかい表現意図の分化に対してはどうか、また、こまかい表現意図の分化とは、どのようなものなのか、われわれは、次第に、現実の文形式との相関関係を、重視しなければならない。もともと、表現意図は無限でありうる。移行の段階的性格を分類各項の本質に、になわせるとかんがえたのも、その無限な表現意図の相互の関連を、動的に無理なく把握したいからであった。しかし、無限な意図に対して、文としての類型的形式は、きわめてかぎられている。意図に対応する文形式に、同一の類型があるとしても、それは、当然のことかも知れない。のみならず、構文とイントネーション形式以外の要素が、類型的の区別を生む要因であることがあるかも知れない。そして、さらに、現代日本語の共通語はなしことばで見いだされる文型も、古代で、方言で、書きことばで、おなじく見いだされるとは言いきれない。外国語では、さらに、別問題である部分が、おおいであろう。それは、意図の分化そのものも、また、対応する文型も、それぞれ、こまかい部分では、各国、各時代、各地方、各位相で、それぞれ独自の分化をとげている可能性がつよいし、そこに、それぞれの独自性があるとしても、おもわれるからである。ただ、内的な表現の意図そのものにおいては、大まかなところでは一脈通ずる底流を、おそらくは、見ることができるであろうとおもわれる。

4. さて、かような、表現意図と文形式との対応は、しかしながら、別の意味において、つねに成立するとは、言いがたいばあいがある。すなわち、個別の場面においては、つねにおなじように成立するとはなまらないのである。たとえば、「ひどい雨！」で<傘を貸してくれ>をあらわし、「いい髪をしていらっしゃる」で<あまりお美しいとは申せませんな>をあらわし、「火事だ！」で<ああよかった>をあらわすばあいもありうる。このような、文がふくむとかんがえられている、いわば裏の意味を生むところの表現意図は、まえに述べて来た表現意図とは、別の表現意図なのである。前述の表現意図は、文の「陳述」論議でとりあげられて来たことのうち、言語主体の陳述するはたらきそのものと、ほぼおなじものであって、ここにとりあげる裏の意味を生む意図というものは、この陳述的な表現意図に、さらにつけくわえることのできる、個別の意図なのである。これを仮に、個別表現意図と呼び、これに対して、前述

の陳述的表現意図を、一般的表現意図と呼ぶならば、われわれが、ここであつかおうとする「文」というのは、この一般的表現意図の方に対応して存在する形式なのである。これは、個別的表現意図によって成立する文とは、一往明確に区別しておく必要がある。個別的表現意図は、かならず、一般的表現意図を担う文にともない、現実の場面で、真に文を成立させるけれども、それは「文」形式と対応せず、きわめて個別の、内的心理的コミュニケーションによって暗示了解される。「君は頭がいいよ」が、「君はバカだよ」をあらわすということは、個別の場面の言語主体間で成立するのであって、意図と文形式との社会的習慣としての対応は見られない。もちろん、われわれが現実の談話で、相手の言うことを、真に了解するためには、個別的表現意図までを了解することが、のぞましい。これがために、ときとして、個別的意図がその対応する文形式を固定させ、一般的表現意図に対応する「文」として成立するにいたるばあいがある。しかし、当面、この中間段階も文型研究の中心課題ではない。意図と文形式との対応がないというのは、種々な意味での「場面」や言語主体の心情や、談話の文脈のなかでの、その文の位置までもを、ふかく忖度するのではなければ、その文がわからないということであり、それだけ、その文の話し手の意図と形式との対応が、非社会習慣的個別的事実にとどまるということであって、それゆえに、すくなくとも、現状では、文型研究の中心的課題とすることができないとおもわれる。また、日常談話を中心とする、当面の作業にあっては、その日常性ということ自体、社会習慣的一般的表現意図を、取りあげることを前提としている。

これらの意味で、いま、われわれは、表現意図のうちでは、一般的表現意図を、主として扱うことに、自覚的に限定する。逆に言えば、この一般的表現意図に対応する文形式の類型を、文型としてかんがえよう、としている。すなわちまた、言語主体については、話し手聞き手が、いずれも個別者として存在するのではなくて、特定の社会習慣内での、一般者としての、表現者理解者として存在するのである。かようなかんがえによるならば、文型という概念は、すこしくこまかく規定されて、「一般的表現意図に対応して、一般者としての話し手聞き手によってもちいられる、文形式の類型である」と言いうるのであろう。

5. 表現意図の面から、述べられるべき主要部分の大略は、以上のごとくであるが、論述としては、あまりにおおくのことを、あとに書きのこした。考察や研究調査のどこかぬところ、不十分なところもあるし、年報という性格によるところもある。参考文献の主なもののみを付記する。

山田孝雄「日本文法論」ほか。松下大三郎「改選標準日本文法」。橋本進吉「国語法研究」ほか。時枝誠記「日本文法 口語篇」ほか。中島文雄「文法の原理」ほか。小林智賀平「マルティの言語学」。E. サビア（泉井久之助訳）「言語」。W. Wierzbicka: Recent Contribution of the Mathematical Theory of Communication. C. Morris: Signs, Language and Behavior. 服部四郎「具体的言語単位と抽象的言語単位」（「コトバ」復刊2—12）。「意味に関する一考察」（「言語研究」22・23号）。渡辺実「叙述と陳述」（「国語学」13・14輯）。芳賀綏「陳述とは何もの？」（「国語国文」23—4）。奥村三雄「辭の形態論的性格」（「国語国文」25—9）。佐治圭三「終助詞の機能」（「国語国文」26—7）。B. Bloch: Studies in Colloquial Japanese.

（宮地）

構文の研究

1. はじめに

ここで構文とは従来文の構造とも言われてきたもので、文の構成要素の配列や組合せの方式をいうのであるが、話しことばの文型を調査研究する際、構文が重要な一つの面であることはいうまでもないであろう。

たしかに話しことばの文についてみると、構文の類型的な把握は可能であると思われる。つまり話しことばの文を構文という面から類型的に把握することができるとと思われる。すでに言われているように主語・述語の関係にある文にしても、

風が 吹く。 （何がどうする）

花が 美しい。 （何がどんなだ）

私が 当番です。 （何が何だ）

のようなものがあり、それぞれさらに連用修飾語（目的語、補語などを含む）をとって表現が複雑になる際の構文に差異があることは人の知るところである。あるいはまた、

そこに 本が ある。 動物園に 虎が いる。

などの場合には「……に、……が、述」の順序が一般的であるともいわれる。恐らく話しことばの構文は書きことばに共通なものが多いであろうが、また話しことば特有のものもあるであろう。このたびの調査においては話しことば特有のものを含めた話しことばの構文を明らかにしようとするのである。

もちろん文型のための構文の考察・調査であるから、構文の細部にわたっては考察・調査することをしない。

2. 調査法

本年度は調査法の検討に終始した。構文をどのような方法によって調査すべきであるかということは統辞論の問題にもなることであって簡単に決定することは困難である。もちろん、現在までに日本語の文型についての調査研究はなかったわけではないし、文型のための構文の考察もあったのであるが、それらはいずれも外国人に日本語を教えるためというような特定の目的のもとに行われたり、あるいは不十分な調査方法によって行われたと考えられるものが多い。われわれは従来の文の構造に関する諸説を検討し、また実際の資料についてみて、目的にかなり方法を見出そうと努めた。

(1) 従来の考え方

文型のための構文研究における従来の考え方をみると、大きく二つの方向があったと考えられる。つまり以下のようなことになる。

(a) 文の構成要素をその叙述内容（の事柄）に即して予め幾つかに定め、それらの要素が含まれているかどうかをみるという方法がある。英文などでも5W1Hなどということが言われているが、このように文の構成要素を幾つかに定め、それらに基いて調査することは不可能ではない。しかしこの方法は文の表現形式というよりは表現内容に重点がおかれる結果になりがちで、構文の調査という観点からは疑問が残る。

(b) 次に、文の構成要素の相互関係に幾つかの関係方式を認め、その相互関係にある構成要素の配列や組合せの方式によって調査しようとする方法がある。いわゆる主語・述語・修飾語・独立語などの相互関係によって行おうとするのである。この場合、比較的に文の構成要素(成分)の関係を表現する助詞や助動詞を重視し、それらに基こうとする方法がある。「雨が降ります」は「……ガ

……マス」,「犬が猫を追う」は「……ガ……ヲ……」のような具合になるわけである。また比較的に主語・述語・修飾語・独立語などの相互関係そのものを重視する方法もある。前例の文は「主語・述語」「主語・連用修飾語・述語」というように構文が表示されるわけである。この二つの方法は結局は同様な考え方に立つものであると認められる。前者は極めて便利であるが、構文要素の相互関係が不分明になる恐れがある。後者は余りに大ざっぱである。ともに一長一短があると思われる。

このようないわゆる文の成分の相互関係にどのような種類を認めるか、また文の成分がどのような関係をもって文を成立させているとみるかなどについては学者によって説が一致しないが、この(b)の考え方は構文の調査という点からは合理的でもあり、便利でもあるので、多くの人がこの方法を採用している。

(2) 本調査の方針

われわれは諸説を検討し、構文の調査としては、基本として(b)の方法を採用した。そして、主語・述語・修飾語・独立語などの相互関係を重視しつつ、かつそれらがどのような辞によって機能を果しているかに着目して調査を進めることにした。たとえば前例の「雨が降ります」は「主語ガ・述語マス」,「犬が猫を追う」は「主語ガ・体言的連用修飾語ヲ・述語動」のように表示される。「子供まで死んだ」は「主語マデ・述語動+タ」,「子供まで殺した」は「体言的連用修飾語マデ・述語動+タ」というように表示される。

また文末部は日本語表現にとって重要であると思われるので特にこれを重視することにした。たとえば「私が歌う」「人が集まる」の二つの文表現をそれぞれさらに細かく分化させた表現(たとえば「私が子守唄を歌う」「人が野原に集まる」)の構文には差異が認められるが、これは文末述語動詞と関係があると思われる。

さて、このいわゆる文の成分の相互関係(格)については諸説を検討し、かつ話しことばに即して補訂して一応の成案を得ているが、細部についてはまだ決定をみていない。

3. 調査の規模

文型のための構文のために具体的な文表現をどのような単位によって取り扱

うべきかという問題がある。われわれは述語中心に文の第一次的な成分を重視し、まずこれら一次の成分の相互関係による構文をみようとした。ここで一次の成分というのは大体において「談話語の実態」(国立国語研究所報告8)における考え方による。つまり

私は／丸善に／文法の本を買いに／行った。

において、斜線によって区切られている一つ一つは一次の成分であるとみなす。「文法の本を買いに」の内部についてさらに見ていけば、「本を」は直接には「買う」に関係するのであって「行く」に関係するのではないから二次の成分であるとする。「文法の本を」における「文法の」は「本」に関係するもので「行く」との関係はさらに間接的になる。「文法の」は三次の成分と考えることができる。われわれはこのような「次」の見方によるとらえ方を基本としてまず文の第一次の成分の関係によって文型のための構文を調査することにした。

話しことばには書きことばに対して異なった表現があるので、実際には構文の調査にもかなり異なった捕え方が必要である。たとえば、

水泳はね、何しろ山ん中で育ったでしょう、／山田君はうまいけど例外ですよ、／とてもへただから、海は／にがてですよ。

という表現において、ある意味では二重斜線で区切られた一つ一つが文であるとも考えられるが、最初の「水泳はね」は「とてもへただから」にかかっているとみることもできる。論理的な意味の関係のつながりを考えれば、むしろ後者のようにみる方が自然である。この表現は全体で大きな一文をなしているともみなした方が話しことばの実際になうであろう。

水泳はね……………とてもへただから／海は／にがてですよ。

と考え、斜線で区切られた一つ一つを一次の成分とみなし、それらの相互関係においてこの文の構文を捕えることが必要であると思う。「何しろ……例外ですよ」までは最初の一次の成分内にある挿入文であるとみなすのである。かくして次に必要に応じて一次の成分の内部の構造を考察しようと思う。

4. 今後の見通し

本年度は全く調査方法の検討に終始したが、来年度はこの調査方法をさらに

具体的な話しことばの文例について検討しつつ、種々の条件における話しことばの構文を明らかにしたいと思う。このようにして話しことばの文型という面から構文を明らかにし、次に表現意図やイントネーションとの総合的立場において、話しことばの文型を考察・調査したい。

5. 参考文献

特に参考にした主な文献名は次のとおりである。

山田孝雄「日本文法学概論」ほか、松下大三郎「改撰標準日本文法」、橋本進吉「国語法要説」ほか、時枝誠記「日本文法 口語篇」ほか、文部省「中等文法」、岩淵悦太郎「新しい口語文法」ほか、佐久間鼎「現代日本語法の研究」ほか、鶴田常吉「日本文法学原論」、青年文化協会「日本語基本文型」、佐伯梅友「国文法—高等学校用—」ほか、遠藤嘉基・松井利男「わたくしたちのことばと文法」、三尾砂「国語法文章論」、藤原与一「日本語方言文法の研究」、阪倉篤義「日本文法の話」、三上章「現代語法序説」ほか、林大「文の構造」（国語学辞典）ほか、永野賢「学校文法（新国語国文学講座）」ほか、水谷静夫「待遇表現の基礎」、加藤十久雄「文型に関する一考察」（言語研究 29）、Otto Jespersen: *Analytic Syntax*. Bernard Bloch: *Studies in Colloquial Japanese*. Charles C. Fries: *The Structure of English*.

（飯豊）

イントネーションの研究

1. はじめに

「文型」を表現意図・構文・イントネーションの三者のからみ合いでまとめようとするとき、イントネーションの問題としては、およそ次のようなことが考えられる。

- (1) イントネーションを、どのように考えるか

（形式観や種類分けなどについて）

- (2) イントネーションを、「文型」にどのように参加させるか

本年度の仕事は、これらの点について考えることを中心として進めた。まず従来の研究にみられたイントネーション論を文献によって学び、形式観などについての検討の資料とした。また、演劇資料を観察したり、内省法によって問題を考え、客観的な観察としてピッチレコーダーによって材料を分析したりした。これらの問題については、まだまだ残された問題点が多くあり、考え方も

不十分な点が多いが、今後このように考えて行こうとしているということを、一応述べてみようと思う。

2. イントネーションをどう考えるか

イントネーションということばの使い方は、人によって一定していないのが現状である。‘intonation’は、外国の学者たちは「文全体の高低関係」という意味に用いているようであり、強弱という要素である‘emphasis’または‘prominence’‘intensity’と並べて使われている。わが国では、「文音調」(注1)と訳されて使われたり、強弱を含めた概念として使っている人もある(注2)。また、文全体の調子でなく、文末・句末・文頭など一部分にみられる高低関係をさして、このことばを使う人もみられる。それぞれ、文末のイントネーション、句末のイントネーション、文頭のイントネーションなどと呼ばれているのがそれである(注3)。

イントネーションを高低関係としてみる立場について考えてみると、文全体の高低関係とみるのは、いわば広義的な使い方であり、部分的な高低関係とみるのは、いわば狭義的な使い方であるということができようか。

われわれは、この狭義的な使い方に従った見方をとり、なお、文末・句末・文頭の全部を「文型」の仕事に取り入れるのではなく、文末のイントネーションだけに限定して仕事を進めて行こうと考えている。句末や文頭のイントネーションも、イントネーション独自の問題としては大切な問題であるが、いわゆる陳述の違いをあらわすと考えられている文末部分にあらわれるイントネーションは、句末や文頭に比べて「文型」に対する重さがきわめて大きいと考えられる。そこで、さしあたっては、文末だけに限定してみて行きたいと思う。

「文末のイントネーション」——すなわち、「文」の終りに該当する「発話段落」にみられる高低変化は、同一言語形式の「文」が「発話」としてあらわれる際、種々の高低変化の相対的対立としてあらわれ、意味の違いをあらわすという働きを持っていると考えたい。(注4)

たとえば、「イワン」という語が発話されるとき、ふつうに聞かれる高低関係は、

a. イワシ (だいたいアクセント形式に従ったもの)

b. イ[┐]ワ[┐]シ (シがワと同じ高さで始まり、終りへかけて上昇するもの)

c. イ[┐]ワ[┐]シ[┐]ー (付随した長音が高められてあらわれるもの)

d. イ[┐]ワ[┐]シ[┐]ー (付随した長音が低められてあらわれるもの)

などがあると考えられよう。

また、ダメダネという文が発話されるときに、ふつうに聞かれる高低関係は

a. ダ[┐]メ[┐]ダ[┐]ネ (アクセント形式に従ったもの)

b. ダ[┐]メ[┐]ダ[┐]ネ[┐] (ネがダと同じ高さで始まり、終りへかけて上昇するもの)

c. ダ[┐]メ[┐]ダ[┐]ネ (ネ全体が高められてあらわれるもの)

d. ダ[┐]メ[┐]ダ[┐]ネ[┐]ー (付随した長音が低められてあらわれるもの)

などがあると考えられよう。(いずれも、これ以外に形式がないということではない。)

そして、「イワシ」にみられる4形式についてみると、

aは、ごくふつうに述べられた発話

bは、イワシカ?またはイワシト言ッタカ?といった質問

cは、イワシダッテといった、いわゆる反問

dは、ナンダコレガイワシカ(ダッテ)といった、ある感情のこめられた発話

といったような、意味の違いが対応していると考えられる。

また、「ダメダネ」の4形式については、

aは、ごくふつうに感情をこめないで言った発話

bは、ダメダネト言ッタカ?という質問



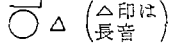

cは、相手に同意を求めるときとか、強めの気持がこめられた発話

dは、ある感情がこめられた発話

といったような意味の違いが対応していると考えられる。

このような、発話における意味の違いの対立は、それぞれの高低形式の違いによる対立として、一番終りの部分にあらわれているとみることができる。そこで、上の例について、終りの部分を取り出してみると次のようである。

イワシの場合

- a. 
- b. 
- c. 
- d. 

ダメダネの場合

-  (平調)
-  (昇調)
-  (昇調)
-  (降調)

ところで、これらの文末部の特徴を、その形式から分けて、何々調といった呼び方で呼ぶことができる。すなわち、a形式は、アクセント形式に従った平らな調子であるから「平調」、b・c形式は、何れも上昇的傾向を特徴とするから「昇調」、d形式は何れも下降的傾向を特徴とするから「降調」と名付けてみようと思う。(a～dに示した形式がイワシ、ダメダネの発話のすべての形式ではないことは先に断ったが、細部の点は別にしても、イントネーションは大体この三種類に分けられるとみてよいと思われる。)

なお、「昇調」の中でも、それ自身内部での上昇的傾向を持つものと、それ自身全体が高められるものと、付随した長音が上昇的傾向を持つものの違いが認められ、この違いは、具体例で示したように、意味の違いに対応しているのがふつうのように思われる。この点についても今後の調査分析に待とうと思う。降調についてもさらに詳しい形式観が検討される必要があろう。

ここにあげた「平調」は、いわゆるアクセント形式に従った形式(注5)とみえることは、前に述べたが、この「平調」を、今仮りに「ゼロ次のイントネーション」と呼ぶことにすると、「昇調」「降調」は「ゼロ次」に対立するヴァリエティーとしてとらえられるものであり、「ゼロ次以外のイントネーション」と呼ぶことができる。

ここに要約して述べたイントネーション観を、もしずっと押し進めて行くことが可能であると仮定すれば、文末のイントネーションの形式は、およそ次のようにまとめることもできるであろうか。

- { ゼロ次のイントネーション……………平調
- { ゼロ次以外のイントネーション…………… { 昇調
- { 降調

以上説明したような形式観と手続きの方向にそって、更にイントネーションについての考え方を確かなものにして行きたいと考えている。

(注)

- 1) 服部四郎「音声学」 2) たとえば、石黒魯平「音声学通論」 3) たとえば、国立国語研究所報告 8「談話語の実態」や川上葵「文頭のイントネーション」(「国語学」第25輯)など。 4) ここで「文」「発話」「発話段落」というのは、服部四郎「具体的言語単位と抽象的言語単位」(「コトバ」復刊第2巻の12号)に言われたところによる。 5) アクセント形式から考えれば、文末の音節は、高く平らと、低く平らという二種類しかないと考えられる。これの反映が、イントネーションとして「平調」である。

3. 音声分析機によるイントネーションの追求

すでに、「調査の経過」の項に述べた通り、文末のイントネーションの様相を客観的に分析したり、発話と聴覚との対応をみたりするために、ピッチレコーダーによって、実験を行なった。分析されたピッチ変化の波型は、オシログラフペーパーに投影され、これを現像したものがピッチグラムである。ここに、ピッチグラムの 2, 3 を示す。

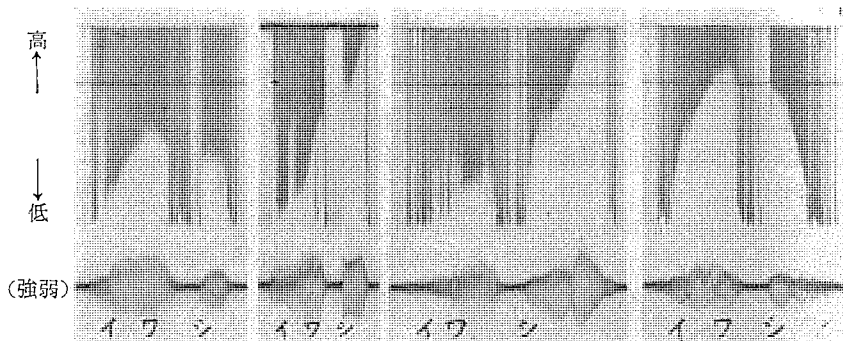
ピッチグラムの見方は、およそ次のようである。

上三分の二の巾のところに黒白の境界によってあらわされている曲線が、高低変化を示している。下三分の一のところにでている波状の模様によってあらわされているのが、強弱変化である。高低変化を示す部分に、横に入っているいくつかの平行線は、ピッチの周波数目盛りであり、ここに掲げたピッチグラムでは、被験者が男性であることを考慮して、60サイクルから 250 サイクル前後の巾に記録できるよう、ピッチレコーダーを調整監視して、周波数目盛りもそれに合せてある。

ピッチグラムについての整理分析が、まだ十分に済んではないが、だいたいのところ、聴覚との対応も認められるし、形式観についての傍証とするに足る資料とすることができるといふ見通しがある。詳しい結果については、他の機会にゆずる。

〔1〕「イワシ(鰯)」のピッチグラム

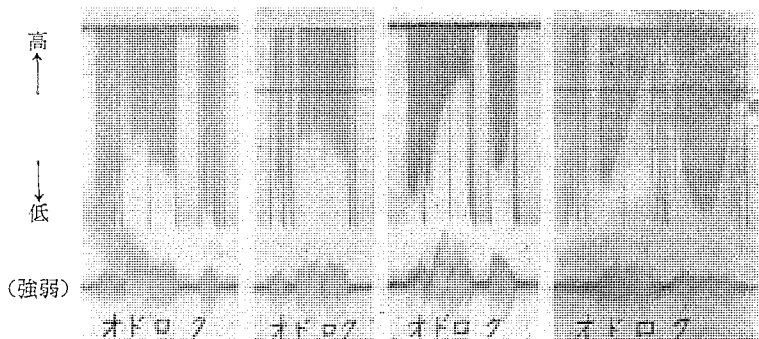
(A. K 32歳男性。)



(注) (イ)ふつうの平仮の気持で (ロ)イワシカ?と質問したとき (ハ)イワンダッテと反問したとき (ニ)ナンド、コレガイワシカと軽蔑の気持がこめられたとき

〔2〕「オドロク(驚く)」のピッチグラム

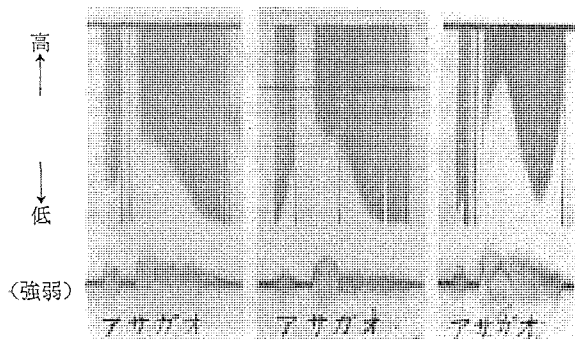
(A. K)



(注) (イ)アクセント (ロ)ふつうの平仮の気持で (ハ)オドロクカ?と質問したとき (ニ)オドロクダッテと反問したとき

〔3〕「アサガオ(朝顔)」のピッチグラム

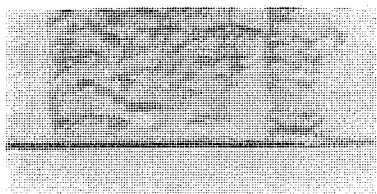
(A. K)



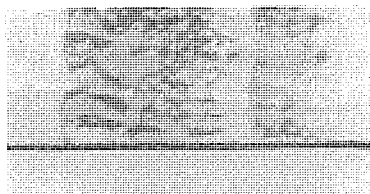
(注)
(イ)アクセント
(ロ)ふつうの平仮の
気持で
(ハ)アサガオカ?と
質問したとき

なお、機械による分析としては、「ソナグラフ」による方法も考えられる。次に掲げる記録図（ソナグラム）は、録音テープに収めた被験材料を2倍の早さにして、ソナグラフの回路に導入し、高低の目盛りを拡大強調してその高低変化を記録したものである。これによると、細かなことはよくわからないが、だいたいの高低変化はつかまえることができるようである。なお、音響学的には検討を要する問題が残されており、今後吟味を加えたいと思う。

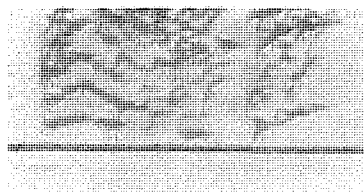
〔ソナグラム〕



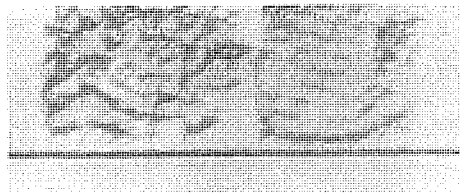
メ ガ デ タ



メ ガ デ タ



メ ガ デ タ



メ ガ デ タ

(注) メガデタ（芽が出た）という文を、それぞれに付した高低変化のように発話したときのもの。横につながっている直線（ベースライン。周波数の目盛のゼロの線）のすぐ上に出ている～の波形がピッチの高低変化を反映していると考えられるから、それぞれの高低変化をみることができる。

4. 「文型」にイントネーションをどのように参加させるか

以上のように、文末のイントネーションを考える場合、表現意図・構文・イントネーションの三者総合によって「文型」を考えようとするわれわれの仕事にとって、イントネーションはどのようにからみ合わされたらよいかということについて、今の段階における見通しは、およそ次のようである。

他でも述べられているように、イントネーションは、「文型」を構成する要

素としては、表現意図・構文に比べれば、やや下位的な要素であろう。

表現意図と構文との対応関連によって位置づけられた、一つ一つの言語形式に種々の高低形式がそえられて、「発話」におけるいろいろの意味の違いが生ずるのである。イントネーションとしては、この表現意図と構文とによって分類され位置づけられた言語形式と、どのように関係し合っているかということを追求して行けばよいと思われる。

たとえば、イワン・カブトといった、一語の形式の文(疑問詞を含まない文)が、疑問という意図とからみ合っているときは、必ず、昇調をとらなければならないが、ナニヲカイトル・ナニヲヨンデルという形式の文(疑問詞を含んだ文)は、必ずしも昇調をとらなくても、疑問という意図はあらわし得る。しかもなお、ナニヲカイトルが昇調をとる場合は、どういう意味と対応しているかという問題がある。

こういった問題を追求して行くのが、イントネーションの分担する仕事であり、「文型」へ寄与することのできる問題だと考える。

5. その他の問題

以上あげた問題の他に、イントネーションとしての独自の問題も残されている。それは、

(イ) (a) 句末のイントネーションはどういうものであるか

(b) 文頭のイントネーションはどういうものであるか

(c) 句末・文頭のイントネーションは、文末のイントネーションとどのような違いをもっているか

(ロ) 高低以外の、音声的要素(強弱・長短・緩急・ポーズ等)とイントネーションとはどのように関係し合っているか

(ハ) 強弱などの要素は、それぞれ独自にはどういう働きを担っているかなどがそれである。

これらについての一々の説明は省くが、こういう問題をも同時に解決しながら、イントネーションの仕事を進めて行くことは、大切なことである。とくに(ロ)の問題はむずかしい問題を含んではいるが、むしろこれらの点を出発点とすべきであるとさえ言えるような性質のものであろうと思われる。

6. 参考文献

以上の考察・実験を進めるにあたって参考にした論文・文献のうち、主なものは、次のものである。(すでに引用したものは掲げない)

佐久間鼎「日本音声学」第4部, 日本放送協会編「日本語アクセント辞典」付録, 寺川喜四男「アクセントの基底としての話調の研究」, (国語アクセント論叢), 金田一春彦「コトバの旋律」(「国語学」第5輯), 柴田武「トルコ語の文節とその構造」(「日本学士院紀要」第6巻第2・3号) K. L. Pike: *The Intonation of American English*. 4th printing, H. O. Coleman 岩崎民平訳「音調と強調」(*Intonation and Emphasis* (「英語学パンフレット」第3篇), 土居光知「日本音声の実験的研究」, 黒木総一郎, 「聴覚の心理」(「応用心理学講座」Ⅱ)

(吉沢)

総合雑誌の用語の調査

昭和 29 年度に着手した「総合雑誌の語彙調査」(昭和 28 年 7 月～29 年 6 月の間の改造, 世界, 中央公論, 文芸春秋ほか 9 誌についての標本調査)を, 第 3 年度として継続実施した。この調査は, 書きことば研究室において, 所員林大, 斎賀秀夫, 水谷静夫, 石綿敏雄が担当し, 5 人の臨時筆生が助けた。なお, 着手以来同室にあって共同した所員永野賢は, 今年度から言語効果研究室に移ったが, 調査の一部をひきつづき分担した。

この調査の集計整理の結果は, 年度末に, 国立国語研究所報告 12「現代語の語彙調査 総合雑誌の用語 前編」として刊行された。同報告書には, 簡単な解説(調査の輪廓, 語彙表の性格, 語彙表の引き方)を付して, 五十音順語彙表, 全体及び各層ごとの使用率順語彙表を収めている。この語彙表に載せた語は, 原則として標本使用度数が 7 以上のもの, 約四千二百語であって, これらの語の使用度数の和は, 標本の総使用度数二十三万余に対して, その約八割五分を占める。

語彙表には全体および各層での使用率を示し, 使用率の大きいものには相対精度を付した。また, 分類目として, 「後編」に掲げられるべき分類語彙表の項目番号を載せている。

この報告書の「後編」は, 次年度に刊行されるはずで, それには調査経過の概要と, 分類語彙表, 語彙構造に対する計量的分析, 語構造についての分析, 等が収められる予定である。なお, 表記に関する事柄は, 別に報告されることになる。

使用率の大きい動詞 30 語については, ごく概略の用法分析を行ったが, それはこの年報の 32 ページ以下に項を改めて報告する。

(林大)

雑誌一般の用語の概観調査

従来、書きことば研究室においては、婦人雑誌、総合雑誌等と、それぞれ雑誌という資料群の中における各類について個別的に計量的調査を行ってきたのであるが、なるべく早い時機に、広く一般の国民生活に妥当するような基本語彙が設定されるようにとの要望がある実情にかんがみて、雑誌という資料形態のものだけについてでも、各領域のものにわたって概観調査を行うことを考えるようになった。幸い、文部省科学試験研究費補助金を「伝達の効率化に関する基礎研究」の名のもとに交付されることになり、われわれの語彙調査の方法も、数回の先行調査の経験から、十分その規模に応じうるだけになっていると思われるので、この年度後半から、以後3年間の予定として、この調査を開始した。

今年度は、調査範囲を確立して、資料としての雑誌を収集することがおもな作業であった。調査範囲については、総体の雑誌目録を作り、部門別の分類を考え、それぞれの雑誌の発行部数の大体を調査した上、各部門につき部数の比較的多いものを選んで、5部門90種の、昭和31年1月号から12月号まで（増刊及び付録を含む）をとることにした。その5部門とは、(1)評論・文芸、(2)庶民、(3)実用・通俗科学、(4)生活・婦人、(5)娯楽・趣味である。そして年度末までに、あるものは発行所からの寄贈を受け、あるものは購入によって、ほぼ資料をととのえることができた。

調査の単位は、総合雑誌の調査に用いた β 単位を踏襲し、助詞・助動詞も今度は調査対象に加えることにした。また採集箇所は、全誌面（広告を除く）から1/8ページ大について約八千を無作為抽出することにした。全体で少なくとも延べ五十万語になる予定である。

採集箇所の抽出、リプリント、採集作業は次年度に行う。

（林大）

用言 30 語の用法

以下は、総合雑誌語彙調査で得られた語のうちから使用率の大きい30の用言を選び、その用法を分類して、それぞれの使用率とその表記を示そうとしたものである。

分類に当っては細かい意味の違いは取りあげず、できるだけ大きな違いだけを取りあげようとした。ただし前後に続く語に特徴があり、見分けやすい形のもの（たとえば「できる」について「実行ができる」と「実行する ことができる」、「やる」について「……をやる」と「……してやる」のようなもの）は、なるべく取りあげるように努めた。従って全体としてみると外形的な用法分析とでも言うべきものになっている。

なお、(1)動詞については、「れる、られる、せる、させる」のついたものや、可能動詞も含めた上で考察した。(2)使用率その他の欄の数字はその語の全体の使用度数に対する百分率である。(3)用法はこの調査で用例の得られたものだけを示す。(4)使用率の大きいもののうち「する」は省いた。また語彙表では、「つく」について、英語の about に当るものを別にしてあるが、ここでもその類の例は取りあげなかった。

〔目次〕

(1) あう	(11) おる	(21) とる
(2) あげる	(12) かかわる	(22) ない
(3) ある	(13) くださる	(23) なる
(4) いう	(14) くれる	(24) みる
(5) いく・ゆく	(15) くる	(25) もつ
(6) いただく	(16) しまう	(26) もらう
(7) いる	(17) しれる	(27) やる
(8) 得る	(18) すぎる	(28) よい・いい・よく
(9) おく	(19) たいする	(29) よる
(10) おもう	(20) できる	(30) わたる

(1) あう

		(表 記)					
	使用率	会	遇	逢	遭	合	かな
1. 出会う	40.63	34.38		4.17		1.04	1.04
2. (災難などに)	10.42	2.08	1.04	2.08	1.04		4.17
3.1 「…があう」(一致)	7.29					6.25	1.04
3.2 「…にあう」(一致)	5.21					4.17	1.04
4. 「……しあう」	36.46					23.96	12.05
(計)		36.46	1.04	6.25	1.04	35.42	19.79

〔説明〕

1. 「だれがだれにあう」「だれがだれとあう」「だれとだれがあう」などの形で、出会う、面会するなどの意。
2. 「災難にあう」「ひどい目にあう」など、ある場面に出会う意。
- 3.1 「つじつまがあう」「理屈があう」「そりがあう」など。
- 3.2 「性分にあう」「水にあう」など。
4. 動詞の連用形について「互に……する」などの意となるもの(「理解しあう」など)。

(2) あげる

		挙	上	揚	かな
1. 上方へ、など	93.86	19.30	15.79	.88	57.89
2. いただくの対	1.75				1.75
3. 「してあげる」	3.51		1.75		1.75
4. 動詞連用形につく	.88		.88		
		19.30	18.42	.88	61.40

〔説明〕

1. 上方へ移行させる。高める、そのほか。ふつう助詞「を」を介し前の語をうける。「を」の前に来ることばには「帆、顔、手；煙、火の手；値段、賃金；声、悲鳴；名、面目；線香；例、反証；効果、利益；全力、総力」などがある。

——イディオマティックなものに「熱をあげる」「たなにあげる」「血道をあげる」など。

2. 「やる」の謙譲。「もらう」の謙譲「いただく」に対する。

3. 「動詞＋助詞て」に「あげる」のつくもの（「送ってあげる」）。

4. 動詞連用形につくもの。

○スパイ事件に仕立てあげたい意図は、初めからアメリカ政府側にあるのだ。

——「あげる」に対する自動詞として「あがる」が考えられる。これには、

1 の多くのものおよび4に対応する用法があるが、2と3のに対応するものはない。

(3) ある

		有	在	かな
1. 11 「……がある」	77.07	.44	.44	76.19
1. 12 「……ある……」	2.21			2.21
1. 2 「……にある」	5.51		.33	5.18
1. 3 「……ことがある」	7.06			7.06
1. 4 「……ものがある」	1.76			1.76
2. 「……である」	3.86			3.86
3. 「……つつある」	2.54			2.54
		.44	.77	98.79

〔説明〕

1. 11 存在を意味するもの。1. 2～4 以外の用法で1. 12の形にならないもの。

○山と川のある町。○わざわざ行った人がある。○望みがある。○名のある人。

1. 12 「名詞＋ある＋名詞」の形のもの。（「心ある人」「光輝ある歴史」など）

1. 2 「…に＋ある＋名詞」の形のもの、および「…に＋あって」の形でやや形式的な用法。ただし、前者で、「学校にふじだながある」「ふじだなが学校にある」のように、「が」と「に」のつく語が置き換えられるもののはここには入れない。

○かかる心境にある筆者としては、……

○昔は憂国の志士というものが居て、野にあって諤々の論を発表していたものだ。

○多くの官吏が信条とする出世主義は君にあっては小児の玩具視されている。

1. 3 「……したことが＋ある」「……することが＋ある」などの形で、経験、成り行きなどを表わす。

○スティーヴ・ネルソンは家族連れで来たことがある。

○お父さんのことはだれが聞いても、まったく知らないというんですよ。敵からお父さんをつかまえに来ることがあっても、知らないとかんばり通すんですよ。

——「ことがある」のほかに「こともある」「ことはあるが」「ことのある……」など他の助詞を用いたものも多いが、ここではすべて「ことがある」の中に含めてある。以下一々断らない。

- 1.4 「用言＋ものが＋ある」の形で、意味的にはその用言に形式的につくに過ぎないもの。

○そのような場合にソヴェトの中心部に対するアメリカの報復はおそらく恐るべきものがある。

○文化事業に尽くせる氏の功績はまた著しいものがある。

2. 「用言＋て＋ある」の形で、完了した動作，作用の結果が残っていることを示す。

○家の中は実にきれいに飾りつけてある。

3. 「動詞＋つつ＋ある」の形で、進行を表わす。

○中国は強大となりつつある。

——この調査では「あり/方」を二単位とし、その前部分を語彙表では「ある」に含めているが、この分類の際除いた。他の場合も同様である。

——助動詞「だ」に当たる「である」の「ある」は、この調査では対象外としたのでここでは数えない。

(4) いう

		言	謂	云	かな
1.1 ……と発言する	17.52	4.49		3.27	9.77
1.2 ……とのうわさがある	4.07	.14		.28	3.64
1.3 ……と判断する	7.06	.89	.05	.84	5.28
1.4 ……と称する	4.02	.14		.33	3.55
2.1 「こういう」(形式的)	8.18			.28	7.90
2.2 ……「という」(")	44.30	.42		1.59	42.29
2.3 ……「といった」(")	2.34	.05		.09	2.20
3. 「……をいう」	2.20	.98		.47	.75
4. 「(簡単に)いうと」など	4.21	.70		.37	3.13
5. 慣用表現	6.12	.33		1.17	4.63
		8.13	.05	8.69	83.13

〔説明〕

- 1.1 発言する，口に出すの意で，発言の内容を助詞「と」で受けるもの，など。

○「早く来い」といいながら、…… ○彼はこういった。

1.2 うわさ、言い伝え、評判などがある。

○芦田首相が引張られるときに「本日は天気晴朗なり」とうそぶいたという。

○いまの隅田川から浜成兄弟に拾いあげられた観音像は初めあかざを柱にした小さな
仮堂に安置したという。

1.3 ……と判断する。断定する。

○旧日本の軍隊はたしかに強かった。しかし必ずしも 常に正しいとはいえなかった。

○作者も聴衆もそれほど華々しい場面をここに期待してないといってよい。

1.4 ……と呼称する。……という名がある。

○佐々木という男。○伊勢与市といひしもの。○山陽線岡山から西の方自動車で一時間
のところに倉敷という町がある。

2.1 形式的、補助的な用法で、『こう、そう、ああ、どう』の次に用いるもの。

○解釈の問題だな。吉田派はそういうふうにとってる。

2.2 形式的、補助的な用法で、「……と+いう+体言または「の」その他の助詞」 の形のもの。

○実質にはこれでインフレを抑えるという効果は乏しい。

○アメリカと組むということも一つの外交。

2.3 形式的、補助的な用法で、「と」または「こう」などの後に「いった』を付 けるもの。（「……といった具合、感じ」など）。

3. 「……を+いう」の形になるもの。「を」の前には「不平、文句、いや味、 でたらめ、悪いこと、大きなこと、真実」などが来る。

——なお前の「とは」などに応じて「……のことを指す」の意になるものも
あるが少数である。

○よい世の中とは男と女がほおを赤くして一生懸命働ける世の中をいう。

4. 「……を例にしていえば、平たくいえば、具体的にいうと、簡単にいえば、 たとえていえば、触目の限りでいうのだが」など。

5. イディオマティックな言い方のもの。「物をいう（実効をあらわす）」「…… はいうに及ばず」「いうまでもなく」「山という山」「とはいえ」「とはい うものの」「とはいいいながら」「……といい……といい」その他。

(5) いく・ゆく

		行	往	逝	かな
1.1 進行。おもむく	58.01	43.57	.79	.26	13.39
1.2 「もっていく」	.52				.52
2. 「ていく」状態の変化	38.06	14.96			23.10
3.1 「そこへいくと」	.26	.26			
3.2 「わけにはいかない」	2.62	1.05			1.57
3.3 「とはいかない」	.52	.26			.26
		60.10	.79	.26	38.85

〔説明〕

1.1 「わが道をいく」「町まで歩いていく」「散歩にいく」「遊びにいく」「学校にいく」「つれられていく」などをはじめ、「そういう論法でいく」「うまいく」「スムーズにいく」「はかがいく」など。

1.2 「もっていく」 cf. 「もつ」

2. 「動詞＋て＋いく」の形で状態の変化を表わすもの。(cf. 「来る」)

○五一年五二年と急速に西ドイツの輸出貿易は増大し、工業生産もまた増大していったのである。

3.1 「そこへいくと」の形で慣用表現。

○田村泰次郎はしきりに脱出孔を求めているようだが、今のところ成功してはいない。そこへいくと舟橋聖一、丹羽文雄、井上友一郎などは巧みに身をかわし、……

3.2 「……するわけにはいかない」の形で慣用表現。

○単にイギリスの国内問題としてみるわけにはいかない。

3.3 「……とはいかないまでも」「……とまではいかない」などの慣用表現。

○汚職絶滅とまではいかないまでも、それに近い効果を期待し得る。

○絶対確実とまではいかない。

(6) いただく

		頂	戴	かな
1. 頭上にもつ、など。	3.33			3.33
2. 「もらう」の謙譲。	21.67	8.33	5.00	8.33
3.1 「……していただく」	70.00	18.33	6.67	45.00
3.2 「お……いただく」	3.33			3.33
4. 「いただける」	1.67	1.67		
		28.33	11.67	60.00

〔説明〕

1. 「頭に銀白の霜をいただく」「会長をいただく」など。
2. 「お手紙, おことば, お暇, をいただく」「いただくものなら夏も小そで」など。
- 3.1 「動詞＋て＋いただく」の形で, 自分の恩恵, 利益として他人の行為を受けることを示すもうにあたるの謙譲。
○「譲っていただく」「割愛させていただく」など。
- 3.2 「お＋動詞連用形＋いただく」の形のもの。意味は 3.1 に同じ。「長い間おつきあいいただいて」
4. 「いただける」の形で, 可と認められる意。
○奈良の料亭で名物の若草鍋なるものを食べたならこれがなんと材料の数だけを多くしたありきたりの寄せ鍋。同じ奈良でも猿沢池畔と興福寺境内にある柳屋の“奈良茶飯”はいただける。
——「ごはん, お茶, をいただく(食べる。喫する)」などの例は現われなかった。

(7) いる

		居	かな
1.1 (人などが)	5.22	.55	4.67
1.21 (つもりで)	.29	.08	.21
1.22 「それでいて」	.08		.08
2.1 「継続動詞＋ている」	78.84	.97	77.91
2.2 「瞬間動詞＋ている」	10.43	.08	10.35
2.3 「第四種の動詞＋ている」	5.13	.04	5.09
		1.72	98.28

〔説明〕

- 1.1 有情の存在。
○不就学児童が五十人**いる**。○ねずみが**いる**。
- 1.21 助詞「で」を受けるもの。
○忘れないつもりでいても, ○学ぶ決心でいます。
- 1.22 「それでいて」などの形で, 文や節の初めにあるもの。
○日産はこの点では他の組合にくらべてよく努めて来られたと聞いております。それでいてこの結末です。
- 2.1 継続動詞に「て＋いる」を付けたもの。現在進行を表わす。

○かれらは陽気に騒いでいる。○船の中で結構楽に暮していたが、

- 2.2 瞬間動詞に「て＋いる」を付けたもの。完了した動作の結果が残っていることを表わす。「ある」2にあたる。

○柱時計は十二時半でとまっている。○彼女の肋骨は二本も折れている。

- 2.3 第四種の動詞に「て＋いる」を付けたもの。現在の状態を表わす。

○これらの二つの複合概念の中には多分に水増しの部分のあるのが共通している。

○理論に長じている。

——継続動詞，瞬間動詞，第四種の動詞の分類は金田一春彦「国語動詞の一分類」(言語研究15号)による。

(8) 得る

		得	かな
1. 手に入れる	27.27	20.45	6.82
2.1 動詞連用形＋得る	53.98	36.93	17.05
2.2 用言連体形＋を得る	18.75	10.23	8.52
		67.61	32.39

〔説明〕

1. 入手する，獲得する。「金を得る」「人を得る」など。

- 2.1 動詞の連用形に続いて可能の意を表わす。「行い得る」など。

——この用法には、「行いえる」(終止・連体形)とかな書きされた例はなかった。

- 2.2 「用言連体形＋を」を受けて可能の意を表わすもの。ここには「動詞＋をえない」「事なきをえた」「動詞未然形＋ざるをえない」や「やむをえない」などがあるが、「ざるをえない」の例がもっとも多い。

(9) おく

		置	措	かな
1. すえる	39.10	24.06		15.04
2. 「(しばらく) 置く」	3.01		2.26	.75
3.1 「……ておく」	54.14	10.53		43.61
3.2 「……とく」	2.26			2.26
3.3 「ままでおく」	.75			.75
3.4 「……ずにおく」	.75			.75
		34.59	2.26	63.16

〔説明〕

1. ある場所に位置させる。ある位置にとどめる。
○花びんをおく。○各地にサービス機関をおく。
——イディオマティックなものに「一目おく」など。
2. さしおく。「その点の詮索はともかくおき」など。
- 3.1 「動詞の連用形＋て」を受けて、あらかじめ行い、動作を完了して時機を待つ、などの意を表わすもの。
○窓をあければなしにしておく。○遺書を書いておく。○書かないでおく。
- 3.2 「て＋おく」のつまったもの。
- 3.3 「用言＋ままで＋おく」の形のもの。
○F・B・Iの調査が支障なく続行しうするために或る人物を解雇しないままでおくようその関係官庁に進言したことは未だかつてない。
- 3.4 「動詞未然形＋ずに＋おく」の形のもの。
○国民を刺激せずにはおかない。
○このことは報告せずにおこう。

(10) おもう

		思	想	かな
1. 「……をおもう」	3.83	3.35	.48	
2. 「……と、におもう」	92.58	90.19		2.39
3. 「思わず」など	3.59	2.87		.72
		96.41	.48	3.11

〔説明〕

1. 「……を＋おもう」の形のもの。
○父の心情をおもう。○故郷をおもう。○それをおもって涙を流した。
2. 「……に＋おもう」「……と＋おもう」の形のもの。述語または判断の内容を表わす語を受ける。
○話をしたらパパもきっと喜ぶとおもう。○うれしくおもう。○だれかとおもったら、……○病人とおもっていない。○疑問におもう。○これほどまでにしなくてもとおもう。
3. 「おもうに」「おもえば」「おもわず」「おもうつぽ」など。

(11) おる（居）

		居	かな
1. 存在	6.20	4.65	1.55
2.1 「継続動詞＋ておる」	75.97	4.65	71.32
2.2 「瞬間動詞＋ておる」	12.40	.78	11.63
2.3 「第四種の動詞＋ておる」	5.43	1.65	3.88
		11.63	88.37

〔説明〕

1. 有情の存在。「いる」の1に当る。

——直接「ます」のつくもの .78 中止法 .78 その他 4.65%

- 2.1 継続動詞に「て＋おる」の付いたもの。「いる」の2.1に当る。

- 2.2 瞬間動詞に「て＋おる」の付いたもの。「いる」の2.2に当る。

- 2.3 第四種の動詞に「て＋おる」の付いたもの。「いる」の2.3に当る。

——直接「ます」のつくもの 20.16, 尊敬の「れる, られる」のつくもの 6.98, 中止法 31.01, そのほか 35.66%

(12) かかわる

		拘	かな
1. 関係する	16.00	4.00	12.00
2. 「にもかかわらず」	84.00	36.00	48.00
		40.00	60.00

〔説明〕

1. 関係する, 関連するの意。助詞「に」を受ける。両極対照の語を受けることが少なくない。

○運命にかかわる。○人間の幸不幸は貧富にかかわらない。○憲法制定の事情いかににかかわらず, …… ○好むと好まざるとにかかわらず, ……

2. 「にもかかわらず」「にかかわらず」の形で接続助詞や接続詞のような働きをする。

○全世界の抗議にもかかわらず電気椅子で処刑されたローゼンバーグ夫妻, ……

○私も数多くのものをこれによって教えられたが, にもかかわらず不消化なカスとなって残っているものがある。

——「にかかわらず」のように「も」を伴わない例は少なく, 2の6分の1である。

○あれだけ多くの良心的な作家や文化人, あるいは労働者, 農民, 学生, 市民たちが

全被告の無罪を信じていたにかかわらずあの判決は一体何でしょうか。

(13) くださる

		下	かな
1. 「くれる」の尊敬語	7.69	6.15	1.54
2.1 「(し) くださる」	69.23	61.54	7.69
2.2 「お(ご) ……くださる」	23.07	20.00	3.08
		87.69	12.31

〔説明〕

1. 「与える」「くれる」の尊敬。「あげる」の対。

○ご返事をください。

- 2.1 動詞連用形に「て+くださる」の付くもの。自分側の恩恵として他人が行為する。「力を貸してください」など。

- 2.2 「お(または、ご) ……くださる」の形のもの。ただし「ご」のない「熟読ください」や、「よくおいでくださいました」などがあるが、数が少ない。

○花でもお供えください。○お許しください。○ご連絡ください。

—— 2.1 および 2.2 の約 70 % は、命令形「ください」である。

(14) くれる

		呉	かな
1. 与える	4.44		4.44
2. 「……てくれる」	95.56	4.44	91.11
		4.44	95.56

〔説明〕

1. 他人側から自分に与える。

○馬券をくれる人があった。○手紙をくれる。

—— 「目もくれない」のような言い方のものを除いては、「自分から他に与える」意のものは、例がなかった。

2. 動詞に「て+くれる」を付けたもの。自分側の恩恵として他人が行為する。

○心からそう言ってくれる。○裁判所がきめてくれる。

(15) くる

		来	かな
1.1 きたる	28.35	20.87	7.48

1.2「てくる」(2以外の)	38.58	20.28	18.31
1.3「出てくる」	8.07	2.56	5.51
1.4「やってくる」	2.56	.59	1.97
1.5「言ってくる」	.59	.20	.39
2.「てくる」(状態の変化)	21.65	4.87	13.78
3.「とくる」	.20		.20
		52.36	47.64

〔説明〕

1.1 こちらへ近づく。「迎えに来る」「話しに来る」など。

——「由来する」意の「過勞から来た病氣」などや、イディオマティックな「ピンと来る」のような表現もあるが、少ない。

1.2 状態の変化をあらわさない「動詞＋て＋くる」の形のもの。ある行為をして現在の場所に到達する。

○ここまで書いてくると、…… ○逃げてくる。 ○一寸遊んでくる。 ○今日まで言わずに来た。

1.3「出てくる」の形のもの。

○～という結論がでてくる。

1.4「やってくる」の形のもの。

○ベルが鳴るとすぐやってくる先生。

○武装解除のためやってきた英軍。

1.5「言ってくる」の形のもの。

○この町にはタクシーが一台しかありませんと言ってきた。

2. 動詞の連用形に「て＋くる」が付いて状態の変化を表わすもの。「……し始まる」「……の状態になる」の意。「ていく」の対。

○患者を二人の主治医が見ることは非常にまずい。……病人に主治医が二人、対等にいて、同じ検査を繰返したり、治療方針が違って来たりすることは許されない。

3.「と＋くる」の形のもの。

○まだ三十一歳の人好きのする美しい丸顔の持主ときているから、……

——「ときているから」の例だけで「あいつときたら」「映画とくると」などの例はなかった。

(16) しまう

		仕舞	了	かな
1. かたづける	.54	.54		
2.1 「(し) てしまう」	87.63		3.23	84.41
2.2 「(し) ちまう」	2.69			2.69
2.3 「(し) ちゃう」	9.14			9.14
		.54	3.23	96.24

〔説明〕

1. 片付ける, しまいこむ, などの意のもの。「道具をしまう」など。
- 2.1 「動詞＋て＋しまう」の形で完了を表わすもの。「読んでしまう」など。
- 2.2 意味は上に同じで, 「ちまう」の形になるもの。
- 2.3 意味は上に同じで, 「ちゃう」の形になるもの。

(17) しれる

		知	かな
1. 「が知れる」など	4.08	4.08	
2. 「……か知れない」	5.10	5.10	
3. 「……かも知れない」	88.77	56.12	32.65
4. イディオマティックなもの	2.04	2.04	
		67.35	32.65

〔説明〕

1. 「ぎょうざのうまいことでしれている」「既に過渡期でなかったことがしれる」「どことも知れぬ場所」など。「知られる」に当る。
2. 「……か＋しれない」の形になるもの。疑問詞をうけて無限の意を示す, など。
○幾度思い立ったかしれないが, いつも三日坊主に終わった。
○あそこで遊んだらどんなに面白いかしれない。
3. 「……かも＋しれない」の形になるもの。
○米ソ関係は取返しのつかないほど悪化するかしれない。
4. イディオマティックなもの。「底しれぬ力」など。

(18) すぎる

		過	かな
1. 通過, 経過など	12.90	6.45	6.45
2. 「……にすぎる」	4.84	1.61	3.23
3. 「……にすぎない」	37.10	11.29	25.81

4. 「……すぎる」	45.16	9.68	35.48
		29.03	70.97

〔説明〕

1. 通過，経過など。「汽車が駅をすぎる」「月日が平和にすぎる」「十二時を五分すぎる」「五十歳をすぎた人」など。

——「度がすぎる」「遠慮がすぎる」などの例はなかった。

2. ……でありすぎるの意。過度。状態を示す語に「に」をつける。

○彼の言動が消極的にすぎるようにみえる。

○処置は遅きにすぎたであろうけれど，……

3. 「……に＋すぎない」の形のもの。それ以上のものを排除して断定する。「空文にすぎない。」「拙劣な古典の模倣にすぎない。」「3パーセントにすぎない」「ただ名を列ねるにすぎない」など。

——新聞などで「……にしかすぎない」など書くことがあるが，この調査では例がなかった。

4. 用言について，程度をこす意（意味は2と同じ，ふつう動詞の連用形，形容詞・形容動詞の語幹につく）。「日本人は泣きすぎる」「早すぎる」「のんきすぎる」など。

(19) たいする

		対	かな
1. 対面	1.06	1.06	
2. 目的行動の目的	97.35	92.59	4.76
3. 対比の相手	1.59	1.59	
		95.23	4.76

〔説明〕

1. 対面，対座，向かい合うなどの意。

○滋本は事実の真相を究めようとする科学者の非情でたいしたのではなくて，由香子に否定して貰いたい一心の感傷でしゃべったのだった。

○そこにわびしくひっそりとつつましく置かれているそのまな板も包丁もなべも卵も豆腐もと石もその大宇宙の中に確かに一つの位置を確保している存在としてわれわれにたいする。

2. 目的行動の目的，防御の目標を示すもの。

○中共貿易にたいする自由世界の要望。○労働者にたいする弾圧。

○ナイロンは熱にたいしては弱い。

3. 対比の相手を示す。

○インドはイギリスとの平和的な同意によって独立を回復したのにたいし、朝鮮では日本の敗戦によって自由がとりもどされたのである。

○爆弾のエネルギーの増加率にたいして衝撃波爆風による損害の増加は立方根倍。

(20) できる

		出来	出き	かな
1. 生ずる、つくられる	12.61	5.57		7.04
2. 能力がある、すぐれる	.59	.59		
3.1 可能だ	19.65	9.97		9.68
3.2 「……ことができる」	44.28	12.02		32.06
3.3 「名詞＋できる」	19.65	5.87	.29	13.49
3.4 「できるだけ」など	3.23	.88		2.35
		34.90	.29	64.81

〔説明〕

1. 出現、出産の意のもの。「パルプから紙ができる」「金ができる」「できたこととはしかたがない」など。
2. すぐれているの意。「英語ができる」など。
- 3.1 単独で用いられ、可能を表わすもの。「名詞＋が＋できる」の形。「身動きができない」など。
- 3.2 「……することが＋できる」の形のもの。「行くことができる」など。
- 3.3 名詞に直接付けるもの。「説明できる」など。
- 3.4 「できるだけ」「できることなら」「できれば」など。

(21) とる

		取	執	撮	採	捕	撰	かな
1. 「……をとる」	60.67	17.18	2.51	1.67	1.26	.83	.42	36.40
2. 「……にとって」	39.33	2.09						37.52
		19.67	2.51	1.67	1.26	.83	.42	73.64

〔説明〕

1. 「……をとる」の形のもの。

「を」の前に来る語には「手段、方法、態度；税金、料金；食事；写真、場

面；魚，ねずみ；事務；形，形式；ポーズ；年」など。なお「道を左にとる」「……をたてにとる」「……を手にとる」などもここに入る。

——イディオマティックなものに、「あげ足をとる」「ひけをとらない」「音頭をとる」「おくれをとる」「氣をとられる」「あっけにとられる」など。

——「執」を用いたものには「業務，措置，手」など，「採」を用いたものは「対策・処置，方向」など，「捕」は「魚，ねずみ」，「撮」は「写真，ラブ・シーン」など，「摂」は「蛋白質」などがある。

2. 「……にとって」の形のもの。「ぼくにとっては迷惑だ」など。

(22) ない・なし

		無	勿	かな
1.1 不存在	70.98	1.40		69.58
1.2 体言＋ない	22.32	.35		22.03
1.3 「しかない」	1.40	.17		1.22
2.1 用言＋ない	1.40	.17	.17	1.04
2.2 「までもない」	3.67			3.67
2.3 「……てない」	.17			.17
		2.10	.17	97.72

〔説明〕

1.1 不存在の意。前の詞との間に助詞の入るもの。「する気がない」「ないものはない」「元気がない」など。

——イディオマティックなものが多い。「かいがない」「かけがえのない」「仕方がない」「だらしがない」「さしさわりがない」「血も涙もない」「根も葉もない」「実もふたもない」「浮ぶ瀬がない」など。

1.2 直接体言などを受けるもの。

——これもイディオマティックなものが多い。「否応なく」「おかまいなし」「大人気ない」「危険極まりない」「……しっこない」「事なきを得た」「相違ない」「他愛ない」「違いない」「とめどなく」「やるせない」「余儀ない」など。

1.3 「……しか＋ない」の形。「これしかない」

2.1 用言に直接付くもの。「やむなく」「恐るるなかれ」など。

2.2 「動詞＋までも＋ない」の形のもの。「申すまでもなく」など。

——このうち、大部分は「いうまでもない、なく」。

- 2.3 「動詞＋て＋ない」の形で、完了していないことを表わす。「てある」の対。「まだやってない」など。

(23) なる

		成	かな
1. 「…になる(変化)」	79.37		79.37
2. 「お……になる」	1.14		1.14
3. 「…からなる(構成)」	.08		.08
4.11 (工事などが)	.41	.32	.08
4.12 (設計などに)	.32		.32
4.21 「…ならない」	.32		.32
4.22 「…てならない」	.16		.16
4.23 「…てはならない」	3.09		3.09
4.24 「…なければならない」	15.11		15.11
		.32	99.67

〔説明〕

1. 変化。「名詞＋に(と)なる」「ことと(に)＋なる」「形容詞形容動詞連用形＋なる」などの形がある。このうち助詞「に」を受けるものがもっとも多い。「大臣になる」など。
2. 「お＋動詞連用形＋に＋なる」の形のもの。敬語。
3. 「……から＋なる」の形のもの。構成を表わす。「七国からなる小委員会」
- 4.1 成就する，でき上る，成立する，などの意。
- 4.11 「……が＋なる」の形のもの。「平和，了解，復興，法案」などが「なる」。
- 4.12 「……に＋なる」の形のもの。「に」の前に手段，原因，基準その他を表わす，「(だれそのの)筆，設計，指導」などが来るもの。
- 4.2 常に否定的に用いられるもの（以下同じ）。成立を許容しないもの。
- 4.21 以下にくらべて，やや独立的に使われるもの。「油断がならない」「辛抱がなりかねる」など。
——否定辭は「ない」で代表させてある。
- 4.22 「情意の形容詞，自発の動詞＋て＋ならない」の形で，強い欲求・傾向のあることを示す。

○行きたくてならない

○やっぱり親不孝じゃないだろうかと思えてならない。

4.23「動詞連用形＋ては＋ならない」の形で禁止の意。

4.24「動詞未然形＋なければ＋ならない」の形のもの。

(24) みる

		見	観	診	かな
1.1「……をみる」	60.05	43.65	1.39	.69	14.32
1.2「……からみる」など。	8.31	4.62			3.70
2.「……とみる」	6.47	3.93			2.54
3.「してみると」	.46	.23			.23
4.「……てみる」	24.71	8.08			16.63
		60.51	1.39	.69	37.41

〔説明〕

1.1 目で知覚する、の意。「……をみる」の形になるもの。またはそれに準ずるもの。「南山をみる」など。

——「めんどうをみる」「みるも涙」「みるかげもなく」「みてる間に」「二目とみられぬ」などのイディオマティックなものもある。

——「診」を用いたものは、すべて医者が患者をみる場合である。

1.2「から」「について」「によって」「にして」などを受けるもの。「この点からみるに」「あいつにしてみれば」など。

2. 助詞「と」を受けるもの。

○文明論之概略をもって後期の開始とみる。

○モサデックの販売政策は完全に失敗に帰したとみられている。

3. 「してみると」の形で接続詞のように用いられるもの。

○あれが死というものか。してみると死なんてなんでもないもんだ。

4. 「動詞＋て＋みる」の形で「こころみる」の意。「やれるだけやってみる」など。

(25) もつ

		持	有	かな
1.1「……をもつ」	97.54	44.67	.41	52.46
1.2「もっていく」	.82			.82
2.「ねにもつ」など	1.64	.82		.82
		45.49	.41	54.10

〔説明〕

1.1 助詞「を」を受けるもの。

「を」の前には「意志，考え，疑惑；速度，力；価値；会議；弾力性，公共性；小刀を手に」などがくる。

1.2 「もっていく」の形。

○重光がある時期が来たら閣外協力に**もっていく**とかりにいったにしても，……

○明日の仕事の能率をあげるため，全部組をつくっておいて，それをどう**もっていく**かということを話しあって……。

——「もってこい」の古い言い方「もて」の例があったが，分類の際除いた。

2. 「もちつもたれつ」「根にもつ」などのイディオム。

——「以」で書かれる「もつ」は別に数えられる（語彙表参照）。

(26) もらう

		賞	かな
1. 「……をもらう」	45.59	27.94	17.65
2. 「……てもらう」	54.41	13.23	41.18
		41.18	58.82

〔説明〕

1. 他人の恩恵によって自分のものとする。助詞「を」と結合する本動詞としての用法。

○ボーナスを**もらい**真直ぐ帰りけり。○賞を**もらう**。

2. 動詞の連用形に「て+もらう」を付けるもの。

○戦争はやめて**もらいたい**。○先生に診察して**もらう**。

(27) やる

		演	試	かな
1. 送るなど。	4.00			4.00
2.1 与える	1.50			1.50
2.2 「……てやる」	14.50			14.50
3. 行う	73.00	.50	.50	72.00
4. 「やってくる」	7.00			7.00
		.50	.50	99.00

〔説明〕

1. 送る，行かせるなど 2～4 以外の用法。「子を大阪へやる」「目をやる」な

ど。また狂言の「やるまいぞ」など。

2.1 与える意。「魚にえさをやる」など。

2.2 動詞に「て+やる」をつけたもの。他人の受益としてある行為をする。

○子供のめんどうを見てやる。○いじめてやる。

3. する、行うなどの意。

○税制改革をやる。○フランス語をやる。○絵をやる。

——漢字の用いられた例は下のようなのである。

○八時からロワイヤル劇場でチェホフの「桜の園」を演る。

○ウルグワイ氏が試^あって見るとすすめるように細君にいうと、一口嘗めて、「ほんと！おいしい！甘い！」

4. 「やってくる」の形のもの。「わざわざ遠くからやって来たのか」など。

(28) よい・いい・よく

		良	善	好	能	かな
1. 11 積極的	35.49	3.66	.56	.85		30.42
1. 12 「名詞+よく」	2.82					2.54
1. 2 消極的	21.13			.56		20.57
1. 3 「方がよい」など	15.46	.28		.56		14.63
2. 「動詞+よい」	.56					.56
3. 副詞的	17.18	.56		.56	.56	15.49
4. しばしばの意	5.92					5.92
5. 「よし！」	1.41					1.41
		4.79	.56	2.54	.56	91.55

〔説明〕

1. 11 「良，好，善」のような意味で，述語，修飾語などに用いられる一般の用法。主格の「が」を受ける。積極的に「よい」と認めるもの。

○仲がよい。○よい腕前。

1. 12 「名詞+よく」の形で下に続くもの。「首尾よく，根気よく，勢よく」など。

1. 2 消極的な言い方のもの。即ち「さしつかえない」「かまわない」などに置き換えられるもの。主格は「が」をとらず，助詞「でも」「て」「ても」などを受ける。

○どうでもよい。○何でもよい。

- 1.3 「……する方がよい」「……した方がよい」「……するがよい」「……すればよい」「……したらよい」「……するとよい」などの形のもの。
2. 動詞の連用形について「……するに適している」「……しやすい」などの意を表わすもの。「使いよい」など。
3. 「よく」の形で「十分に」の意味で副詞的に用いられるもの。
○事情がどうもよくわからない。○よく効く薬。
——ただし「する」「なる」に続くものは1.11に入れる。
4. 「よく」の形で「しばしば」の意に用いられるもの。
○禅の問答では弟子がえらくなって師匠をなぐることがよくある。
○総評はよく左派一辺倒と言われるんですが、決してそうじゃない。
5. 「よしっ」「よしよし」などと感動詞のように用いられるもの。
——①陳述副詞の「よし(や)」は、別の語と認めた。②語彙表では「しばしば」の意のものは別の語と認めてあるが、この表では合わせて数えた。

(29) よる

		依	因	由	抛	かな
1. 「……によって……される」	22.03					22.03
2.1 手段、原因、根拠とする。	60.34	.34	.34	.34		59.32
2.2 「によると、によれば」	9.83					9.83
3. (時と場合に)	7.45	.34				7.12
4. (根拠地に)	.34				.34	
		.68	.34	.34	.34	98.31

〔説明〕

1. 受身表現について、動作の主体を表わすもの。「民主主義者がつくっている政府」を政府について受身表現とした場合の「民主主義者によってつくられている政府」。
——「この一文はすべて<日刊朝鮮通信>所載の記事によって書かれたものである」などは形が類似しているが、ここへは入れない。
2. 手段・方法・原因・原由・根拠・基礎・原動力などを指す。
○あらゆる紛争は交渉によって解決することができる。
○合理化によって生産をたかめる。○ドッジ・ラインによるインフレ収束。
○戦争による家庭の破壊。○由って来るところ。京大官制による総長具状の権限。

○ケマル・パシャによって興隆した国。

- 2.2 判断や根拠を前以って示すもの。2と同様、出所、根拠などを示すが、うしろにそれに基いた判断の文が続くもの。「…によると」「…によれば」などの形になるものが多い。

○六日のモスクワ放送によれば、ソ連指導者間に対立があったことが考えられる。

3. 種々のものがあって、その選択のいかんに関わることをいう。

○州によっては英語の使用を停止したところもある。

○場合によっては、やむを得ないこともある。

4. 城などにたてこもる。

○資本の制約を大企業ほどには受けない独立プロに、すぐれた作家たちが^よ拠る ことになり……。

(30) わたる

		渡	亘	渉	かな
1. 移っていく	37.49	30.35		1.79	5.36
2. 他人のものになる	1.79	1.79			
3. 他のことに及ぶ	1.79				1.79
4. ある範囲の全部に関係する	58.93		8.93		50.00
		32.14	8.93	1.79	57.14

〔説明〕

1. 移って行く。対岸へ移る。「橋（海，世間，世）をわたる」
2. 所有者，所有権が移される。「外人の手にわたる」
3. 他のことに及ぶ。

○私事にわたるが，機会だから一言しておく。

4. ある範囲の全部に関係する。

○五十年間にわたる生活。○二時間にわたる公演。○東独全土にわたる戒厳令。

○一々にわたって検討する。

(石綿)

日本言語地図作成のための準備調査

A. はじめに

B. 地方調査員への委託調査

1. 臨地調査

1.1 調査票Dについて

1.2 調査のあらまし

1.3 調査の結果

2. 臨地調査の経験に基いて調査法・調査項目を検討すること

3. 全国協議会

4. 地方調査員

C. 所員による臨地調査

1. 第3回調査（秋田県鹿角郡花輪町）

2. 第4回調査（宮城県北諸県郡高城町）

3. 第5回調査（山梨県中巨摩郡豊村）

3.1 よい被調査者の選び方について

3.2 被調査者の人数についての問題の検討

D. おわりに

1. 昭和32年度以降の見通し

2. 担当者

A. は じ め に

地方言語研究室では、主として地方調査員に調査を委託する形で、全国的な規模の日本言語地図を作成する計画をたて、前年度からその準備にとりかかった。すなわち、昭和30年度には、言語地図作成に関する問題点の研究を地方調査員に対して委託する一方、室員も2回にわたって臨地調査を行った（年報7参照）。昭和31年度も、前年度と同じく、言語地図作成についての準備調査期間とした。地方調査員に対しては、調査票D（B1. 1参照）による調査を委託する（B. 参照）一方、室員による臨地調査を3回にわたって行った。ねらいは、主として調査法、調査項目を検討することであった（C. 参照）。

なお、昭和32年度から本格的調査にはいる予定である（D. 参照）。

B. 地方調査員への委託調査

昭和31年度、地方調査員に対して委託したのは、次の二つの問題についてである。

(1) 調査票Dによる臨地調査

(2) 臨地調査の経験に基いて、調査法・調査項目を検討すること

別に、調査票Dの各項目にあたる方言形を従来の方言文献の中から調べることも委託した。

1. 臨地調査

臨地調査は、次の要領で行うよう指示した。

調査地点——担当地域の方言の特性に基いて、調査員ごとに2地点（地方調査員は、47人。したがって調査地点は全国で94地点）を選ぶこと。調査地点の性格は農村に限るなど指定はしないが、市街地を避けること。

被調査者——各調査地点について、55歳から65歳(満)までの生えぬきの男子ひとり。調査票の初めから終りまで、同じひとりについて、通して行う。都合により調査を途中で打切るときは、そこまでの調査結果を捨てて、次の被調査者についてまた第1項からはじめる。ここで生えぬきとは、言語形成期をその地点で過ごし、それ以後も合計2か年（24か月）以上よその土地で生活したことのない人をさす。

調査結果は、所定のカードに記入して提出するよう求めた。

1.1 調査票について

ここで、この委託調査のために作った調査票Dについて、それが完成するまでの経過を説明しよう。調査票Dができあがるまでには、A・B・Cの三つの調査票が順次作られ、検討された。

1.11 調査票A

この調査票は、室員による第1回調査（昭和30年10月、中国・四国地方一年報7参照）のために作ったもので、約1,150項目の語のリストである。共通語形を示し、それに対する方言形を問う方式をとっているが、意味を限定したり、他の語との関係を調べるために、各項について多くの参考事項が併記してある。

それらを通算すれば、項目数は4,000以上になるであろう。全体の内容は、日常生活に関係のある基本的な項目と、方言量の多いもののが中心となっている。その一部を例として示そう。

(前略)	気候
<ul style="list-style-type: none"> ・ともだち →つきあい ・なかま なかまいり ・きゃく〔客〕 来客 顧客 ふりの客 ・あいて〔相手〕 相手を見てものを言う 相手をする 碁の相手 相手になるものがない 	<ul style="list-style-type: none"> ・かぜ (風向による個々の名は問わない) あらしなど 風邪
(中略)	(中略)
<ul style="list-style-type: none"> ・ひ〔火〕 たきびの火 すみ火 ほのお 灯が見える ・てんき 天候 あしたは天気だ 	<ul style="list-style-type: none"> ・やぶる 紙をやぶる 敵をやぶる 約束をやぶる ・あける 窓をあける 孔をあける コップの水をあける 夜をあける 梅雨があける
(中略)	(中略)
	<ul style="list-style-type: none"> ・こい〔濃〕 色が濃い 味が濃い 液が濃い ひげが濃い
	(後略)

調査の結果、この調査票では、同じひとりの人について通して調査するのは項目が多すぎるということがわかった。1日で調査を終わることを考えると、300～400項目が限度らしいということもわかり、調査項目を整理した。

また、この調査の経験から、普通行われる——ある一定の事柄について、それに対する方言形を求める方式の質問のほかに、——ある一定の語形について、方言におけるいろいろの意味の違いを調べる方式の質問を次の調査票に加えることを考えた。たとえば、アカイという語形は「明かるい」という意味にも使うかどうか。オバという語形にどんな意味があるかなどを問う質問である。(わ

れわれは、この方式の質問をS式質問と呼んでいる。Sは Semantics のS) この質問法については、昭和30年11月21日の公開討論会“日本の言語地理学”で室員柴田と徳川が発表した(年報7参照)。

1.12 調査票B

調査票Bは、室員による第2回調査(昭和31年3月、和歌山県新宮市一年報7参照)のために用意したものである。これを作るのについては、調査票Aのほか、昭和30年度の地方調査員の報告が材料になった。

質問の方式としては、ただ共通語形を示してそれにあたる方言形を求める方法をとらず、事柄の内容を説明する一定の質問文を使う方式をとることとした(例はあとに示す)。このようにしたのは、前回の調査の結果、比較・対照のできる正確な答を得るのには、事柄(意味)を限定しておく必要があるとわかったためである。たとえば「耳のことは何といえますか」という質問では、被調査者が聴覚器官としての耳(耳が遠いの耳)にあたる方言形と、耳たぶにあたる方言形のどちらを答えたかの保証がない。また、「呼ぶ」という形を示すだけでは、その間の求めるところが声を掛ける意味か、招待する意味か、名付ける意味か(あるいはそのほかか)、はっきりしない。ある調査員は「声を掛ける」意味にあたる方言形を求め、ある調査員は「招待する」意味にあたる方言形を求めてきたのでは、各地の調査結果を比較することができない。(われわれは、この一定の質問文を使う方式の質問をナゾナゾ式質問と呼んでいる)

この調査票に新たにS式質問の項目が加わったことは、前項でのべた。

調査票Bは3分冊約540項目の質問を持っている。

第1・第2分冊についていくつかの項目の例を示そう。

- | | |
|-------------|--|
| H 1 | 星の名前ですがネ、真北の空に輝いていて、ほかの星は季節や時刻に |
| hokkyokusei | よってみんな位置が変わるのに、その星だけはいつも同じ位置にある、
そんな星がありますネ。その星に何という名前をつけていますか。 |
| H 2 | 晴れた夜、空を見ているとスッと尾を引いて星が飛ぶことがあります |
| nagarebosi | ネ。その星のことを何と呼んでいますか。 |
| | (中略) |
| NV 3 | 大雨が降って池の水が一杯になりました。雨はまだ止みません。サア |
| ahureru | 池の水はどうなりますか。 |
| NV 4 | 机の上の茶碗に水がなみなみと入っています。その机に人がぶつかる。 |

koboreru と茶碗の水はどうなるでしょう。

(中略)

N J 5 太郎と次郎と相撲をとると、かならず太郎が勝つのです。太郎の方が
tuyoi 次郎よりどうだから勝つのでしょうか。

N J 6 それでは、次郎はなぜいつも負けるのですか。

yowai

(中略)

S 1 「アカイ」ということばを明かるいという意味に使うことがあります
か。たとえば電灯の方がランプよりアカイというふうに。

S 2 「アザ」ということばをほくろ、つまり生まれつき体にある小さな胡
麻つぶほどの黒い斑点の意味に使うことがありますか。

(後略)

最初の6項目がナゾナゾ式質問の例であり、あとの2項がS式質問の例である。(なお、Hは方言量の多い項目の略、NVは日常語の動詞、N Jは日常語の形容詞の項目を示す。SはS式質問項目の略)。

この調査では、調査票の質問文が適当であるかどうか、誤解される恐れはないか、じゅうぶん意を尽しているかどうか、まわりくどくはないかの検討に主力を注いだ。次の調査票からは、項目の配列を内容的な関連を考慮に入れることにした。その方が答えやすく、調査も能率的に運ぶ。

この調査票の第3分冊は、音韻・文法に関するものであり、次に示すような質問項目があった。

B 1 山道を歩いていると、まだそんな季節でもないのに、桜の木に花が咲
いています。それを同行のともだちに知らせようとするとき、あなたは「サクラガサイテイル」と言いますか。「サクラノサイテイル」と言いますか。「サクラサイテイル」と言いますか。それともほかの言い方をしますか。

B 2 山道を登りつめると、景色がよくて自分の村(町)がよく見えます。学校も見えます。それを同行の人に知らせようとするとき「ガッコウガミエール」と言いますか。「ガッコウノミエール」と言いますか。「ガッコウミエール」と言いますか。それともほかの言い方をしますか。

(中略)

O 1 線路の上を煙をはいて走ってくる、あの乗物は何といいますか(母音の無声化)。

O 2 髪 of 乱れたのを整えるために使う道具<手つきで示す>を何といいますか

すか（母音の無声化）。

（Bは文法に関する項目，Oは音韻に関する項目の略）。

調査の結果，以下の調査票からはこれらの文法・音韻に関する項目を割愛することになった。それは分量に制限のある調査票に，いろいろな質問を総花式に盛り込むことは，あぶはちとらずになりかねないからである。文法や音韻については，体系的記述に基く調査を改めて計画することとして，今度の日本語地図作成のための調査は，もっぱら語について調べることに決めた。

1.13 調査票C

室員による第3回の調査（昭和31年5月，秋田県鹿角郡花輪町—C.1 参照）のために作ったのが調査票Cである。調査票Bを基礎とした約320項目。質問方式としては調査票Bのとったナゾナゾ式とS式を踏襲したが，質問文には大幅な改訂を加えた。たとえば，調査票Bでは，

NN 26 二段の棚があるとして，天井に近い方の棚に壺がのせてあり，床に近い
ue 一方の棚に本がのせてあるとしますネ，壺ののっている方の棚はどっ
 ちの棚といったらよいでしょう。

のようであった質問文を，調査票Cで，

124 二段の棚があるとして<手つきで示す>，こちらの棚をく上の手を動か
ウエ かす>，どちらの棚といったらよいでしょう。

のように改め，また，調査票Bで，

NN 51 あなたを，かりに太郎と花子という夫婦の間にできた子どもというこ
titi(oya) とにしますとネ，太郎は，あなたからいって何にあたるのでしょうか。

という質問を，調査票Cでは，

051 男の親のことを何といいますか。
チチ(オヤ)

と改めた。ここに示したのは，ほんの一例であるが，この例からもわかるようにほとんどの項目についての質問文が，わかりやすく簡潔になった。

そのほか，調査票Bに比べて，いくつか項目を補充した。たとえば，「あか（垢）」を問うほかに，関連があるものとして「ふけ（雲脂）」という項をふやしたり，「かみなり（雷）」についての命名のしかたを知る参考資料を得るために「雷鳴（ゴロゴロ）」の質問を追加したりした。S式質問についても，たとえ

ば「コワイ」について「疲れているという意味に使うか」「恐しい意味に使うか」の質問のほかに、「固いという意味に使うか」の質問を追加し、別に「コワイを、疲れている・恐しい・固いのほかの意味に使うか、使うとすればどんな意味にか」の質問を新設したりした。調査票Cで新しく設けた項目は42項目であるが、調査票Bに比べて項目数が減ったのは、文法・音韻に関する項目を除いたからである。

1.14 調査票D

調査票Cを基礎とし、第3回の臨地調査の結果に基づいて作ったのが調査票Dである。項目数は299。そのうちナゾナゾ式質問の形をとっているものが250、S式質問の形をとっているものが49であった。そのほかに関連ある事項についての参考質問が70ほど含まれている。一部を例として示そう。

(中略)

- ※ あなたは、他人と話をするとき、自分のことをさして何と言いますか。たとえば“これは自分の持物だ”と言う場合、“これは誰の物だ”といえますか。
- 058 このことばは、話し相手によっていろいろと言いつけることがあると
- ワタクシ 思いますが、話し相手が自分より目上の人だったら、何といえますか。
- 059 相手が幼なじみで、今でも親しく付き合っている男だったら、何と
- ボク いいますか。
- 060 相手が目下の場合は何といえますか。
- オレ
- 176 よく削ってない板をてのひらでこすると、手に何か刺さることがあり
- トゲ ますね。その刺さったものを何と言いますか。
- ※ いばらやみかんなどの枝についている尖った部分も、〔トゲ〕ですか。

※印のついた質問が参考質問である。058の項目の前の参考質問は、以下の質問への導入の役目をはたしている。

項目の内容は、調査票Cとほぼ同じであるが、質問文にはかなりの改訂がある。「おとこ(男)」と「おんな(女)」の方言形を問う質問文は、調査票B以下次のように改められてきた。

- 調査票B 人間を二つに、子どもを生む側と生ませる側に分けたとします。この場合、子どもを生ませる側の方のことを何と言いますか。
- それでは、生む側の方は何というのですか。

調査票C 婦人代議士というような場合の婦人ということばは、ふだんはあまり使わないことばですね。普通よく使っていることばで言うとは何というのですか。

「オンナ」でない人たちは何なのでしょう。

調査票D 「男女共学というのはどんなこと」と小さい子どもに聞かれたとき、方言で何といって説明したらよいでしょう。

「きょう(今日)」の方言形を問う質問文は次のように変化してきた。

調査票B かりに総選挙があるとします。のんきな人がいて、その投票日の当日になって「投票はいつだったかな」とあなたに聞いたとします。あなたはいつだと言って教えてやりますか。

調査票C この「調査日を言う」ことを何と言いますか。

調査票D 本日ということばをやさしく言ったら何でしょう。

「かお(顔)」の方言形を問う質問文は次のように変化してきた。

調査票B オカメとかヒョットコとかのお面がありますね。あのお面というものは人の体のどの部分をかたどっているのでしょうか。

調査票C おかめとかひょっとことかてんぐとかの面がありますが、あの面というのは人の体のどの部分をかたどっているのでしょうか。

調査票D (絵を示し) ここのところを、毎朝起きたとき洗いますね。何と言いますか。

調査票Dの質問の項目を、共通語を見出しとして、項目の順序に列挙すると、次の通りである。

目	あざ	親指	灸をすえる	あなた
まゆ毛	あたま	人差指	男	君
ものもらい	首	中指	女	お前
鼻	髪の毛	薬指	産婆	胤
耳	つむじ	子指	赤ん坊	お手玉
口	禿頭	しもやけ	末っ子	人形
くちびる	見る	脚	こども	肩車
舌	聞く	足	女の子	片足飛び
いびき	におい(香)	踵	若者	おにごっこ
おし	におい(臭)	あぐら	娘	かくれんぼ
つば	酸っぱい	来る	大人	さびしい
咳	からい	行く	としより	赤い
頬	嘘をつく	みずおち	私	青い
顔	腕	垢	ぼく	黄色い
あばた	手	寝小便	おれ	黒い

白い	一昨晚	深い	糠	こうま
色	今朝	浅い	いなむら	たてがみ
泣く	明日	葬式	たんぼ	牛
読む	明後日	墓地	畑	おうし
長い	明々後日	庭	あぜ	めうし
短い	明々々後日	屋根	耕す	こうし
書く	今晚	柱	蒔く	猫
お金	明晩	壁	植える	犬
お釣り	おおみそか	障子	窠山子	嗅ぐ
かぞえる	太陽	床	じゃがいも	ねずみ
買う	月	灰	さといも	もぐら
売る	流れ星	こげくさい	さつまいも	とさか
もらう	雨	湯気	そらまめ	ふくろう
やる	梅雨	煮る	とうもろこし	きつつき
くれる	夕立	たく	かぼちゃ	せきれい
貸す	雷	食べる	ひがんばん	すずめ
借りる	落雷する	飲む	すみれ	ひばり
右	虹	米びつ	つくし	かまきり
左	降る	俎板	すぎな	くものす
下	雪	厚い	いたどり	かたつむり
上	氷	薄い	どくだみ	なめくじ
表	氷る	すりばち	くわのみ	おたまじゃくし
裏	霜柱	すりこぎ	熟す	ひきがえる
明け方	つらら	瀬戸物	まつかさ	まむし
朝	風	大きい	竹	とかげ
集まる	旋風	小さい	綿	うろこ
曇	消える	てんびん棒	まわた	何
夕方	ごみ	足駄	重い	どこ
夜	地震	作る	軽い	誰
夜中	高い	穴	糸	なぜ
まぶしい	低い	とげ	着る	いくつ
きょう	林	米	洗う	いくら
きのう	森	梗	馬	ここ
おととい	井戸	糲	おうま	そこ
昨晚	掘る	飯米	めうま	あそこ

Sアカイ (明かるい)	Sコワイ (疲れた)	Sケチ (だ) (不都合)
Sアカイ (赤い)	Sコワイ (固い)	Sケチ (だ) (不思議)
Sオカシイ (恥しい)	Sコワイ (恐しい)	Sケチ (だ) (吝嗇)
Sオカシイ (こっけいだ)	Sホシイ (惜しい)	Sイトコ (親類)
Sオカシイ (妙だ)	Sホシイ (所有したい)	Sオバ (妹)

Sオバ（次女以下）	Sニワ（庭園）	Sステル（破棄する）
Sオバ（娘）	Sセンタク（縫返し）	Sオチル（降りる）
Sアザ（ほくろ）	Sセンタク（裁縫）	Sオチル（墜落する）
Sコケ（きのこ）	Sセンタク（洗濯）	Sオチル（脱落する）
Sコケ（苔）	Sハソン（修繕）	Sオチル（落第する）
Sモモ（果実一般）	Sハソン（破損）	Sオドロク（目覚める）
Sモモ（桃）	Sナオス（仕舞う）	Sオドロク（目覚める）
Sコショウ（唐辛子）	Sナオス（修繕する）	Sオドロク（驚く）
Sカド（庭）	Sアズケル（あてがう）	Sクサル（濡れる）
Sカド（戸外）	Sアズケル（与える）	Sクサル（腐敗する）
Sカド（便所）	Sアズケル（預ける）	
Sニワ（土間）	Sステル（紛失する）	

なお、この調査票には、付録として、調査を助けるための付図67図（主として人体各部の名称や動植物名に関するもの）をつけた。

言うまでもないことであるが、この調査票Dが本格的調査に使われる調査票の最終案ではない。以下EからG（最終案）までの試案が作られ、検討される（C参照）。

1.2 調査のあらまし

地方調査員による臨地調査はどのように行われたか。そのあらま시를まとめてみよう。

1.21 調査地点

地方調査員47名が臨地調査した地点(全国で合計94地点)は次の通りである。

〔調査地点〕		〔調査員氏名〕	
北海道	斜里郡斜里町，樺戸郡月形町	五十嵐	三郎
北海道	余市郡余市町浜中，有珠郡伊達町	石垣	福雄
青森県	中津軽郡岩木村駒越，上北郡七戸町	此島	正年
岩手県	西磐井郡平泉町平泉，盛岡市中野字門	小松代	融一
宮城県	黒川郡大和町吉岡，亶理郡亶理町亶理	堀籠	敬蔵
秋田県	北秋田郡鷹巣町，大曲市藤木村乙本藤木	北条	忠雄
山形県	東置賜郡宮内町田町，北村山郡大石田町大石田	後藤	利雄
福島県	南会津郡下郷町旭田，田村郡田村町谷田川	菅野	宏
茨城県	新治郡玉里村上玉里，常陸太田市三才町	田口	美雄
栃木県	塩谷郡喜連川町上河戸，上都賀郡栗野町口栗野	多々良	鎮男
群馬県	利根郡片品村土出，多野郡万場町船子	上野	勇
埼玉県	本庄市都島，行田市埼玉	大久保	忠国

千葉県	印旛郡印西町竹袋，夷隅郡大多喜町小沢又	大岩	正伸
神奈川県	横浜市港北区長津田町御前田，中郡西秦野町渋沢	斎藤	義七郎
新潟県	刈羽郡千谷沢村千谷沢，新発田市川東上楠川	劔持	隼一郎
富山県	礪波市久泉，中新川郡上市町逢沢	大田	栄太郎
石川県	金沢市押野町上荒尾町，羽咋郡志雄町石坂	岩井	隆盛
福井県	吉田郡森田町，大野郡石徹白村	佐藤	茂
山梨県	中巨摩郡白根町百々，南巨摩郡西山村奈良田	清水	茂夫
長野県	諏訪郡茅野町北山，更級郡八幡村中原	青木	千代吉
岐阜県	吉城郡小鷹利村信包，武儀郡洞戸村奥洞戸	谷開	石雄
静岡県	富士郡鷹岡町厚原，周智郡森町城下	望月	誼三
愛知県	西加茂郡藤岡村飯野，西春日井郡北里村藤島	野村	正良
三重県	亀山市布気町，北牟婁郡長島町	堀田	要治
滋賀県	東浅井郡朝日村今西，高島郡高島町勝野	熊谷	直孝
京都府	船井郡東本海村南大谷，竹野郡豊栄村一畝	奥村	三雄
大阪府	富田林市錦織町，寝屋川市太閤	前田	勇
兵庫県	姫路市白国，三原郡広田村中条中筋組	和田	実
兵庫県	朝来郡朝来町羽淵，美方郡温泉町湯	岡田	莊之輔
奈良県	添上郡東山村水間，吉野郡十津川村上野地	西宮	一民
和歌山県	海草郡紀伊村上野，東牟婁郡下里町粉白	村内	英一
鳥取県	東伯郡北条町島，日野郡江府町江尾	広戸	惇
島根県	出雲市西林木町，那賀郡雲城村上來原	岡	義重
岡山県	岡山市玉栢，高梁市宇治町	虫明	吉治郎
広島県	高田郡向原町坂，佐伯郡佐伯町友和	村岡	浅夫
山口県	吉敷郡小郡町下郷，美禰郡秋芳町嘉方	渡辺	保
徳島県	麻植郡山川村井上，那賀郡富岡町山口	宮城	文雄
香川県	木田郡川添村下田井，丸亀市郡家町	近石	泰秋
愛媛県	越智郡朝倉村山越，喜多郡内子町程内	杉山	正世
高知県	長岡郡久礼田村久礼田，中村市具同	土居	重俊
福岡県	築上郡椎田町，早良郡早良村脇山	都築	頼助
佐賀県	佐賀市本庄町袋，東松浦郡入野村入野	小野	志真男
長崎県	南高来郡吾妻村，西彼杵郡三重村	西島	宏
熊本県	下益城郡城南町，芦北郡芦北町立川	秋山	正次
大分県	津久見市保戸島，宇佐郡四日市町糸口	糸井	寛一
宮崎県	宮崎郡清武町，東臼杵郡西郷村田代	岩本	実
鹿児島県	揖宿郡喜入村前之浜，出水市上知識	上村	孝二

調査は被調査者の自宅で行ったものが多い。3月現在、45人の地方調査員から集まった報告を整理すると、調査場所のべ91か所（2日間にわたる調査で、

調査場所をかえた所が1地点ある)の内訳は次の通りである。

被調査者自宅	52	役場・教育委員会など	6
紹介者などの個人宅	17	旅館	4
学校	10	寺院	2

1.22 調査所要時間

はじめ、調査は(休憩時間を含めて)大体6時間程度かかるものと予想して計画を立てたが、実際の調査では、それぞれの条件によって各地点まちまちであった。ある調査地点で2時間57分で調査が終った例がある一方、8時間18分もかかった例がある。調査所要時間の分布は次の通りである。

所要時間	3時間以内	3.0→3.5時間	3.5→4.0時間	4.0→4.5時間	4.5→5.0時間	5.0→5.5時間	5.5→6.0時間	6.0→6.5時間	6.5→7.0時間	7時間以上
地点数	3	9	7	12	10	18	12	9	5	5

このうち、被調査者側の都合などから、1地点の調査が2日間にわたったものの5例、3日間にわたったもの2例があった。他の83地点では、その日のうちに調査を終った。

1.23 被調査者

全部が指定の条件(B.1参照)に適合した生えぬきの男子であって、このことについては問題がない。

職業——主として農業(79人)であった。他は漁業(3人)、神職・大工・畳職・理髪業・雑貨商・学校巡視・役場使丁・自由業(各1人計8人)であった。

郷里以外で生活した経験——経験のあるものは28人(兵営生活を除けば10人)であり、残りの62人は完全な(小旅行程度は無視して)土着の人であった。

学歴——さまざまであったが、9か年が最高、学歴なしは1人であった。内訳は次の通り。

学 歴	9か年	8か年	7か年	6か年	5か年	4か年	3か年	0か年
人 数	8人	27	3	24	2	24	1	1

父母の出身地——ほとんどが同郡内であったが、他府県・または同府県他郡の出身者である場合もあった。他府県(北海道では他支庁も含む)出身である例は、次の通りである。

- ・北海道余市郡の被調査者の父親は檜山郡江差町、母親は秋田県出身。
- ・北海道有珠郡の被調査者の両親は、ともに福島県（相馬郡）出身。
- ・鹿児島県出水市の被調査者の母親は、熊本県（天草郡）出身。

そのほか、同県内ではあるが、（父親は同郡で）母親が他郡出身であるものが9例、（母親は同郡で）父親が他郡の出身者であるものが1例あった。

1.24 表記法

調査結果をカードに記入する場合の表記法については、カタカナあるいは国際音声字母を用いるように指定した。調査結果を報告した46人の地方調査員のうちカタカナによるものは36人、国際音声字母によるものは10人であった。

1.3 調査の結果

本年度の委託調査・研究の主な目的は、調査票Dが本調査に使うものとして適当かどうか。不適当な点があるとすればどんな点かを検討することにあった。したがって、全国94地点での臨地調査も、調査票Dが、北は北海道から南は九州まで、いろいろ条件の異なる地域で、しかも47人のどの調査員にも誤りなく使うものかどうかを調べることに主眼があった。調査の結果は、各調査地点について、項目ごとにカードに記入したものが集まったが、調査の目的から言うと、副次的な産物であったと言える。

しかし、その報告は、全国でわずか92地点（昭和32年3月末現在まだ2地点からの報告がない）の調査結果とというものの、全国すみずみまでほぼ均等に調査地点を取っているの、かなり粗いものではあるが、全国的に概観することができる。以下10項目についての分布略図を示す。（項目は、簡略な図として示すために、とくに方言量の少ないものの中から選んだ。）

2. 臨地調査の経験に基いて、調査法・調査項目を検討すること。

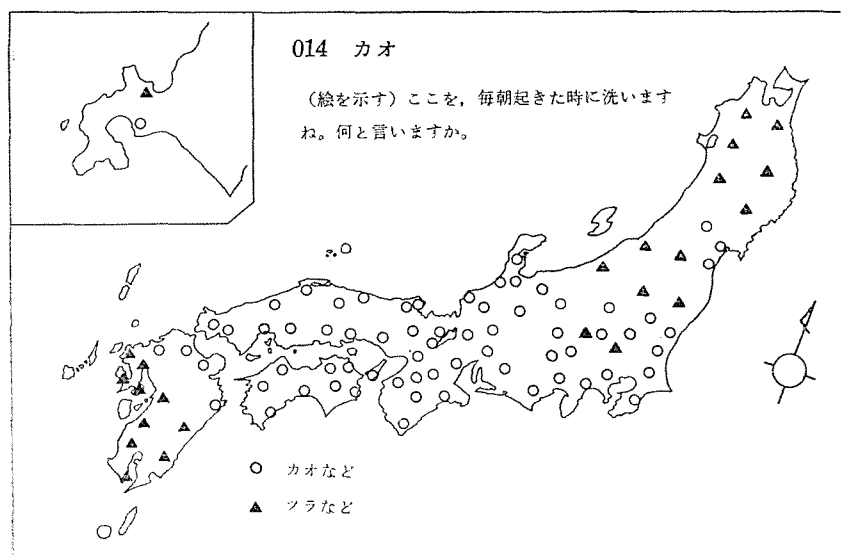
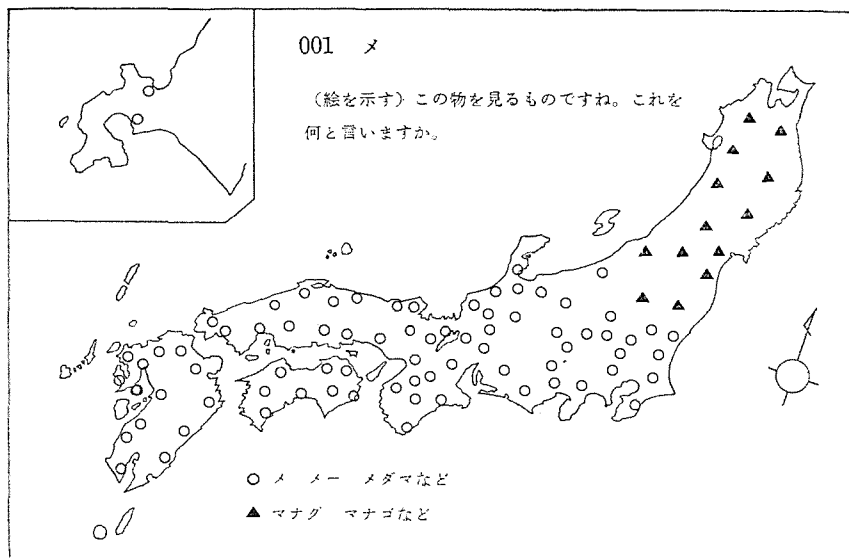
委託に際しては、論ずべき内容として次のようなものをあげた。

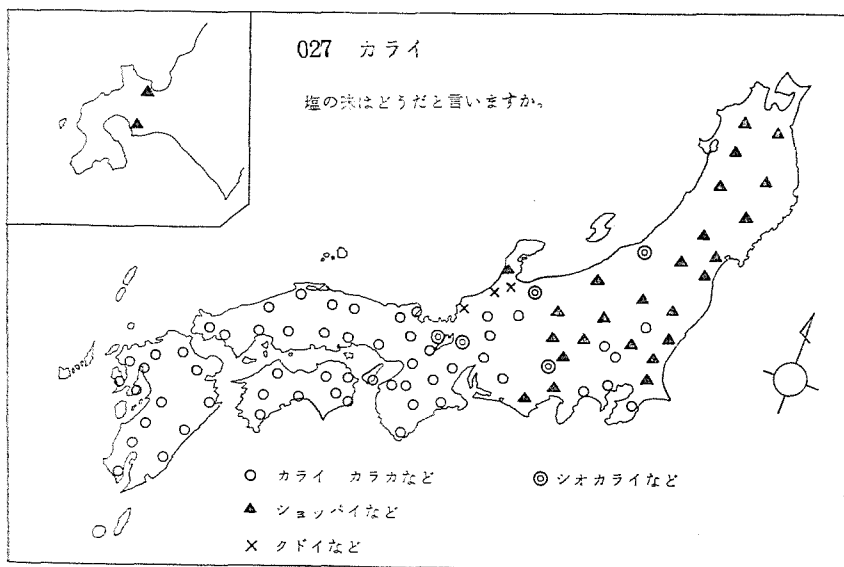
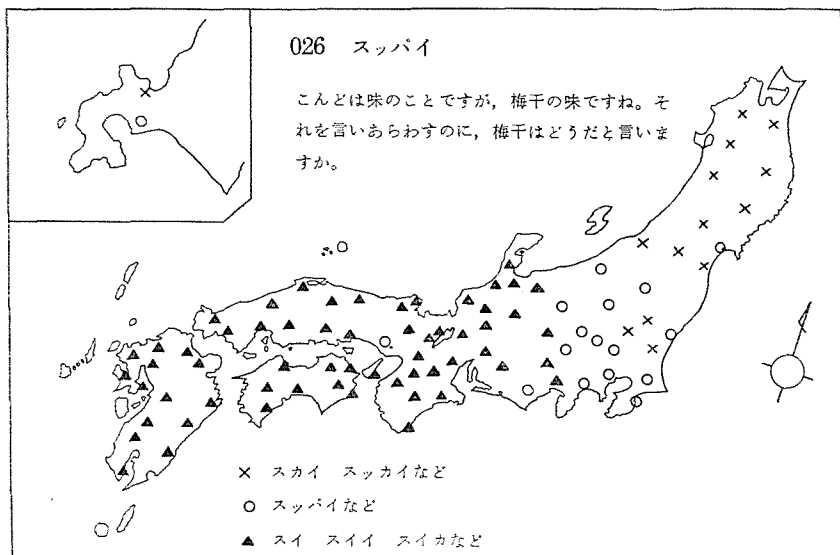
調査票全般について——特に質問法・調査票の体裁などについて。

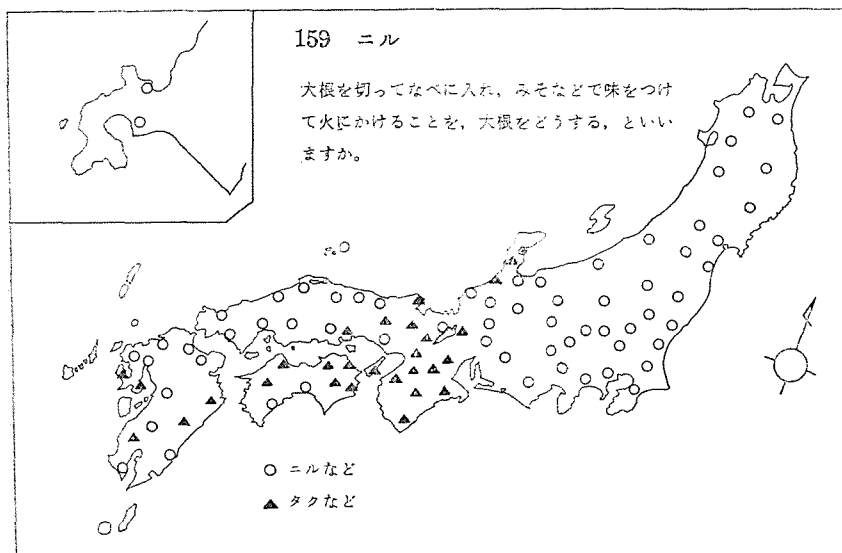
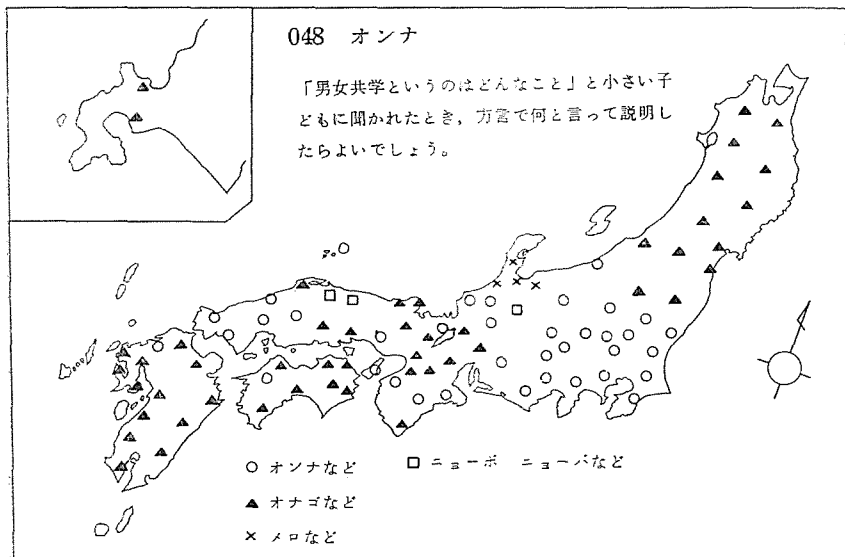
調査項目について——特に全般の内容・配列方法・項目数などについて。

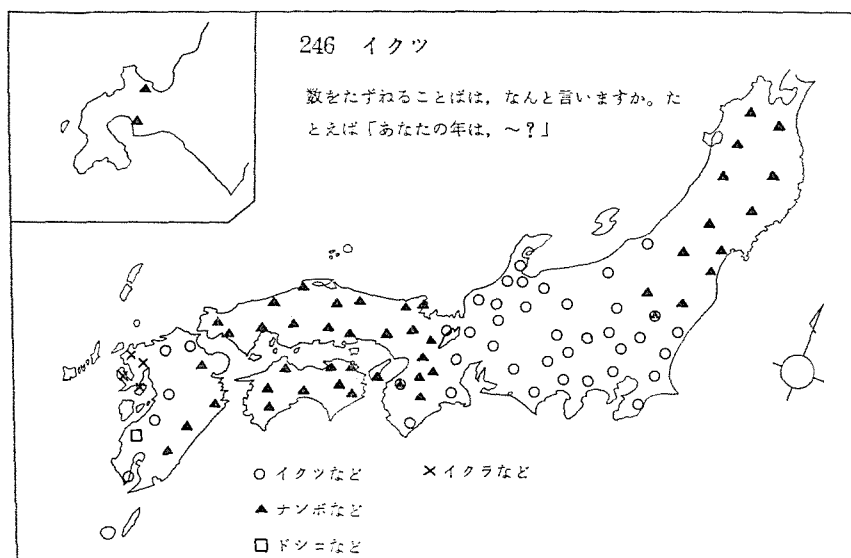
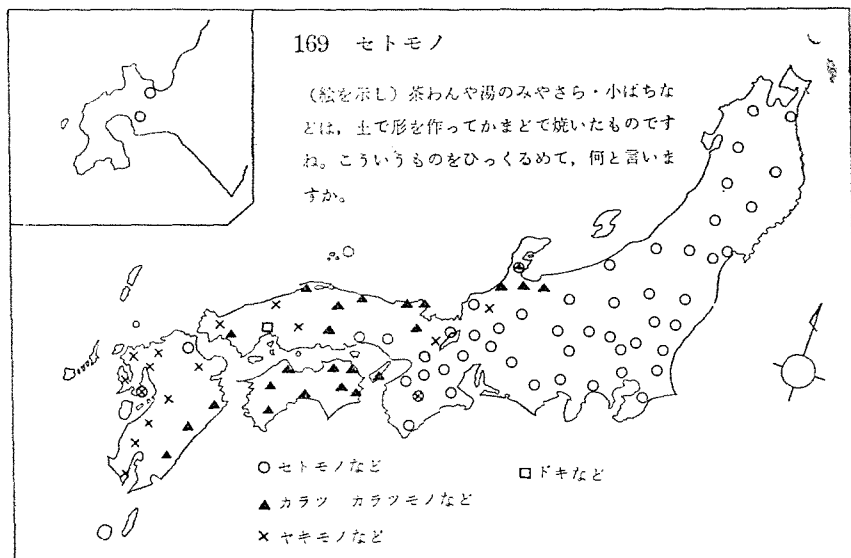
さらに、各項目については、質問文の適否・調査不要と思われるもの・別に新たに加えるべきと考えられるものは何かなど。

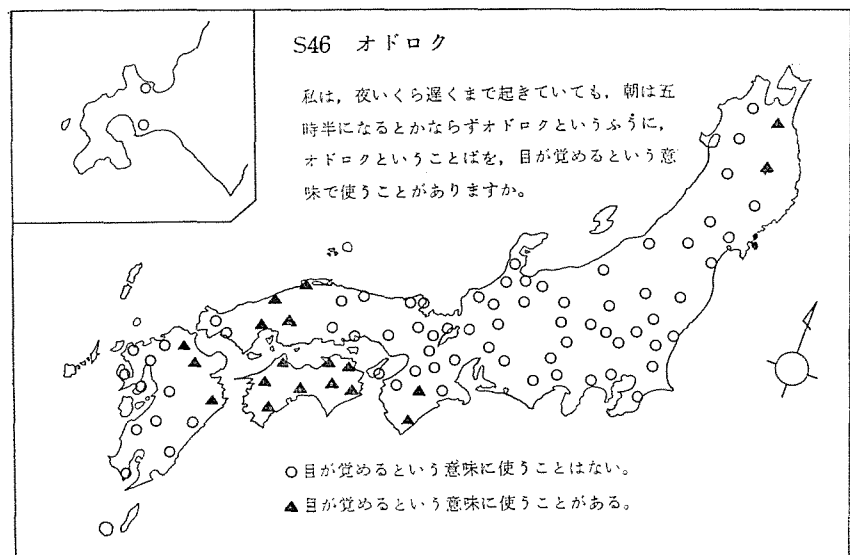
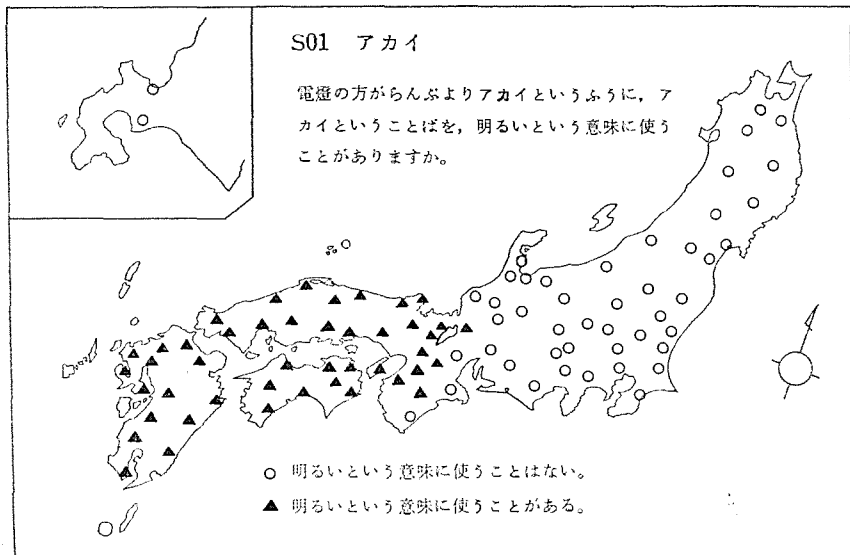
地方調査員からの意見をまとめると、その主なものは大体次のようである。











- ④ 臨地調査のみでは「通信調査にくらべて地点が限られ、」（以下地方調査員の意見を「 」で囲む）「面接ですべての方言を聞き出せるとは限らない」から「通信調査を併用してはどうか」。
- ⑤ 被調査者の「資格規準が厳密すぎて、現地で被調査者の選定に困難がある」「年齢の制限をゆるめてもよいのではないか」「被調査者を1人と限定したり、資格を厳密に規定する必要はない」「2人並べて調査した方が、互に確かめ合うことができる利点があるし、また改まった気分をほぐすことができる」。
- ⑥ 項目数は「多すぎる」「調査が3時間から4時間で終る程度にしたい」。
- ⑦ ナゾナゾ式質問は「賛成するが、この方式がすべてでない。別の方法、たとえば文脈にはめた共通語を示し、それ全体を方言に訳させる方法も考慮してはどうか」「質問文はさらに検討すべきだ」。
- ⑧ S式質問は「興味ある調査法であるが、被調査者にとってなかなか理解しにくいようである」「質問法について工夫の余地がある」。
- ⑨ 参考質問は「導入や確認のため必要なもの以外は、除くか本調査項目とすること」。

そのほか、項目ごとについて質問文の改訂や、除くべき、あるいは新たに加えるべき項目についての具体的な意見があり、別に調査票や付図の体裁についての意見もあったが、省略する。

なお、地方調査員からの意見については、それを議題にして全国協議会で話し合ったから、その項も参照のこと。

3. 全国協議会

昭和31年11月12日、東京の一ツ橋講堂会議室で第4回地方調査員全国協議会を開いた。出席した地方研究員は23名。プログラムは次の通り。

- | | |
|----------------------|------|
| 1. あいさつ | 西尾所長 |
| 2. 地方調査員委託計画一般について | 岩淵部長 |
| 3. 昭和31年度委託調査研究結果の報告 | 徳川所員 |
| 4. 記念撮影 | |
| 休 憩（昼食） | |
| 5. 所内見学 | |

6. 協議

司会 野元所員

7. ヨーロッパ言語地理学の現状

柴田所員

なお、当日欠席の地方調査員には、協議会の席上で話し合ったこと・決まったことの概要をプリントして送付した。その内容の主な部分を転載しよう。

A. 調査全般について

- (1) 調査を始めるのは——昭和32年度から。
- (2) 何年計画か——7年間とする。7年間は、一定の項目の範囲内で調査し、毎年、全国的に地点をふやして、網の目を細かくしていく。このやり方でいけば、第1年度でもごく荒い全国概観が得られるわけだ。最初の7年間で第1期調査とし、その後、別の項目について、第2期調査を計画することも考える。
- (3) 調査の機構——国立国語研究所地方言語研究室を調査センターとし、調査センターの一定の方針に基いて、主として各県の地方調査員が調査に当る。地方言語研究室の室員も適宜調査に参加する。
- (4) 現地調査か通信調査か——現地調査を主体とする。
- (5) 何地点調べる予定か——調査地点は多ければ多いにこしたことはないけれども、費用・地図刊行までの期間・調査機構などを考えると、全国で約2,000地点が最低の線ではないかと思われる。これは、毎年、1年1調査員6地点受持つとして、7年で1,974地点となることに関連がある。また、昭和30年度に地方調査員から寄せられた県ごとの必要地点数を加算すると1,500～2,500地点となることとも関連がある。また、2,000地点というのは、地理調査所の5万分一地形図1枚に少なくとも1地点といったほどの密度になる。ちなみに、5万分一地形図は全国でほぼ1,500枚ある。
- (6) すべての項目について同じ数の地点調べるべきか——その必要はないと思われる。ある項目（例えば「耳」）は300地点（第1年度で調査できる地点数）で全国的概観は得られようし、ある項目（例えば「目」——言語地図参照）は、第2年度以後は境界地帯（おそらく県で言っても、新潟県・福島県・茨城県・栃木県・群馬県）だけを細かく調べれば十分である。

う。もちろん、多くの項目は全国各地で2,000地点の網目で調べることが必要である。このような、地点および地点数を項目ごとに考慮するやり方も考えられる。

- (7) 小さな県と大きな県と企画は同じか——全国調査であるから、毎年、どの県でもまったく同じ企画で調査することは無駄ではないかと考えられる。面積の狭いある県は2年ぐらいいで調査が終るだろうし、広大なある県は7年間続けて、できれば調査費（謝金）または調査員をふやして調査することになる。

B. 被調査者について

- (1) 年齢——65歳まで、という制限をはずして、上は何歳まででも差支えないことにしてはどうかという提案もあったが、やはり、昭和何年に何歳の人を調べた地図だということではなければ意味がないという意見が強かった。まだ仕事をしている年齢層、精神的・生理的に調査の対象になりうる年齢層として最高のところをとれば、やはり60歳前後がころあいではないかと考えられる。土地によって、同じ年齢層でも、ふけぐあいが違うが、全国的に見て、55歳ないし65歳（60歳を中心として上下それぞれ5歳）というのが適当ではないか。
- (2) 人数——少なくとも2人ほしいという意見が二三の人から出た。2人というのには二つの場合があって、2人同時に調べる（あるいは1人は補助者として）というのと、2人別々に調べるというのとある。だが、前者は、結局、どちらかひとりの言語を調べることになる（一般に、もうひとりの人はあまりしゃべらないことになる）から、これは初めから避けた方がいいだろう。後者の方法をとると、同じ地点数を調べるのに、倍近くの費用・日時を要することになる。グローターズ師によれば、イタリアの調査とルーマニアの調査では、1人調べて、答の得られないときだけ他の1人に聞くという方法がとられたとのこと。
- (3) 男か女か——被調査者1人とすれば、女よりは男の方がいい。その土地はえ抜きの人となると、男の方が探しやすい。

C. 調査票について

- (1) 体裁——本調査では、消しゴムの使える上質紙を使い、活字印刷にする。
- (2) 共通語形を出しておくかどうか——調査票の左側に出してある共通語形については、被調査者にのぞかれるから無い方がいい。残すにしても紙の裏に回したい。または、ローマ字にしてはどうか。
- (3) 調査項目の数——同一の被調査者について、通して調べるという限り、今年の300を越える項目は多すぎる。3時間ぐらいで調べあげられる項目数（ほぼ200項目）にしたい。なお、ある地方調査員からは、項目数を極度にへらして、例えば20項目ぐらいを、できるだけ多くの地点数について調べなければ信頼できる結果は得られまい、という意見が出た。
- (4) 音韻・文法は調べないのか——第1期調査では、語だけに限る。音韻文法は第2期計画以後ということになる。
- (5) いわゆるS項目について——いわゆるS項目以外は、同じ事柄に対する異なる語形を求める、という方法で調べるのに対し、S項目は、同じ語形に対する異なる意味を求める、という方法で調べている。S項目は、従来、日本では調査したことがあまりないので、のみこめない人もあったようだ。実際の調査に当たってS項目は調べやすかったという報告と、調査しにくかったという報告とがある。後者は、特に「その他の意味」をたずねる際に一番困ることを訴えたもので、本調査では質問法を検討する必要がある。
- (6) 霜柱のような項目は調べるべきか——霜柱というものは全国各地に見られるものではない。したがって、霜柱の立たない地点では報告のしようがない。このような全国的視野から一般的でないと思われる項目は第1期調査では除いた方がよからう。
- (7) ナゾナゾ式質問——質問として、まわりくどい感じがするが、日本のような共通語のよく広まっているところでは、やむをえない方法と考えられる。こういう方法をとらないと、方言形があるのに共通語形で答えてしまうおそれがある。なお、ナゾナゾ式質問は、全国的に一定の、限定されたある事柄に対する語形を求めるのには、どうしても必要な方法

と考えられる。

- (8) 質問文が長い——間違いなくこちらの意図するものを聞き出すために必要だが、説明がくどいたために、かえってわかりにくいことがある。さらに検討の余地があろう。
- (9) 付図について——本調査では専門家に書いてもらう。写真を使ったらという意見もあったが、聞いているものが総称のときは、写真はかえて困る。特定の物をさすからだ。たとえば、里芋は、どの種類の里芋ともつかない絵が必要となる。

4. 地方調査員

本年度(昭和31年度)の調査研究を委託した地方調査員は、次の47名である。

担当地域	氏名	勤務先	住所
北海道(道南)	石垣 福雄	札幌北高校(教諭)	札幌市北2条西12丁目
北海道(その他)	五十嵐三郎	北海道大学文学部(助教授)	札幌市北28条東3丁目
青森	此島 正年	弘前大学教育学部(助教授)	青森県弘前市袋田20
岩手	小松代融一	県立杜陵高校(教頭)	盛岡市加賀野久保田95
宮城	堀籠 敬藏	宮城県警察本部教養課(技師)	仙台市川内三十人町53の1
秋田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部(教授)	秋田市手形東新町1
山形	後藤 利雄	山形大学文理学部(助手) 兼教育学部(講師)	山形市緑町2丁目4の4
福島	菅野 宏	福島大学学芸学部(助教授)	福島市太田町208
茨城	田口 美雄	県立土浦第二高校(校長)	茨城県新治郡玉里村上玉里
栃木	多々良鎮男	宇都宮大学学芸学部(助教授)	宇都宮市一の沢町196
群馬	上野 勇	県立沼田女子高校(教諭)	群馬県沼田市西倉内町810
埼玉	大久保忠国	埼玉大学文理学部(教授)	浦和市外与野町大戸576
千葉	大岩 正伸	千葉大学文理学部(助教授)	東京都練馬区東大泉町941
神奈川	斎藤義七郎	川崎市立商業高校(教諭)	神奈川県川崎市千年新町26
新潟	劍持隼一郎	県立柏崎高校(教諭)	新潟県柏崎市本町2の873
富山	大田栄太郎	富山大学文理学部(講師)	富山市大町2区144
石川	岩井 隆盛	金沢大学教育学部(助教授)	石川県河北郡津幡町字清水 ホ313
福井	佐藤 茂	福井大学学芸学部(教授)	福井市湊新町66の3
山梨	清水 茂夫	山梨大学学芸学部(助教授)	山梨県中巨摩郡白根町百々 3062
長野	青木千代吉	通明中学校(教諭)	長野県更級郡更北村中氷鉤 1089

岐阜	谷 関 石雄	県立中津高校(教諭)	岐阜県中津川市小川町 萱橋方
静岡	望月 誼三	静岡大学教育学部(教授)	静岡市小鹿 1
愛知	野村 正良	名古屋大学文学部(助教授)	名古屋市千種区徳川山町 3の44
三重	堀田 要治	文部省初等中等教育局	東京都文京区蓬萊町蓬萊館内
滋賀	熊谷 直孝	県立長浜北高校(教諭)	滋賀県東浅井郡朝日村今西
京都	奥村 三雄	岐阜大学学芸学部(講師)	岐阜市長良六本松大学住宅
大阪	前田 勇	大阪学芸大学(教授)	大阪市東住吉区田辺西元町 6の34
兵庫(南部)	和田 実	神戸大学文学部(講師)	神戸市垂水区西垂水町神田 122
兵庫(北部)	岡田 莊之輔	温泉小学校(校長)	兵庫県美方郡温泉町湯
奈良	西宮 一民	帝塚山学院短期大学(助教授)	大阪府枚岡市河内町 920
和歌山	村内 英一	和歌山大学学芸学部(助教授)	和歌山市真砂町和歌山大学教官住宅
鳥取	広戸 惇	島根大学文理学部(助教授)	島根県出雲市元宮町
島根	岡 義重		島根県簸川郡斐川村大字富村
岡山	虫明吉治郎	県立岡山操山高校(教諭)	岡山市高島新屋敷
広島	村岡 浅夫	五日市中学校(教諭)	広島県佐伯郡五日市町屋代 121
山口	渡辺 保	大股中学校(教諭)	山口市上金古曾 2の75
徳島	宮城 文雄	徳島大学学芸学部(教授)	徳島県那賀郡那賀川町島尻 932の2
香川	近石 泰秋	香川大学学芸学部(教授)	香川県丸亀市土器町 3936
愛媛	杉山 正世	県立今治工業高校(講師)	愛媛県今治市松本通 2丁目
高知	土居 重俊	高知大学教育学部(助教授)	高知市彌生町 44
福岡	都築 頼助	福岡学芸大学(教授)	福岡市高宮玉川町 93一高内
佐賀	小野志真男	佐賀大学教育学部(教授)	佐賀市赤松町中館
長崎	西島 宏	長崎大学学芸学部(講師)	長崎市城山町 1の172号
熊本	秋山 正次	熊本大学教育学部(講師)	熊本市健軍町県営住宅 406号
大分	糸井 寛一	大分大学学芸学部(助教授)	大分県臼杵市海添 190
宮崎	岩本 実	宮崎大学学芸学部(助教授)	宮崎市下鶴町 190の1
鹿児島	上村 孝二	鹿児島大学文理学部(教授)	鹿児島市武町 965

C. 所員による臨地調査

地方言語研究室では、地方調査員に調査・研究を委託するのと平行して、調査法全般および調査項目の検討のために、昭和31年度に室員による臨地調査を前後3回行った（昭和30年度の室員による調査2回については年報7参照）。

- 第3回調査 秋田県鹿角郡花輪町
- 第4回調査 宮城県北諸県郡高城町
- 第5回調査 山梨県中巨摩郡豊村

1. 第3回調査

昭和31年5月14日から16日までの3日間、昭和31年の地方調査員への委託に先立って、秋田県鹿角郡花輪町で調査した。調査には調査票C（B.1.13参照）を使用した。

この調査の主目的は、あらかじめ文献によって調査した方言が、この調査法とこの調査票で得られるかどうかを確かめることであった。使用した文献のうち、主なものは次の3部である。

- 秋田方言 秋田県学務課（昭和4年）
- 鹿角方言集 内田 武志（昭和11年）
- 鹿角方言考 大里武八郎（昭和18年）

それぞれ特色のある方言集で、わが国の方言集として優れたものに属する。これらの文献のあることが、鹿角郡を特に調査地点として選んだ理由の一つである。

調査は次のような方法で行った。各調査員が同じ調査票を持って別々の被調査者に面接調査し、終ってから、それぞれの結果を持ち寄って検討する。第二日以降は、前日に不適当な部分の発見された質問文を改めて試したり、文献に出ている方言形で聞き出せなかったものについて、それがなぜ聞き出せなかったか確かめながら調査を進めた。この調査の結果を参考として調査票Dが作られ、昭和31年度の委託が行われたのである。

この調査には、地方言語研究室の柴田武・野元菊雄・上村幸雄・徳川宗賢の4人が参加した。

2. 第4回調査

昭和32年2月9・10日の2日間、宮崎県北諸県郡高城町で調査した。調査票は調査票Eを使用した（調査票Eについては後述する）。

この調査のおもな目的は調査票Eの検討にあったが、ほかに新たに用意した60枚の付図の検討もかねた。

調査は、調査員が別々の被調査者に面接し、終わってからそれぞれの結果を持ち寄って検討するという、第3回の調査の時と同じ方法をとった。

ここで調査票Eについて、その概略を説明しよう。この調査票は、調査票Dの改訂版であり、地方調査員の報告を参考としてそこからかなりの項目を削り、一方参考質問の大部分を本調査項目にし(項目番号を与え)、またいくつかの新しい項目を加えたものである。総項目数299。

調査票Dから削られた項目のおもなものは次の通り。

1. 明け方・朝・昼・夕方など刻限に関する項目
2. 左・右・上・下・など方向に関する項目
3. 啞・あばたなどの個人の欠陥にふれる項目など。

新たに加えた項目や質問文を改めたものには次のようなものがある。

1. 今まで水が氷結するコオルのみを尋ねていたが、あらたに水気のあるもの（たとえば濡れ手拭など）が凍結するコオルを尋ねる項目を新設。
2. 塩の味のカライを問う質問のほか、唐辛子などの味を問う質問を新設。
3. 調査票Dでは単にセキの名詞形を求める質問であったが、調査票Eでは「セキをスル」のように後続する動詞も一括して問うこととした（セキオスルをコズクと動詞一語で表現する地方がある）。イビキオカク、カタアントビオスルなども同じ。

第4回調査の結果、調査票Eから一部の項目を削ることになり（赤んぼう・こども・おとな・としよりなど成長に応ずる名称、人称代名詞など）、質問文の改案もほぼ出つくしたので、調査票については大体最終的に決定したと言ってよいが、なお調査全般について問題となる点が二つほど残った。それは、

- (1) よい被調査者を得るにはどういう方法をとったらよいか。
- (2) 被調査者は1人でよいか。2人並べて調査した方がよくはないか。

これらの問題の解決は、第5回の調査に持ち越された。

この調査には、研究第1部長岩淵悦太郎、地方言語研究室の柴田武・野元菊雄・徳川宗賢が参加し、宮崎県地方調査員岩本実が同行した。

3. 第5回調査

昭和32年3月11・12日の2日間、山梨県中巨摩郡豊村で調査した。前項で述べたように、この調査の目的は主として次の二つにしばられた。

- (1) よい被調査者を得るにはどういう方法をとったらよいか。
- (2) 被調査者は1人でよいか。2人並べて調査した方がよくはないか。

そのほか、前回の調査によって不適当だと思われた調査票付図の改訂版の検討や、まだ多少問題があるとして残ったいくつかの項目の検討もかねた。

3.1 よい被調査者のえらび方について

われわれの考えるよい被調査者（調査に向く被調査者と言いかえてもよい）とは（年齢・性・経歴などの条件は別として）大体次のような条件を備えた人である。

- a. 言語感覚が鋭い（意味のニュアンスの違いに鋭敏で、質問に対し適切な答えをする。共通語と方言、敬語と卑語、日常語と廃語などの区別がはっきりしている）。
- b. その土地のその年齢層の人としてじゅうぶんな方言形を使っている（その土地の方言をふだんほとんど使わない生活をしている人は調査に向かない）。
- c. 精神的・肉体的に欠陥がない（もうろくしている・歯が抜けて発音がはっきりしない・耳が遠いなどの人は、被調査者として適当でない）。
- d. その他調査に協力的である。反応が早く、むだ話をしないなど。

よい被調査者が得にくいには、次のような事情がある。一般に被調査者を見つけるのには、あらかじめ現地の学校や役場あるいはその土地に住む知人に紹介を頼むのが普通である。ところが、依頼のときにいろいろの条件をつけておいても、それが必ずしも満たされない。現地の人たちが、こちらの示した条件をそれほど重いものと考えないためもあるだろう。年齢・居住経歴や性別で不適格な人が現われる場合さえある。しかも、具合の悪いことには、aからd

までのような条件に適合するかどうかは、大概の場合実際に調査を始めてみなければわからない。言うまでもないが、調査を始めた以上、途中でそれを中断することは相手が人間であるだけにむずかしい。調査票がまだ始まったばかりの所で調査を打切るという相手に対するきまずさと共に、調査員側としても、せっかく始めたのにという気持が沸いてくるのは当然のことである。また、初対面のあいさつや雑談などを通して、調査をはじめる前にその人が不適當であることがわかったとしても、調査を受けるという心組みを持って来た人を何も調べずにそのまま帰すことはやりにくいことだし、また紹介者の立場も考えねばならない。

そこで、これらの困難を克服するために、われわれはパイロット調査という方法を考え、この第5回の調査で検討することにした。パイロット調査とは、大体次のようなものである。パイロット調査票（ほぼ30項目・その中に方言量の多い項目や、やや答えにくい項目、S式質問の項目などを含む）を作り、まず、その調査票によって目の前にあらわれた被調査者を判定する。もし調査に不向きであると考えられる場合には、そのパイロット調査票だけで調査を打ち切り（調査結果は捨てる）、別の被調査者を探す。もしよい被調査者であれば、その調査結果を生かして次の本調査票へと進む。

この調査法をとれば、いちおう一冊の調査票が終った所で判定するのであるから、そこで調査を打切る場合でも被調査者に途中でやめたという感じを与えない。またその調査票が終ったところで、どうしても判定しなければならないのだから、調査者側としても、どこかわりきれない感じを持ちながら調査を続けてしまうことは、まずない。経歴などもこの調査票で聞くことになっているが、かりにそれで不適格とわかってこの調査票ぐらいは調査してもたいして負担にならない。調査される心組みを持った人を、調査しないで帰す必要はなくなる（この調査票に要する時間は20分以内）。

このパイロット調査の検討のために使ったのが調査票Fである。現地では4人の調査員が手分けして20人の被調査者にあたって調べてみたが、この方法・この調査票で、ほぼ期待した目的を達することができるようである。調査票Fの項目を共通語を見出しとして配列順に示せば次の通り。

かまきり	くものす	ひきがえる	いくつ	あかい
あめんぼ	かたつむり	まむし	いくつ	(S)あかい
みずすまし	なめくじ	へび	いくら	
くも	おたまじゃくし	とかげ	あおい	
くものいと	かえる	かなへび	きいろい	

なお調査の結果、一部改めるべきところが出てきた。

3.2 被調査者の人数についての問題の検討

被調査者を1人とせず2人以上並べて調べるという考えは地方調査員側からも出され(B.2参照)、それに対して研究室としては1人でよく、また、その方が調査しやすいという考えであったが(B.3参照)、第4回の調査の結果、もう一度この点について検討してみようということになった。第5回臨地調査で、この問題検討のための調査は次のようにして行った。被調査者は、パイロット調査の結果優秀と認められた被調査者と、普通程度と判定された被調査者のうちから、10人を選び、その人たちで2人ずつの組合わせを5組作った。調査票には調査票G、Hと名付けたものを使用した。(調査票Gは質問文検討や配列検討をかねた81項目。調査票Hは付図改訂版の検討用をかねた30項目)。

調査の結果、次にあげるような理由から結局単独の被調査者を対象とする方が複数の被調査者よりもすぐれているということになり、被調査者を2人(あるいはそれ以上)並べて調査する案はとらないこととなった。複数の被調査者を使えるなら、2人(それ以上)を別々に調べた方がよいという考えである。

(1)2人の被調査者を並べても、往々にして一方の意見にひきずられ、1人の場合と差がないことが多い。それどころか、この場合圧倒された方の被調査者は、調査の間ずっと黙りこくって、卑屈な気持で、退屈している。(2)調査者側から言えば、こんな場合に2人を平等視しながら2人であることを生かして調査を進めることがむずかしい。(3)2人を十分に生かして調査するには、非常に時間がかかる場合がある。(4)他人のいる所では、前に自分の主張した答を訂正しにくい場合がおこりうる。(5)他人の言わない答をしようとして純粋でない答をする可能性が多い。(6)互に確認し合えば、納得のいった答えかというとは必ずしもそうでない。一方が不承不承ながら認めていることもありうる。(7)2人がそれぞれの答を互に否定し合った場合の処置がむずかしい。(8)ふだん使ってい

ることばでも、卑語といわれるようなものの出にくい場合がある。

なお、この第5回調査に使った調査票F・G・Hの項目数は合計141であった。項目数が少ないようであるが、これは、第4回調査、調査票Eで検討が完了したと考えた項目は含めなかったためである。

D. おわりに

1. 昭和32年以降の見通し

全国協議会の項(B.3参照)で記したように、本格的な調査は昭和32年度から7か年計画で始める。調査地点は全国で2,300地点以上。広大な県では70ぐらい、小さな県でも20ぐらいの地点が選ばれる。調査票E・F・G・Hに、さらに検討を加えたもので、項目数は200ないし250となるであろう。パイロット調査の方法は採用する。

2. 担当者

日本言語地図作成のための準備調査についての計画の立案・報告書の整理などには、地方言語研究室の柴田武・野元菊雄・上村幸雄・徳川宗賢があたった。

(徳川)

琉球首里方言辞典の編修

A. 目的と前年度までの経過

琉球首里出身の琉球研究家、島袋盛敏氏執筆の原稿「琉球語辞典」（収録語数約1万2千）に検討を加え、訂正増補した上で琉球首里方言辞典として刊行する。そのために、昭和29年度から30年度にかけて、すべての見出し語について、音声の観察と音素体系の帰納、アクセントの観察、意味の補正、用例の追加、項目の整理と補充などを行い、一方で文法の調査を行った。その上で、原稿を全部書き改める作業にとりかかった。

B. 昭和31年度の実施概要

原稿を書き改める作業に意外に時間を要したために、それ以降の作業は次年度にくりこして、昭和31年はもっぱら原稿の書き改めと疑問のある項目の補正に費した。

原稿を書き改める作業には、次のような仕事が含まれている。

- (1) 見出し語および例文を島袋氏の原稿のかなおよびローマ字による表記から、音声の観察にもとづいて得た音素表記に変える。
- (2) すでに調査して得たアクセントの資料によって、すべての見出し語にアクセント記号をつける。
- (3) 文法の調査によって得た資料にもとづいて、見出し語につける品詞の注記をいっそう確かなものにする。
- (4) 見出し語が、文語としてのみ使われる語か、古語であるか、明治以降に借用した新語であるか、士族の用いる語か、女の用いる語か、などについて、すでに観察して得た資料によって、できるだけ注記する。
- (5) 文語については、見出し語および例文について、琉球における正書法（多くのあて字を含んだ、独特の漢字かなまじり文。書き改めた原稿の例のなかの〔 〕で囲んだ部分）をできるだけ記入する。

- (6) 活用する語（動詞・形容詞）については、その活用の型の種類を、調査して得た資料によって、見出し語ごとに記入する。
- (7) 意味の記述については、できるだけ簡略に、かつ正確にするようにつとめ、また難解な語については必要に応じて説明を長くする。また、すでに調査して得た例文を、できるだけ加える。

この作業を進めていく過程で、意味・用法その他について新たな疑点を生じた項目が多数あった。これらの項目については、すべて再調査を行っている。また、再調査の過程で、いまだ見出し語にない語が次々と数多く見出されるので、それらについても必要なものは、調査を行ってから、見出し語として加えていくことにしている。

なお、どのような語を見出し語として補うかについては、およそ次のような方針によっている。

- (1) 1900年前後に、すなわち、島袋盛敏氏、比嘉春潮氏の幼年時代から青年時代にかけて、日常用いられていた首里方言はもろさず収録するようにつとめる。また、当時すでにまれにしか使わなくなっていた語または、当時すでに古語となっていた語についても、話し手に記憶されているものは、その旨を記して、できるだけ収録する。
- (2) 文語であっても、組踊（琉球の楽劇、韻文で書かれている）・琉歌（日本の和歌にあたる、琉球の定型詩）などによって、人々に親しまれていた語は、なるべく収録する。ただし、文語の中には、日本語からの借用語で、日本語をまねして作った、日本語とほとんど変わらない文体の中でのみ用いられ、発音のみが琉球式の語が多数ある。そういう語は原則として収録しない。
- (3) 明治以降の新語および、明治以降の日本語からの借用語については、収録すれば際限がないので、次のようなもののみを収録するにとどめた。
すなわち、
(イ) 明治時代に一時的に新造され、あるいは借用され、その後はもう用いられなくなったもの。これらは文化史的その他の観点から、興味のある語である。

例. ʔagihwiigurumaa (陸の火の車の意。おか蒸気。汽車),
kaagaa'udui (影踊りの意。映画), cincoo (県庁), ciisaçi (警察)
これらに対して、たとえば、次のような、明らかに日本語から借用した
語で、現在も用いられているものは収録しない。

kisja (汽車), 'eiga (映画), kencoo (県庁), keisaçu (警察) な
ど。

(㊦) 明治以降の借用語らしいが、全く琉球語として在来の語と同様に用
いられているもの。中には、明治以降の借用語か、それ以前から用いら
れていたかが不明のものも含む。

これら以外に、日本語の大部分の単語は、琉球語に借用されて用いら
れるが、それらについては際限がないので、省略する。また、比較的
最近の琉球語の新語(米軍の影響その他によるものなど)については、
資料がないので省略する。

(4) 複合語については、際限なく造ることのできるような複合語をのぞき、
日常用いられるものは、紙数の許すかぎり収録する。

(5) おもろ、混効験集(琉球語の最古の辞書)などのみにあらわれる古語で、
一般の話し手の記憶にないような語、首里方言では用いられない他の方
言の語は、島袋氏の原稿に少数あったが、割愛した。

次に、島袋氏の原稿と、書き改めた原稿とを対比して、数項目について例を
示す。

島袋氏の原稿の例 (ただし縦書き)

アカ aka (名) 垢。

アガユン agayun (自) あがる。
たこがあがる。物価があがる。

アガユン agayun (自) おしまいに
なる。「マチ、ヌ、アガユン」

書き改めた原稿の例

ʔaka⑥ (名) 髪に毛にたまつたよごれ。日本語
の垢は hwingu, ふけは ʔirici という。

ʔaka hadoon. 髪がよごれている。ʔakan
nugan. 仕事がかどらない。すき櫛がよくない
時、髪によごれがとれにくいことからいう。

ʔaga=jun ① (自=ʔan,=tan) ①上る。下から離
れて上る。nubujun 参照。tiidanu (maainu)
ʔagajun. 太陽(まり)が上る。niinu ʔagajun.
値が上る。①上達する。zii(tii) ʔagarasjun.

(市場がおしまいになる)

アチ achi (名) 秋。

イバサン ibasan (形) 狭い。

オモロ omoro (名) 沖縄最古の歌集。日本の万葉集に匹敵するもの。尚清王即位五年(西暦一五三二)に第一巻が出来、それから八十年後島津の琉球入から五年後尚寧王の即位二十五年(西暦一六一三)に第二巻が出来、尚豊王即位三年(西一六二三)に第三巻から第十二巻まで出来た。

ヌンチャービ nunchōbi (名) 髪
の敬語。普通の敬語は「ウンチャー
ビ」である。

字(腕前)を上達させる。㊤おしまいになる。
macinu ʔagajun. 市場がはねる。㊤(よいは
ずのものが)いっそう悪い。qkwajaka (nu-
sujudjaka)! ʔagajun. 子供(泥棒)より悪い。

ʔaci ① (名) [文] 秋。秋にあたる季節感がない
ので秋にあたる口語はない。

ʔibasan ㊤ (形) 狭い。窮屈である。狭苦しい。
単なる面積の広狭のみでなく、そこにいる人、
ある物に対してその場所がせまいのにいう。
sibasan の項参照。ʔusakii qcunu ʔaɕima-
idunʒee, caaru ʒasici ʔatin, ʔibasadu
ʔjaru. そんなに人が集まるなら、どんな部屋で
も狭いさ。ʔibasanu naakankai ʔwaikudi
Picun. 窮屈な中へ割りこんで行く。

ʔumuru ㊤ (名) [文] [おもろ] おもろ。沖縄に
古くから伝わる伝誦詩。日本の祝詞にあたるよ
うな歌謡で、そのほとんどが叙事詩である。
ʔumuru は、首里王府に集められ、ʔumuru-
ʔusoosi [おもろ御さうし] に収められたおも
ろをいい、地方の nuuru (のろ、巫女) に伝
わるおもろには ʔumui という。ʔomoro は
日本式発音。

ʔumuruʔuso'osi ㊤ (名) [古] [おもろ御さうし]
沖縄最古の歌集。各地に伝わるおもろを集大成
したもので、日本の万葉集に匹敵する。22巻か
らなり、尚清王即位5年(西暦1532)に第1巻、
その80年後、島津の琉球入りの5年後、尚寧王
即位25年(西暦1613)に第2巻、尚豊王即位3
年(西暦1623)に第3巻から第22巻までがで
きた。わずかに漢字を含むひらがな文の韻文で書
かれている。

ʔumurunusi'dui ㊤ (名) [古] [おもろ主取] お
もろをつかさどる役の男子。ʔumuruʔusoosi
[おもろ御さうし] を保管し、王の式典の時、
おもろを歌う。

ʔumui ㊤ (名) 各地の nuuru (のろ、巫女) によ
って伝えられ、歌われているおもろ。思いの意か。
mjuncoobi ① (名) [美御美髪] 貴族の髪
の敬語。おぐし。nuncoobi ともいう。髪
の普通の敬語は ʔuncoobi。

C. 昭和31年度の担当者

本年度は上村幸雄ひとりが担当した。疑問のある項目その他についての調査にはすべて、比嘉春潮氏の協力を得た。氏は首里出身の琉球史家で、望みうるもっとも確かな形で首里方言を再現することのできる、最良の協力者である。

D. 来年度の予定

原稿を書き改める作業に意外の時間を要したため、進行が予定よりかなりおくれている。原稿を書き改める作業は、昭和32年3月末日現在、9,000語以上について終り、あと4,000語程度を残している。この作業にはあと4か月程度を要する。疑問項目の処理は、約半数を終り、あと半数を残している。その後に残された作業は次の通りである。

- (1) 書き改めた原稿によって項目を配列する。
 - (2) 日本語（標準語）引きの索引を作る。
 - (3) 文法について補足調査を行う。
 - (4) 音韻・文法についての解説を加えるため、その原稿を執筆する。
- これらすべての作業は、昭和32年11月末日までに終る予定。

（上村）

言語能力の発達に関する調査研究

A 前年までの経過、本年度の実施概要

昭和28年度から7年計画ではじめた研究で、昭和28年度に小学校第1学年に入学した児童の、一学級のひとりひとりについて、その言語能力がどのように伸びて行くかを、継続的にみている。この児童たちが今年度は4年生になった。言語能力の調査は、文字、発音、語い、文法、読解、読書、作文、話すこと、聞くことのすべてにわたり、また、発達の条件として、環境、知能、性格、身体的状況、学習などを調べている。この昭和28年度入学児童について調べ切れなかったことを、翌年昭和29年入学の児童について調べている。この児童は今年度は3年生である。

この調査研究のため、東京に実験学校1校、地方に協力学校11校を依頼した。この12校はすべて最初からの継続校である。

東京都四谷第六小学校 (実験学校)
神奈川県比々多小学校 (実験学校に準ずる学校)
東京都方南小学校, 東京都新井小学校
岩手県二子小学校 栃木県小山第二小学校
長野県松代小学校 長野県豊野西小学校
神奈川県久木小学校 静岡県中田小学校
滋賀県中央小学校 兵庫県北小学校 (以上協力学校)

本年度の調査担当者は、興水実、芦沢節、高橋太郎、村石昭三、および平井昌夫（非常勤）であった。

実験学校におけるおもな検査や調査を実施順にあげる。協力学校については、調査問題に実施の手引きをつけたものを送って、協力学校職員の手で実施の上その成績表なり成績物なりをこちらに届けてもらっている。

I. 各学期末のテスト

A. 4年生

第1学期

1) かたかな書字力

- 2) 漢字読字力
- 3) 漢字書字力
- 4) 語い力
- 5) 文法能力
- 6) 読解力
- 7) 読書速度
- 8) 話し方
- 9) 聞き方
- 10) 音読技能
- 11) 作文「ともだち」

第2学期

- 1) 漢字書字力
- 2) 読解力
- 3) 読書速度（黙読・音読）
- 4) 語い力
- 5) 文法能力
- 6) 聞き方
- 7) 話し方
- 8) 音読技能
- 9) 作文 (A)「わたくしのうち」
- 10) 作文 (B)「目的に応じて文を書く；手紙文の良否の判断」

第3学期

- 1) 書字力（漢字・文章聴写）
- 2) 漢字読字力
- 3) 読解力
- 4) 読書速度（黙読・音読）
- 5) 語い力
- 6) 文法能力
- 7) 聞き方
- 8) 話し方
- 9) 作文 (A)「先生」
- 10) 作文 (B)（学習記録）

B. 3年生

第1学期

- 1) 語い力
- 2) 文法能力
- 3) 文章鑑賞力

- 4) 話し方
- 5) 聞き方
- 6) 黙読理解力
- 7) 作文「ともだち」

第2学期

- 1) 語い力
- 2) 文法能力
- 3) 話し方
- 4) 聞き方
- 5) 作文 (A)「わたくしのうち」
- 6) 作文 (B)「目的に応じて文を書く；手紙文の良否の判断」

第3学期

- 1) 語い力
- 2) 文法能力
- 3) 話し方
- 4) 聞き方
- 5) 作文 (A)「先生」
- 6) 作文 (B) (学習記録)

Ⅱ. そのほかの調査

A. 4年生

- 1) 読書調査
- 2) 田研式環境テスト
- 3) 京大NX知能検査

B. 3年生

- 1) 話し方テスト (手品を見てその内容を他人に伝える)

B 実験学校・協力学校の状況と意見

研究所と実験学校・協力学校との連絡のために、所員が出向いたり、会議をしたり、また連絡のための「伝言板」を発行したりしている。31年2月に各学校に質問紙を送り、

- (1)テストの被験者の選び方と、そのテストの担当者、(2)学校の国語部のこと
- (3)学校での研究活動と指導上の中心点、(4)研究別のテストの扱い方と利用法、
- (5)質問と要求

の5項目について、回答を願った。以下その回答の整理である。

1. 研究所のテストの被調査者の選び方はどのようにしていますか。
 ——大部分は特定の学級を定めているが、方南と小山第二とは、その学年の各学級から調査者を選んでいる。なお北小学校は31年4月に学級の編成替えを行なったので、30年度後期からテストを継続している児童が1/3になった。また松代では学年会の話し合いによって特定学級以外の学級でも自由に積極的に研究所のテストを行なっている。
 2. 研究所テストの実施と整理は、どのようにしていますか。
 ——多くは学級担任が国語部の援助を得て行なっているが、学年担任が集まってする所や、全職員が協力して行なう所もある。また時に家人の応援を頼む先生もある。
 3. 教科研究の国語部が設けられていますか。
 4. 国語部員は何名ですか。
 5. 国語部の会合はどのくらいやっていますか。
 ——ほとんどの学校に国語部があり、その人数と会合数は次の通りである。
- | | |
|--------|----------|
| 2人—1校 | 大体月1回—5校 |
| 4人—3校 | 学期に5回—1校 |
| 5人—2校 | 大体月2回—2校 |
| 6人—1校 | 週1回—2校 |
| 7人—2校 | |
| 8人—1校 | |
| 11人—1校 | |
6. 国語部の会合では、いつもどんなことが話題になりますか。おもなことを三つあげてください。

〔読解〕

- | | |
|-----------------------|-----------|
| ○読解力をつけさせる方法 | (方南・北・久木) |
| ○読解力をのばすための生活経験の取り上げ方 | (小山第二) |

〔作文〕

- | | |
|-------------------------------|-------|
| ○作文や文法の力をつけたい | (比々多) |
| ○作文学習の体系づけ | (中央) |
| ○作文指導、特に構想記述の指導 | (中央) |
| ○作文の指導(校内作文コンクールのことなど) | (方南) |
| ○児童の作文を持ちよって話し合う。(語い・語法・表記など) | (松代) |

〔話し方〕

- | | |
|------------|---------|
| ○話すことの指導 | (豊野西) |
| ○発表力をつけること | (松代・久木) |

〔文字〕

- | | |
|-------------|------|
| ○漢字の指導法について | (久木) |
|-------------|------|

○ローマ字、毛筆習字などのカリキュラムについて (小山第二)

〔学力〕

○国語学力の問題 (北)

○学力が低下しているかどうか。 (方南)

○基礎学力向上のための方法 (豊野西・比々多)

○基礎学力の効果が単元学習にどうあらわれるか。 (比々多)

○言語能力調査の活用 (小山第二)

〔指導〕

○国語指導法の問題 (北)

○学習指導上の基本形態 (豊野西)

○実践事項を学者の説によって検討してみる (四谷第六)

〔教材〕

○教材の指導技術の共同研究 (四谷第六)

○教材を文のジャンルにわけること (中田)

○各ジャンルの教材につき指導態度の方式 (中田)

○教科書の取扱い方 (新井)

〔計画〕

○年次計画を立てる (四谷第六)

○国語学習の時間の効果的活用 (中央)

〔一般〕

○国語教育の現状分析 (教校)

7. あなたの学校では、今、国語の学習指導上、特にどのような点に重点をおいていますか。

〔読解〕

○読解力を高める (松代・豊野西)

○学年段階による読解指導 (語法をとりいれて) (方南)

○児童の主体性を重視した読解指導 (久木)

○文形による読解指導 (要約・文法・修辞など) (四谷第六)

○読解指導 (読みの正確さ) (新井)

○文を要約する力をのばす (方南)

○読解をのばすための生活経験の位置づけ (小山第二)

○読解をのばすための板書 (小山第二)

○読めない子、字づらは読めても理解できない子供を救う。 (二子)

○会話文の読み方 (松代)

〔作文〕

○作文力をのばす (方南)

○作文学習、特に文の構想をたてる (中央)

○作文における語法 (松代)

〔話し方、(読み方)〕

○話しことばの能力向上 (豊野西)

○話しことばの文末を明瞭に (松 代)

〔文字・語い〕

○語い力を高める (松 代)

○漢字力を高める (方 南)

○漢字の使用量を増す(作文と関連して) (新 井)

〔基礎学力〕

○国語基礎学力の効果を全分野であげる。 (比々多)

○“皆読、皆話、皆書”(みんなの力をのばす) (北)

〔学習指導〕

○楽しく作業できる学習の場を考えて行く。 (中 田)

○単元学習(他教科の単元学習との関係を明かにして国語としての
単元学習を推進して行く)。 (中 央)

8. あなたの学校の今年の研究項目は何でしたか。(国語科に限りません)。

9. 今年度、国語科の研究授業、発表会などの試みがありましたか。

——8, 9をまとめて、学校別(到着順)に書く。

〔久 木〕 8. 読解指導

9. 月1回程度、14回ほど行う。

〔豊野西〕 8. 全校的には“文章題の解決の指導”

国語係中心に“話し合い学習の効果的な進め方”

9. 研究授業……1年“単元もみじ”

4年“作文をしよう”

〔中 田〕 8. 生活指導、意欲的学習を進めるには、環境美化

9. だれにもできる国語教育ということを目 標にして研究授業——読解指導について——

〔中 央〕 8. 生活学習の反省と前進——系統化の方法——(国語では作文学習の系統化)

9. 11月: 全校的な研究発表会——全国対象

12月: 兵庫県加古川市国語主任会のための研究授業を公開

1月: 全学級の国語研究授業(作文中心)——校内

2月: 大津市国語カリキュラムの実践研究会のため研究授業公開

〔方 南〕 8. ことばのきまり、文の要点をつかむ、よい作文をつくる、漢字力・文
字力をつける。

9. 「ことばのきまり」の研究発表会(6月下旬)「文の要点をつかむ指導」発表(東京都教研大会)読解指導——校内随時

〔新 井〕 8. 不適応児の指導(生活指導部)、国語算数の学力調査

9. 各科輪番制で国語は来年度
- 〔小山第二〕 8. 全教科の学習指導の改善
9. 学年研究授業——素材＝生活文、留意点＝低学年の読解指導
- 〔四谷第六〕 8. 国語、社会：カリキュラム作成、
音楽：コーラス指導
算数：指導技術研究（授業3回）
9. 研究授業6回、発表会1回、
- 〔松代〕 8. 国語：学校文集の編集（作文の領域別指導法）
算数：図形教材の指導法
社会：地域社会にもとづいたカリキュラムの作成
音楽：楽譜と発音
9. 国語教室における学習目標に立った話しあいの形態（授業と研究会）
小学校における文法学習の指導について（発表）
小学校における文学教育のあり方（発表）
児童の詩について（研究授業）
- 〔比々多〕 8. 国語基礎学力（素読、発音、聴取、語い、書字）の養成
9. 国語基礎学力の発表会……3月
読解力の実態調査……神奈川中郡北部で
- 〔北〕 8. 国語学習指導法の研究
特別教育活動の推進
9. 全県的研究会（県国語連盟、郡国語教育部共催）を行う。研究授業は毎月（校内）
- 〔二子〕 8. 郡カリキュラムの地域化……展開案の作成（社会・国語・算数・理科）
9. 特になし
10. 研究所のテストをどのように実施していますか。（時期・日数・整理の日・人など）
——ほとんどが学期末に1週間～10日ぐらいかかって実施している。中には3～4日で終る学校もある。大体は当学級内で適当な時間に実施、特定学級を定めない学校では、プログラムを作ったり、放課後に見童を集めたりして行う。個人検査を放課後に行なう学校もある。
整理は学級担任、学年担任、国語主任、国語部員、またはその協力など、学校によって、行なう人が異なり、整理の時期も放課後のところと、休暇期間のところがある。整理にも1週間～10日ぐらいかかる所が多い。
なおプリントの印刷も、学級担任、学年担任、国語部、研究所係、などいろいろである。
11. 〔研究所のテストを何かに利用されることがありますか。（評価、研究など）
——学期末でせわしいので、あまり利用できないというところもあるが、割合にいろいろの方面に利用されている。

〔評価と指導〕

国語指導上の評価に用いる学校と、標準・水準を知るために用いる学校がある。
比々多・新井では各人の誤答のあり方を指導上の参考にしている。

〔出題のヒント〕

研究所のテストをヒントにして、国語の出題に利用するところもかなりある。研究所のテストを参考にした“よりよい問題”がたくさんできているようである。

〔父兄に連絡〕

テストの結果を父兄に連絡して、父兄の教育に利用する学校もある（北）、方南では“国研だより”を作って家庭に配布している。

〔研究会〕

研究所のテストの結果を、日教組や県や区の研究会で発表した学校もある。

12. 研究所のテストに対する関心はいかがですか（児童・父兄・先生方など）。

〔児童〕

喜ぶもの、いやがるものがあるが、関心を示さないものもある。新しい型の問題に対しては、喜ぶものと“むずかしい”というものとがある。前回と同じ問題に対しては、自分の成績の向上に興味をもつもの以外は関心を示さないという報告もある。放課後残ってやることにいやがるものもある。概して、“研究所のテスト”というものになれてきているもようである。

〔父兄〕

父兄は割合に関心を示し、テスト結果をききたがったり、子供を被検者にしてほしがったりするものもあるようである。

〔先生方〕

テストの問題や結果に対する興味と、負担に対するめんどくささと両方が存在するようである。しかしみんなが協力的だという回答が多い。

13. 研究所または他の協力学校にたずねたいことがありますか。

14. 研究所または他の協力学校に伝えたいことがありますか。

——13と14はいっしょにして次のようにまとめられる。

〔たずねたいこと、してほしいこと〕

A. 研究所に対して

- (1) 各テストのねらいを示して利用しやすくしてほしい。

（豊野西・方南・新井）

- (2) 今までのひとつひとつについて発達という観点から前後の関連において位置づけしてほしい。（今までのまとめ方を示してほしい）

（松代・中央）

- (3) 本年の問題についての(2)のような位置づけをしてほしい。

（松代）

- (4) 今後の見とおしを説明してほしい。

（松代）

- (5) テスト実施によってえられる結果の教育的価値はどうか。

（四谷第六）

- (6) “手引”は大ざっぱで実施の仕方にはばがすぎる。

（比々多）

- (7) 実験学級だけで行って、協力学校にまわさないものも見本として一部ほしい。
(新井)
- (8) 書字力の結果が教科書などによって影響されることをどう考えるか。(特に
4年2学期)
(比々多)
- (9) 現物送付の作文について他の学校のことも知りたい。
(小山第二)
- (10) 平均値が本校の報告通りの数値になっていたが、
本校の実施の仕方はあっているのだろうか。
(小山第二)
- (11) テストの結果と学校の特性について知らせてほしい。
(方南)
- (12) 能力差と教師の指導技術と地域差との関係はどうか。
(四谷第六)
- (13) 学期末でなく、中間にしてほしい。
(豊野西)

B 協力学校に対して

- (1) 集計後それを主体的にうけとめ、どんなまとめ方をしているか。(松代)
- (2) テストのための用紙代・印刷代・会議費などをどうひねり出しているか。
(新井)
- (3) 実験学級に対して、何か特別の配慮をしているか。
(中央)
- (4) テストをした児童としない児童との国語能力を比較したデータがないか。
(新井)

C. 提案

- (1) 協力学校の協会をつくり、各校の研究テーマを交換したい。(中央)
- (2) 集計しないまゝの各校のなまの資料を交換したい。
(四谷第六)
- (興水)

児童、生徒の読みにおける眼球運動

—— 1年生～9年生の発達——

1. この研究の目的

この研究は、「言語能力の発達に関する調査研究」の一部として行っているものであるが、つぎの3つの点を実験によって明らかにしたいと考えた。

1. 児童、生徒が文章を読むとき、その眼球運動の技能は学年によってどのようにのびていくか。
2. 眼球運動の技能はほかの言語能力の発達とどのような関係があるか。(発達を規定している要因はなにか。)
3. とくに児童、生徒のひとりひとりの眼球運動を事例的に調べ、その発達の特性を診断し、それがなんにもとづくか。

この研究そのものは事例的研究をたてまえとして、この4年間、同じ子ども

について、小学校入学当初から調べてきた、なお継続中である。ここで中間的に報告することがらは、上の(1)の目的にそって、一般的に各学年ごとの眼球運動の平均の発達のあるかただけを、各学年から10名ずつ選んで実験したものである。したがって、これは事例研究に先だつ概観調査であり、(2)および(3)の目的にそった実験の中間報告は「中学年の読み書き能力」の中で報告する。

2. この研究の方法と手続き

○被験者

小学校1年生から中学校3年生までの児童生徒、男女計90名を被験者にした。各学年10名（男5名、女5名）ずつ。

小学生は東京都新宿区四谷第六小学校の児童

中学生は東京都中央区文海中学校の生徒

被験者はいずれも(1)視力正常。(2)読書能力と知能がその学級で中位のものである。

○実験の期日

予備実験 昭和29年秋（小学1年生、2年生だけ）

本実験 昭和30年秋（全学年）

補充実験 昭和31年秋（中学3年生だけ）

中学校3年生の実験は、本実験のとき、電圧が低すぎて、うまく眼球運動の写真がとれなかったために、1年後あらためて補充実験をした。

○実験の装置

オフサルモグラフ（Master Ophthalmograph）

これは、文章を読む被験者の両眼に弱い光をあて、目の動きに対応して動くその光線を流動するフィルムに記録する装置である。（アメリカ、眼科協会の製品）

○実験の方法

実験に先だち、被験者につぎのような教示を与える。

「これから、あなたに、やさしい短かい文章を読んでもらって、そのときの目の動きを写真にとります。手を出さないで、あなたが普段読みなれている普通の速さで読んでもらいます。この実験がすんでから、あとで正しく読めたか、

どうかをみる簡単なテストをします。」

この教示を与えてから、練習用の文章をつかって実際に読ませ、実験のしかたを納得させる。被験者の気持が落ちついてから、本実験にうつる。

○実験で読ませた文章

のちに示すとおり A, B, C の 3 種類にわかれている。A 文章は小学校 1 年生相当、B 文章は 3 年生相当、C 文章は 6 年生相当のむずかしさの文章である。

よこ組み、タイプ印刷、

それぞれの文章について、読ませた学年はつぎのとおりである。

A 文章 小学校 1 年生～6 年生

B 文章 小学校 3 年生～中学 2 年生

C 文章 小学校 6 年生～中学 3 年生

したがって小学校 1, 2 年生の被験者は A の文章だけ、小学校 3, 4, 5 年生の被験者は A, B の文章を、小学校 6 年生の被験者は A, B, C の文章を、中学 1, 2 年生の被験者は B, C の文章を、中学 3 年生は C の文章だけを読むことになる

このように、3 種類の文章で、そして、ある学年で、2 種または 3 種の文章を読ませたわけは、

(1) 読む文章のむずかしさ(注 1)が各学年で同じ程度のものにしたい。小学校、中学校を全部同じ文章で通すことは、学年によって、適、不適が出すぎるから、それでは正しい読みの条件とはならない。

(2) 文章のちがいによる実験結果のズレをならしつつ、眼球運動の発達の標準曲線をさいごにみたい。

(注 1) 読ませる文章を全学年、同じものにするか、学年ごとに変えるかによって、発達の曲線がちがってあらわれる。バスウエルは第一学年をのぞいて、他の学年を同じ文章で実験したところ、小学校低学年で急激な発達があり、中学校以後はほとんど発達がなかった。バレンチンは 2 学年ずつにわけて文章を変えて実験したところ、バスウエルの結果より、長い発達の過程があるように結果が出た。シュミットの実験では、中学校期に第二次の急激な発達期があるという結果がでた。

Buswell, G.T., "Fundamental reading habits: a study of their development" Suppl Educ. Monogr. 1922. No. 1

Balentine, F.A., "Age changes in measures of eye movements in silent reading". Monogr. in Education 1951

Schmidt, W.A. "An experimental study in the psychology of reading." Supple. Educ. Monogr. 1917. No. 2.

A, B, C の文章にはそれぞれ、数個の理解度テスト問題がついている。別項に示すとおりである。この方はオフサルモグラフによる目の動きの撮影がすんでから、実験者が口頭で質問する。もっとも理解度テストといっても被験者が勝手にとばし読みをしたりしないで、文章のだいたいのすじやことがらを頭のみこみながら、読んでいたか、どうかを調べるためである。普通、読解力テストと呼ぶような厳密なものではない。

I 読ませた文章

A文章 1年生～6年生

たろうさんの うちの きんじょに
いけが あります。 いけには さか
なが たくさん います。 たろうさ
んは よく つりに いきます。 まさ
るさんを さそって いきます。 よ
しこさんを さそうことも あります。

B文章 3年生～8年生

きのう みさ子さんは おかあさん
の ご用で かいものに 出かけまし
た。 大きな かいものかごを 持って
行きました。 たまごを 6こ、 トマト
を 3こ、 それから にくを 少し
かいました。 家に かえる とちゅ
うで 学校の 先生に会いました。

C文章 6年生～9年生

1492年、新大陸を発見したコロンブス
は、その地をインド、すなわちアジア大陸の
東側のどこかであると死ぬまで考えていた。
新大陸がアメリカと呼ばれるようになったの
は、コロンブスの死後、イタリアのアメリカ
という人の探検報告からである。それにし
てもアメリカに住んでいる土人をインディアン
と呼ぶのは、コロンブスの考えがそのまま残
っているからである。

○理解度のテスト問題

A文章（5点満点）

- (1) だれが、なにをしたお話です
か（2点）
- (2) どこに行ったのですか（1点）
- (3) だれと行ったのですか（2点）

B文章（7点満点）

- (1) だれが、なにをしたお話です
か（2点）
- (2) なにを買いましたか（3点）
- (3) とちゅうでだれに会いました
か（1点）
- (4) みさ子さんはだれの用事で
行ったのですか（1点）

C文章（5点満点）

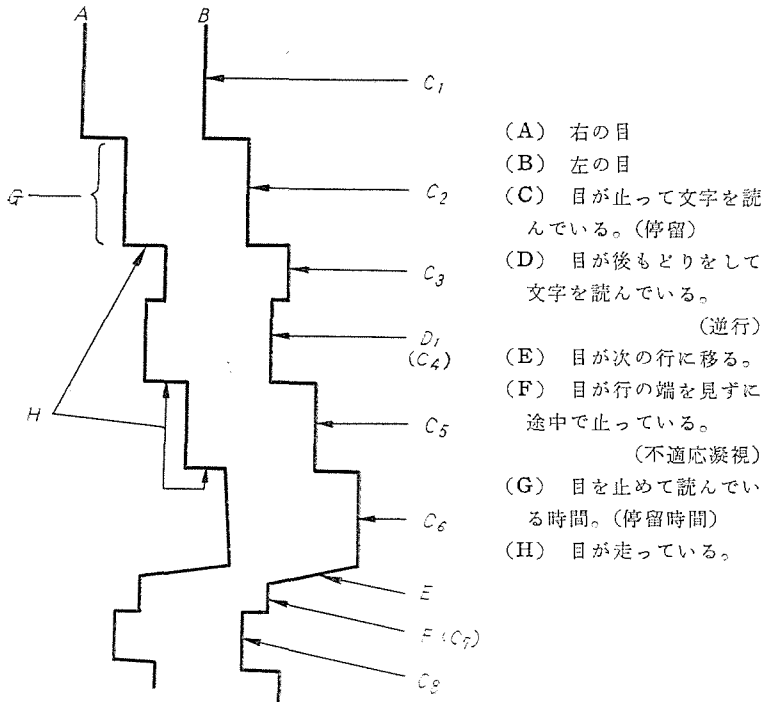
- (1) 新大陸はいつ発見された
のですか（1点）
- (2) コロンブスは自分の発見
した大陸をどこだと思った
のですか（1点）
- (3) アメリカに住む土人をイ
ンディアンと呼ぶのはだれ

の考えが残っているのですか (1点)

(4) 新大陸がいまのアメリカだとわかったのはだれの報告からですか (1点)

(5) コロンブスとアメリゴとはいっしょに新大陸にいきましたか (1点)

線にあらわれた目の動き



○記録したフィルムの処理

眼球運動を記録したフィルムは現像、定着にうつし、ネガのまま、これをマイクロリーダーにかけて、読んだ文章の第二行目から分析した。目の動きは上掲のような線になってフィルムにあらわれる。分析する項目はつぎの5つである。結果は () 内にきめた単位によって出した。

1. 読書速度 (1秒間に平均なん字読んだか)
2. 停留数 (100字読む間に、平均なん回目がとまったか)
3. 停留時間 (1回、目がとまっている間に、平均なんシグマ($1/1000$ 秒)の時間がなかったか)

4. 逆行数（100字読む間に、なん回目があともどりしたか）
5. 不適応凝視数（行から行に移る間に、平均なん回、目がまちがったところにとまったか）

このほかに理解度をだす。

3. この研究の実験の結果

○第一実験 A文章を読ませた実験

A文章を小学校1年生から6年生までの被験者、各学年10名ずつについて読ませ、目の動きの発達をみた。結果は第1表のとおり。

1. 学年が上るにつれて、目にとまる回数(停留数)あともどりをする回数（逆行数）行のはじめの文字からはずれて不適応凝視をする回数（不適応凝視）、目にとまっている時間（停留時間）は減っていく。そして一定時間に読める文字数(読字数)、理解度はふえていく。このような傾向ですすむことが眼球運動の発達であると考えることができる。
2. 発達の度合いはどの技能も低学年でいちじるしい。停留数は3年、逆行数は4年までに急激に減り、あとゆるやかになる。不適応凝視は4年以降、かわらない。停留時間は停留数の減少の度合いほどへりかたがいちじるしくない。読字数は3年から4年にかけて発達がいちじるしい。

第1表 A文章の読みにおける眼球運動

技能 学年	停留数	逆行数	不適応凝視数	停留時間	読字数	理解度
1 年	136.2	21.9	1.7	330	2.14	3.1
2 年	97.6	15.2	0.6	291	3.45	4.0
3 年	64.6	8.4	1.0	267	5.78	3.7
4 年	51.7	5.4	0.5	203	8.92	3.9
5 年	44.4	4.1	0.5	228	9.41	4.4
6 年	45.7	2.7	0.5	198	9.30	4.6

3. とくに、1年生について考えてみる。この実験はやっと、ひらがなが全部読めるようになった秋、10月に行われたものであるが、100字の文章を読む間

に、1年生は平均136回、目がとまっている。これによって、この時期の読みの特徴である、逐字読み (letter by letter) をしていることがわかる。目が後もどりをする回数は4字から5字の割合で1回ずつ、あらわれている。不適応凝視は一行うつるたびに、平均1.7回と出している。まだ、1年生では、正しく行から行に移るとき、最初の文字をすばやく知覚することはむずかしいようである。

4. 目が一回の凝視で、停留する時間は外国の実験結果とくらべて短かいように思われる。(注2)

5. 理解度は眼球運動の技能の発達とあまり関係がなさそうである。

○第二実験 B文章を読ませた実験

B文章を小学校3年生から中学2年生までの被験者、各学年10名ずつについて読ませ、目の動きの発達をみた。結果は第2表のとおり。

1. 第一実験とひきあわせてみると、読ませた文章がちがっていても、目の動きの発達傾向は似ている。

2. 小学校3年生から4年生にかけて、各技能の発達の度合いがとくにいちじるしい。

3. しかし、この実験では中学1年生が小学校6年生より、逆行数、不適応凝視、読字数に悪い結果が出ている。

(注2) バスウェル、眼球運動に関する年令の効果 (1922現在)

	年令	1行に対する 平均逆行数	1行に対する 平均停留数	平均 停留時間
I B	6	5.1	18.6	660
I A	7	4.0	15.5	432
II	8	2.3	10.7	364
III	9	1.8	8.9	316
IV	10	1.4	7.3	268
V	11	1.3	6.9	252
VI	12	1.6	7.3	236
VII	13	1.5	6.8	240
Fresh	14	1.0	7.2	244
Sopn	15	0.7	5.8	248
Jhn	16	0.7	5.5	228
Sen	17	0.7	6.4	248
Coll	18	0.5	5.9	252

第2表 B文章の読みにおける眼球運動

技能 学年	停留数	逆行数	不適応 凝視数	停留時間	読字数	理解度
3年	65.6	8.7	0.8	259	5.53	5.4
4年	46.0	4.7	0.5	213	9.07	6.0
5年	45.0	2.9	0.6	223	9.22	4.6
6年	44.9	3.9	0.4	220	9.20	5.1
7年	57.4	5.2	0.5	207	7.75	5.0
8年	42.6	2.0	0.3	197	10.62	4.3

○第三実験 C文章を読ませた実験

C文章を小学校6年生から中学3年の被験者各学年、10名ずつについて読ませ、目の動きの発達をみた、結果は第3表のとおり、

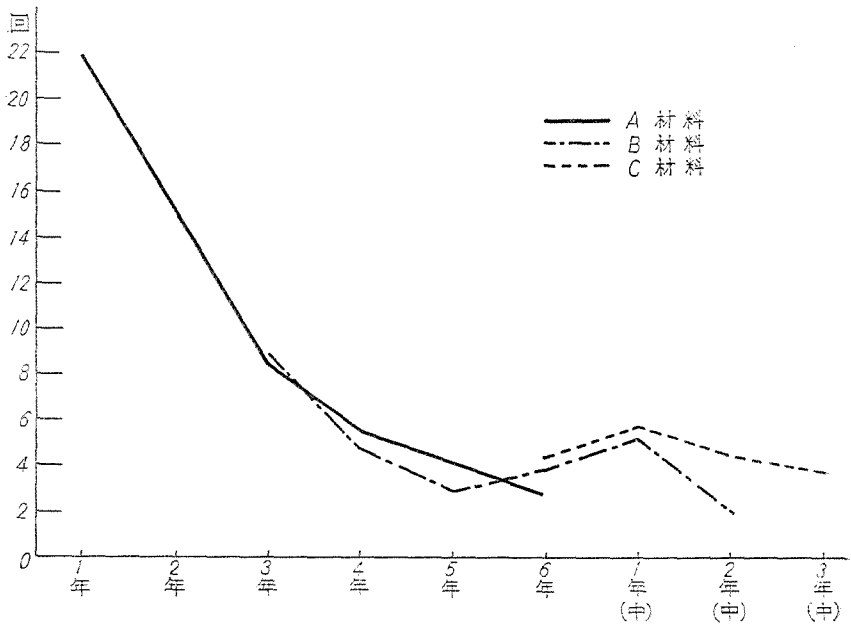
1. 第一実験、第二実験とひきあわせると、予想した発達の水準より悪い結果が出ている。
2. 発達曲線は中学生では小学生ほど、なめらかでない。とくに中学3年生で、停留数、不適応凝視数、停留時間、読字数は中学2年生より悪い結果が出ている。
3. 理解点は各学年とも高くない。これはC文章がA、B文章にくらべて、むずかしすぎたためであろう。

第3表 C文章の読みにおける眼球運動

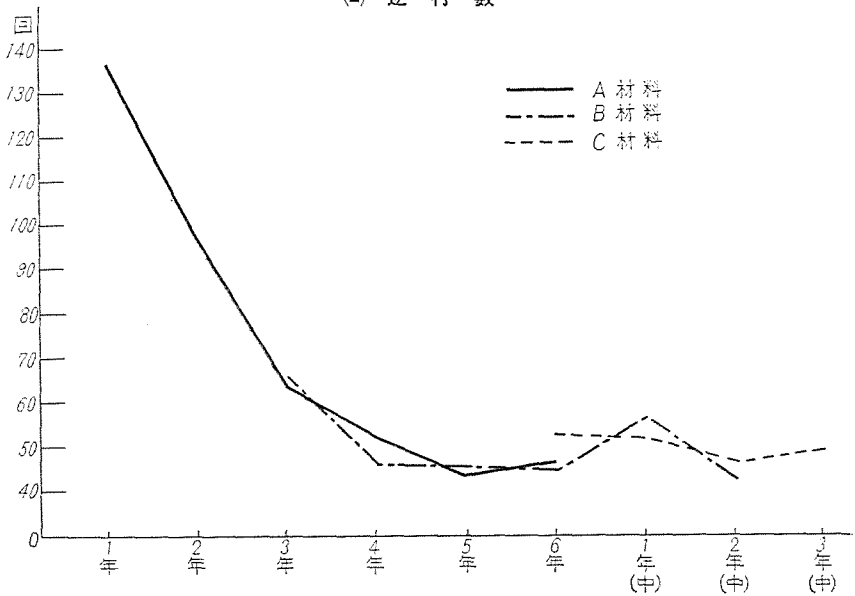
技能 学年	停留数	逆行数	不適応 凝視数	停留時間	読字数	理解度
6年	52.7	4.3	0.7	216	7.89	2.8
7年	52.4	5.8	0.5	203	8.01	1.6
8年	46.9	4.4	0.4	214	9.01	1.4
9年	49.6	3.8	0.5	234	7.80	2.1

つぎに、目の停留数、逆行数、不適応凝視数、停留時間、読字数の技能別にA、B、Cの文章を読んだ結果をまとめて図に示す。

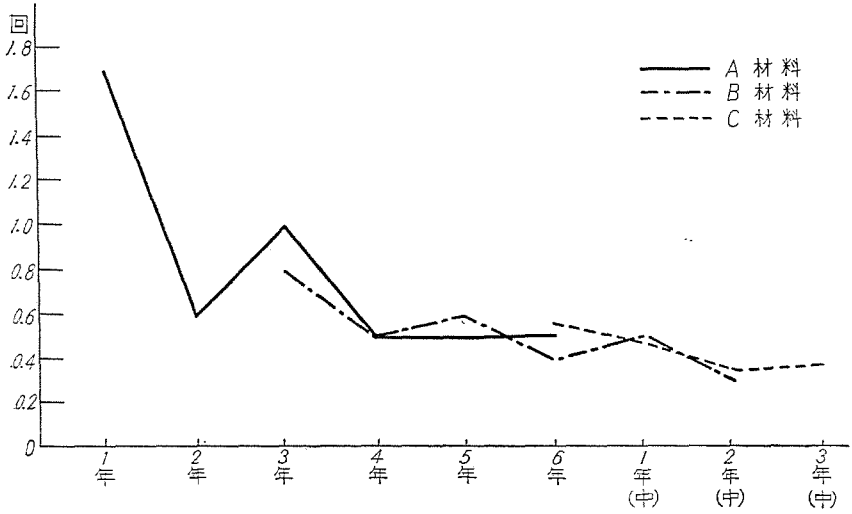
(1) 停留数



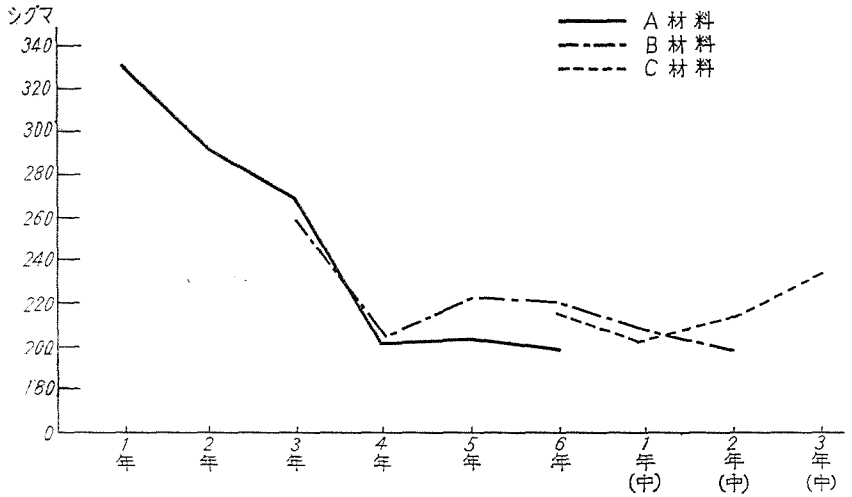
(2) 逆行数



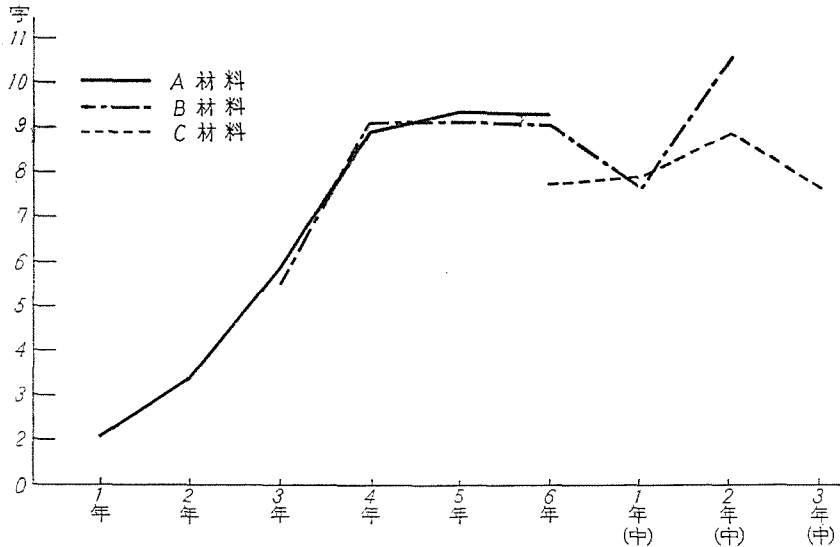
(3) 不適応凝視数



(4) 停留時間



(5) 読字数



4. 結果に対する全体的考察

1. 文章を読むときの目の動きは、学年が進むにつれて、停留数、逆行数、不適応凝視数、停留時間が減り、読字数が増していく。これが眼球運動の発達というときの、各技能発達の傾向である。
2. 停留数、逆行数の減少の度合いは、停留時間の減少の度合いにくらべて、より大きい。中学校では、停留時間は学年が上るにつれて増していく傾向がみえるがこの実験だけではわからない。
3. 読書速度がますます大きな要因は停留数の減少である。
4. 眼球運動の各技能はだいたい、小学校の間で、完成する。その中でも、小学校低学年のころの発達がいちじるしい。1年から2年に移る時期は逐字読みから、語として、また文として読めるようになる時期であり、3年から4年に移る時期は音読より黙読の方がより速く読めるようになる時期である。小学校の各学年になると、発達の度合いはゆるやかになり、中学校ではほとんど発達の度合いがわからない。ときに退行の現象すら見える。
5. 眼球運動の急激な発達時期は小学校4年までに一度あらわれるが、外国の

研究で報告する（中学校の時期に第二次の急激な発達がある）（注3）という現象はあらわれない。このことは日本の児童、生徒の読書力は小学校の比較的早い時期に、ある程度の能力がつくのに、それから先の発達が少なく、先どまりになるというひとつの傾向かもしれない。

（注3） シェミット（1917、既出）

6. 外国の研究結果にくらべて、平均停留時間がどの学年とも50シグマから60シグマほど短かく、逆に不適応凝視は比較的多い。これはつぎのどれかに原因がありそうである。

- 1) 日本人の民族パーソナリティが持つ知覚のタイプ
- 2) 文字、印刷上の問題
- 3) フィルム記録分析上の誤差

以上の結果の解釈で、いくつか問題点や疑問がでてきたが、それらはいま継続中の実験研究の中であらためて考えなおしている。

（村石）

低学年の話し聞く能力の調査

国語教育研究室では昭和28年度から7か年の計画で「言語能力の発達に関する調査研究」を実施しており、さきに昭和31年3月に「低学年の読み書き能力」を出したが、低学年の話し方、聞き方については、これにふくめなかったので四谷第六小学校で行なった調査の項目全部と、一部の調査の概略を、ここにのべる。

- I 行なった調査の時期と種類
- II 同じテストに対する答の発達
- III 1年生の聞く能力の調査から
- IV 2年生の話す能力の調査から

I 行なった調査の時期と種類

1年2学期末

〔話し方〕

（第1類） 一対一でおとなの問に答える能力（話題は学級内での共同経

験「かるたあそび」)

(第2類) 教室内で学級の一員として発言する能力(風車作りの作業を通して)

(第3類) 教室内で学級の全員にむかって話す能力(きのうしたことについて)

〔聞き方〕

(第1類) 短い文を完全に聞きとる能力(Ⅲ参照)

(第2類) 条件のある指示を聞きとって行動する能力(Ⅲ参照)

(第3類) 長い話のあらすじを把握する能力(21分かかる童話「逃げた仁王さん」)

1年3学期末

話し方、聞き方ともに2学期末と同じ観点から各3類にわけて調べた。
また聞き方の第1類と第2類は材料も2学期末とほぼ同質である。

2年1学期末

〔話し方〕

(第1類) 一対一でおとなと話す能力(郵便局への道順について)

(第2類) 話し方作法(条件を与えて、こんな時どう言えばよいかをきく。(ペーパーテスト))

〔聞き方〕

(第1類) 音声の聞きわけ(発音の似た語を聞かせて)

(第2類) 目的をもった聞き方(始めに課題状況を与えて、それを解釈するのに必要なことを聞きとる)

(第3類) 1年2学期末と全く同じ材料を聞かせ、理解度はペーパーテストで調べた。

2年2学期(10～11月)

〔話し方〕 相手のまだ知らないことがらを、相手にわかるように伝える能力

2年2学期末

〔話し方〕 一学期末と同種の話し方作法。

〔聞き方〕

（第1類） 1学期第1類と同種。

（第2類） 1学期第1類と同種。3問のうち2問は材料もほぼ同質。

（第3類） これまでの第3類と同種。（材料は23分かかる童話「やまなしの実」）

2年3学期末

〔話し方〕 1・2学期末と同種の話し方作法。3問のうち、2問は2学期末とほぼ同質。

〔聞き方〕

（第2類） 1・2学期末と同種。3問のうち、1問は材料も1・2学期末とほぼ同質。

（第3類） 比較的長い話を聞いて、要点をつかむ。

II 同じテストに対する答の発達

2年生の1・2学期、または2・3学期に、同質と考えられるテストを、話し方作法について3つ、聞き方について2つおこなった。

その問題（の大体）と正答率（分母は総人数、分子は正答者数）

1. 話し方の作法の場合

（A） 1学期と2学期におこなった。ここに1学期のものを示すが、2学期は「隣り」を「親戚」に、また名前をかえたものである。

（問題） あきら君は隣のまさる君といっしょに道を歩いていると、学校の先生にあいました。まさる君は幼稚園に行っていて、自分のことを、マーチャンと言います。先生があきら君に、「この子はだれですか、君の弟かね」と聞きました。あきら君は、まさる君をどう言ったらよいでしょう。——以上を読み聞かせた後、客観法形式ペーパーテストで、次の中から選ばせる。

- （1） ぼくに弟なんかいません。
- （2） まさるっていうんです。まだ学校に行っていません。
- （3） いいえ、ちがいます。ぼくのうちのとなりの子です。
- （4） いいえ、ちがいます。まーちゃんです。

正答率は、1学期 21/48、2学期 40/48 であった。

(B) 2学期と3学期におこなった。前者は病気、後者はけがの見舞いである。(読み聞かせる文は省略)

- (1) 石田さん、早くよくなってね、そしてまたボール遊びをしましょうよ。みんなで待ってるわ。
- (2) 石田さん、まあ、ずいぶんやせたわね。顔も青いわよ。早くよくなってね。私さびしいの。
- (3) 石田さん、早くよくなってね。おくすりのんでる？ 私あなたの顔を見ていると、なんだかかぜをひきそうだわ。
- (4) 石田さん、国語のお勉強すごく進んだわよ。あとお勉強においつくの大変だわね。

正答率は、2学期 32/48、3学期 20/48 であった。

(C) 2学期と3学期におこなった。

(問題) (前略)……しかし加藤君はクリチャンの漫画が見たいので、朝日新聞をとってほしいと、きのうお父さんにお願ひしました。けれどもとってもらえませんでした。先生が「加藤君の家は何新聞をとっていますか。」とお尋ねになりました。何と答えたらよいでしょう。(以上読み聞かせる。)

- (1) 読売新聞をとっています。
- (2) 朝日新聞の方がいいけど、今読売新聞をとっています。
- (3) 読売新聞です。あれはクリチャンがないからつまらないんです。
- (4) 新聞はね、僕んち読売です。

正答率は2学期 25/48、3学期 22/48

2. 目的をもつ聞き方の場合

(D) 1学期と2学期におこなった。運動会(2学期は遠足)の前の日ラジオの天気予報を聞く、という状況を設定して、天気予報を聞かせ、必要な地方(東京地方)の必要なことがらが聞けたかどうかを調べる。

正答率は、1学期 21/48、2学期 36/48

(E) 1, 2, 3学期に行なった。全体に対する指示の中から自分のすべき

ことを聞きとる聞き方。次の例は、1学期。2・3学期は、学芸会の代りに遠足とした。

(問題) 校長先生が校庭で朝のあいさつをしました。「あしたの学芸会の準備をするから、学年でまとまって、ちがう所集ってもらいます。よく聞いているように。」と言われました。武君はどこへ行ったらよいか、みんなで聞いてあげましょう。「6年生は屋上の東側に集まる。5年生はここに残る。4年生と3年生と2年生は屋上の西側に集まる。1年生だけは教室にはいって静かに勉強する。また全部の学年の学芸会の役員は山田先生の所にいく。わかったね。」——さあ武君はどこにいけばよいでしょう。(以上を聞かせた後客観法形式、ペーパーテストで次のなかから選ばせた。)

- (1) おくじょうひがしがわ。
- (2) おくじょうにしがわ。
- (3) きょうしつ。
- (4) やまだせんせい。

正答率は1学期 28/48, 2学期 30/48, 3学期 27/48

3. 傾向

以上5種類にわたって、次の傾向があることがわかった。

- (i) 1学期より2学期の方がよくできた。
- (ii) 3学期は2学期よりできがわるかった。

なお(ii)の傾向は女子だけに見られた。クラス全体的の場合も、女子の、その傾向が大きくできたのである。(なお、この3学期が2学期より低くなったことについては、他の問題のこととともに、別の機会に考察するつもりである。)

III 1年生の聞く能力の調査から

1年生の2・3学期末におこなった調査は1で示したように3種類であるが、そのうち第1類と第2類について、ここに示す。

1. 第1類

A・Bの2種があり、Aは短文をその場で復唱させる方式、Bは第1の

部屋で聞いたことを第2の部屋にいる別人（調査者側）に伝えさせる方式をとった。

(A) 2学期末に行なった。復唱する文は「オオキナ オツキサマガ モリノウエニ デテイマス」である。結果は次の通りであった。

	男	女	
完全なもの……………	16	17	33
完全に近いもの（ニ→へ など）……	1	1	2
まちがったもの……………	7	7	14
計	24	25	49

(B) 2学期と3学期末に行った。示した文は、2学期は「センセエ シロイ チョークヲ ニホント アカイ チョークヲ イッポン クダサイ」3学期は「センセエ キイロイ チョークヲ ニホント シロイ チョークヲ イッポン クダサイ」で、色をかえた以外は、同質と考えられる。その結果は次の通りであった。

	2学期末	3学期末
完全、または完全に近いもの……………	5	10
いい方は少し違ったが、用の通じるもの……………	8	16
同上、用は通じるが、話す態度その他に欠陥のあるもの…	3	7
聞き違い、おぼえ違いをしていて、用の通じないもの……	33	14
合計	49	47

2. 第2類

学級の一員として教師の指示をどの程度まで正しく聞きとれるかを調べるための問題で、A・Bの2種を設けた。AとBとは指示の内容が異なるだけで他は同じにした。つまり全員に四つ切りのわら半紙を1枚ずつ配り全員の前で指示を1度だけ言って、その指示が終った後、それに従った行動をさせる。

(A) 2学期末におこなった。指示の内容は次の通りである。

「はじめに赤いクレヨンで○を書き、その下へ黒いクレヨンで△を書き、おわりに自分の名前を鉛筆で書きなさい。」

結果は次の通りであった。

	男	女	計
できたもの……………	22	23	45
できなかったもの……………	2	2	4
計	24	25	49

(B) 2学期末と3学期末におこなった。指示内容は次の通りである。

2学期末は、

「鉛筆で端から端まで横に長い線を一本書き、その下へにわたりの卵ぐらいの大きさの○を一つ書いてから、その下へ短い線を横に二本書きなさい。」であったが、3学期末は「にわたりの卵ぐらいの大きさの」をただ「大きい」だけにかえた。

結果は次の通りであった。

	2学期末	3学期末
9条件とも完全……………	2	9
1条件だけ不足……………	11	11
2条件以上不足……………	36	27
計	49	47

IV 2年生の話す能力の調査から

2年生の2学期に手品のタネあかしを材料にして行なった「相手のまだ知らないことを、相手に伝える能力」の調査の概略を示す。

1. 目的と方法

Aは知っていて、Bはまだ知らないことを、AからBへ伝える場合の、伝え方の能力を、2年生について、評価しやすい形でしらべよう、というのが目的であり、これを、3年生および二人の成人と対照しながらしらべた。方法は次の通りである。

手品 t のタネを教えられて知っている被験者Hと、手品 t のタネを知らない被験者Kとを2人並んですわらせ、2人の前で実験者が手品 t を行ない、そのあとで、HからKにタネあかしをさせて、その時のHの話し方を録音分析したものである。なおHがタネあかしを行なう際には、 t のための道具を持ち出させず、口頭と手まねだけでやらせた。

手品のタネあかしを材料にした理由は、次の四つである。

- (i) 子供に興味のもてるものであること。
 - (ii) 各被験者に同一のことを話させ得ること。(昨日したこと、学芸会の時のこと、などを話させると、各被験者の経験が異なるので、話の内容が一定せず、被験者間の比較がしにくい。)
 - (iii) ことがらの受けとり方の差異を除去し得ること。(同一の絵を見せたり、同一の話を開かせて、それについて話させる場合には、話し方のほかに、その絵や話の受けとり方の能力がまじりこむおそれがあるが手品のタネはきまっているので、受けとり方の差異は除去し得る。)
 - (iv) HはKに対して、「自分は知っている」という優越感をもち、Kは知らないことにひけめを感じている。このH→Kの緊張関係が非常に強いので、各2人ごとの平常の緊張関係を無視することができる。
- なお手品は2種類行なった。

2. 評価の観点と結果の処理

この場合の話し方を、二つの観点から評価した。第1の観点は、手品師(実験者)の演じた動作の順序、次第を、Hがきちんと正しく説明して行く能力(R)をみることであり、第2の観点は、Kにどう見えたかということまで、考えあわせて、Kの立場に立ってのべる能力(S)を見ることであった。たとえば、「あなたがこう思ったのは、実はこうだったのだ」といったふうな言い方ができる能力(S)を見ることであった。

こうした観点から結果を処理した。結果の大体は次の通りである。

- (i) 対照に使った成人では、2人とも確実にタネアカンが伝わったが、2・3年生では伝わらなかったで、「どうすれば伝えられるか」の要点をはっきりつかむことができなかった。ただ、2・3年とは成人より、能力Sが著しく低いので、伝えるためには、能力Sが大切ではないか、と考えられる。
- (ii) 2年生は、3年生とくらべると、能力Sでは、かなり低い、Rのちには、あまり差が見られない。
- (iii) 能力Rでは、主語を明らかにすることにおいて、2年生は3年生よりよくなかった。

(iv)能力Sでは、相手のなっとくの仕方を考えて、[★]間をおく、ということにおいて、2年生との間に大きな差がみとめられた。

(v) SおよびRの能力が発達して行く、最初の出発点として2年生を選んだことは、今後3・4年生から上級生にかけての変化の仕方をしらべて行く上に役立つものであることがわかった。

3. 聞き手を考慮して話す能力と、2・3年生

おこなった2種類の手品およびその結果の全貌の紹介は後の機会にゆずるが、ここでは、「いかに聞き手を考慮しているか」を示すデータを少し書いておく。

次のa, b, c, は、話し手が、「聞き手はここで考えちがいをしているであろう。(a, b)」 「聞き手はここで大切なことに気付かなかったであろう。(c)」と考えて表現したかどうか、を示す鍵と考えられるものである。

(a) 「あなたには、同じ長さのヒモが2本あるように見えただろうが、実は長いヒモと短いヒモとが組みあわさっていたのだ」というふうに言う。(聞き手を考慮していないものは、単に「長いヒモと短いヒモを組みあわせる」としか言わない。)

(b) 「『見えないクスリをかける』と言ったが、実は何もかけていない。」というふうに言う。

(c) 「あなたが、どこに結び目があるかを調べていただろう。その時、短いヒモをポケットに入れたのだ」ということを注意する。

このように鍵を述べたものの数(分子)を次に示す、(分母は被験者になったものの総数。)

	2年	3年	成人
a	4/32	4/21	2/2
b	0/32	9/21	2/2
c	3/32	8/21	2/2

いくつかのことを伝える場合、その1つずつが、順にわかっていかないと、聞き手は理解しにくい。タネあかしの被験者になった二人の成人

は、ことがらの要素ごとに、間をわき、念をおして、聞き手が理解したかどうかを確かめてから、先の説明に進んだ。しかし、2年生は、多くのものが、たてつけにしゃべった。次の表は二種類の手品の説明において、間をおき、念をおしたものの数をあらわしたものである。（成人は手品 t_2 をおこなわなかった。）

	t_1			t_2	
	2年	3年	成人	2年	3年
たてつけにしゃべる	23	10		14	5
間 <small>ま</small> をおいているらしい	2	1		1	3
間 <small>ま</small> をおいて説明する	7	9		8	8
念をおしているらしい		1			
念をおしてから次へ移る			2		
	32	21	2	23	16

ここにあげた調査実験のうち、Ⅱでとりあげたものは村石昭三が、Ⅲでとりあげたものは、上甲幹一が、Ⅳでとりあげたものは高橋太郎が、それぞれ中心になって行なったものである。

（高橋太）

小学校の国語学習指導の実態

——質問紙調査による——

- (1) 質問紙は昭和31年2月末に発送して、4月15日までに返送してもらった。質問紙を発送したのは全国467校で、整理の対象になった完全回答は214校であった。学校はその年の1月末の全国指導主事協議会の席上、国語科を特にやっているというわけではなく、むしろ全般的にしっかり運営されているような学校、くわしい質問紙に書きこんでくれるような学校、そして、なるべく都市の大きい学校に偏らないようにという注文のもとに、各府県から20校ぐらいずつ推薦してもらった。だから、厳密な見本、標本ではない。しかしこれで全国的な傾向は想像がつくと思われる。

「調査票のまえがき」には次のように書いた。

1. この調査は小学校の国語の学習指導の実状を知りたいためにおこないます。
2. この調査の直接対象は学校です。中には学級によってちがうものがありますが、そういう場合は、その学校の大体の傾向を答えてください。

3. この調査では、まず、現在ある特定の学校で実行している実際について答えてもらい、最後に一括して、別に、こうあるべきだという意見をつけ加えてもらうようにしてあります。

それは「実際にこうやっている。こうやってきた」ということと、「こうあるべきだ（と考えている）」ということをはっきり区別したいからです。

4. 答えかたは（ ）の中に書きこむか、あるいは該当する項目を○や（○）でかこみ、更に足りないと思われることがあったら、それを適宜書きこむようになっていきます。

都道	市区	町		整理番号
府県	郡	村	小学校	

学校長氏名

国語部主任氏名

（記入年月日 昭和 年 月 日）

(2) 被調査校（完全回答 214 校）の性格

あなたの学校の通学区域は次のどれに属すると思いますか。（二つにまたがると思うものは両方に○をつけてください。だいたい住宅地で商業街もあるというような場合は◎と○とを使って下さい。）という欄への答を整理すると、次のようになる。

商業地	26.2%
工業地	7.3%
住宅地	14.4%
農業地	39.7%
漁業地	4.4%
その他	8.0%

この 214 校の児童数は平均 860 名、学級数は平均 18.1 学級であった。

(3) 質問は次の 9 項目をふくむ。

- (Ⅰ) 国語科の時間配当とカリキュラム
- (Ⅱ) 読むことの学習指導
- (Ⅲ) 書くことの学習指導
- (Ⅳ) 作文の学習指導
- (Ⅴ) 話すことの学習指導
- (Ⅵ) 聞くことの学習指導
- (Ⅶ) ワーク・ブックとドリル
- (Ⅷ) 家庭学習
- (Ⅸ) 国語学習指導の重点と意見

(4) 回答校名

岩手県	山岸小学校	小山第一"	押原"
	横川目"	小山第二"	上九一色"
	田山"	木幡"	長野県 松代小学校
	萩荘"	豊田北"	豊野西"
	二子"	関谷"	新潟県 日越小学校
秋田県	生保内小学校	仲町小学校	裏館"
	七滝"	青木北"	川東"
	五城目"	羽生"	村上"
	和田"	本庄西"	柴橋"
	花館"	粕壁"	曾根"
	水沢"	馬室"	西五十沢"
	船川第一"	柏原"	岡野町"
	川西"	霞ヶ関"	下保倉"
	三関"	横瀬"	中条"
	象潟"	福田"	後山"
	中通"	屈巢"	塩野町"
福島県	青木小学校	本田"	藤塚"
	大山"	西"	分田"
	笹原"	成田"	鼓田"
	下中津川"	奈良"	猿橋"
	石神第一"	高津小学校	内野"
	石川"	新磯"	和納"
千葉県	南条小学校	厚木"	神田"
	大久保"	串川中央"	富山県 富山大付属小学校
	栗源"	北方"	新瀬戸"
	椎柴"	御成"	大久保"
栃木県	豊郷・・小学校	藤沢"	水島"
	本郷"	南下浦第一"	早月加積"
	三依"	本町"	石川県 此花町小学校
	茂木"	御所見"	瓢箪町"
	山本"	比々多"	苗代"
	氏家"	久木"	山代"
	黒磯"	中田小学校	津幡"
	烏山"	山梨県 初狩小学校	末森"
	城北"	小笠原第一"	小山"
	会沢"	都川"	御祓"
	相生"	一宮西"	浜"
	足尾"	谷村第一"	穴水"
	桜"	相生"	福井県 湯尾小学校

	中島	〃		開明	〃		大影	〃
	剣岳	〃		豊岡	〃	熊 本 県	池 上 小 学 校	
	南中山	〃		上郡	〃		本渡北	〃
愛 知 県	東 山 小 学 校			松帆	〃		滑石	〃
	筒井	〃		河東	〃		中富	〃
	昭和橋	〃		由良	〃		植柳	〃
	白水	〃		北	〃	大 分 県	南庄内小 学 校	
	大志	〃	岡 山 県	津山第一小学校			南部	〃
	井田	〃		宇野	〃		日隈	〃
	平洲	〃		笠岡西	〃		桂陽	〃
	麻生田	〃		早島	〃		東山香	〃
	足込	〃		北川	〃		白木	〃
	矢作南	〃		植月	〃		梶寄	〃
	岩倉	〃		大原	〃	福 岡 県	芦 屋 小 学 校	
岐 阜 県	安 井 小 学 校			領家	〃		中牟田	〃
	興文	〃		方歳	〃		英彦山	〃
滋 賀 県	中 央 小 学 校			清輝	〃		笠原	〃
和歌山県	藤 並 小 学 校	山 口 県		関 西 小 学 校			宮田南	〃
	中野上	〃		華城	〃		椎田	〃
	塩津	〃		明新	〃		下庄	〃
	中津川	〃		徳佐	〃		駿馬北	〃
	三川第三	〃		根笠	〃		清見	〃
京 都 府	綾 部 小 学 校			八代	〃		鯉田	〃
	明倫	〃		通	〃	鹿 児 島 県	川 内 小 学 校	
奈 良 県	高 田 小 学 校			船木	〃		伊集院	〃
	志津美	〃		滝部	〃		溝辺	〃
	真菅	〃		向峠	〃		中山	〃
	天辻	〃		島地	〃		登尾	〃
	生駒	〃	香 川 県	琴 平 小 学 校			西田	〃
兵 庫 県	千 歳 小 学 校			川添	〃		盈進	〃
	船橋	〃		五名	〃		照島	〃
	相生	〃		直島町	〃			
	福住	〃	徳 島 県	日野谷小 学 校				

(I) 国語科の時間配当とカリキュラム

(1) 毎週の国語科の時間

項目 \ 学年	1	2	3	4	5	6
聞く、話す、読む、書くの合計	5.9	5.9	6.0	5.2	5.2	5.2
習字（特設の割合）	1.0(14.6)	1.2(19.3)	1.0(27.4)	1.0(87.7)	1.0(89.6)	1.0(88.2)
ローマ字（"）	1.0(0.4)	1.0(0.4)	1.0(1.9)	1.0(9.3)	1.0(91.5)	1.0(92.4)

国語科の時間配当には低学年と高学年でちがいがあり、平均して低学年は6時間、高学年は5時間というのが大勢である。中には高学年において3時間台の学校（8校）があり、低学年において9時間という学校（1校）、8時間という学校（15校）があった。習字は4年から、ローマ字は5年から、それも大部分の学校で特設している。それ以下の学年で特設しているところは非常に少ない。

(2) 各学年の読む、書く、聞く、話すの比率

	聞く	話す	読む	書く	計
1年後期	(19.9)%	(24.8)%	(32.6)%	(22.7)	100%
2年	(19.1)%	(22.8)%	(33.8)%	(24.3)	"
3年	(18.3)%	(21.4)%	(34.7)%	(25.6)	"
4年	(17.5)%	(19.9)%	(36.4)%	(26.2)	"
5年	(16.8)%	(19.5)%	(37.3)%	(26.4)	"
6年	(16.8)%	(19.7)%	(36.5)%	(27.0)	"

学年を通じての傾向をみると、「聞く、話す」はだんだんと減り、「読む、書く」はだんだんと増す。1年では「話す」の方が「書く」より多いが、2年から逆になり、学年を通じてその比率に大きな変化がない。その平均は次のようになる。

	聞く	話す	読む	書く
平均	18.1%	21.4%	35.1%	25.4%

(3) カリキュラム

あなたの学校ではどんなカリキュラムによっていますか。

イ、学校のカリキュラム

- | | |
|------------------------|-------|
| 1. 印刷物として発表したものがある。 | 22.1% |
| 2. 発表はしていないができています。 | 29.1% |
| 3. 作りたいと思っているが容易にできない。 | 17.8% |

ロ、地域カリキュラム（県又は郡市）

- | | |
|--|-------|
| 1. （ ）カリキュラムによっている。（その地域カリキュラムの名称を入れる） | 18.8% |
| 2. 地域カリキュラムはあるが使っていない。 | 9.9% |
| 3. 地域カリキュラムは作られていない。 | 28.2% |

ハ、学校として特別のカリキュラムはないが、教科書のカリキュラムにそって、使用上特別の注意を加えている。

46.9%

ニ、カリキュラムは不要だと思う。

0.5%

カリキュラムは不要だとしている学校はほとんどない。半数近くは教科書のカリキュラムに依存しているが、学校としてのカリキュラムをすでに発表している学校が22パーセントある。また地域のカリキュラムは、（ロの1+2）30パーセントに近い。（この欄のパーセンテージは、学校として発表したものがあり、かつ地域カリキュラムに依っているものもあって、イとロと重複しているものがある。）

（II）読むことの学習指導

（1）教科書による学習指導の手続き

教科書による場合（教材が物語、随筆の時）の学習指導の手続き、（言語教材や詩、劇などは除く）。やっているものだけ○でかこむ。

- | | |
|---------------|-------|
| イ、さしえの取扱い | 95.8% |
| ロ、児童の読みへの助言 | 94.4% |
| ハ、難文字、難語句の指導 | 98.1% |
| ニ、教師の説明 | 81.3% |
| ホ、内容問答（教師と児童） | 96.7% |
| ヘ、感想発表 | 96.3% |
| ト、範読 | 83.6% |

チ、文字練習	90.7%
リ、発音練習	65.9%
ヌ、一斉音読	42.1%
ル、学習計画	74.3%
オ、指名音読	95.3%
ワ、内容についての話し合い(児童たち)	90.7%
カ、視写	44.9%
コ、語句練習	89.7%
タ、ノートに書く	93.5%
レ、板書	94.4%
ソ、学習の評価	92.1%
ツ、一斉黙読	91.6%
ネ、微音読	69.2%
ナ、題目についての話し合い	83.6%

ここに掲げた21の手続きのうち、「視写」「一斉音読」「発音練習」「微音読」「学習計画」を除けば、他はみな80パーセント以上である。

一番多くおこなわれるのは難文字、難語句の指導、内容問答、感想発表、さしえの取扱い、指名音読、板書、ノートに書くなどである。

また、その手続きに順序があるかどうかについては67.1パーセントの学校が順序があるといっている。その手続きの順序については、実にさまざまであったが、たとえばナ、ルなどは、たいてい最初の段階であり、オ、ホ、ヘなどは中間の段階に多く、タ、チ、ソなどは最後の段階にしている場合が多いようである。

(2) 教科書を使わない学習

教科書を使わない学習指導にはどんな場合がありますか。

イ、作文	97.2%
ロ、話し方	74.1%
ハ、聞き方	75.5%
ニ、読み方の発展的取扱い	73.6%

ホ、漢字のドリル	71.2%
ヘ、語いのドリル	60.8%
ト、その他（あったら書き加えてください）	18.4%

ここに書き出されたような学習はみなあり、その他にはあまりないということがわかった。

(3) 指導形態

次の学習形態のうち、どれを採用していますか。

イ、常にグループ編成している	2.4%
ロ、グループにすることはほとんどない。	17.1%
ハ、時によってグループにする。	80.5%

次の指導方法のうち、どれを採用していますか。

イ、教師が主に話したり、読んでやったりする形態	6.1%
ロ、教師の発問に児童が答えていく形態	62.1%
ハ、教師と児童とが共同で問題を設定し、その解決を教師が援助し、指導していく形態	66.4%
ニ、児童たちが問題を出し、自分たちでできるだけ解決する、教師はそれを見守っているという形態	5.6%

常時グループ編成をしている学校は、今日は非常に少なくなっていること、教師と児童との問答的形態あるいは、児童たちを主にして教師が助けて行くという形態が比較的多いことがわかった。

(III) 書くことの学習指導

(1) 文字の書き方の指導法

文字の書き方指導はどういう方法でやっていますか。

イ、教室で新出の文字を何回もノートに書かせる。	35.0%
ロ、同じ文字を何回も書かせず、いろいろな語の形で与えて書かせる。	80.0%
ハ、文字の構造等について、記憶しやすい話をしてやる。	71.5%
ニ、黒板その他に児童に大きな字を書かせる。	60.3%
ホ、聴写をさせる。	60.3%

へ、書取りのテストをする	91.6%
ト、ノートを検査をする	80.8%
チ、視写（教科書のある部分の書きぬきなど）をさせる。	77.1%
リ、その他	14.5%

(2) 筆順指導の方法

筆順の指導はどういう方法でやっていますか。

イ、空中に指で書いてまねをさせる。	59.8%
ロ、黒板に教師が板書して、それを見ながらノートに書かせる。	88.3%
ハ、教科書の筆順表を見ながらノートに書かせる。	26.6%
ニ、筆順表のカードなどによって書かせる。	40.2%

(IV) 作文の学習指導

(1) 時間の特設

特設しているものが27.9パーセントあった。

(2) 各学年の学習指導の重点

次の項目の中で、どれを重点に指導していますか。毎学年についておもなものに○を書きこんでください。

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
日記	69.0	65.3	46.9	43.2	40.2	40.4
詩	8.0	31.5	50.2	50.2	47.7	39.9
観察見学記録	6.6	13.1	41.8	56.8	47.2	47.9
手紙	17.4	36.6	28.2	28.6	34.6	32.4
メモ	7.5	6.6	14.1	24.4	43.9	45.6
感想文	1.4	6.6	26.8	47.9	73.8	77.0
生活文	78.4	85.4	83.1	77.5	71.0	74.6
その他（具体的に書いてください）	8.0	5.2	5.6	7.0	9.3	12.7

(3) 作文の回数

低学年は月 2.71 回、高学年は月 2.3 回で高学年の方が減っている。（比重

のおき方は重くなっているが、全体の時間数が減っている。その上、1回の時間や分量の関係もあるのであろう)

(4) 自由題と指定題

	自由	指定
低学年	55.0	45.0
高学年	51.2	48.8

学年の進むにつれて、自由題の場合はへり、指定題の場合はふえる。しかし、大体が半々である。

(5) 作文の処理

作文はふつういつ処理していますか。

イ、授業中(自習時など)に、	5.2%
ロ、放課後に	92.0%
ハ、空時間に	29.1%
ニ、家庭へもちかえって	76.5%
ホ、その他(具体的にかいてください)	10.3%

(V) 話すことの学習指導

(1) 学習指導の機会

話し方指導は、次のうち、主としてどれによってやっていますか。

イ、機会を与え話させること。	61.5%
ロ、教師が気がついた時に、随時、その子の話し方を指導してやる。	67.6%
ハ、まちがいや話し方の巧拙を自分自身で気づかせたり、友達に発見させること。	52.6%
ニ、正しいものを教師がやってみせること。	22.5%
ホ、その他	5.2%

(2) 話しかた指導の重点

話すことの指導のうちで、次のうち、あなたの学校では、主としてどれに力を入れてやっていますか、○でかこんでください。

イ、発声指導	11.3%	ロ、発音指導	54.0%
--------	-------	--------	-------

ハ、アクセント指導	31.5%	ニ、対話指導	35.2%
ホ、会話指導	43.2%	ヘ、独話指導	15.0%
ト、方言矯正	53.5%	チ、朗読	49.3%
リ、劇	25.4%	ヌ、その他	4.2%

以上のように、おもなものは発音指導と方言矯正である。

(4) 話しかたの時間

時間を割いて実施することがあるというものが46.8パーセントである。

(VI) 聞くことの学習指導

(1) 聞きかたの時間

時間を割いて実施することがあるというものが51.2パーセントある。話し
かたの場合よりやや多いという点が注目される。

(2) 聞きかた指導の重点

聞き方指導の重点は次のどれにありますか。

イ、話し手の方を向いて正しい姿勢でだまって聞くこと。	54.0%
ロ、聞きとったかどうかあとで質問を出してテストすること。	66.4%
ハ、聞き方の大事なことをいってきかせること。	28.0%
ニ、その他	8.1%

以上のように聞きとりテストと聞きかた態度が主である。

(VII) ワーク・ブックとドリル

(1) ワーク・ブックの使用

ワークブックを使っていますか。

イ、使っている	<div>教科書に即したもの 99.4%</div> <div>教科書に即さぬもの 0.6%</div>	75.5%
ロ、使っていない（ふつうの学習帳を使う）		10.6%
ハ、ワークブックに当るものを毎回プリントして与える。		13.9%

(2) ドリルをやるかどうか

ドリル学習をしていますか。

イ、時間をきめてやっている。	28.9%
----------------	-------

ロ、ほとんどやっていない。 3.3%

ハ、やる時をきめてはいないが、かなりやっている。 67.8%

(3) ドリルの対象

ドリル学習を意識してやっているとするば、何を主としていますか。

イ、漢字を書くこと 34.0%

ロ、漢字の読み書き 84.4%

ハ、語句練習 50.9%

ニ、朗読 23.6%

ホ、発音 7.1%

ヘ、アクセント 5.2%

ト、その他 4.7%

以上のように、漢字の読み書きと語句練習ということになるが、実際は漢字の読み書きも語とし句としてなされる場合が多いようである。

(4) ドリルの学習時期

ドリル学習をするとすれば、いつやっていますか。

イ、一課一課単元のあとにやる 49.8%

ロ、毎時間の前または後にやる 33.5%

ハ、曜日をきめて集中的にやる 8.1%

ニ、いつときめず、必要と認めた時にやる 37.3%

ホ、その他 11.0%

(5) 所要時間

1回平均16.9分で1週間の合計が平均して1.19時間となっている。

(VIII) 家庭学習

(1) 宿題を出すかどうか

「多く出す」というもの31.8%、「少し出す」というもの67.3%、「ほとんど出さない」というもの1.4%であった。多い、少ないという程度がはっきりしていないとしても、とにかく出しているようである。

(2) 宿題の内容

出すとすればどのような種類の宿題を出しますか。

イ、漢字の練習	84.9%
ロ、教科書の読み	84.4%
ハ、作文	39.2%
ニ、視写	39.2%
ホ、語句の意味や使い方	51.4%
ヘ、文意の読解	41.0%
ト、その他	8.0%

以上のように漢字の練習と教科書の読みが多い。

(IX) 国語学習指導の重点と意見

(1) 学習指導の重点

あなたの学校の国語部では指導実践は、現に次のどれとどれに重点を置いていますか。4つだけ○をつけてください。

1. 他人の話をよく聞くこと。	47.6%
2. よく発表すること。	53.3%
3. 教科書をすらすらと読むこと。	42.0%
4. 文字を正しく書くこと。	54.2%
5. 正しい筆順で書くこと。	11.3%
6. 方言や幼児語を使わないこと。	9.4%
7. 悪いことばを使わないこと。	29.2%
8. よい本をたくさん読むこと。	52.4%
9. 正しい語感を養うこと。	14.6%
10. 語いを豊かにすること。	32.1%
11. 劇をすること。	0.9%
12. 文をたくさん書くこと。	29.7%
13. ノートをきちんと書くこと。	15.1%
14. 詩を書くこと。	4.7%
15. その他	6.1%

以上のように文字を正しく書くこと、よく発表すること、よい本をたくさん読むことが50パーセント以上であった。

(2) 意見

これについては、「現在あなたがこれではいけない、こうありたいと願っている点を書いてください」として最後に書き加えてもらった。

これについては、「これではいけない」と「こうありたい」とを分けて書いて来た学校もあるが、多くはそれをいっしょにしているので、言及された問題点でくくってみる。(1校で二つ以上書いて来たところがある。)

1. 作文(人間教育として必要、特設せよ、処理法がむずかしい、生活綴り方の是非) 38校
2. 話しことば、話すこと、聞くこと、標準語の教育、もっと発表するようにしたい。 37校
3. 漢字、語句等いわゆる基礎学力の不足、ドリルの是非 34校
4. 教科書の改善、カリキュラムの確立、能力表の修正 34校
5. 環境の充実(図書館、読書指導、辞書)、悪いマス・コミの影響になやむ。 33校
6. もっと深い読み、人間育成をねらった教材と学習指導 30校
7. ローマ字、習字の取扱いを明確に(ローマ字教育の廃止、縮小の意見をふくむ) 30校
8. 国語の時間数が足りない(特に高学年に) 28校
9. 文法(語法)教育の重視、その系統化 16校
10. 国語の合理化の促進、かたかな学習の徹底 15校

そのほか、学級の児童数が多すぎてこまるとか、もっと朗読を多くしなければならないとか、日本語の特質を自覚しなければならないとか、実態調査が必要だとかいろいろな意見があった。

(興水)

新聞の文章の漢字使用に 関する実験的研究

A 調査の目的

今の新聞の文章は、一般読者にとって、必ずしも読みやすく、わかりやすいものではない。このことについては、これまでに行われたいくつかの調査の結果が証明している。

新聞の文章を読みにくく、わかりにくくしている要因としては、用字・用語・文章構造・記事内容など、いろいろのものがあげられるが、わたしたちは、まず用字、とくに漢字の問題を取りあげた。

新聞の文章をさらに読みやすく、わかりやすくするためには、漢字の使用をどのようにしたらよいか。その改善にあたっては、どのような問題があるか。一般に読みやすさ・わかりやすさと漢字使用との関係は、どうであるか。これらのことを実験的に調べてみようとするのが、この研究の目的である。

B 担 当 者

言語効果研究室に属する次の3名の所員が、共同して行なった。

永野 賢 林 四郎 渡辺 友左

なお、筆生1名が所員を助けた。

この報告は、永野・林・渡辺が共同で執筆し、永野が整理した。

C 計画と実施経過

1. 問題の設定

朝日新聞社調査研究室の堀川直義氏は、文章の難易に影響する要因を、

1. センテンスの長短
2. 漢字の多少
3. 構文の複雑単純

の三つにしばり、東京都内の中学生(卒業期)を対象として実験を行い、その

うち、漢字の問題については、次のように報告している。

漢字の多少については、100字あたり20字ないし40字程度ではむずかしさに大した差はない。55字以上になるとむずかしさをます。一方漢字が20字以下になるとグンと、わかりにくさが急増するのである。『言語生活』昭和28年10月号「読みやすさの一実験」)

また、国立国語研究所と日本新聞協会とが共同で、勤労青年を対象として行なった実態調査によれば、東京の定時制高校生も、農村の非就学生も、漢字の含有率が100字中35字の文章がいちばん読みやすいとしている。この結果は、前記堀川氏が、昭和30年2月に行なった実験(卒業期の中学生を対象としたもの)の結果と一致しているという。(日本新聞協会 国立国語研究所『青年とマス・コミュニケーション』昭和31年)

それでは、実際の新聞の文章における漢字含有率は、どれくらいであろうか。朝日新聞調査研究部の『新聞文章実態調査』によれば、52.2%を占めるという。(前記堀川氏の論文に引用されたものによる。)また、毎日新聞大阪本社印刷局の『本社使用活字使用度数調査表』(昭和28年)によれば、47.821%となっている。わたしたちが、朝日・毎日・読売3紙の昭和30年1—12月の1年分の記事からサンプリングして調べたところでは、49.37%(内訳:記事 46.63%, 広告 63.00%)となっている。

すなわち、実際の新聞の文章は、だいたい50%前後の漢字の含有率をもっているのであって、読みやすさということを考えたばあい、あきらかに多すぎるということができるわけである。

そこで、わたしたちは、まず、実際の新聞の文章を、最も読みやすいとされる漢字の含有率のものに書きかえる試みをする事とした。そのために、使用漢字を、「当用漢字別表」の881字(いわゆる教育漢字)に限るというわくを設けた。教育漢字というわくを設けた理由は、次のとおりである。

- (1) 任意に漢字を減らすよりも、一定数の字種に制限するほうが、作業の手続きが簡単である。
- (2) 実際の文章における教育漢字の使用度は、非常に高いと認められる。たとえば、これは新聞の文章ではないけれども、国立国語研究所で

『主婦之友』の語彙調査をした結果によれば、教育漢字の全使用漢字に対する比率は82%であった。『婦人雑誌の語彙調査』昭和28年）また、前記毎日新聞社の『活字使用度数調査表』によれば、使用度数の多い漢字を1,000字とすると、そのうち75.4%が教育漢字である。それからまた、国立国語研究所『語彙調査——現代新聞用語の一例——』（昭和27年）によれば、頻度100以上の語374語のうち、教育漢字だけで書き表わせる語は352語（94.1%）を占めているし、朝日新聞東京本社印刷局『活字使用度数調査・熟語使用度数調査』（昭和25年）によれば、使用度数の多い1,000語のうち、教育漢字だけで書ける語は838語（83.8%）を占めている。

以上によって、教育漢字の範囲にしばった場合、書きかえの無理が比較的少なくてすむと予想されるし、前記の比率から考えて、だいたいの漢字の含有率を35%の線に近づけることができそうに思われる。

使用漢字を教育漢字にしばるというのは、漢字の含有率を減らすための機械的な手段であり、量の問題である。わたしたちは、漢字の含有率を単なる量の問題だと考えているわけではない。しかし、このような、いわば第2次漢字制限を実施してみることによって、書きかえにどんな無理が起こるか、また、書きかえの結果、果たして読みやすさの効果をあげることができるかどうか、できないとすれば、そこにはどんな問題があるか、というようなことが、あきらかにされるであろう。量的な処置を通して、質的な問題を見いだそうというねらいがあるわけである。

2. 実施計画

以上のように問題を設定して、次の三つの作業を計画した。

(1) 実験新聞の作成

- (i) 実際の新聞から記事を抜きだして、書きかえをし、実験新聞として編集する。
- (ii) 記事の書きかえが無理なく行われるか、あるいは、どの程度の無理があるかを、作業を通して確かめつつ、書きかえの類型をさぐる。
- (iii) 書きかえた結果、漢字の含有率はどれくらいになるかを測る。

(2) 実験新聞の読みやすさに関する意見調査

- (i) 実験新聞は、読みやすいか、読みにくいか。読みにくいのはどんな箇所かを見るための集団調査を実施する。
- (ii) 実際の新聞と表記の異なる実験新聞は、初めて読むばあいは、当然読みにくいと感じられるだろうが、その種の表記に慣れるにしたがって、読みにくさが減っていくのではないかと考えられる。そこで、被験者に一定期間、毎日実験新聞を読ませ、慣れの程度について、調査を行なう。

(3) 文章表記のバリエーションに応ずる眼球運動の観察

- (i) 実験新聞の作成にあたっては、いろいろと表記上の問題が生じる。それらの問題点が、読みやすさとどのような関係にあるかを見るために、いろいろの表記の実験文章を被験者に読ませ、読書生理の実験機械であるオフサルモグラフを使って、眼球運動の記録を取り、さまざまな角度から分析してみる。
- (ii) 問題点として、次の4つのものを設定した。
 - (a) 漢字の含有率の異なるいろいろな文章について、眼球運動に現れた客観的な「読みやすさ」の因子分析をする。
 - (b) 主観的な「読みやすさ」と、客観的な「読みやすさ」とは一致するかどうか、その因子分析をする。
 - (c) 新聞記事の原文と書きかえ文との読みやすさの比較をする。
 - (d) かな書きの続く場合、特殊の語を片かな書きにしたものと、平かな書きにしたものとの読みやすさの比較をする。

3. 実施経過

(1) 実験新聞の作成

- (i) 昭和30年1月——12月の、朝日・毎日・読売3紙の記事（本文・広告）から391記事（本文259、広告132）を抜きだし（サンプルの大きさは $\frac{1}{725}$ ）、次の原則に従って書きかえを試み、実験新聞を編集した。（1956年11月15日号から1957年1月13日号まで都合60号。1日分は、B5版裏表に、孔版タイプで印刷、本文8ポイント活字を使用。）

(ii) 書きかえの原則は、次のとおりである。

- (a) 書きかえによって事からの内容に増減のないように特に気をつける。
- (b) 教育漢字外の漢字を機械的に書きかえるのではなく、語としての言いかえや、文章としての書きかえをも行う。
- (c) 言いかえや、他の漢字に書きかえることのむずかしい語は、かな書きにする。そのばあい、原則として、和語は平がな、漢語は片かな書きとする。
- (d) 漢語のまぜ書き（例、カッ血）は、もとの文でそうになっているものを除き、避ける。
- (e) 固有名詞（人名・地名など）は、原則として、すべて（教育漢字も）片かな書きとする。
- (f) 漢数字は、アラビア数字に書きかえる。（「一応」「再三再四」のよな漢語は除く。）
- (g) かな書きが続く場合、わかち書きはしない。

(2) 意見調査

(i) 集団調査

- (a) 実験新聞の中から10日分を抜きだし、東京都立九段高校2年生50名、私立早稲田中学2年生50名を被験者とし、九段高校を昭和32年1月17日に、早稲田中学を1月21日に、次の調査を行なった。
- (b) 1人あたり各3日分の実験新聞を与え、読みにくい箇所、意味のわかりにくい箇所に、しるしをつけさせた。
- (c) 実験新聞に関する全般的な感想を記入させた。

(ii) 慣れについての感想の調査

- (a) 実験新聞60日分を、15名の被験者に、毎日1号ずつ読む作業を課し、期間の途中で感想を聞いた。読了後も聞く予定であったが、都合で、読了後の感想を聞くことができなかった。
- (b) 被験者は、大学生5名（教育大3、慶応大2）、高校生5名（東京都立九段高校）、中学生5名（私立早稲田中学）である。

(3) 眼球運動の観察

(i) 前記(2)の(ii)の被験者15名に、1956年11月15日から1957年1月18日まで、だいたい10日おきに前後7回にわたり、実験文章を読ませ、オフサルモグラフで眼球運動を記録・分析した。

(ii) 実験のあとで、その文章が読みやすかったか否かを問い、その集計結果と、眼球運動の記録に現れた集計結果との相関を求めようとした。

(iii) 実験文章は、次のとおりである。

(a) 原文と書きかえ文との比較のためのもの…4種(2組)

○〔原文〕日本とインドに文化センターを建設

宗教、文化の交流を通じて日本とインド両国の親善関係をさらに深めようと、そのよりどころとなる両国の文化センターをお互の国に建設する計画が親善友好団体、宗教団体の間で進められている。この計画は来る八月東京で開かれる宗教世界会議へのインド代表の出席下交渉のため同会議発起人下中 弥三郎氏(平凡社社長、日印友の会会長)がインドに渡ったさい、カルカッタの印日友好協会会長カリダス・ナグ博士(カルカッタ大学教授)から提案されたものである。

(1 a) (註) ——略称「日印文化センター(原文)」——

○〔書きかえ文〕日本とインドに文化センターを建設

宗教、文化の交流を通じて日本とインド両国の親善関係をさらに深めようと、そのよりどころとなる両国の文化センターをおたがいの国に建設する計画が親善友好団体、宗教団体の間で進められている。この計画は、きたる8月トウキョウで開かれる宗教世界会議へのインド代表の出席を前もってコウシヨウするため、同会議発起人シモナカ・ヤサブロウ氏(ヘイボン社社長、日印友の会会長)がインドにわたったさい、カルカッタの印日友好協会会長カリダス・ナグ博士(カルカッタ大学教授)から提案されたものである。

(2 a) ——略称「日印文化センター(書替文)」——

○〔原文〕新映画「新・平家物語」(大映)の迫力

日本映画も、遂に、ここまで豪華な作品を生み出すまでになった。永田雅一を中心に大映製作スタッフがイーストマン天然

(註) (1 a) は、実験文章の記号。実験は、1 a, 1 b, 2 a, 2 b, 3 a b……の順に行なった。

色の研究を続けて来た成果である。

特に、群衆撮影の迫力は注目される。冒頭の野外市の壮観とか、平家一族が戦いから疲れ果てて帰って来るところ、叡山の僧兵たちの示威行進など、これまでの日本映画にはなかったものだ。

(2 b) ——略称「新映画(原文)」——

○〔書きかえ文〕

新エイガ「新・平家物語」(ダイエイ)のハクリョク

日本エイガも、ついに、ここまでゴウカな作品を生み出すまでになった。ナガタ・マサイチを中心に、ダイエイ製作スタッフがイーストマン天然色の研究を続けてきた成果である。

特に、群衆サツエイのハクリョクは注目される。最初の野外市のすばらしいながめとか、平家一族が戦いからつかれ果てて帰って来るところ、エイ山のソウ兵たちのデモ行進など、これまでの日本エイガにはなかったものだ。

(1 b) ——略称「新映画(書替文)」——

(b) 漢字の含有率の異なるいろいろな文章の比較のためのもの…9種

(分析にあたっては、(a)項にあげた4種を含め、13種を比較することとする。また、読みやすさの因子としては、漢字の含有率だけでなく、他のものをもあわせ考える。それについては、「D 結果」の項に述べる。)

○ デビス・カップ・カントクに推されたハラダ・タケイチ

タケさん・・・といってもわかい人には通らないが、そのタケさんがデビス・カップのカントクに選ばれた。もうかなり長くキョウリのクラシキに引っこんだままだったから、戦後のテニス界では わすれかかっていた存在だが、タケさんには、クマガイ、シミズ、ヤマギシとくり出したあとのカントク難になやんだ庭球協会が、しらはのやをたてるには十分すぎるほどの球歴が光っている。

ケイオウ在学中の大正12年全日本選手権でユウシヨウ、あくる13年から昭和2年まで連続4年デビス・カップ選手に選

(3 a)

○ばれたが、この間ハーヴェード大学に在学、じっくりこしを落ちつけてテニス勉強したのがタケさんのゴウカイなテニスを完成させ、クマガイ、シミズに続くハラダ時代を現出させた。

エイ画ハイユウのハヤカワ・セッシュウに似て苦みばした美男型だが酒もいけ、よえば、しぶいノドもきかせるし、さらに気分が出れば、はだかおどりも出ようという竹をわったよう

なキッスイのスポーツマン。一時ゴルフにこってこの方でも、シングルのうでまえ。

親身になってコウハイの世話をする人がらだけにこの人のデビス・カップ・カントクには期待がもたれるだろう。55才。

(3 b) ——略称「デ杯監督」——

○結婚の季節で、東京駅を出る電車で幾組もの新婚組と乗りあわすことがあります。贈られた花束があちこちの網ダナにのっている、その下の座席には新婚さんが、あるいは沈黙のまま、あるいは十年の知合いかのように語りあっています。ある夜、その一組が大きな旅行カバンを無造作に網ダナにのせたまま話に夢中になっていました。車が動揺することに今にも落ちそうなのも気がつかない。おせっかいとは思ったが、新婚の門出に怪我でもしては可哀そうなので、そっと車掌さんに注意して直させました。(4 a) ——略称「新婚列車」——

○ある人が飛行機で海外の旅にたつ時、たくさんの花たばをもらいました。陸をはなれてすぐ外人のスチュアーデスに花たばをわたして世話をたのみました。しばらくすると、そのスチュアーデスがにこにこ顔でやってきて、「花は大切におあずかりしています。ご安心下さい。」と言いました。アリガトウとはほえみを返したのですが、まもなくまたそばへ来て「花は大切にあずかってあります。」と言うんだそうです。あまりたびたびなので、気になりながらも、その意味を解しかねたままアメリカに着きました。(4 b) ——略称「花たば」——

○ニセの「血液証明書」で、病毒血をあっせんしたり、売ったりしていた悪質輸血業者をツイキューしていたケイシチョウ防犯部保安課では、4日午前11時、トウキョウ都シナガワ区ナカノブ1の338 ヤマト・イリョウ協会会長オイカワ・ダイタロウ(52)を私文書ギゾウ行使の疑いでとらえるとともに、同会員ヨシカワ・セイイチ(27)、同オノザワ・サダオ(24)の両名を参考人として出頭させ、同協会の家さがしを行い、イリョウ器具・会員メイボ・印形・書類などを取りおさえた。

(4 c) ——略称「病毒血」——

○去る10月7日最高裁が「人身売買にからむ前借金は、その人身売買と不可分的に公序良俗に反するもので、無効とみるべきである」という主旨の画期的な判決を下した。これは宇和島の料理屋に前借4万円で酌婦に売られた16歳の少女が脱走したのに対し、抱え主が借金返済要求を提起した事件であった。宇和島の第一審は、人身売買の前借金契約は無効としたが、高松の控訴審では、酌婦契約は無効だが、前借金は有効だと抱え主を保護したのに対し、最高裁が第一審の判決を支持したものである。

(4 d) ——略称「人身売買」——

- インドのジャムー・カシミール州政府の閣僚は、蔵相のギルダリ・ラル・ドグラ氏を除くと、バクシ・グーラム・モハメッド首相をはじめみな回教徒だ。彼らはカシミール国民会議派を指導し、憲法議会で圧倒的多数を占め、ジャムー・カシミール州のインド併合を完成しようとしている。元藩王だった州知事のユグラジ・カラン・シンはヒンズー教徒だから、もちろんインド併合には賛成だ。まだ27才で赤いターバンを頭に巻き、アラビアン・ナイトに出てくる王子のように美男子である。ユブラニ夫人の美しいことはニューデリーでも評判になっている。

(5 a) ——略称「カシミール」——

- 強制測量をめぐるゴタゴタしているスナガワ町の事態を解決するため社会党のカトウ・カンジュウ氏らは、5日夜、クライシス労相と話し合いの結果、6、7の両日は測量を中止、その間に社会党が地もとのシエン労組側を説得することになった。このため、社会党書記長アサヌマ・イネジロウ、同基地対策委員長カトウ・カンジュウ氏らは、6日午前11時半、スナガワ町をおとずれ、シエン労協常任トウソウ委員会に出席、「日本人同士が争うのは国のはじだ。これ以上のゲセイ者を出さないように、レイキャク期間を設ける」むね談合した。

(5 b) ——略称「スナガワ」——

- 昭和27年9月、アメリカのノン・プロ野球代表ケープハーツと毎日オリオンズとのナイターの6回表に、ムナグロチドリの大群が球場に集まって70万ショックウの照明燈のまわりを飛び回った。鳥のかげのため試合が進められず、2度もライトを消して、試合は1時間も延びた。ムナグロチドリは長キョリのわたり鳥で、夏はシベリアの北のツンドラ地帯でふえ、秋から冬にかけてオーストラリアからニュージーランドまでわたって冬をすごす。春と秋に日本を通るが、トウキョウには長くはいない。この鳥は夏のカのように、強い光に集まる習性がある。

(5 c) ——略称「ムナグロチドリ」——

- だれでも、1年、365日、いつも健康でゆかいいにはたらくるときばかりではあるまい。だるいとか、ねむいとか、はらぐあいがおかしいとか、あるいは、頭がいたいとか、足がおもいとか、なにをするにもおっくうだとか……いろいろ不快なうったえをもつだろう。これは病気というほどではないが、さりとて全くの健康というわけにもゆかない、いわば“半健康”の状態である。こんな時には、別に医者薬をもらわなくても、無理をしないで静かに休養していれば、たいてい直ってしまうものだ。

(5 d) ——略称「半健康」——

(c) 片かなと平がなとの比較のためのもの…4種(2組)

○山形県のある学校で「峠の小鳥」という本を出した。オオルリ・キビタキ・クイナ・ノスリ・セキレイ・ミソサザイなどの観察を実によくやっている。クイナの卵は、かえる時期が近づく、とがった方がみんな中心に向くそうだ。ノスリタカの巣には、モグラ・ノネズミ・ヤマカガシ・ウサギまでヒナのエサに持ちこんであったそうだ。この土地では、ホオジロの鳴き声を「テッペンシチロー・マタハチロー・テッペン一六・二朱マケタ」という。センダイムシクイは「ショーチューー1パイグー」と鳴き、フクローは「五郎助奉公」と鳴く、という。

(6 a 片) (注) ——略称「峠の小鳥(片)」——

○山形県のある学校で「峠の小鳥」という本を出した。おおるり・きびたき・くいな・のすり・せきれい・みそさざいなどの観察を実によくやっている。くいなの卵は、かえる時期が近づく、とがった方がみんな中心に向くそうだ。のすりたかの巣には、もぐら・のねずみ・やまかがし・うさぎまでひなのえさに持ちこんであったそうだ。この土地では、ほおじろの鳴き声を「てっぺんしちろう・またはちろう・てっぺん一六・二朱まけた」という。せんだいむしくいは「しょうちゅう1ばいぐう」と鳴き、ふくろうは「五郎助奉公」と鳴く、という。

(6 a 平) ——略称「峠の小鳥(平)」——

○冬枯れの野や庭には、みどりもくれないも乏しくなった。つややかなツバキの葉が冬の陽をキラキラと反射させているのは、常緑樹の有難さだ。赤いものといえば、ナンテンの実とウメモドキ・アオキの実ぐらいのものだ。よその家のかき根に、タチバナモドキが赤い実や黄色い実をたわわにつけているのがうらやましい。タチバナモドキはピラカンスともいう。サンゴかメノウのカンザンにも似て、色彩に乏しい冬の目を楽しませる。イチゴもオオマツヨイグサもカワラヨモギもイソギンチャクのような格好で幼い葉を地上に拡げている。

(6 a 片) ——略称「冬枯れ(片)」——

○冬枯れの野や庭には、みどりもくれないも乏しくなった。つややかなつばきの葉が冬の陽をきらきらと反射させているのは、常緑樹の有難さだ、赤いものといえば、なんてんの実とうめもどき・あおきの実ぐらいのものだ。よその家のかき根に、たちばなもどきが赤い実や黄色い実をたわわにつけているのがうらやましい。たちばなもどきはびらかんすともいう。さんごかめ

(注) 被験者を2グループに分け、それぞれ「6 a 片, 6 b 平—6 b 片, 6 a 平」「6 b 片, 6 a 平—6 b 片, 6 b 平」の順序で読ませた。

のうのかんざしにも似て、色彩に乏しい冬目を楽しませる。
いちごもおまつよいぐさもかわらよもぎもいそぎんちゃくの
ような格好で幼い葉を地上に拡げている。

(6 b 平) ——略称「冬枯れ(平)」——

D 結 果

この調査は、方法的に初めての試みでもあり、また、規模も小さいので、一般的な結論を出すまでには至らなかった。被験者も少数であるし、また、知的水準の高い層に属する者を選んだという制約もある。また、オフサルモグラフは横書きのものの実験機械なので、縦書きの新聞記事に関するデータとは必ずしも言いがたい。しかし、この調査の範囲内では、こういう傾向があるという結果を得たので、以下に、項目別に述べることにする。

1. 実験新聞の作成

(1) 実験新聞の記事の例を次に示す。

(i) 実験新聞実物見本……142～143ページに掲げる。

(ii) 政経記事の例

政府、予算案の大すじ検討へ

“拡大キンコウ”と“ひきしめ”

調整になお問題残る

政府は、30年度予算案の大すじを18日のナйкаク会議で決める予定で、8日夕方帰京するイチマダ蔵相を中心に、昨年末から持ちこした大すじにもりこむ重要方策についての検討をはじめめる。30年度予算案の国会提出は、総選挙後にできる新しいナйкаクの手によることとなるが、予算案の大すじは、再開国会で行うイチマダ蔵相の財政演説のうらづけとなり、また民主党ナйкаクが基本政策をはじめて明らかにする点と、選挙後どんなナйкаクができてでも予算編成の一つのひな型になる点で注目される。

農民をあざむく米価両社党声明

両派社会党では米価の決定について9日次の共同声明を発表した。

一、早場ショウレイ金から荷造代などを差引くと基本米価は石当り9701円となり全くのごまかしであり、米価シンギ会や国会の評議を無視し農民をあざむくものである。

*

日本加盟資格あり

各国代 表発言

〔ニューヨーク国連本部15日発＝UP特約〕来年度の国連総会に日本の国連加盟承認を勧告する米決議案を討議するための15日の安保理理事会における各代表の発言大要次のとおり

ソボレフ ソ連代表 米国の決議案は日本の加盟問題の解決をねらうものということはできない。安保理理事会に不当に屈をさせている1人物（国府代表をさす）によるキョヒ権の行使が18か国のひとまとめ加盟をさまたげたことは周知のとおりである。総会と安保理理事会が外モウと日本の同時加盟を認める意思を表明しているのに日本の加盟だけを討議する理由はない。

ロジ米代表 米国は18か国ひとまとめ加盟案を積極的に支持したことはかつてないし、かつまた18か国ひとまとめ加盟に関する総会の決議は安保理理事会をしるものではない。ソ連が日本と外モウのだき合せ加盟案を出すことは自由だが、米国としてはこれを受け入れるわけにはゆかない。日本が文化と文明に対してどれだけつくしたかを知る者は日本と外モウのだき合せにはおどろかないわけにはゆかないだろう。

マンロ議長（ニュージーランド代表） 日本に加盟の資格

があるという意見に賛意はないが、米決議案の表決にはキケンする。安保理理事会の加盟勧告に条件をつけることは憲章に反するというのがニュージーランドの意見であり、次期総会における加盟を要求することは条件を付するに異ならない。ニュージーランドは同じ理由でソ連決議案の表決にもキケンする。このキケンはいずれも手続上の法的疑義によるものであって加盟を申告している国の資格によるものでなく、ただちに加盟に関する新しい提案が出ればこれを支持する用意がある。

ショウ国府代表 日本が加盟のための完全な資格をもっていることはあまねく認められているところである。国連加盟国中1国たりとも日本の加盟申告が52年6月はじめて安保理理事会に上程された時にはソ連代表ですら日本にその資格なしとはいわなかった。日本はすぐれた国家であり、わが国はその加盟資格にいささかたりとも疑念を持ったことはない。これにひきかえ外モウは独立もして

いないし主権もない。それに46年には中国にソソリヤクを行い、またカン国とも戦った。日本あるいはどのような国に対してでもその加盟に条件を付することは国連憲章に反するものであり、また外モウと日本とを同等扱いすることは日本と世界の理解をはずかしめるものである。

ディグソン英代表 日本と外モウの加盟を結びつけるべきだとの考えには絶対に同意できない。次期総会において外モウの加盟を認めるべきか否かについてはいまのところ何ともいえないが、日本にふりかかった不幸はなるべく速くつぐなわれなければならない。

ペラウンデ・ペルー代表

18か国ひとまとめ加盟案は理事会または総会の多数によってではなく、ただ一つのキョヒ権行使によって無効とされたのである。

これは（被国の弱小国に対する）おどかしの1事例であった。このことが残余の西ヨーロッパ側申告国に対するソ連のキョヒ権行使を招いたのである。ソ連が後にその態度を改めたのは喜ばしいことであつたが、この態度修正が日本の除外をとまなうものであつたのはいたましいことであつた。日本の加盟はアジアのつりあいのため欠くべからざるものである。だがペルーは日本と外モウとを一まとめにした案には賛成することができ

でも喜んでくれる母に内親のよさを
しめしめと感じるのでした。

(トウキョウ都シナガワ区ヒガシ
オオサキ4の181サイトウ・ユ

ウコ公務員=22サイ)

《ブヨウ》

意欲みせる女流3人

ハナヤギ・ヒサシ イチカワ
・スイホ ハナヤギ・サクラ

ちかごろ新人の間では流派をこえて他流派同士の合同公演が目だってきたし、日本ブヨウと西洋ブヨウをミックスしたような現代ブヨウの運動もさかんだ。今秋の発表作品のなかではハナヤギ・ヒサシ、イチカワ・スイホ、ハナヤギ・サクラのものが注目される。

◇ハナヤギ・ヒサシ=家元ハナヤギ・トシスケに古典を学ぶかわら西洋ブヨウも3年前からエグチ・タカヤに師事している。そうした意欲が近ごろブタイの上にも現われて演技も現代ブヨウのジェリッという新しい感覚表現に専念している。12月のハナヤギ流「光

光会」には長うた「ふじむすめ」をシキサイと照明に新クワウをして、この曲本来の持味であるオオツ絵の感じを出したいといっているし、テレビ・ブヨウのふりつけ演出にも新境地を試みつつある。

◇イチカワ スイホ=おどりと地うたまの両面から日本ブヨウのテクニックを深くほり下げて。その正確な演技術が1作ごとに実を結んでいる。今秋ではすでにハナヤギ・キノノスケと組んで「お国山三」フジマ・トモアキと組んで「こいこうろ」など、新作ブヨウゲキを発表しており地うたまいではトウキョウ・オオサカに定期発

表会を持つなどいそがしいカツヤクをつづけている。数少ないイチカワ流ではただ一つのカンパン・ブヨウ家で、毎回他流派の達達と協力した発表作品が多い。来春には地うたまいを取り入れたブヨウゲキと、タンテイ小説のブヨウ化をキカクしている。

◇ハナヤギ・サクラ=日本ブヨウと西洋ブヨウとの歩み寄りによるブヨウこそこれからの現代ブヨウであると、今秋の芸術祭参加作品には、「トウキョウむかしむかし」をとりあげ、新派のハナヤギ・ヨシアキ、西洋ブヨウのタカダ・セイコ門下生らと協同して、音楽にもブヨウ界では最初の試みであるミュージック・コンクレートを使用するなど新しいブヨウ形態を創案している。

のびる子 強い子!

スクスクと発育ざかりのお子様を、強く、丈夫にのび上げて上げるのは、親としてのあなたの責任です。

わかもとを是非あなたのお子様にも達げてください。わかもとにふくまれている成分(チアシスターゼその他各種の消化コウソ、ビタミンB複合体、ミネラル、豊富なニューサンキン等々)は胃腸の働きをうながし、体を丈夫にするのに必要なものばかりです。わかもとはあなたのお子様をすこやかに、強く丈夫な体にいたします。

(適応ショウ)

発育をうながす・はらくだし、ペンビ、食欲のない時・産前産後

300ジョウ	150円
1000ジョウ	430円

わかもと

ニッポン放送

毎週月曜から金曜まで夕4時
連続放送ゲキ「君美しく」

旺薬株式会社 トウキョウ

都チヨダ区まるビル

*一、これでは予約制度はくずれ食管制度はみだれる。また統制テッパイを策略をもって実現せんとするものである。

一、我々は民主的な食物管理制度の確立と生産費をつぐなう米価実現のためた
たかう。

4—7月ですでに黒字豊作のめぐみはこれから

景気は動く ⑤

“ついで”ときはなんでもうまく運ぶ。お米もことしは記録破りの大豊作でお役所の予想出来高でさえ、7665万石とザット1500万石（前年比）の大増収。麦は小麦、大麦、はだか麦合わせて3035万石の実収をあげ昨年の大豊作につぐ2番目の上成績。イモ類もジャガイモが7億7千万貫で約5千万貫の増収、サツマイモが16億7千万貫で1億3千万貫の増収といずれも反当り出来高では戦前戦後を通じての最高の出来。そればかりか工芸作物のタバコやナタネの作がらもよく、副業の養蚕も戦後最高のまゆの出来高が予想されている有様で、ことしほど農作物に最高記録が生れた年はないとまでいわれている。

自由経済の原則からすれば夏野菜異変のように、あまり、ナス、キュウリがとれすぎれば暴落するのが当然だが、そこは農家の現金収入の半分近くをしめているお米が統制されている有難さ、いくらとれても米価は昨年より高い、石10160円で無制限に政府が買上げてくれるから、米の増収はそっくり農家の収入増加となる計算で、昨年より米だけで千億円以上の現金が余計に農民のフトコロにころげこむ。さらに強気すじの思わくにかかるとそのほかの農作物収入でも500億円から1000億円の増収を見こんでいる。昨年、風水害の年を考えるともまさにお天気様々で、ゆめみtain話だが、これでは今年の豊作がいわゆる“数量景気”の支柱の一つに数えられるのも無理はない。そのはしりが統計にもすでにあらわれたせいか4—7月の農家の現金収入は黒字（昨年の同期は赤字）を示す調子のよさだ。炭焼きなどの林業収入や労賃など農業外収入こそ、いくぶん減り気味だが、本業の農業収入は前年同期に比べ13%もふえている。しかもこの統計には問題のことしのお米の代金は前渡金の一部を除いてほとんど入れてないので、本当の豊作のめぐみが統計にあらわれるのはこれからの話。このように農家のフトコロがあたたかいのは事実だが、今のところサイフのひもも案外かたいこともまた事実だ。たとえば前渡金景気とさわがれた予約前渡金のゆくえを調べてみても農林中金を通じて支はらった金は半分近くも歩どまって、そのほかの金も消費にはあまりつかわれないうで、例年ならば年末に支はられるはずのかけ買いなどのくり上げ返済にあてられている。してみると豊作景気として株屋さんあたりが期待している農村の金の株式市場流入などが実

現するにしても、それはやはりのこりの米代金がいいる年末近くの話となりそうだ。

(iii) 社会記事の例

大づめ、昨夜の各候補

チュウシャでもたせてかけ回る

選挙事務所に 売りこみ電話もしきり

選挙戦は終わった。26日間早朝から深夜まで活動が続けた選挙事務所もホコをおさめた。きょう全国4900万人の有権者が思い思いの答案を書くわけだが、選挙戦まく切れの26日夜、ギリギリの心理効果をねらってどの候補者も町をかけ回った。くたくたにつかれた候補者をビタミン、チュウシャ器かた手にカンゴ婦が追いかける。“ジンチュウ見まい”の1ショウビンが、顔役といっしょに事務所にはいつてくる。選挙のブタイうらもめまぐるしい回転を増した。これは大づめの日の表情。――

○ ある事務所のかたすみで「こちらは△△でございます。平素はゴブサタしておりますが」と電話戦術をやらされていたアルバイト学生君「なに△△？ そんなの知らんよ」とあっさりふられてがっかりしたり、シンパにぶつかってニコリしたり。オウエン弁士にやとわれたのだが、都議、区議のおレキレキが多くて最終日などとても出してもらえないという。

「革新派に投票するつもりだと話したのが週刊ザッンに出たので気がひけて」と保守派のゲキレイ文のはってあるかべを横でにらんでいた。追いこみにはいっているんな売りこみもひっきりなし。中には電話で「目下失業中、20票あり」というのもあったが、いっさいお断りした、と事務長以下全員力説。

○ ニシオギクボの駅前で会ったある候補の小型自動車運転手君に聞くと「ずい分走らされたけれどレンコがないので楽になった。演説時間が長いからこっちは余計休めるわけさ」26日間のホコリをはたきながら改正法をほめる。

けむにまく兵法指南

○ ゴール直前だといろんな“あやしい人物”が来ますね――とこれは明大生のアルバイト君。

26日にもある無所属氏の事務所に自称兵法指南が現われて一席。「今の選挙はソソシの兵法でやっとなる。わしのリクトウサンリャクでやれば大ジョウブ。週1回なら伝授いたそう」とけむにまく。

アルバイト君「この人は目的が分らない。中にははっきりたかりにきたとい

ったのがありますよ」とおどろいていた。

ガイトウ演説は上々

○ 強いとか、当落線上とか下馬評された候補者たちの追いこみはさすが殺氣立っていた。ガイトウの演説会が許されるギリギリの夜9時まで、駅やさかり場でさけび、続いて届出済の会場で11時ごろまで一席。終わったらいずれもふらふらだった。静かな選挙といわれながらレンコじゃないかと疑われるような短い演説をぶち回ったのもいる。演説会の立てカンバンを選挙区内にごそっと配置した候補者もあれば反対派がその立てカンバンにいちいち「これはイハンです」とはり紙して回ったり。しかしまく切れのガイトウ演説会の入りはどこも上々、低調といわれた2月選挙もシリ上がりの景気をみせて終った。

すべての事務所が静かになった時、トケイのはりはもう投票日の27日に回っていた。保守も革新も無所属もどの候補者も異口同音「今となっては選挙民各位の良識に期待するのみ」という。

さらに4名をつかまえる

コウラクエンあらしピストルをうってにげる

コウラクエン競輪場あらしのピストル暴力団事件を追究中のトミサカ・ケイサツではさきに6人をつかまえ、ピストル3丁をおさえたが、21日朝さらにスミダ区アズマ町西1の19コンドウ組筆頭代貸競輪取次ハンバイ前科1犯キーさんことキノシタ・ウメジ(47) 同区ムコウジマウケチ179同組幹部前科2犯ショーパンツことチョウ・シュンジュ(26) 同区スザキ町142同組幹部前科3犯ウチャマ・タダマサ(30) 同区テラシマ1の62同前科2犯カギことアオヤギ・イサム(38)の4人をつかまえ、さらにウチャマの自家テンジョウうらから発見された日本刀4ふりをおさえた。調べによると去る2月24日、キノシタらはさきにつかまえられたチョウ・シュホウ(31)らとコウラクエン競輪場に不正入場しようとしたが、とりしまり中のヌノト組(組長ヌノト・トリゾウ氏)にとめられ口論となり、はらいせにキノシタらはムコウジマのコンドウ組、ヨコスカのワダ組、マツドのハコ屋一家にオウエンを求め、あくる25日午後3時ごろ一味40名とともにピストル、日本刀をふりかざしコウラクエンになぐりこみをかけ、ヌノト組の1名を場外につれ出し、つるしあげているところをトミサカケイサツのケイカンに発見されピストルをうちながらにげたもの。

これまでにつかまえたのは10名となったが、まだ一味は相当にいるものとみ

ハタノ・イソコの3部作

(各 ¥260・〒35)

夏休みの育児は心理学のちえで

赤 ちゃんの心理

あなたのお子さんはすばらしくなる……それは母親の努力と愛情で実現できます。

お さない子供の心理

毎日出版文化賞・人間のちえや才能や性質の根深い土台はおさない時につくられる。

小 学生の心理

夏やすみに知らず知らずのうちについた子供の悪い習慣をなおしておきましょう。

トウキョウ・ブンキョウ・オトワ町3
ふりかえトウキョウ 115347

光 文 社

シッシン・おでき・切りきず・ニキビ

アメリカで「水にとける油」が完成され、すばらしいヒフ病の薬が生まれました。この「水にとける油」で造ったダマリンは、今までの軟コウとちがって、お薬の成分が厚いカサブタ、うみやブンビ物にさえぎられることがなく、ヒフのおく深くしみとおって根深い病部に直接作用いたしますので、ガンコな田虫やシッシン、おできでも、しらくも、ニキビ、やけど、切りきずなどにもすばらしくきくのです。ひどいかゆみもすぐ止まります。ダマリンは、ヒフ病の種類と病状に応じて使い分けるよう、4種類ありますからご近所の「大正チェーン薬局」でご相談の上、お選び下さい。

お 花 見 は……

4月1日から始まる花見わりびきで!

ナガトロ	イケブクロから往復わりびき……………	330 円
タマヨド	イケブクロから往復わりびき……………	270 円
カマキタ湖	イケブクロからヒガン・モロ往復わりびき……………	180 円

◎4月の日曜日には臨時電車大增発……くわしくは下記へ

イケブクロから東上線

TEL (97) 0556
(案内所)

(2) 書きかえの実例

どういふ語・表記をどういふ語・表記に書きかえたかで、項目ごとに、典型的な例をいくつかあげる。

- ①漢字漢語→漢字漢語 閣僚→大臣、国務大臣 憂慮→心配 豊凶→豊作不作 好評→高評
- ②漢字漢語→片かな漢語 懇談→コンダン 六十歳→60サイ
- ③漢字漢語→平かな漢語 屋敷→やしき 概況→もよう 若干→いくぶん 騒々しく→そうぞうしく
- ④漢字漢語→まぜ書き漢語 一塁手→1ルイ手 連載→連サイ 漂白←ヒョウ白
- ⑤漢字漢語→漢字和語 包装→荷造 財布→金入れ 誕生した→生れた 痛切に→強く
- ⑥漢字漢語→平かな和語 契機→きっかけ 所載→のった 破壊され→こわされ
- ⑦漢字漢語→まぜ書き和語 色彩→色どり 自宅→わが家
- ⑧漢字漢語→片かな外来語 短銃→ピストル 併殺→ダブルプレイ
- ⑨漢字和語→漢字漢語 極めて→非常に 此の度→今度
- ⑩漢字和語→漢字和語 眼→目 想う→思う 操り→使い
- ⑪漢字和語→片かな和語 婆ア→ババア
- ⑫漢字和語→平かな和語 皺→しわ 描く→えがく 荒々しい→あらあらしい 手狭で→せまくて
- ⑬漢字和語→まぜ書き和語 鼻筋→鼻すじ 裸麦→はだか麦 引揚げ→引きあげ 皆殺し→みな殺し
- ⑭漢字和語→片かな外来語 八割→80パーセント
- ⑮まぜ書き和語→平かな和語 片すみ→かたすみ 違いない→ちがいない 予め→あらかじめ
- ⑯まぜ書き和語→まぜ書き和語 赤ん坊→赤ちゃん
- ⑰漢字固有名詞→片かな固有名詞 東京都台東区北稻荷町六六→トウキョウ都タイトウ区キタイナリ町66 清水幾太郎→シミ

ズ・イクタロウ 紫雲丸→シウンマル

⑮漢字固有名詞→片かな外来語 南仏→南フランス 黄八妹→ホアン・パー
メイ

⑯漢数字→アラビア数字 二十四億三千三百万円→24億3300万円

⑰漢数字と漢字助数詞→アラビア数字と記号 一割三分→13% 三分の一→ $\frac{1}{3}$

⑱連語→連語 死傷者→死者やけが人 横綱だ→第1位をしめ
ている 危険を冒して→あぶないことをして
年齢が高くなるほど一年をとった者ほど

(3) 実験新聞の漢字の含有率

教育漢字の範囲内で書きかえた実験新聞の文章の漢字の含有率は、次のとおりである。

記事	31.34%
広告	31.27%
<hr/>	
平均	31.33%

すなわち、教育漢字の範囲内で記事を書けば、量的に読みやすいとされる漢字の含有率を少し下まわる文章となる。従って、教育漢字のほかに、ぜひ必要な漢字を加えて書くことによって、望ましい漢字含有率の文章ができると考えられる。しかし、どういう字種を加えたらよいかは、なお研究を要する。

2. 実験新聞の読みやすさに関する意見調査

(1) 集団調査

(i) 調査のしかた

(a) 実験新聞60種の中から10種の新聞を選ぶ。選びかたは、この10種の中
言いかえ・書きかえの問題点が、どの面でも含まれるように見当をつけて行な
ったつもりである。

(b) 被験者各人が10種(10枚)全部を読むことができるなら、各種30枚の
答案を得るために30人の被験者があればいい。しかし、この新聞を、1授業時
間(50分)のうちに、だれもが無理なく読める枚数は、まず3枚(6ページ)
と考えられる。1人が3枚ずつ読んで、10種各30枚の答案を得るためには、100
人の被験者が必要である。

(c) 中学2年生50名、高校2年生50名、計100名の被験者を定めた。中学生は男子ばかり、高校生は男女各25名ずつである。ここから、1種の新聞につき、中高各15枚ずつの答案が得られた。高校生の15枚は、男8・女7のもの5種、男7・女8のもの5種となっている。以上の割当てを行なって、あとは、ランダムに3枚を組み合わせたから、能力差や性別によるかたよりはなくなっているはずである。

(d) インストラクションは、「次の3枚の『実験新聞』を読んで、読みにくいところや、わかりにくいところについて、下のようなしるしをつけてください。」とし、「読めない字」「読みにくいところ」「ことばの意味がわからない」「ことばの意味がわかりにくい」「ことばづかいが不適当と思われるところ」の5種類を区別して、しるしをつけさせた。

以下、その結果を記述する。

(ii) どのくらい、しるしがついたか

しるしのついた所は、全部で1,531箇所あった。この「箇所」というのは、実は、はなはだあいまいな言いかたである。数語にわたって、時には、数行にわたって線が引かれていることがある。それでも1箇所である。ことに複合語の場合が問題である。例えば、「財政投ユウ資計画」の全部に引いたもの、「ユウ」だけに引いたもの、「財政投」に引いたもの等いろいろある。これを厳密に考えれば、語の単位を確定して語に分けてから、何語にしるしがついたかとしなければならないが、それでは作業が非常に複雑になるので、今の場合は、その方法をとらず、この例ならば、「投融資」を「投ユウ資」とまぜ書きしたことに対する抵抗と考えて、1箇所として扱った。以下、しるしのついた所を数量で呼ぶ場合、何箇所と称するが、1箇所は大体、常識的に考えて1語に当るのである。だから、これを分類するときには、「漢語」「和語」等、語の名称を当ててある。

1,531箇所とは、実験新聞1ページにつき、76.5箇所に当たる。1ページは15字づめの約90行から成るから、ほとんど毎行に近くしるしがついたわけである。この76.5箇所には、ひとりだけがつけた所もあり、大勢が一致してつけた所もある。それらをならすと、1箇所平均約5人がしるしをつけている。(た

だし、1人でいくつものしるしをつけていることもあるから、この5人は被験者の実際の頭数ではなく、延べの数である。しかし、実際は、1人が二つ以上つけた例は多くないので、大体、実際の人数と見ていい。)

(iii) どんな所にしるしがついたか

1,531箇所の内訳はどうなっているか。どんな語をどんな文字で書いた所か。それは、第1表のような分布になっている。

これで見ると、しるしのついた箇所をいちばん多く含んでいるのが漢字で記

第1表

語	表記	しるしのついた箇所数	総数を100とする%
	アラビア数字	18	1.2
漢語	漢字	420	27.4
	片かな	248	16.2
	平かな	10	0.7
	まぜ書き	25	1.6
和語	漢字	49	3.2
	片かな	49	3.2
	平かな	152	9.9
	まぜ書き	35	2.3
固有名詞	片かな	335	21.9
外来語	片かな	95	6.2
	ローマ字	3	0.2
連語		92	6.0
計		1,531	100

した漢語で、全体の3割近くを占める。その次が、地名人名等、固有名詞の片かな書き(2割余)、次が漢語の片かな書きで、以上が1割以上を占めるものである。

この実験新聞は、上記のように別表外の漢字をいっさい使わないで書いたものである。それにもかかわらず、まだこのように、漢字がきらわれているということは、余程考えさせられる問題である。

しかしながら、以上の数字は、1箇所についたしるしの数の多少を度外視したものである。1人だけがしるしをつけた所も、10人が

しるしをつけた所も区別していない。これでは真の問題点はつかめない。それで今かりに、1箇所にしるしのついた度数3以下と4以上とで2分し、表を描き分けると第2表のようになる。

漢字書き漢語 420 箇所の約8割に当たる 333 箇所は度数3以下のグループに入っている。すなわち、しるしのついた漢字書き漢語の大部分は、被験者の1割以下が抵抗を示したものにすぎないのである。

これに反し、その漢語を片かなで記した箇所では、しるしのついた 248 箇所

第2表

語	表記	しるしの 度数3以 下の箇所 数	(右端合計 を100と する%) (下端合計 を100と する%)	しるしの 度数4以 上の箇所 数	(右端合計 を100と する%) (下端合計 を100と する%)	計
	アラビア 数字	18	(100) (2.3)	0	(0) (0)	18
漢語	漢字	333	(79.2) (42.4)	87	(20.8) (11.7)	420
	片かな	21	(8.5) (2.7)	227	(91.5) (30.4)	248
	平かな	7	(70.0) (0.9)	3	(30.0) (0.4)	10
	まぜ書き	2	(8.0) (0.3)	23	(82.0) (3.1)	25
和語	漢字	35	(71.5) (4.5)	14	(28.5) (1.9)	49
	片かな	27	(55.2) (3.4)	22	(44.8) (2.9)	49
	平かな	134	(88.0) (17.1)	18	(12.0) (2.4)	152
	まぜ書き	31	(88.6) (4.0)	4	(11.4) (0.5)	35
固有名詞	片かな	41	(12.2) (5.2)	294	(87.8) (39.4)	335
外来語	片かな	63	(66.4) (8.0)	32	(33.6) (4.3)	95
	ローマ字	0	(0) (0)	3	(100) (0.4)	3
連語		73	(79.5) (9.3)	19	(20.5) (2.5)	92
計		785	(51.2) (100)	746	(48.8) (100)	1,531

の9割余に当たる227箇所が、4以上のグループに入っている。固有名詞の片かな書きでも、同様の現象が見える。

このようなはげしい片よりが何によって生じたか、それは、あとで、度数4以上の語を分析することによって明らかになるが、ここでは、ひとまずその問題をおいて、われわれの行なった言いかえ・書きかえが、このしるしとどんなふうにかかわっているかを見よう。

(iv) しるしのついた所と書きかえとの関係

第2表は第1表を度数3以下と4以上に分けたのだが、今度は、しるしのついた部分のことは・表記がもとの記事のままであるものと、言いかえ・書きかえ（以下単に「書きかえ」という）を施したものとに分けてみると、第3表のとおりである。

第3表

語	表記	もとのま （右端合計 を100と する％） （下端合計 を100と する％）	書きかえ （右端合計 を100と する％） （下端合計 を100と する％）	計
	アラビア 数字	0 ⁽⁰⁾ (0)	18 ⁽¹⁰⁰⁾ (2.2)	18
漢語	漢字	378 ^(90.0) (53.0)	42 ^(10.0) (5.1)	420
	片かな	11 ^(4.6) (1.5)	237 ^(95.4) (29.0)	248
	平がな	3 ^(30.0) (0.4)	7 ^(70.0) (0.9)	10
	まぜ書き	2 ^(7.9) (0.3)	23 ^(92.1) (2.8)	25
和語	漢字	39 ^(79.5) (5.5)	10 ^(20.5) (1.2)	49
	片かな	41 ^(83.6) (5.7)	8 ^(16.4) (1.0)	49
	平がな	74 ^(48.7) (10.4)	78 ^(51.3) (9.5)	152
	まぜ書き	7 ^(19.8) (1.0)	28 ^(80.2) (3.4)	35
固有 名詞	片かな	0 ⁽⁰⁾ (0)	335 ⁽¹⁰⁰⁾ (41.0)	335
外来語	片かな	91 ^(95.7) (12.8)	4 ^(4.3) (0.5)	95
	ローマ字	3 ⁽¹⁰⁰⁾ (0.4)	0 ⁽⁰⁾ (0)	3
連 語		63 ^(68.5) (8.8)	29 ^(31.5) (3.5)	92
計		712 ^(46.7) (100)	819 ^(53.3) (100)	1,531

漢字書きの漢語に示された抵抗は、その大部分が、「実験新聞」の記事文に

対する抵抗というよりも、もとの新聞の記事文に対する抵抗が、実験新聞にまでも影を落したのだと見るべきものである。反対に、漢語の片かな書きについてゐるゐるの数は、書きかえたことに対する抵抗のあらわれと見なければならぬ。固有名詞を片かなで書いたものは、もとの記事には一つもないから、比較の問題にはならない。

以上のことから、被験者が実験新聞に示した抵抗には、「書きかえても」なおかつ残る抵抗と、「書きかえたために」生じた抵抗とが含まれていることがわかる。

(v) 書きかえはどう行われていたか——そのどこに問題があるか

第3表から、漢字書き漢語のうち42箇所は、書きかえたにもかかわらず、なおゐるゐるをつけられたものであることが知れるが、それなら、同じく漢字書き漢語で、書きかえたために、ゐるゐるをまぬかれた（と言うのが言い過ぎなら、書きかえたものでゐるゐるのつかなかった）箇所が何箇所あるのか。すべてについてそれを見たのが次の第4表である。

書きかえた箇所は全部で、1,420箇所あり、漢字書き漢語は113箇所ある。うち71箇所は、ゐるゐるをまぬかれている。

この表から、いくつか顕著な事実を拾ってみる。

もとの新聞は縦書き、実験新聞は横書きだから、比較に不便であるが、漢数字をすべてアラビア数字に書きかえた結果は、抵抗なく読まれたのが92.5%に及んでいる。そして、ゐるゐるのついた18箇所は、いずれも、度数3以下のものである。

漢語の片かな書きは、書きかえた238箇所のほとんど全部237箇所に、ゐるゐるがついた。そのうち220箇所が度数4以上のものである。（ゐるゐるのつかなかったのは「ダンナ」1箇所だけ。しかも、それは同一記事に2度出てくる2度目のほうである。）

和語を漢字で記した61箇所は、その8割余の51箇所がゐるゐるをまぬかれているから、書きかえの効果は、まずまずあったというべきである。さきに見たように、漢字書き漢語に書きかえてゐるゐるのついたものは42箇所あったのだが、そのうち度数4以上のものはたった1例（「策略」）しかない。これらの事実を

第4表

語	表記	書きかえる しにつか なかつた 箇所の数 (右端合計 を100と する%) (下端合計 を100と する%)	書きか えて、し るし のつ いた 箇所 の数 (右端合計 を100と する%) (下端合計 を100と する%)	書きか えて、し るし のつ いた 箇所 の数 (右端合計 を100と する%) (下端合計 を100と する%)	書きか えて、し るし のつ いた 箇所 の数 (右端合計 を100と する%) (下端合計 を100と する%)
	アラビア 数字	224 ^(92.5) (37.2)	18 ^(7.5) (0)		242(17.0)
漢語	漢字	71 ^(62.8) (11.8)	42 ^(37.2) (1)		113 (8.0)
	片かな	1 ^(0.6) (0.2)	237 ^(99.4) (220)		238(16.8)
	平がな	9 ^(56.2) (1.5)	7 ^(43.8) (2)		16 (1.1)
	まぜ書き	5 ^(18.0) (0.8)	23 ^(82.0) (22)		28 (2.0)
和語	漢字	51 ^(83.6) (8.5)	10 ^(16.4) (5)		61 (4.3)
	片かな	1 ^(11.3) (0.2)	8 ^(88.7) (2)		9 (0.6)
	平がな	180 ^(69.7) (29.9)	78 ^(30.3) (14)		258(18.2)
	まぜ書き	31 ^(52.5) (5.2)	28 ^(47.5) (3)		59 (4.2)
固有 名詞	片かな	6 ^(1.6) (1.0)	335 ^(98.4) (294)		341(24.0)
外来語	片かな	9 ^(69.0) (1.5)	4 ^(31.0) (0)		13 (0.9)
連 語		13 ^(31.0) (2.2)	29 ^(69.0) (8)		42(3.0)
計		601 ^(42.3) (100)	819 ^(57.7) (571)		1,420 (100)

あわせ考えると、漢字に関しては、次のように言えるかと思う。すなわち、同じ教育漢字で書かれた語でも、もとの記事に使われていたままのものには、まだ、読みにくいものがあるが、われわれが書きかえたものは、大部分が読みやすくなっている。すなわち、教育漢字の中にも、やさしさの段階があり、われわれが書きかえるに際しては、おのずからやさしい字を選んでいたということである。

和語を平がなで記した書きかえ 258 箇所は、その7割に当たる 180 箇所が

しるしをまぬかれた。しるしのついた78箇所も大部分は度数3以下で、4以上のものは14箇所しかないから、これも、かなり親しみやすい形だと言うことができる。

固有名詞の片かな書きは、漢語の片かな書きとともに、現在の段階では、もっともきらわれる書きかたで、「おロク（人名）」「ダイエイ」「ウエノ」3例のほか、99%に当たる335箇所がしるしをつけられた。うち294までが度数4以上のものである。

以上をまとめると、次のようになる。

書きかえが記事を読みやすくするのに役立った点は、

(a) 漢数字をアラビア数字にかえたこと（ただし、これは、横書きという条件の中で）

(b) 教育漢字を活用したこと

(c) 平かな書きの和語を使ったこと

書きかえが記事をかえって読みにくくした点は、

(a) 漢語を片かなで記したこと

(b) 固有名詞を片かなで記したこと

その他、数は少ないが傾向として言えることは、

(a) 漢語のまぜ書きは歓迎されないこと

(b) 片かな書きでも、外来語なら、抵抗感が少ないこと

等である。

(vi) 中学生と高校生とがどのような反応のちがいを示したか——しるしの多くついたものの分析

今まで、しるしのついた部分を考察する指標に、箇所の数と、度数による2区分とを用いてきた。この「箇所」の数の中には、同一の語が何度も出て来てひとりでかせいだ数が含まれている。しるしのついた箇所にどんな語があるかを具体的に考えるのには、それでは不便なので、これを異なり語（この「語」も厳密な意味ではない）の数にかぞえてみる。その上で、語と表記によって分類した各グループについて、中学生・高校生がしるしをつけた度数になんらかの片よりがあるかどうかを見ることにする。

このような考察のためには、度数3以下のものは不安定で、適当でないのをこれを棄てる。従って、さきにあげた第2表の度数4以上の箇所数の項に視点を定め、この項の数に含まれた、異なり語数をかぞえる。第5表がそれである。

第5表 しるしの度数4以上の異語数

語	表記	もとのま $\left(\begin{array}{c} \text{右端合計} \\ \text{を100と} \\ \text{する}\% \\ \text{下端合計} \\ \text{を100と} \\ \text{する}\% \end{array} \right)$	書きかえ $\left(\begin{array}{c} \text{右端合計} \\ \text{を100と} \\ \text{する}\% \\ \text{下端合計} \\ \text{を100と} \\ \text{する}\% \end{array} \right)$	総数 $\left(\begin{array}{c} \text{下端合計を} \\ 100とする \\ \% \end{array} \right)$
漢語	漢字	70 ^(98.5) (55.5)	1 ^(1.5) (0.3)	71(15.5)
	片かな	7 ^(6.4) (3.6)	103 ^(93.6) (31.0)	110(24.0)
	平がな	1 ⁽¹⁰⁰⁾ (0.8)	0 ⁽⁰⁾ (0)	1(0.2)
	まぜ書き	1 ^(5.0) (0.8)	19 ^(95.0) (5.7)	20(4.4)
和語	漢字	13 ^(86.5) (10.3)	2 ^(13.5) (0.6)	15(3.3)
	片かな	10 ^(83.1) (7.9)	2 ^(16.9) (0.6)	12(2.6)
	平がな	2 ^(40.0) (1.6)	3 ^(60.0) (0.9)	5(1.1)
	まぜ書き	1 ^(20.0) (0.8)	4 ^(80.0) (1.2)	5(1.1)
固有名詞	片かな	0 ⁽⁰⁾ (0)	198 ⁽¹⁰⁰⁾ (58.6)	198(43.2)
外来語	片かな	21 ⁽¹⁰⁰⁾ (15.7)	0 ⁽⁰⁾ (0)	21(4.5)
計		125 ^(27.5) (100)	332 ^(72.5) (100)	458(100)

最初、しるしのついた箇所が1,531あると言った。次に、それを度数4以上に限ったら746箇所になった。そして、これを異語数にせんじつめたら、458語になった。これを原記事のままのものと書きかえたものとに分けると126と332とになる。もとのままの126語の半分以上を占めるのが漢字書きの漢語(69)である。これに漢字書きの和語(13)を加えると、つまり、126のうち82(7割近く)までが漢字で書かれた語への抵抗なのである。一方、書きかえた332語の9割に当たる301語が固有名詞ないし漢語の片かな書きで占められ

ることは、これまでに見てきたとおりである。

以下、語・表記の種類ごとに検討を加える。検討のしかたは次のようである。

(a) しるしの種類は5種類あったが、これでは複雑すぎて、数量的考察に不便なので、次のように単純化した。「読めない」と「読みにくい」とを合わせて「読みにくい」とする。「意味がわからない」と「意味がわかりにくい」とを合わせて「意味がわかりにくい」とする。つまり、読みにくさを、読みの上での抵抗によるものと、意味の上での抵抗によるものとに2分したのである。このように合併することには、問題もあるが、結果から見ると、むしろ、これで正しかったと思われる。「ことばづかいが不適当と思われる」しるしは、読者の批判のあらわれであって、これには複雑な要素が含まれているはずである。従って、被験者の抵抗感をはっきり2種類に分ける場合には、これは処理にこまる。しかし、いずれにしても、なんらかの抵抗があるからこそ批判が生れるのであるから、便宜上、このしるしは、次のように処理した。すなわち、しるしの総数を問題にするときだけ、これをかぞえ、2種類の抵抗に分けて考察するときには、すべて、この数を除外した。

(b) 被験者の層分けは、中学生と高校生の二つにした。高校生は男女を等しく配合してあるので一応分けてみたが、この別を立てると、数があまりに散るし、また、男女差のようなものも感じられなかったので、結局合算した。

(c) 以上のように、被験者の層、抵抗の種類（以下これを「読みの抵抗」「意味の抵抗」と称する）を、それぞれ2種類に分けて、しるしの度数分布を見る。一、二例をとって、その見かたを説明する。「レンコ」（連呼）「トウソウ」（闘争）という語の度数分布は次のようになる、

「レンコ」 総数28				「トウソウ」 総数16			
	中	高	計		中	高	計
読みの抵抗	4	1	5	読みの抵抗	2	9	11
意味の抵抗	12	11	23	意味の抵抗	1	2	3
計	16	12	28	計	3	11	14

「レンコ」についたしるし数は全部で28ある。中高各15人、計30人が、これだけのしるしをつけたわけだ。ひとりで二つ以上のしるしをつけていること

もあるので、しるし^レの数^ンが人数をこえていることもある。しかし、その例はそう多くはないから、これを「30人中28人がしるし^レをつけた」と言いかえても、はなはだしい誤りにはならない。その内訳は、層別には、中学生のほうがいくぶん多くの抵抗を示しているが、この差は問題にすべきでなく、抵抗が、「意味」のほうに片よっていることに注目しなければならない。「レンコ」と書かれても、一読して何のことだかわからない読者のほうがずっと多かったわけである。これに反して「トゥソウ」については、読みかたにとまどう人のほうが多いのである。「レンコ」を Renko と読むのはたやすいが、これと「連呼」とを結びつけるのにひまがかかる。一方、「トゥソウ」は、Tousou でなく、Tôsô と読むのにちょっと手間取るが、それがわかれば、(と言うより、読みに手間取っているうちに)「闘争」だということはすぐわかるということであろう。そうして、「トゥソウ」にひっかかりを持つ度合は、高校生のほうが強いのである。(上に記した総数16が表の合計14とくい違うのは、(1)で述べたように、「不適当」の数を加えてあるからである。この場合は、高校生に2個あった。)

第5表に記した332個の異なり語全部についてこのような集計を行い、語表記の種類ごとに合計した。

(d) (c)で出た数値を語数で割れば、各種類ごとに1語当たりの抵抗の量が出るが、これは、抵抗のあった語だけ、しかも、度数4以上のものだけについての集計だから、その数値の絶対値には、あまり意味がない。そこで、そうして出した平均値は、「中」か「高」か、「読み」か「意味」かの片よりの程度を知るための相対的な量としてだけ参考にとすることとし、ここでは、もっと直接にその片よりを見るために、単に大小(ないし相等)関係を調べた。すなわち、(c)で示した例語について言えば

「レンコ」	「トゥソウ」	左のような大小関係が成り立っている。このようにつけた不等号(または等号)の数を、その方向ごとに(>か<, Vか^)集計した。
中 高	中 高	
読み 1 > 1	読み 2 < 9	
^ ^	V V	
意味 12 > 11	意味 1 < 2	以上4段階の作業によって得た数値に解釈を加えた。以下、語・表記の種類ごとに、大小関係の数値とその解釈ならびに語例とを記す。

イ 漢字書きの漢語（71語、もとのまま70、書きかえ1）

①大小関係

	中	高	左の表の見かたはこうである。漢字書き漢語でしるし
読み	43	15	13
	>	=	<
19	√		√
11			
41	∧		∧
意味	53	10	8
	>	=	<
<p>のついた度数4以上のものは71語あったが、そのうち、読みの抵抗については、（まず、横に見て）中学生のほうが多く抵抗を示した語が43語、反対が13語、中・高相等しいものが15語である。意味の抵抗については中学生のほうが多く抵抗を示した語が53語、反対が8語、中高相等しいものが10語である。だから、2種の抵抗のどちらについて見ても、中学生のほうが多く抵抗を示していて、その落差は、意味の抵抗においていっそう著しいわけである。次に、中学生・高校生のそれぞれが、「読み」「意味」のどちらに多く抵抗を感じているかという、（今度は縦に見て）中学生では、意味の抵抗を多く示した語が41語、読みのほうに多く抵抗を感じたものが19語、「読み」「意味」相等しいものが11語である。高校生では、「読み」「意味」相等しい抵抗度のものが29語でいちばん多く、読みの抵抗を多く訴えたものが22、反対が20であるから、高校生にとっては、2種の抵抗に、片やうがないわけである。というより、抵抗度相等しい29語の中にはともに無抵抗のものが14語含まれているのであるから、つまり、高校生は、この実験新聞の範囲内では、漢字で書かれた漢語にほとんど抵抗を感じないのだと見ることができる。</p>			

そこで、参考までに、1語当たりの抵抗の量（作業段階の(3)と(4)とで説明したもの）を示すと、次のようになっている。

	中	高	計	これを大まかな数にして、言いかえれば、こうなる。
読み	2.0	1.0	3.0	この71語だけについて言えば、中学生15人のうち、平均して約5人がしるしをつけた。そのうち2人は「読みにくい」とし、3人は「意味がわかりにくい」とした。高校生15人のうちでは2人がしるしをつけ、1人は読み、1人は意味の抵抗を感じたとしている。合計30人の中では、「読みにくい」が3人、「意味がわかりにくい」が4人、合わせて7人が、どちらかの理由で抵抗を感じている。
意味	2.9	1.1	4.0	
計	4.9	2.1	7.0	

総じて、この範囲内でなら、今回の被験者の高校生は、漢字書き漢語をもの
ともしないのに対して、今回の被験者の中学生は、これでもまだ、読めなかつ
たり、意味がわからなかったりでヘキエキする者があるわけである。

②語例（度数20以上をA，19～10をB，9以下をCとする。配列は度数の
多い順による。以下同じ。＊は書きかえたもの）

A……小異 B……名義借営業 所産 律(して) 大同 歩(どまって) 暴落 計
上 兵法指南 参画 食管制度 安易 自称兵法指南 中支 旗手 C……国内円資金
流入 俄(反共抗俄) 残存価格 *策略 細目 大合同問題 返済 聯(聯合) 名義
世銀中東極東部長 農林中金 国庫支出 善処 下馬評 色面 主柱 通住可歴持(案
内広告欄にあるもので、仮りに1語として扱った) 米大統領基金 基調 食管法 成
否 数量景気 米穀 受益者 答申 歴持 強権 発動 文久元年 伝授 収益性 異
口同音 株式市場 実証 不適正 集荷 中華婦女反共抗俄聯合總會(上に「俄」「聯」
だけにしるしのついたものを記した。これは全部にしるしのついたもの) 信用状 未
通関 小農 交歓 細君 追加公演 減額 電電 官報新聞 雑役 10社社長側 思考
派 老練 相場 労賃 最高水準 夏野菜異変 収用認定

□ 片かな書きの漢語（110語、もとのまま7，書きかえ103）

①大小関係

			中	高
上に述べたような見かたでこれを見ると、次のよう	読み	11	9	90
		>	=	<
に言えるであろう。		65	√	√99
		16		1
読みの抵抗は高校生において著しい。意味の抵抗で		29	∧	∧10
		>	=	<
は、中高の差はあまりない。中高それぞれについては、意味		33	36	41

どちらも読みの抵抗が大きい、その傾向は高校生において著しい。

つまり、高校生は著しく漢語の片かな書きをきらう。その理由は、意味がわ
からないからではなくて、読みにくいからである。抵抗量の平均値は、左のと

	中	高	計	
読み	2.5	4.7	7.2	おりであるから、高校生15人中6人余りがこれら110
意味	1.5	1.5	3.0	語に抵抗を示し、うち5人近くが読みの抵抗を訴えた
計	4.0	6.2	10.2	わけである。漢字書き漢語の場合と全く逆である点に

興味がある。

②語例（ここでは、もともと片かな書きであったものを＊で示す）

A……レンコ（連呼） シエン（支援） メイヨ・キソン（名誉棄損） フンボ（墳墓）
ジュッサツ（出札） ヒフン（悲憤） センリョウ（占領） ＊シンラツ（辛辣） B…

…ッチテイ（徹底） ショウトツ（衝突） *サイハイ（采配） ケンサツ（検札） エン
 ショ（援助） バイショウ（賠償） ケイサツチョウ（警察庁） ケンメイ（賢明）
 チュウザイ（駐在） ショウレイ（奨励） チョウセン（挑戦） ミッセツ（密接、ミ
 スプリントで、「ツ」が小文字になっていない） ソウサイ（総裁） ジュク（す）（熟）
 トウソウ（闘争） ムエン（無煙） ゲンソウ（幻想） チュウシャ（注射） テキハ
 ツ（摘発） テッパイ（撤廃） キンユウ（金融） *ショーバイ（商売、もとのままの
 表記によった） ジェンカン（句間） カイコン（開墾） レンラク（連絡） ヒデン
 （秘伝） ショウゾウ（醸造） カントク（監督） ブタイ（舞台） クウシュウ（空
 襲） ホンヤク（翻訳） ハクセン（白扇） オウエン（応援） ショコウ・イハン（徐
 行違反） エイキョウ（影響） ソッキョウ（即興） ヨウセイ（要請） キョトウ（巨
 頭） ケイサツ（警察） キョリ（距離） 1 ショウ（一升） ゴウダツ（強奪） バ
 イドク（梅毒） フクシ（福祉） タイソウ（体操） ガロウ（画廊） タイザイ（滞
 在） ソクセイ（促成） コウガ（抗俄） ソウチ（装置） コウジャク（侯爵） ユ
 ウウツ（憂鬱） ケショウ（化粧） ハイユウ（俳優） ハンコウレン（販購連） シ
 ョウグン（将軍） ザッシン（雑誌） ショウジョウキチ（上々吉） ハンコウ（反抗）
 ジュクレン（熟練） ゲキエイガ（劇映画） ホウヘイ（砲兵） トウニョウ（糖尿）
 メンキョ（免許） ショコウ（徐行） ジマン（自慢） *ユエン（所以） *ゴブサタ
 （御無沙汰） C……シンパン（審判） シュシン（主審） コンダン（懇談） キギ
 ヨウ（企業） レイチョウ（霊長） エイガ（映画） イハン（違反） ミョウ（妙）
 フキウ（普及） シキサイ（色彩） ヘンコウ（変更） シンギ（審議） イモン（慰
 問） シュウドウ（柔道） トケイ（時計） モウ（盲） ケッコン（結婚） キョウ
 フ（恐怖） イッパン（一般） カンバン（看板） カイゾク（海賊） エンビツ（鉛
 筆） ハンキョウ（反共） サイ（歳） ガイトウ（街頭） リレキ（履歴） サイフ
 （財布） イオウ（硫黄） シゲン（資源） ホウシン（方針） *バイキン（微菌）
 ソボク（素朴） シンシ（紳士）

ハ 平がな書きの漢語（1語、もとのまま）

書きかえの方針として、漢語をかな書きするときは、片かなによることにし
 たから、平がな書きの漢語は、もともとそうになっていたものを、そのまま用い
 たものが主であり、その例は極めて少ない。（書きかえたものも16例あるが、
 それは、「もちろん」「いっぱい」「やしき」等、極めて熟していると思われる
 ものばかりである。）

この集計では、「めいてい」（醴酊）「あっせん」（斡旋）
 の2語が上っただけである。そのうち「あっせん」は「あ
 っせん役」として用いられ、その語全体に「しるし」のついた

	中	高	計
読み	1	5	6
意味	9	6	15
計	10	11	21

ものが多いので、ここでは、まぜ書きの項へ入れた。

「めいてい」についた^ゐゐの数値は、前ページの表のようにになっている。

二 まぜ書きの漢語 (20語, もとのまま 1, 書きかえ 19)

複合語の場合、どこからがまぜ書きであるかの判定はむずかしい。片かな書きに入れた「キギョウ」(企業)は「中小キギョウ」として見れば、まぜ書きだし、本項に入れた「コリツ主義」は「コリツ」(孤立)だけ離せば片かな書きとなる。この調査では、この区別を語学的に考えず、^ゐゐのつけられた部分の範囲(「中小キギョウ」か「中小キギョウ」か)によって、読者の読字読語意識を判定し、その大勢にそってどちらかの判定を下すようにした。

		中	高			
①大小関係						
高校生における読みの抵抗がいくぶん目立つほかに は、著しい片よりは見えない。	読み	4 0 16				
		> = <				
		7 √	√ 14			
		4 ∥	∥ 2			
		9 ∧	∧ 4			
②語例（*はもとのまま）						
A……ドウマ声	B……投ユウ資	ユウゲキ手	ールイ手	意味		
ダンナ衆	コリツ主義	エン会	ぬい(縫)ジュクレン者	新ミツイ	フウシ的	はざかい期
こう着	大シンサイ	オザワエボウ	C……ヒョウ白	殺キン	カッ血	新女エン
ン*あっせん役	協ソウ曲					

ホ 漢字書きの和語 (15語 もとのまま 13, 書きかえ 2)

和語と漢語が複合してできた語については、その語の性質からどちらかに決定するということをせず、読みがむずかしかったと推測される部分が和語であるか漢語であるかによって判定した。「早場」「作付時期前」「見返資金」等の傍線部が問題の部分である。

①大小関係

全体に中学生のほうが多くの抵抗を示しているが、その落差は、意味の抵抗		において特にはなはだしい。また、中学生と高校生と	
読み	中	高	ではやや傾向がちがうよう で、中学生はどちらかといえ ば意味の抵抗のほうを大きく 感じ、高校生は、読みの抵抗
	9 2 4		
	> = <		
	5 √	√ 9	
意味	2 ∥	∥ 3	中 高 計 読み 2.0 1.4 3.4 意味 2.9 0.8 3.7
	8 ∧	∧ 3	
	> = <		
	13 1 1		

を、より大きく感じているようだ。抵抗の量では漢字書き漢語の場合とよく似前ページ右下の表のように、この15語に対して、中学生は平均約5人、高校生は約2人強でいてがしるしをつけている。

②語例（*はもとのまま）

B……*新株落 *届出済 思わく（活用語の語尾と判定されるものはかなで書くのが当然だから、こういうものはまぜ書きとは認めなかった） *挙る（これを「あがる」と読むのは音訓表にはずれている。これを見のがしたのは、書きかえる時のミスであった。）

C……*博打場 *早場 *食下り *出来秋 *作付時期前 *見返資金 *前渡金 大立者 *下向く *有難さ *面持

へ 片かな書きの和語（11語 もとのまま9，書きかえ2）

①大小関係

意味よりも読みが抵抗があるとする点では、中学生も高校生も区別がない。

中 高 しかし、そのような読みの抵抗を，中学生と高校生の
読み $\begin{matrix} 1 & 2 & 9 \\ > & = & < \end{matrix}$ どちらが多く感じるかという，それは，高校生のほ
 $\begin{matrix} 9 & \vee & & \vee & 9 \\ 1 & \parallel & & \parallel & 2 \end{matrix}$ うがずっと多く感じているようだ。
 $\begin{matrix} 2 & \wedge & & \wedge & 1 \end{matrix}$ しかし、この大小関係は，やや誇張されて出たよう
意味 $\begin{matrix} > & = & < \\ 3 & 7 & 2 \end{matrix}$ で、抵抗の量としては、右の

	中	高	計
読み	1.5	2.7	4.2
意味	1.2	0.8	2.0
計	2.7	3.5	6.2

ように、この11語に対して読みの抵抗を示した高校生が3人近くいるのがきわ立っているだけで、あとは差というほどの差でもない。

②語例（*はもとのまま）

B……ドロナワ *カオ C……*イザコザ *ノリ *マザマザ *ザット *ダメ *マシ *ハナシ *ズッと ヤケド

ト 平がな書きの和語（5語 もとのまま2，書きかえ3）

書きかえの方針として、和語のかな書きは平がなによったので、この形式に書きかえられた語の数はかなり多い。このテストの範囲内で、箇所数は258に達する。異語数は明らかにしてないが、200に近いであろう。その中で、ここに上った数が5であるから、抵抗の示された率は極めて低いと言わなければならない。

①大小関係

少数ながら、傾向として言えそうなのは、意味の抵抗を感じる中学生が一つの集中的存在をなしていることである。その数は15人中3.5人、あとはいずれも少数である。

中	高
読み	1 2 2 > = <
178	178
13	13
7	7
42	42
124	124
32	32

②語例(*はもとのまま)

B……かけねない C……ふなれ *はしり こい(濃) *ひとしお

チ まぜ書きの和語(5語 もとのまま1, 書きかえ4)

①大小関係 少数が分散して、傾向らしいものは見えない。

②語例(*はもとのまま)

B……強気すじ ミノ紙 C……*キメ手 かけ買い ツヤはだ

リ 片かな書きの固有名詞(198語, すべて書きかえ)

もとの記事の固有名詞が片かな書きされていた例はない。書きかえた箇所が338箇所あって、そのうち335箇所にしるしがつき、うち294箇所が度数4以上のものであることは前に述べたとおりである。その294箇所を異なり語にしたら198語になった。(ただし、語の認定は、ここにおいて、もっともアイマイである。)人名・地名が主で、その他が14箇所あるが、傾向はいずれも同じである。

① 大小関係

人名や地名に「意味」があると言うべきかどうか。あるとしても、一般の語の意味とは性質がちがうであろう。ここで、そのちがいを論ずることはしない。ただ、被験者の反応が、そのちがいをハッキリと示していることを指摘するにとどめる。

中学生も高校生も、圧倒的に読みの抵抗を示している。だいたい、「意味がわからない」と答えた被験者は、ほとんどいないのである。ただ地名・人名でない「リクトウサンリャク」(六韜三略)、「ソンシ」(孫子)の2語にだけ、意味の抵抗が大きかった。これは、たしかに知識の問題であって、読みかたの問題ではない。

読みの抵抗を示す度合は圧倒的に高校生のほうが高く、片かな書き漢字の場

合と同様である。198語に読みの抵抗を示した高校生の平均人数は、15人中5.3人で、中学生の3.4人を引き離している。

②語例は省略し、人名、地名、その他に分けて度数20以上の語だけを例示する。

人名 リキドウザン アズマフジ ムトウ・ウンジュウロウ ヨロズヤ・ヘイシロウ

地名 シノツ・デイトン（地） コウベクマガイドウリ

その他 リクトウサンリャク ソンシ オオサカマチブギョウ

有名・無名、既知・未知などによって、読みにくさに違いがあるかと思ったが、それは、このテストでは判定できなかった。

又 片かな書きの外来語（21語 すべてもとのまま）

人名や地名でも、西洋（日本と中国以外）のものは、ここでは外来語として扱った。本来、漢字では書けない語という意味である。

①大小関係

	中	高	どちらの抵抗についても、中学生が多く抵抗を示し
読み	12 4 5 > = <		ており、中高どちらにおいても、意味の抵抗が大きい。
	3 V	V 2	つまり、中学生の中での意味の抵抗が、もっとも顕著
	6	8	
	12 ∧	∧ 11	だということである。中学生15人中3人強が「意味が
意味	> = < 11 4 6		わからない」と答えている。

②語例（すべてもとのままだから、しるしはつけない）

A……シンパ B……モデルプラント リベラル パロメーター エキジビション
C……スタンドバー ガット グルンベルグ タイト ルーズ ルポ ポスト タフト
サロン イージ メータク（これは「メータ7」とミスプリントされていたのを調査現場で訂正した） バックス サークル カクテルパーティ モンブラン トライ

外来語は片かなで書くのがふつうだから、事実、読みの抵抗を感じないのか、または、「外来語だからこう書くよりしかたがない」という常識的・知的判断がはたらいてこの結果になったのか、どちらかだろうと考えられるが、どちらであるかはわからない。いずれにしても、ここでの問題は、「読みにくさ」ではなくて知識の程度である。

(vii) まとめ

今回の被験者に関するかぎり、もっとも顕著なのは、漢語と固有名詞を片かな書きにしたものが、きわめてはげしい抵抗を受け、ほとんど総スキャンをくったことである。しかし、これは表面的な事実であって、しさいに見れば、中学生と高校生の間に、反応のちがいが認められ、中学生は高校生ほどに読みの抵抗を示していない。これには、漢字の知識の多少と、現代の標準的表記法による文章の読書経験の多少とが、要因としてはたらいっていることは明らかだ。

そうであれば、この結果は、今回の被験者に限ったことではないであろう。おそらく、義務教育終了程度の読者と、それ以上の教育を受けた読者との間でこのような相違が見られるのではないかと思われる。だから、新聞が、どの程度の読者を予想するかによって、この問題に対する考えかたは変わってくる。

もし現状のままで、いっそう言いかえ・書きかえを押しすすめるならば、いちばん抵抗のすくない道は、和語の平かな書きを広範囲に採用することであろう。

漢字の問題はどうか。さきに、漢字書き漢語への抵抗も箇所数はきわめて大きい、度数で見ると、大部分が散発に終わっていることを述べた。それはどうしてだったか。上の考察でわかったように、抵抗の度数4以上の漢字書き漢語は、多く中学生にきらわれたものである。その傾向がいっそう強くあらわれているのが度数3以下のもので、そのほとんど全部が中学生によってしるしをつけられたものである。この事情は、高校生が片かな書きの漢語や固有名詞を目的かたきにしてしるしをつけたのとは全く性質の違ったものである。意識や慣れの問題ではなくて、能力の問題である。そう考えると、これは非常に正直な結果であり、「度数が少ない」「被験者の1割以下がしるしをつけたにすぎない」としてほうむり去れない大きな問題として、再びうかび上がってくるのである。

(viii) 付録：書きかえてしるしがつかなかったのはどんな語か

第4表に、書きかえてしるしがつかなかった箇所数を示したが、これを異語表にして、次にかかげる。()内がもとの語である。

①漢字書き漢語(47語)

【漢語からの書きかえ】 以後（以降） 衣服（被服） 運転（操縦） 永久（恒久）
快調（好調） 活動（活躍） 関係大臣（閣僚） 近海（沿海） 計算（勘定） 快心
（覚悟） 決定（方針） 合同（合併） 高評（好評） 国務大臣（閣僚） 五分（五
角） 根本的（抜本的） 今夜（今晚） 最高（頂点） 市外（近郊） 事故（故障）
実行（実施） 借金（借款） 重大（深刻） 重病（重症） 上成績（好成绩） 心配
（憂慮） 席（座席） 善戦（健闘） 全体（全般） 大臣（閣僚） 態度（方針）
短編（短篇） 注（註） 中心（焦点） 中年（年輩） 土台（基礎） 納得（了承）
何百（幾百） 配合（配剤） 批評（批判） 豊作不作（豊凶） 保健（医療） 未解
決（懸案） 役所（官庁） 様子（模様） 予定（段取り） 余分（余剰、超過） 両
方（双方） 老人（高齢者）

【和語からの書きかえ】 今度（此の度） 非常に（極めて） 比率（割）

②片かな書き漢語（1語）

ダンナ（旦那）

③平かな書き漢語（9語）

【漢語からの書きかえ】 もけい（模型） もよう（模様） やしき（屋敷） いくぶ
ん（若干） いっしょ（一緒） いっぱい（一杯） ご（御） そうぞうしく（騒々し
く）

【和語からの書きかえ】 もちろん（固より）

④なぜ書き漢語（3語）

けが人（負傷者） ご飯（御飯） 連サイ（連載）

⑤漢字書き和語（44語）

【漢語からの書きかえ】 体言……色（色彩） 差引（控除） 出来高（収穫高） 年
（年齢） 取れ高（収穫） 港（港湾） 遊び（遊戯） 〔自由〕 売り（〔自由〕 財売）
金入れ（財布） 戦い（闘争） 取り入れ（収穫） 荷造（包装） 話し合い（交渉）
用言……上がる（上昇） 当てる（充当） 生れる（誕生） 送る（派遣） 行う（実
施） 栄える（繁栄） 少なくする（緩和） 助ける（援助） 達する（到達） 続け
て～（継続～） 取り決める（締結） 取りやめる（撤回） 話し合う（懇談） 引き
受ける（受諾） 交わる（交錯） 求む（募集） 分れる（分裂） 勇ましい（壮烈
な） 多く（沢山） 強く（痛切に） 豊かな（豊麗な）

【和語からの書きかえ】 体言……目（眼） 用言……入れて（入って） 思う（想う）
戦う（闘う） 使う（操ふ） 突く（衝く） 作られる（創られる） その他……少し
（僅か） 速く（速かに） 最も（極く）

⑥片かな書き和語（1語）

ババア（婆ア）

⑦平かな書き和語（133語）

【漢語からの書きかえ】 体言……おおも（根源） おそれ（危険性） きっかけ（契
機） さしず（指揮） なまけ（怠慢） はじめ（冒頭） はらいた（腹痛） ふるさ

と(故郷) めくら(盲目) めくらの～(盲～) よごれ(汚物) 用言……いたたく(頂戴) うながす(促進) おくりたたえられる(贈与) こわす(破壊) さげぶ(絶叫) しずむ(沈没) しみとおる(浸透) すずめる(促進) つく(到着) のった(所載) はげしくなる(激化) はげしくふえる(激増) はっきりとする(明瞭だ) はらいのける(一掃) ぶつかる(衝突) ほめる(礼賛) もぐりこむ(潜入) もつ(負担) ゆきわたる(普及) よぶ(呼称) よろこんでむかえる(歓迎) あやしい～(怪～) あぶない(危険な) くわしい(詳細) はげしい(猛烈な) ひっきりなし(殺到) その他……ある(某)

【和語からの書きかえ】 体言……あおい(葵) あと(跡) おとめ(乙女) おりばこ(折箱) かたすみ(片すみ) からだ(体) かれ(彼) くだもの(果物) くもり(曇) けむ(煙) さかり(盛り) しわ(皺) すがた(姿) なみ(普) なみだ(涙) はげ(禿) はだ(肌) はらいもどし(払戻) ひざ(膝) ひとり(一人) ふみきり(踏切) ほど(程) まち(街) まま(儘) みなさま(皆様) むかし(昔) めぐみ(恵み) ゆくえ(行方) わかはだ(若肌) ～わり(～割) わりあい(割合) わりあて(割当) 用言……あたえる(与える) あらす(荒らす) いたす(致す) うながす(促す) うばう(奪う) えがく(描く) おくれる(遅れる) おす(押す) おどろく(驚く) おる(居る) かかえる(抱える) きこむ(着込む) きざむ(刻む) くるう(狂う) こえる(越える) こまる(困る) さそう(誘う) [努力]する([努力を]傾ける) しめる(占める) すてる(捨てる) すわれる(座れる) すむ(澄む) せまる(迫る) たずねる(訪れる) たたかう(闘う) ただよわせる(漂せる) たのむ(頼む) ちがう(違う) つかれる(疲れる) つく(笑く) つくす(尽す) つどう(集う) こともできる(途もある) なく(泣く) なやむ(悩む) にごる(濁る) のがす(逃す) はいる(入る) ひびく(響く) ふとる(肥る) ふるう(振う) まく(巻く) まぬがれる(免れる) むかえる(迎える) やる(遣る) ゆられる(揺られる) わたる(渡る) わらう(笑う) あざやか(鮮やか) あらあらしい(荒々しい) うすい(薄) おめでとう(お目出度う) おもしろい(面白い) きびしい(厳しい) せまくて(手狭で) なごやか(和やか) みにくい(醜い) むずかしい(難しい) めずらしい(珍らしい) わかい(若い) その他……あらかじめ(予め) すなわち(即ち) その(其の)

⑧まぜ書き和語(29語)

【漢語からの書きかえ】 わが家(自宅) 色どり(色彩) 取りきめ(契約) 引きあげ(撤退) おし出す(排出)

【和語からの書きかえ】 赤ちゃん(赤ん坊) 鼻すじ(鼻筋) 私たち(私達) うす毛(薄毛) かた手(片手) か女(彼女) しめ切(メ切) はだか妻(裸妻) まどロ(窓口) まる顔(丸顔) みな殺し(皆殺し) 居ねむり(居眠り) 売りわたす(売り渡す) 追いこみ(追い込み) 大づめ(大詰め) 男まさり(男勝り)

引きあげ（引揚げ） 見こむ（見込む） 申しこむ（申込む） 持ちこす（持ち越す）
物ずき（物好き） おそれ入る（恐入る） もり上る（盛上る） わり増し（割増し）

⑨片かな固有名詞（4語）

ウエノ（上野） ダイエイ（大映） ダイチン島（大陳島） おロク（おろくー）

⑩片かな外来語（5語）

クラブ（倶楽部） パーセント（割） パーメイ（八妹） ビストル（短銃） 南フ
ランス（南仏）

⑪連語（13例）

あけましておめでとうございます（謹賀新年） アメリカへわたる（渡米） こわが
っている気持（恐怖感） 死者やけが人（死傷者） 下の部分（下層） 神経質になり
過ぎ（神経過敏になって） 第1位をしめている（横綱だ） 年をとった（年齢が高
い） においの感覚（嗅覚） 古くなって役にたたなくなった（老朽） まゆの出来高
（収蚕量） 村の各農家（農村の末端） 最も先に行われる（最優先となる）

(2) 継続調査

オフサルモグラフによる実験を数回重ねたところに、各被験者に、実験新聞の
表記法に対する感想をたずねた。質問が整備されていなかったのも、その結果
は、数量にあらわせるようなものにはなっていないが、大要は次のようであっ
た。

片かな書き一般については、「読みにくい」と答えたのが大部分で、中学生
と大学生の各1人が、「読みにくくない」と答えた。また、もう1人の大学生
は、「片かなが長く連続する場合」という条件をつけて、「読みにくい」と答
えている。その大学生は、同じ片かなでも、固有名詞は読みにくくなく、同音
異語のある漢語の場合が読みにくいのだと、つつこんで答えた。また1人の高
校生は、一応読みにくい「それほどでもない」と答え、特に固有名詞の場合
は読みにくい、漢語はそれほどでないとつけ加えた。

固有名詞の片かな書きと漢語の片かな書きは、このように、人によって、そ
のすききらいの状況がくい違っているが、概して、固有名詞のほうを読みにく
いとした答えのほうが多かった。これを「読みにくくない」と言ったのは、15
人中4人であった。漢語の片かな書きを「読みにくくない」と答えたのは、同
じく4人だが、ほかに、「それほど読みにくくない」と言ったのが3人あるか
ら、結局、これを完全に「読みにくい」と断じたのは15人中8人ということに

なる。その8人は中・高・大に散在している。

まず書きについては、一部にだけたずねたが、その範囲内では、すべて「読みにくい」と答えた。

このような表記に慣れてきたかどうかについては、何とも答えかねたのが5人、「少しは」「いくぶん」慣れてきたと答えたのが6人、はっきり「慣れた」「慣れない」と答えたのが、同じく2人ずつであった。(慣れた2人は中学生、慣れない2人は高校生、上へいくほど、返事はアイマイになるようであった。)

現行の新聞の表記には、どういう感想をもっているかという、6人が「あの程度が読みやすい」と言っている。(そのうち3人が中学生であるのは、やや意外であったが、別の1人の中学生は「漢字が多すぎる」と答えた。1人の大学生も、そう答えている。この2人は、さきに、片かな書き一般を「読みにくくない」と答えた人たちである。また、いま1人の大学生は「第1面に漢字が多すぎる」と言った。この人は、片かな書きについても、「未知の語は特に読みにくい」という注をつけていた。他の人は、可もなし不可もなし、アイマイであった。

3. 実験文章の眼球運動の観察と分析

(1) 眼球運動に現れた客観的な「読みやすさ」の因子分析

オフサルモグラフによって記録された被験者の読解行動のなめらかさを、客観的な「読みやすさ」と考えた場合、それと、実験文章の構成要素とは、どのような因果関係にあるか、これについて分析した結果を以下に述べる。

1a から 5d までの13個の文章について、(イ)語いの基本度、(ロ)漢字の含有率、^(注)(ハ)文の長さの平均を測り、(イ)については、基本度の高い順に、(ロ)については、含有率の低い順に、(ハ)については、短い順に、それぞれ13個の文章を順位づけた。また、被験者の眼球運動の、(ニ)100字あたり平均停留数、(ホ)同じく逆行数、(ヘ)単位時間(1秒)あたり平均読字数、(ト)同じく読語数を取りあげ、(ニ)(ホ)につ

(注) 語いの基本度とは、実験文章の助詞・助動詞を除く全語いの中に、基本的な語いがどれだけ含まれているかの百分比である。基本的な語いは、便宜上、国際文化振興会『日本語基本語彙』(昭和19年)に載っているものとした。

第6表

読みの抵抗（読みやすさ）の条件と読み手の反応との関係 1

実験 文章	読み手の反応					読みやすさの条件				各要因間の 順位相関係 数						
	P 読字数 1秒当り	Q 読語数 2秒当り	R 停留数 100字当り	S 逆行数 100字当り	X 語い基本度 %	Y 漢字含有率 %	Z 文の長さ (字数)									
4a 新婚列車	1	10.8	1	3.0	5	33.9	1	1.3	3	69.57	7	28.57	4	43.4	PQ	.352
5d 半健康	2	10.5	3	2.9	1	31.5	2	1.6	1	85.58	1	14.22	7	51.0	PR	.887
4b 花たば	3	10.3	6.5	2.7	2	32.4	4	2.1	2	74.58	2	15.74	3	42.8	PS	.776
3ab デ杯監督	4	9.9	8.5	2.6	3.5	33.5	7	2.5	5	51.77	3	17.33	8	59.9	QR	.208
1b 新映画 (書替文)	5	9.4	10.5	2.4	3.5	33.5	9	2.7	8	42.59	5	25.70	2	37.8	QS	.460
5c ムナグロチド リ	6	9.3	13	2.2	7	37.6	7	2.5	4	65.75	4	23.53	6	47.6	RS	.623
5b スナカワ	7	8.7	3	2.4	8	38.5	7	2.5	6	48.81	9	37.05	12	112.5	PX	.872
5a カジミール	8	8.3	10.5	2.9	10	39.3	4	2.1	11	37.50	6	27.27	5	46.5	PY	.769
2b 新映画(原文)	9.5	8.2	3	2.7	6	36.2	4	2.7	10	39.62	12	49.38	1	32.0	PZ	.507
2a 日印文化セン ター(書替文)	9.5	8.2	6.5	2.8	9	38.9	12	3.0	9	42.31	10	38.56	11	79.3	QX	.631
1a 日印文化セン ター(原文)	11	8.0	5	2.8	12	41.8	10	2.8	7	43.59	11	48.61	10	72.0	QY	.163
4d 人身売買	12	7.8	8.5	2.6	11	40.8	11	2.9	12	33.78	13	56.87	9	71.3	QZ	.120
4c 病毒血	13	7.1	12	2.3	13	42.4	13	3.5	13	31.88	8	32.49	13	200.0	PX	.773
															RY	.727
															RZ	.617
															SX	.648
															SY	.484
															SZ	.654

いては、数の少ない順に、(ト)(ト)については、数の多い順に、それぞれ13個の文章を順位づけた。

そして、(イ) (ロ) (ハ) のそれぞれの順位づけと、(ニ) (ホ) (ヘ) (ト) のそれぞれの順位づけとの相互の間の順位相関係数を算出したら、第6表のようになった。

この表から言えることは、要約すると、次のとおりである。

(i) 語いの基本度は、眼球運動の停留・逆行数、および読字・読語数との相関が、他の場合よりも非常に高い。停留数、読字数、読語数は、いずれも第1位、逆行数は、わずか0.06の差で第2位となっている。これは、語いの基本度が高ければ高いほど、読者は、その文章を速く、かつなめらかに読むことができることを示している。

(ii) 漢字の含有率は、停留数および読字数との相関は高いが、逆行数と読語数との相関は低い。もっとも、読語数との相関がないのは、文の長さの場合も同様である。これは、読語数のほんのわずかの差（1位と最下位との差が、わずかに0.8語）が、その順位に影響しているため、と考えられる。

(iii) 文の長さも、客観的な「読みやすさ」との相関が、比較的高い。

(iv) 結論 客観的な「読みやすさ」を規定する最も重要な因子は、語いの基本度である。これは、のちに述べる主観的な「読みやすさ」の因子分析の場合にも共通している。（主観的な「読みやすさ」と語いの基本度との相関は、0.738で、非常に高い。）（176 ページ参照）これは、文章の中に含まれる語いの「親近性」(familiarity) の分析から「読みやすさ」(readability) の問題を解明しようとする外国の研究者（たとえば、E. Dale）の方法が、日本語の場合もおそらく妥当であることをものがたっている、ということができる。

(2) 主観的な「読みやすさ」と客観的な「読みやすさ」とは一致するかどうか、その因子分析

わたしたちが、文章を読む際に常を感じる主観的な「読みやすさ」「読みにくさ」の印象は、具体的にどのような因子を有しているのだろうか。

それは、(i) 客観的なデータとしての文章のどのような構成要素と因果関係があるのだろうか。またそれは、(ii) オフサルモグラフや理解テストなどによって客観的にとらえられた読者（被験者）の読解行動と、どのような因果関係

があるのだろうか。(iii) そのようなところから、「読みやすさ」「読みにくさ」に関する読者（被験者）の主観的な印象は、「読みやすさ」に関する尺度として、どれだけ信頼してよいものだろうか。このような点について、まとめた結果を以下にのべる。

オフサルモグラフの実験に使用した18の文章のうち、8個の文章について、それぞれの実験終了直後、「今の実験文章は、読みやすかったか、読みにくかったか。」の質問を全被験者に発し、

「読みやすかったもの」には ○印

「読みにくかったもの」には ×印

「どちらともいえないもの」には △印 を付してもらった。その回答を集計、整理し、実験の日付順に配列したのが、第7表である。

第7表

順位	実験文章	○(読みやすい)		△(どちらともいえない)		×(読みにくい)		合 計		読みやすさの自覚度 %
		実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	
2	新婚列車	14	93.3	0	0	1	6.7	15	100.0	93.3
1	花たば	14	93.3	1	6.7	0	0	15	100.0	96.7
8	病毒血	1	6.7	1	6.7	13	86.7	15	100.0	10.0
7	人身売買	5	33.3	1	6.7	9	60.0	15	100.0	36.7
6	カンミール	7	50.0	0	0	7	50.0	14	100.0	50.0
3	スナガワ	12	85.7	0	0	2	14.3	14	100.0	85.7
4	ムナグロチドリ	11	78.6	1	7.1	2	14.3	14	100.0	82.1
5	半健康	10	71.4	0	0	4	28.6	14	100.0	71.4

(注) 右端「読みやすさの自覚度」は、○に2点、△に1点、×に0点を与えて点数化したものを%に換算した数値。これを主観的「読みやすさ」の尺度とした。

他方、この8個の文章について、その構成要素として、(イ) 語いの基本度、(ロ) 漢字の含有率、(ハ) 文の長さを取りあげ、(イ)については、基本度の高い順に、(ロ)については、含有率の低い順に、(ハ)については、短い順に、おのおの8個の文章を順位づけた。また、客観的にとらえた被験者の読解行動のデータとして、(ニ) 理解テストによってとらえた被験者の文章の内容理解度、(ホ) オフ

サルモグラフによってとらえられた被験者の眼球運動の100字あたり平均停留数、(ㄱ)同じく逆行数、(ㄴ)単位時間(1秒)あたりの平均読字数、(ㄷ)同じく読語数をとりあげ、(ㄹ)については、理解度の高い順に、(ㄺ)と(ㄻ)については、数の少ない順に、(ㄽ)と(ㄿ)については、数の多い順に、おのおの8個の文章を順位づけた。

以上、客観的なデータに基づく8種類の順位づけと、前にのべた主観的な「読みやすさ」(表の中では、「読みやすさの自覚度」として数量化した)の順位づけとの順位相関係数を算出したら、第8表のようになった。

この表からいえることをまとめると、次のようになる。

- (i) 主観的な「読みやすさ」の順位は、読字数(1秒あたり)との順位相関が、きわめて高い。このことは、被験者(読者)が、ある文章を速く読み進むことができる、すなわち、文章の「字づら」を速く追うことができる場合、被験者(読者)は、主観的にその文章を「読みやすい」と感じ、逆の場合は、「読みにくい」と感じていることを示す。
- (ii) 主観的な「読みやすさ」と1秒あたりの読語数との順位相関は、読字数ほどは高くない。このことは、語を速く読みとることよりも、字を速く読みとることのほうが、主観的な「読みやすさ」「読みにくさ」の印象に大きく作用していることを物語る。
- (iii) 主観的な「読みやすさ」は、語いの基本度との相関が高い。このことは、被験者が、文章を構成する語いが基本的なものであればあるほど、その文章を主観的に「読みやすい」と感じていることを示す。
- (iv) 主観的な「読みやすさ」は、理解度との相関も高い。このことは、被験者が、その内容をよく理解できる文章ほど、主観的に「読みやすい」と感じていることを示す。
- (v) 文の長さとの相関から、被験者は、文の長さの短いものほど、主観的に「読みやすい」と感じていることがわかる。
- (vi) 眼球運動の停留数、逆行数との相関が高いことから、被験者が、ある文章をスラスラと読んでいける場合、すなわち、生理的に抵抗の少ない場合彼らは、その文章を主観的に「読みやすい」と感じていることがわかる。

第8表

読みの抵抗（読みやすさ）の条件と読み手の反応との関係 2

実験文章	読み手の反応					読みやすさの条件												
	意識的反応		無意識的反応															
	読みやすさ の自覚度	読字数 1秒当り	読語数 1秒当り	停留数 100字当り	逆行数 100字当り	理解度	語いの基本 度%	漢字含有率 %	文の長さ (字数)									
花たば	1	96.7	3	10.3	4	2.7	2	32.4	3.5	2.1	2	86.7	2	74.6	2	15.7	1	42.8
新婚列車	2	93.3	1	10.8	1	3.0	3	33.9	1	1.3	1	93.3	3	69.6	5	28.6	2	43.4
スナカワ	3	85.7	5	8.7	2.5	2.9	5	38.5	5.5	2.5	4.5	73.3	5	48.8	7	37.1	7	112.5
ムナグロチ ドリ	4	82.1	4	9.3	8	2.2	4	37.6	5.5	2.5	4.5	73.3	4	65.8	3	23.5	4	47.6
半健康	5	71.4	2	10.5	2.5	2.9	1	31.5	2	1.6	6	66.7	1	85.6	1	14.2	5	51.0
カシミール	6	50.0	6	8.3	6	2.4	6	39.3	3.5	2.1	7	46.7	6	37.5	4	27.3	3	46.4
人身売買	7	36.7	7	7.8	5	2.6	7	40.8	7	2.9	3	80.0	7	33.8	8	56.9	6	71.3
病毒血	8	10.0	8	7.1	7	2.3	8	42.4	8	3.5	8	13.3	8	31.9	9	32.5	8	200.0
読みやすさの自覚度との 間の順位相関係数																		
	1	.786	7	.554	25	.738	6	.678	4	.714	2.5	.738	8	.381	5	.691		

(vii) 文章の漢字の含有率は、「読みやすさ」の印象とは相関がない。このことは、文章の中に含まれる漢字の多少は、主観的な「読みやすさ」「読みにくさ」の印象と因果関係がないことを示すもので、ちょっと意外な結果であるが、よく考えると、このことは、この8個の文章に現れた漢字の種類程度では、文章の「読みやすさ」の客観的尺度とはなり得ないことを示す。すなわち、漢字の含有率の多少によって、「読みやすさ」を考える場合は、機械的に含有率を算出するのではなくて、その漢字が、どんな性質（難易の段階）の漢字であるかの観点から、文章に含まれている漢字の質的な層別が必要であることを示す。

(viii) 結論 以上の記述から、すでに了解されたわけであるが、「読みやすさ」「読みにくさ」に関する読者（被験者）の主観的な印象は、「読みやすさ」「読みにくさ」の客観的な尺度と考えられているものと、相関がきわめて高い。このことは、「読みやすさ」「読みにくさ」に対する読者の主観的印象が、相当の信頼性を有するものであり、それは、あなたがち「主観的」の名において、しりぞけ得ないものであることを示す。

(3) 原文と書きかえ文との「読みやすさ」の比較

原文と書きかえ文とは、どちらが読みやすいかを、オフサルモグラフの実験によって判定する場合、その判定の基準は、5つある。

- (i) 文章全体を読み終えるのに必要とした時間の多少。
- (ii) 単位時間あたりの平均読字数の多少。
- (iii) 単位時間あたりの平均読語数の多少。
- (iv) 100字あたりの平均停留数の多少。
- (v) 100字あたりの平均逆行数の多少。

以上、5つのデータを整理することによって、原文と書きかえ文と、どちらが読みやすいかを、客観的に判定できる。以下、各項目別に実験の結果を集計整理する。

(i) 文章全体を読み終えるのに、どちらが時間を多く必要としたか。

実験文章、「日印文化センター」（原文1a、書きかえ文2a）の場合は、第9表のとおりである。（全被験者が、1aを先に、2aをあとに読んだ。）

第9表

読了時間の比較(「日印文化センター」の場合)

被験者 No	原文 (1a)	書きかえ文 (2a)
01	26	< 34
02	—	—
03	26	< 35
04	20	< 35
05	45	> 39
06	16	< 20
07	19	> 16
08	34	> 25
09	23	= 23
10	46	> 38
11	43	= 43
12	32	< 42
13	36	> 34
14	24	= 24
15	30	> 26
合計	420	434
平均	30.0	< 31.0

(例) 単位は秒, <, >は数字の大小関係を示す。

実験文章, 「新映画」(原文 2b, 書きかえ文 1b)の場合は, 第10表のとおりである。(全被験者が1bを先に, 2bをあとに読んだ。)

この表から言えることは, 次のとおりである。

- (a) あとに読んだ原文を速く読み終えた者は9名。平均では2.4秒速い。すなわち, 学習効果をぬきにすれば, この数は, もっと少なくなるかも知れない。
- (b) 先に読んだ書きかえ文を速く読み終えた者は5名。すなわち, 学習効果を考慮に入れば, この数は, もっと増

この表からいえることは, 次のとおりである。

- (a) 原文を先に読んで, なおかつ, 書きかえ文より速く読み終えた者が5名。逆にいえば, 書きかえ文をあとに読んでも(学習効果がプラスされている), なおかつ, 書きかえ文を読むのに時間が多くかかった者が5名, ということになる。
- (b) 原文を先に読んでも, あとに読んだ書きかえ文と読了時間が同じであった者が3名。
- (c) 以上の事実から, 全被験者(14名)のうち, 8名(57.14%)は, 原文を先に読んでも, なおかつ速く, または同じ時間で読み終えている。この限りでは, 原文は, 書きかえ文より読みやすい。と

判定できる。全被験者の平均でも, 原文のほうが1秒速い。

第10表

読了時間の比較(「新映画」の場合)

被験者 No.	書きかえ文 (1b)	原文 (2b)
01	17.7 <	18.2
02	—	—
03	19.4 >	16.3
04	17.2 <	19.0
05	30.9 >	27.4
06	13.6 <	14.1
07	13.8 >	12.9
08	18.5 >	16.3
09	16.1 >	15.2
10	31.3 >	24.2
11	26.8 <	30.4
12	33.8 >	21.4
13	35.3 >	26.0
14	20.1 <	21.5
15	23.1 >	21.3
合計	317.6	284.2
平均	22.7 >	20.3

第11表

平均読字数の比較(「日印文化センター」の場合)

被験者 No.	原文 (1a)	書きかえ文 (2a)
01	8.3	> 6.9
02	—	—
03	8.3	> 6.7
04	10.8	> 6.7
05	4.8	< 6.1
06	13.5	> 11.8
07	11.4	< 14.8
08	6.4	< 9.4
09	9.4	< 10.0
10	4.7	< 6.2
11	5.0	< 5.5
12	6.8	> 5.6
13	6.0	< 6.9
14	9.0	< 9.8
15	7.2	< 9.1
合計	111.6	122.9
平均	8.0	< 8.2

が多かった者が5名。書きかえ文のほうが多かった者が9名。

- (b) このことから、書きかえ文のほうが原文より単位時間に読みとる字数は多い。平均では、0.2字多い。これは、次の「新映画」の場合も同じ。というよりも、この傾向はことに著しい。平均では、書きかえ文のほうが、1.1字も多い。(第12表参照)

(iii) 単位時間あたりの平均読語数

それでは、単位時間あたりの平均読語数は、どうであろうか。原文、書きかえ文の総語数を、おのおの同一の原則で算出し、さらに1秒あたりの

すかもしれない。

- (c) 以上のことから、「新映画」の場合
は、書きかえ文は、原文より読みやすいとも断定できないし、逆に読みにくいとも断定できない。

(ii) 単位時間あたりの平均読字数

書きかえ文と原文とを読んで、被験者は、どちらの文章の場合、単位時間(1秒)に、より多くの字数を読みとったであろうか。

「日印文化センター」(原文を先に読んだ)の場合は、第11表のとおりである。

この表から、次のことが言える。

- (a) 単位時間あたりの平均読字数が、書きかえ文よりも原文のほうが

第12表

平均読字数の比較(「新映画」の場合)

被験者 No.	書きかえ文 (1b)	原文 (2b)
01	10.6	> 7.3
02	—	—
03	9.7	< 10.0
04	11.0	> 8.4
05	6.1	> 5.9
06	13.9	> 11.4
07	13.7	> 12.3
08	11.5	> 10.0
09	11.6	> 10.1
10	7.5	> 6.7
11	7.0	> 5.3
12	5.6	< 7.6
13	5.4	< 6.2
14	9.4	> 7.3
15	8.2	> 7.6
合計	131.2	116.1
平均	9.4	> 8.3

平均読語数を算出した。結果は、第13表のとおりである。

この表から言えることは、次の2つである。

(a) 「日印文化センター」については、原文を先に読んで、なおかつ書きかえ文よりも読語数の多い者と等しい者は、計7名。平均では、原文が0.1語だけ多い。これは、原文をあとに読んだ場合、学習効果が当然プラスされるので、書きかえ文（あとに読んで7名）の場合よりも増すことを意味する。したがって、「日印文化センター」については、原文のほうが、学習効果をぬぎにしても、平均読語数は多いと考えられる。

(b) 新映画の場合は、あとに読んだ原文のほうが、14名中12名で、圧倒的に多い。平均では0.5語多い。しかし、これには、学習効果がプラスされているのだから、もし学習効果をぬぎにして考えれば、原文のほうが少なくなるかもしれない。したがって、「新映画」の

第13表
平均読語数の比較

被験者 No.	日印文化センター		新映画	
	原文	書きかえ文	書きかえ文	原文
01	2.9	> 2.3	2.7	< 3.0
02	—	—	—	—
03	2.9	> 2.4	2.5	< 3.4
04	3.8	> 2.2	2.8	= 2.8
05	1.7	< 2.0	1.6	< 2.0
06	4.8	> 3.9	3.6	< 3.9
07	4.0	< 4.9	3.5	< 4.2
08	2.2	< 3.1	2.6	< 3.4
09	3.3	> 3.4	3.0	< 3.6
10	1.7	< 2.1	1.5	< 2.3
11	1.8	= 1.8	1.8	= 1.8
12	2.4	> 1.9	1.4	< 2.6
13	2.1	< 2.3	1.4	< 2.1
14	3.2	< 3.3	2.4	< 2.5
15	2.5	< 3.0	2.1	< 2.6
合計	39.3	40.8	32.9	42.8
平均	2.8	> 2.7	2.4	< 2.9

第14表
平均停留数(100字あたり)の比較

被験者 No.	日印文化センター		新映画	
	原文	書きかえ文	書きかえ文	原文
01	39.5	< 45.5	33.5	< 34.5
02	—	—	—	—
03	34.6	< 43.1	30.8	< 31.4
04	28.3	< 36.8	22.8	< 33.3
05	65.4	> 50.6	52.7	< 53.1
06	25.9	< 30.0	19.9	< 30.5
07	25.0	< 31.5	19.8	< 23.7
08	45.6	> 36.4	29.6	> 29.4
09	37.7	> 30.4	28.0	< 31.1
10	57.4	> 41.5	43.4	> 39.5
11	56.0	> 55.3	37.4	< 50.8
12	—	—	—	—
13	45.6	> 38.7	46.2	> 44.1
14	32.9	> 27.7	30.6	> 23.0
15	49.1	> 37.9	40.3	< 46.3
合計	543.0	505.4	435.0	470.7
平均	41.8	> 38.9	33.5	< 36.2

場合は、いずれの平均読語数が多いか、少ないかは、この結果からだけでは、断定できない。

(iv) 100字あたりの平均停留数は、どちらが少ないか。

単位字数(100字)に対する眼球運動の平均停留数は、第14表のように集計・整理された。

この表から言えることは次の2つである。

(a) 「日印文化センター」の場合、書きかえ文をあとに読んで、停留数の少ない者は、全体(13名)のうち、8名。平均では、書きかえ文のほうが、2.9少ない。しかし、これには学習効果がプラスされているから、もし学習効果をぬきにして考えれば、この数は、もっと多くなるかもしれない。したがって、学習効果をぬきにして考えると、原文、書きかえ文、いずれの文章のほうが、停留数が少ないかは、断定できない。

(b) しかし、「新映画」の場合
は、学習効果をぬきにしても
先に読んだ書きかえ文のほう
の停留数が、圧倒的に少ない。
平均で2.7少ない。

(v) 100字あたりの平均逆行数は
どちらが少なかったか。

眼球運動の逆行は、読書行動の、いわば不適応現象ともいうべきものである。原文と書きかえ文とでは、この逆行が、どちらが少なかっただろうか。集計の結果を整理すると、第15表のとおりである。

この表から言えることは、次の2つである。

(a) 「日印文化センター」の場合、学習効果をぬきにして

第15表

平均逆行数(100字あたり)の比較

被験者 No.	日印文化センター		新映画	
	原文	書きかえ文	書きかえ文	原文
01	3.5<	5.5	1.9<	2.3
02	—	—	—	—
03	1.9<	4.3	1.6>	0.6
04	2.4<	4.0	1.5<	2.8
05	4.8>	2.8	6.0>	2.3
06	0.4=	0.4	0<	0.6
07	3.3<	5.5	1.6<	2.3
08	1.3>	1.2	1 >	0
09	2.6>	1.2	1.6<	1.7
10	7.0>	3.2	3.8>	2.8
11	3.3<	4.7	1.5>	4.0
12	—	—	—	—
13	2.2>	0.8	3.9>	2.8
14	1.3<	1.6	1.9>	1.3
15	2.8<	3.6	2.9<	3.4
合計	36.8	38.8	29.2	26.9
平均	2.8<	3.0	2.2>	2.1

も、原文の平均逆行数のほうが少ない。平均で 0.2 少ない。

- (b) 「新映画」の場合は、学習効果をぬきにすれば、逆に、書きかえ文の平均逆行数のほうが、原文の平均逆行数より少ない、と断定できる。平均では、原文のほうが、0.1 だけ多いにすぎない。

(vi) 結論

- (a) 読了時間からみると、原文のほうが書きかえ文よりも速く読み終えるという傾向がある。(原文のほうが読みやすい。)
- (b) 単位時間あたりの読字数からみると、書きかえ文のほうが原文よりも速く読み進むことができるという傾向がある。(書きかえ文のほうが読みやすい。)
- (c) 単位時間あたりの読語数は、原文のほうが書きかえ文よりも、多い傾向がある。(原文のほうが読みやすい。)
- (d) 単位時間あたりの停留数は、書きかえ文のほうが原文よりも少ない傾向がある。(書きかえ文のほうが読みやすい。)
- (e) 単位時間あたりの逆行数からは、どちらが読みやすいとも断定できない。
- (f) 以上を総合すると、次のように結論することができる。すなわち、「書きかえ文のほうが、原文よりも、速く、なめらかに読み進むことができる。しかし、全文を読了するに要する時間としては、書きかえにあって伸びただけをカバーすることは必ずしもできない。」
- (4) 特殊の語を片かな書きにしたものと、平かな書きにしたものとの「読みやすさ」の比較
- (i) 6a・6b (「峠の小鳥」「冬枯れ」) の 2 組の文章で実験し、それぞれの組について、片かな書きを先に読ませたグループと、平かな書きを先に読ませたグループとを比較した。(「峠の小鳥」で片かなを先に読んだグループは、「冬枯れ」では平かなを先に読む、というようにした。ただし、実験日の都合で 1 名だけ、「峠の小鳥」「冬枯れ」ともに片かなを先に読ませた。)
- (ii) どちらが読みやすいかを判定する基準は、次の 3 つである。

第16表
1秒あたり平均読字数

実験 文章 被験者	峠の小鳥		冬枯れ	
	(片)	(平)	(片)	(平)
01	° 7.2	7.8	9.6	° 7.9
02	° 2.4	4.4	5.1	° 4.4
03	5.4	° 5.0	° 6.6	5.8
04	° 4.7	6.6	7.2	° 5.5
05	3.9	° 4.4	° 4.9	4.7
06	° 10.3	9.9	11.5	° 12.1
07	10.9	° 7.2	° 10.0	11.0
08	° 8.0	8.7	9.6	° 8.8
09	° 6.8	9.0	9.6	° 7.7
10	5.4	° 4.3	° 5.2	5.2
11	° 3.7	4.2	4.4	° 3.9
12	° 6.8	5.6	° 4.6	4.9
13	° 5.3	6.8	5.2	° 5.6
14	7.8	° 6.6	° 7.0	9.2
15	7.5	° 7.7	° 6.8	7.9

°印は、先に読んだ印

読んだものの平均読字数がわずかに少なくなっている被験者がそれぞれ2名ずつあった。いま、全被験者の平均を取って比較対照してみると、第17表のとおりである。

第17表

実験文	グループ別	1秒あたり平均読字数		
		先	あと	差
峠の小鳥	片かなを先、平がなをあと	6.1	7.0	0.9
	平がなを先、片かなをあと	5.9	6.8	0.9
冬枯れ	片かなを先、平がなをあと	6.4	7.0	0.6
	平がなを先、片かなをあと	7.0	7.8	0.8

「峠の小鳥」では、先に片かな書きのを読んだグループのほうが、先に平がな書きのを読んだグループよりも、読字速度は速い。「冬枯れ」では、それが逆になっている。「峠の小鳥」で片かな書きのを先に読んだ被験者は、「冬枯れ」では平がな書きを先に読んでい

- (a) 1秒あたり平均読字数
(b) 100字あたりの平均停留数
(c) 100字あたりの平均逆行数

(iii) 1秒あたり平均読字数は、「峠の小鳥」「冬枯れ」ともに、片かな書きを先に読んでも、平がな書きを先に読んでも、あとで読んだもののほうが、だいたいにおいて、多くなる傾向がある。(第16表) これは、実験文章が、片かなと平がなのちがいがあるだけで、内容・文章構造ともに同じものだから、学習効果が働くことから考えて、当然である。もっとも、各組ともに、あとで

る(1名例外)ので、その個人差がきいていけると見ることができる。
この限りでは、片かな書きと平がな書きとどちらが速く読めるかは
断定できない。そこで、あとで読んだものの読字数のふえ方を見ると、
「峠の小鳥」では同じであり、「冬枯れ」では、片かなをあとで
読んだもののほうが、わずかに多くなっている。これは、先に読ん
だ平がな書きの学習効果が強く働いたか、あとで読んだ片かな書き
が読みやすかったかの、どちらかである。が、その差はわずかであ
り、いずれにしても、片かな書きと平がな書きと、どちらが速く読
めたかの傾向は、はっきりつかめない。

(iv) 100字あたり平均停留数と平均逆行数は、「峠の小鳥」「冬枯れ」
ともに、片かなを先に読んでも、平がなを先に読んでも、あとで読
んだもののほうが少なくなる傾向がある。(第18表)しかし、あと
で読んだもののほうがかえって多かった被験者もある。その数は、
第19表のとおりである。

第18表 100字あたり平均停留・逆行数

6a. 「峠の小鳥」

被験者	停留 / 100字		逆行 / 100字	
	(片)	(平)	(片)	(平)
01	°39.5	39.5	°5.2	3.6
02	°52.9	41.2	°4.4	2.9
03	41.5	°59.1	5.2	°14.0
04	°56.4	38.3	°9.5	6.5
05	63.0	°60.9	11.8	°4.4
06	°29.8	30.6	°0.4	2.4
07	25.6	°38.2	0.6	°5.1
08	°37.5	35.9	°3.2	1.8
09	°39.5	29.0	°4.8	1.2
10	47.6	°57.3	7.3	°9.4
11	°64.5	56.8	°6.5	9.7
12	°39.1	41.5	°5.6	6.5
13	°49.4	52.6	°4.3	2.1
14	35.5	°42.3	3.2	°4.4
15	49.9	°36.5	2.0	°1.0

°印は、先に読んだ印

6b. 「冬枯れ」

被験者	停留 / 100字		逆行 / 100字	
	(片)	(平)	(片)	(平)
01	35.4	°37.9	2.1	°2.5
02	44.3	°59.2	1.5	°7.8
03	°43.3	45.7	°6.5	7.0
04	38.6	°55.8	6.0	°7.4
05	°66.3	64.2	°8.6	12.3
06	30.5	°28.0	0.8	°0.0
07	°36.6	26.0	°6.1	1.3
08	38.1	°37.7	2.3	°0.5
09	32.1	°42.3	1.6	°4.5
10	°53.9	54.7	°6.0	10.0
11	56.7	°65.8	0.5	°6.2
12	°48.3	48.6	°3.7	7.4
13	42.8	°47.7	1.3	°2.9
14	°38.3	31.7	°2.9	2.1
15	°45.2	39.9	°1.6	2.1

°印は、先に読んだ印

第19表

実験文	グループ別	停留がふえているもの	逆行がふえているもの
峠の小鳥	片かなを先, 平がなをあと (9名)	4名	3名
	平がなを先, 片かなをあと (6名)	2名	2名
冬枯れ	片かなを先, 平がなをあと (7名)	3名	5名
	平がなを先, 片かなをあと (8名)	2名	2名

以上に見るとおり, あとで読んだものの停留数・逆行数が多くなっているのは, 片かなよりも平がなのほうに多いという傾向がある。

そこで, 全被験者の平均停留数・逆行数を比較対照してみると, 第20表のとおりである。

第20表

実験文	グループ別	100字あたり平均停留数			100字あたり平均逆行数		
		先	あと	差	先	あと	差
峠の小鳥	片かなを先, 平がなをあと	45.4	40.6	4.8	4.9	4.1	0.8
	平がなを先, 片かなをあと	49.1	43.9	5.2	6.4	5.1	1.3
冬枯れ	片かなを先, 平がなをあと	47.4	44.4	3.0	5.1	6.0	-0.9
	平がなを先, 片かなをあと	46.8	39.8	7.0	4.0	2.5	1.5

「峠の小鳥」では, 片かな書きを先に読んだグループのほうが, 平がな書きを先に読んだグループよりも, 停留数・逆行数ともに少ない。すなわち, 片かな書きのほうが滑らかに読まれた傾向がある。しかし, 「冬枯れ」では, 差は相対的に少ないが, その逆になっている。この事情は, 読字数の場合と同じである。そこで, 停留数・逆行数のへり方を見ると, 「峠の小鳥」「冬枯れ」ともに, 片かな書きをあとで読んだもののほうが, 例外なく減り方が著しく, 「冬枯れ」の逆行数は, 平がな書きがあとの場合, かえってふえている。これは, 片かな書きのものほうが, 滑らかに読めたという傾向がものごとにある。

(v) 結論 片かな書きと平がな書きとでは, 読書速度にはほとんど優

劣はなかったが、片かな書きのほうが停留数・逆行数が少ない傾向を示した。これは、片かな書きのほうが、ひと目でつかむ字数が多かったこと、すなわち、語としてのゲシタルトを作りやすかったということを裏書きすると考えられる。（新聞記事で、いま、動植物名や擬声語その他を片かな書きにしていることは、効果的であると考えられる。）

（永野）

明治時代語の調査研究

A. 総 説

本年度は、前年度に着手した「明治時代語の調査研究」を継続して、カードの採集・採集カードの配列替え、集計カードの作成・整理表の作成などの作業を行った。この調査研究は、次年度で完結する見込みである。

この研究は、「郵便報知新聞」の明治10年（1877）11月から明治11年10月までの1年分を対象とし、標本調査法によって、語彙（いわゆる自立語）を概観し、さらに、助詞・助動詞、語構成、表記、文体などの実態を明らかにしようとするものである。その目的・資料・方法などの詳細については、すでに「昭和30年度 国立国語研究所年報7」に報告してあるので、ここには繰り返さない。

B. 担当者

本年度は、次の5名の室員が共同でこの研究に従事した。

山田 巖 見坊豪紀（昭和32年1月から参加）

広浜文雄 市川 孝 進藤咲子

なお、標本調査の実施について、所員水谷静夫の協力を得た。

C. 作業の経過

(1) カードの採集

10万枚の採集予定のカードのうち、前年度に採集した6万枚の残り4万枚のカードの採集を、8月までに完了した。

(2) 採集カードの配列替え

採集カードの配列替えは2回に分けて行った。最初、配列法の検討のため、前年度に採集した6万枚のカードのうちの3万枚について、五十音順の配列替えを試み、その結果に基づいて方法を検討したうえ、9月末までに全カードの

配列替えを完了した。この配列替えには、集計カード作成の便宜を考慮して、次のような方法をとった。

(i) 五十音順の配列については、「^{現代語の}婦人雑誌の用語」(国立国語研究所報告4)に見られる「カードの五十音順配列法」(同書2.41 p.40)に従う。

(ii) カードの見出し形(大体において文節に相当する)から、末尾に一般に存する助詞・助動詞をすべて除いて得られる形によって配列する。また、その形がある語の一活用形である場合には代表形に改めたものによって配列する。ただし、動詞は連用形を代表形とし、形容詞は語幹を代表形とする。なお、形容動詞の語幹は名詞と区別しない。

(3) 集計カードの作成

集計カードは次のような様式によった。

カ ノ サ ツ																																																									
<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: flex-start;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr><td>a</td><td></td><td>1</td><td></td><td>6</td><td></td><td>7</td><td>a</td></tr> <tr><td>b</td><td>レ</td><td></td><td>レ</td><td></td><td>レ</td><td></td><td>b</td></tr> <tr><td>c</td><td>レ</td><td></td><td></td><td>4</td><td></td><td>4</td><td>c</td></tr> <tr><td>d</td><td>レ</td><td></td><td>レ</td><td></td><td>レ</td><td></td><td>d</td></tr> <tr><td>e</td><td>レ</td><td></td><td>レ</td><td></td><td>レ</td><td></td><td>e</td></tr> <tr><td colspan="4"></td><td>11</td><td colspan="3"></td></tr> </table> <div style="margin-left: 20px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px; display: inline-block;">名</div> () <div style="margin-left: 20px; text-align: right;">近代語研 郵(56.8)</div> </div> </div>										a		1		6		7	a	b	レ		レ		レ		b	c	レ			4		4	c	d	レ		レ		レ		d	e	レ		レ		レ		e					11			
a		1		6		7	a																																																		
b	レ		レ		レ		b																																																		
c	レ			4		4	c																																																		
d	レ		レ		レ		d																																																		
e	レ		レ		レ		e																																																		
				11																																																					
<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%;">鑑 札</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">1</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">8</td> <td style="width: 15%;"></td> </tr> <tr> <td>鑒 札</td> <td></td> <td style="text-align: center;">1</td> <td></td> </tr> <tr><td> </td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td> </td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td> </td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td> </td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td> </td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td> </td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td> </td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td> </td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr> <td style="font-size: small;">かん ぎつ 鑑 札</td> <td></td> <td style="text-align: center;">1</td> <td></td> </tr> </table>								鑑 札	1	8		鑒 札		1																																		かん ぎつ 鑑 札		1		(備考)					
鑑 札	1	8																																																							
鑒 札		1																																																							
かん ぎつ 鑑 札		1																																																							

a・b・c・d・eは記事による層別を示す。いちばん左の欄は、はじめ、集計を2回に分けて行う予定であったために設けられたものであるが、結局1回にまとめて行ったので、この欄は補正用として利用することとなった。層別されている右端の欄は、順位もしくはパーミルを記入するためのものである。また

右半分の欄は、表記のバラエティーを記載するための欄である。

見出しの掲げ方については、原則的には、「婦人雑誌の用語」の「見出しの掲げ方」(同書 3.21 p.54)に従ったが、次のような点は別に考慮した。

(i) 口語や方言については、これを文語や共通語と区別し、()内に、口、方と記入する。

(ii) 副詞・連体詞・接続詞のうち、語末にくとにのではもや>を持つものは、それらを除いた形を見出し形とする。[例]イカ(如何)にも

(iii) 見出し欄の点線の左右に、次のような付属要素を書き出す。(これは、語彙の本表のほかに、別表として掲げるものの、集計上の便宜を考えたためである。)

a) (お・ご・み)の類——敬意などを表わす接頭語

[例] お ご み おん

b) (君・公・氏)の類——敬意などを表わす接尾語

[例] 君 公 氏 卿 翁 殿下 先生

c) (す・なす・致す)の類——す・なすおよび補助用言の類

[例] す なす 致す 能ふ 奉る 申す 仕る 相成る 難し

d) (回・箇月・時)の類——助動詞

[例] 回 箇月 時 戸 名 艘 駄 反歩 朱

e) その他(a, b, c, d 以外の接辞およびそれらに準ずるもの)

[例] (接頭) 諸 阿 全 前 某 仮 各 相 非 不 在 第
貴 一

(接尾) 外 中 内 上 下 等 連 輩 的 向 風 式
来 用 宛 頃 毎

(4) 疑問カードの処理

採集語彙の読みや意味のにわかに判定しがたいものについては、疑問カードとして一括し、これを次のような手続きによって推定した上で、集計カードを作成した。この推定は、集計カードに見出しを記載し、配列し、それによって語彙表を作成する必要上とった手続きであって、当時の語彙の規範的な読みを断定しようとするためのものではない。したがって、問題の残る語については

実態を明示し、推定の根拠を示し、また、相互参照の方法をとるなど、製表のために実態のゆがめられることのないように配慮した。

A 読みの推定の手続き

1 ルビのない語については、各種の辞書、特に同年代の有力な辞書をおもな資料として、可能な限り読みを推定する。

2 ルビのある語については、

(1) まずルビの位置づけを行い、そのルビが本文を読み下す場合の主体をなすものであるかどうかの判定を行う。

たとえば、次の例においては、明らかにルビが読みの主体である。

漫^{みだ}り^{あるく}遊^(マ)び歩^{あるく}行事なく 祖先の功勞事蹟を脚^{しき}色^くしん

また、次の例においては、漢字が読みの主体を示すものと考えられる。

此品ヲ君ニ授与シテ（中略）更ニ吝^{をを}惜^みセス

午前第十時に氣^{いき}管^{のくだ}截^{だちわり}開^(マ)術を行ふに

(2) ルビと漢字のうち主体をなすものの読み方に従って、集計カードに見出しを記載し、配列をきめる。

3 同じ漢字について、ルビつき、ルビなしの両方が存在する場合は、

(1) ルビなしについては、1の手続きに従い、ルビつきについては、2の手続きに従う。

(2) 同時に、ルビつき、ルビなしの両方にわたって、読みの上で調整をはかる必要がないかどうかを吟味する。

4 かな書きの語については、問題は比較的少ない。ただし、清濁などの点では、多少検討を要するものがあつた。たとえば、「テレカラフ」の読みは、「テレガラフ」と推定された。また、かな文字を含む語については、かえて読みの推定を助けたものが多い。〔例〕 隙^ひきースキ

5 以上の推定作業にともない、誤植または誤用の認定を下さざるを得なかった語もある。

(1) ルビの誤植 消防^{ひがりちようれん}操^(マ)練（「ひがり」は、「ひがかり（火掛）」の誤植と認定した。）

(2) 漢字の誤植 山脈^{ひがりちようれん}連^(マ)聯り綿^{ひがりちようれん}亘^(マ)数里（「綿亘」は「綿互」の誤植）もち

ろん、誤植の認定にあたっては、極力原形を尊重することに重きをおき、たとえば「法衛」「午^ご餐」「午^{ぞん}餐」「晩^{ぞん}餐」のごときは、一応原形（のルビ）に従い、みだりに私意を加えることをさけた。

B 読みの推定のための参考資料

読みの推定を行うにあたっては、読みの一応の客観的統一をはかるという意味で、必要に応じて、Hepburn の「和英語林集成」、山田美妙の「日本大辞書」を主として参照した。たとえば、「発駕」「発言」は、両辞書によって、それぞれ「ホツガ」「ホツゴン」として、集計カードの見出しを記載し、配列をきめた。また、両書に見当らない語については、できるだけ同年代の文献を調査して参考に資した。なお、固有名詞を含む語は、一般の人名・地名辞書によったものが多い。〔例〕 部崎燈台→ヘザキトウダイ

C 意味の推定について

意味の推定は、読みと相互に関連するところが多く、意味がきまれば、自然に読みのきまる場合が多い。（たとえば、「末期」における「マツキ」と「マツゴ」、「楽」における「ラク」と「ガク」のごとき。）しかし、特に読みに問題はなくても、意味のにわかに判定しがたいものものないではなくしかも、それらの語は、すべて特殊な領域の専門用語や過去または海外の制度文物に関する特殊用語であるため、参考資料の検索に意外な時間と労力を要した。

(5) 整理表の作成

集計カードを整理して、次のような各種の整理表を作成する計画を立て、本年度は主として、このうち本表(1)A表の作成に従事した。

本表

- (1) 五十音順語彙表 $\begin{cases} \text{A表} & (\text{度数10以上の語について}) \\ \text{B表} & (\text{度数9以下の語について}) \end{cases}$

- (2) 使用率順語彙表（全体および各層別）

別表 〔本表(1)と同様A表・B表に分ち、各類を五十音順に配列〕

- 1) (お・ご・み)の類

- 2) (君・公・氏)の類
- 3) (す・なす・致す)の類
- 4) (回・箇月・時)の類
- 5) その他

標本度数10以上の語をA表として収録するのは、語の範囲をこう限れば、母集団では表に掲げられる語と同等に使われながらも、抽出誤差のため標本に現われなかったという語がほとんどなくなるであろうと推定したためである。その理論的根拠は、「婦人雑誌の用語」の「表に掲げてある語の範囲」(同書3.11 p.51以下)に従い、次の近似的な式、

$$f \geq k^2(1-r) \quad (k^2 \text{ は危険率の逆数, ここでは危険率を } 10\% \text{ とする。})$$

$$\text{抽出比 } r \text{ は } \frac{1}{12}$$

で、 f が 9.17 と算出されるためである。従って、標本度数 9 以下の語は捨て去ってもよいわけであるが、ただ、この研究が国語の歴史的発達に関する研究として、当時の使用語彙のパラエティアーをなるべく豊富に示しておきたいという立場から、度数 9 以下の語を、別に B 表として収録することとしたのである。

D. 成果および次年度の見通し

本年度の成果の一端として、本表(1)A表から、標本度数順に50位までの語を抜き出して掲げておこう。なお、参考のために「婦人雑誌の用語」から、「主婦之友」(全記事)で使われている、使用率順で50位までの語を併せ掲げてみよう。〔「郵便報知新聞」欄の標本度数を標本の延べ語数100,000(概算)で割り1,000をかければ使用率パーミル(‰)が算出される。〕

郵便報知新聞(明治10~11年)				主婦之友(昭和25年)		
順位	見出し	標本度数	順位	見出し	使用率‰	
1	アリ・リ	有 1778	1	シ・スル	為	19.235
2	ソの	其 1707	2	イル	居	17.275
3	コト	事 1165	3	アリ・ル	有	14.253
4	モノ	物・者 1118	4	イイ・ウ	言	12.225
5	コレ(代)	之 1012	5	ナリ・ル	為・成	11.163

郵便報知新聞				主婦之友			
順位	見出し		標本度数	順位	見出し		使用率%
6	コの	此	727	6	コト	事	10.937
7	ナシ	無	684	7	ナイ	無	8.956
8	シス	為	599	8	ソの	(指)	7.353
9	イイウ	言	515	9	モノ	物・者	7.140
10	ナリ・ル	成	399	10	ヨイ	良・好・善	6.606
11	トコロ	所	388	11	キ・クル	来	5.414
12	ツキ・ク	附	381	12	ワタグシ	私	5.352
13	イタリ・ル	至	380	13	ソレ	(指)	5.297
14	エ・ウ	得	340	14	コの	(指)	4.872
15	ナン・ス	為	311	15	トキ	時	4.029
16	ドウ(名)	同	300	16	ミル	見	3.735
17	マタ(接)	又	299	17	オモイ・ウ	思	3.639
18	マタ(副)	又	284	18	コレ	(指)	3.543
19	ヨリ・ル	依	278	19	ナニ	何	3.392
20	ヨシ	由	258	20	ヒト	人	3.324
21	トキ	時	246	21	トコロ		2.741
22	オヨビ	及	236	22	一		2.563
25	イワク	曰	234	23	デキル	出来	2.522
24	キン	金	227	24	ドウ	(指)	2.378
25.5	ミル	見	225	25	ニ		2.371
25.5	ユエ	故	225	26	ユキ・ク	行	2.357
27	メイジ	明治	221	27	シマイ・ウ	了	2.234
28	ヒト	人	219	28	ウエ	上	2.227
29	ミギ	右	198	29	オキ・ク	置	2.227
30.5	アルイハ	或	194	30	ナカ	中	2.193
30.5	シリ・ル	知	194	31	デル	出	2.165
32.5	タメ	為	190	32	ツケル	附	2.069
32.5	ワガ	我	190	33	タメ	為	2.056
34	ムネ	旨	184	34	ソウ	(指)	1.987
35	ドウ(連)	同	179	34	マタ	(副・接)	1.987
36	ギ	儀	176	36	イマ	今	1.980
37.5	ジンミン	人民	175	37	マエ	前	1.932
37.5	スデに	既	175	38	コドモ	子供	1.836
39.5	オオシ	多	162	39	ジブン	自分	1.816
39.5	スナワチ	則	162	40	カケル	掛	1.720

郵便報知新聞			主婦之友			
順位	見出し		順位	見出し		使用率%
41	チ	地	160	41	ハウ 方	1.720
42	ホカ	外	159	42	ヤリ・ル	1.713
43	ウチ	内	158	43	モウ (副)	1.651
44	トオリ(名)	通	151	44	ココロ 心	1.638
45	モツテ(副)	以	148	45	メ 目	1.624
46	ヨク(副)	能	146	46	オット 夫	1.610
47	ツイに	遂	143	47	クレル 呉	1.604
48.5	サル(連)	去	142	48	テ 手	1.590
48.5	タ	他	142	49	イエ 家	1.576
50	カツ	且	140	50	イレル 入	1.556

次年度には、次のような作業を計画している。

(1) 本表ならびに別表(上述)の完成

(2) 異り語の補充

当時の使用語彙のバラエティーをなるべく網羅的に収録するため、調査対象としての郵便報知新聞1年分から、標本調査でもれた未出語彙を採集し、記録する。

(3) 分析——本表・集計カード・採集カードなどによって、次の事項を分析研究する。

(イ) 助詞・助動詞

(ロ) 語の構造

(ハ) 表記

(ニ) 文体と用語との関係

(山田)

特殊問題の調査研究

資料調査室の調査室では他の研究室に属さない特殊問題の調査研究をおこなっているが、昭和31年度には次のような調査を行った。

Ⅰ 正書法に関する基礎的問題についての資料の収集・調査

Ⅱ 漢字の字体に関する基礎的研究

調査には松尾拾、村尾力、大久保愛が当たった。

Ⅰ 正書法に関する基礎的問題についての 資料の収集・調査

現代の国語表記上の諸問題を総合的に考察し、これに解決の方途を見いだそうとする観点にたち、まず現代の国語表記にはどんな問題があるかを概観して、おのおのの問題に関する資料を収集整理する作業を本年度から始めた。

1 昭和25年以降の国語問題関係の文献の収集およびその事項別整理

「国語関係刊行書目」(昭和25年 国語研究所刊)所収の文献(昭和17年～24年)以後のものを、表記法一般、送りがな、かなづかい、句とう点、わかち書き、漢字に分類した。(この調査は毎年継続する予定である。)

2 わかち書きに関する資料の収集・調査

当用漢字の制定後、当用漢字外の字を用いる漢語はもちろん、当用漢字にあっても、なお、かながきにする語がしだいに多くなってゆく傾向が見られ、その結果かなが連続して現れることが多く、そこにわかち書きに対する考慮が生じてくる。

従来わかち書きの研究は、ローマ字論者あるいはかな書き論者の側で行われてきたために、ローマ字書きあるいはかたかな書きに即したわかち書きの試みはあったが、現行の漢字かなまじり文に即したわかち書きの研究あるいは実践はほとんど見られない現状である。この調査は、わかち書きが文意の混乱を防ぐのにどのように役だつかを調査する準備として、現在までに漢字かなまじり文について試みられたわかち書きの資料を収集・整

理することを目的とする。

この目的にかなう資料で現在までに収集し得たのは、わずかに次の3種にとどまる。

(1)分別書き方案（明治39年 文部省） (2)小学校国語教科書 (3)山田忠雄氏の諸論文

(1)は国定教科書の修正の際の標準となるべきものを示すため、教科書調査委員会が「句読法案」とともに発表した試案で、単語をわかち書きの基礎としているが、次のような点に例外を認める。

(i) 次のような構造をもつ語は続けて書く。(i)名詞・代名詞に尊称を示す語がついたものは、(iii)のように離して書くが、そのうち、単立語とみなすべきもの（ともだち、おとうさんの類）(ii)助詞「の」「が」を介した二つの名詞からなる複合語（たけのこ、おにがしまの類）(iii)数詞に名詞が合してできた複合語（ふたばん、いちばんやりの類）

(ii) 助動詞は上の動詞・助動詞と続けて書くが、敬語動詞から転じた助動詞（おうたれ なさる、おきかせ まうします、おうかがひ いたしませう等々）指定の助動詞（あるのだ、みるのです）推量の「だらう、でせう」（とるだらう、おうけ なさらない の でせう）は離して書く。

(iii)名詞・代名詞に複数または尊称を示す語がつくときは離す。（ねいさん たち、わるもの ども、てんのー へいか、やまだ くんの類）

(iv)助詞は原則として離して書くが、(i)「て・ても・たり」が促音・撥音の下にくるとき、(ii)命令を表わす「よ・ろ・い」の場合には続けて書き、また、(iii)助詞の下に「は・も」がくる時は続けて書いてもよい。

(v)姓と名は離して書く。（やまだ こーさく）

これに対し、(2)および(3)は文節をわかち書きの基礎としている。このうち(2)については、2年あるいは3年までに実施している。数種の教科書について調べた結果、助動詞「ようだ」、「そのうち、そのころ、そのほか」の類「いきおいよく」の類には離して書くものと続けて書くものとあり、細部についての小異はあるが、各社の教科書ともほとんど一致

している。したがって小学国語教科書のわかち書きは、比較的安定した形をとっているものといえよう。

しかし、これらは低学年にのみ実行されているため、その文章には漢字の出る度合は低く、この調査の目的には必ずしも適したものではない。

(3)は山田忠雄氏が近年その著作に実行しているもので、これも法則を示したものがないので、最近の三種の論文、(イ)漢数字の書法^(佐佐木教授古稀記念祝賀論文)、(ロ)「古辞書の研究」(書評)(国語学26)、(ハ)楊守敬旧藏本将門記の研究^(日大国文学会機関紙「語文」4)から帰納した。次のような諸点は問題のある点であろう。

(i) 「こと、とき、ほか、ところ(…ところのもの、…ところであった等)もの、わけ、(…わけではない等)うち、うへ、なか、あまり、ばあひ、とほり、(…とほりである等)」等々の類は離すが、「ため」「そのうち」また「その間(かん)、その後(ご)」の類は続ける。

(ii) 「に いたって、に 関する、に 対する、に つれて、に かかわらず、かも しれない」の類は離し、「において、について、として、によって」の類は続ける。

(iii) 「いふ」は動詞として離すが、呼称する意味の「(と)いふ」は続ける。

(iv) 「てある、である、てくる、てゆく」の類は続けるが、「に すぎない、に ほかならない、ねば ならぬ、なく ない、…(し)さへする」の類は離す。

(v) 「である」は続けるが、「で ない」「では ある」「では ない」は離す。

(vi) 「…のやうに、…のごとく」は続くが、「と とともに」は離す。

(vii) 「勇氣凜然と」、「図書寮新収の…」、「資料蒐集」等、漢語を並列させたものに位格(case)の考えられるものでも続ける。

(viii) 年月日は一続きにする。

要するに、単語式によるも文節式によるも多く例外を生じる。その原因は単語、または文節の認定のしかたが、人によって異なることにあるといえる。

なお、以上の諸資料においては、漢字を用いる度合が現行の漢字かなまじり文に比べて著しく少ないことが注目される。たとえば、漢字が相当多く現れてもよいはずの山田氏の論文についてみると、「見様、見通し、基、手続、疑、場所、裏付、立場、誤、根深さ、口絵、大きく、多く、言う、与える、試みる、述べる、扱う、許す、合せ持つ、見る、示す、説く、過ぎる、取り上げる」等々、普通は漢字が用いられそうな場合でも、かなになっている、したがって、わかち書きに関連して、逆にわかち書きにするためには、どんな語が漢字で残るかという調査もなされるべきであろうと思われる。また、わかち書きされた文において、わかち書きと句とう点とがそれぞれ、どのような役わりを分担しているかということも、両者を連関させて調査すべきであるが、根本資料が乏しいので十分な結果は期待しがたい。

(松尾)

Ⅱ 漢字の字体に関する基礎的研究

わが国では、当用漢字字体表(昭24)によって、当用漢字の字体(中国でいう字式、字の構成をいう)・字形(点画による具体的な図形)は公式に規定されている。しかし実際社会においては、たとえば、材木の材が枚となるように字形の変動しているものとか、𠂔とか𠂔(電々公社の電話帳では以前から使用している)のように字体の変動したものがいくつか行われている。こうした文字を収集するとともに、字体・字形(以下ひっくるめて字体とよぶ)の基礎的研究が行われるべきであろう。

一方、漢字の母国である中国では、在来略字とよばれてきたものを、1955年来、正式の通用文字として、政府の名において公布し、一部実施に移しつつある。これに伴う、字体の具体的用例の調査研究、字体の変動によって生ずる、漢字の本質に関する諸問題の調査、更には文字問題を一国の政策として扱うことに関する諸問題の調査等は、同じく漢字を使用するわが国にとっても一考の要があるべきものと思われる。

そしてこれらの調査研究には、一定のわく内で比較的安定しているわが国の場合よりも、変動しつつある中国の場合を対象とした方が、問題の種類・観点

の角度等、より広い材料が得られるように思われる。よって調査室においては今明2年度にわたって、これらの問題を調査研究する。

今年度には、中国における今日の簡略字・異体字（公認未公認を問わない）を収集するとともに、字体変動に関する問題のありかを調査した。

資料不足に悩みながら集めた字数は、正式の算出ではないが約2,000字に及ぶ。そのうち、常用の字でかつ字体の点で注目すべきものは大体500字であるが、その分類・研究は明年度に行われる予定である。

字体の変動・簡略化に伴って生ずる、漢字自体に関する問題としては、

- (1) 漢字という語文字における、いわゆる形声という要素の比重。たとえば疒・疒・疒・疒の類はわれわれ日本人にも或程度の表意性を与えるが、これは何によるものか。この問題は漢字の構成・本質に関連するものである。
- (2) 画数の減少と漢字識別との関係・限界。つまり書き易さと見分け易さの均衡の問題で、たとえば、木・朮(術)、受・爰(愛)とか、儿(児)・几・凡の類である。これは、漢字各字の示差的単位とは何であるか、の問題に関連する。
- (3) 人為的に行おうとする、全く別義の文字による同音代用の問題。たとえば、中国では北京音によって、鬱を郁なり玉なりで代用しようとしたが、かくては鬱々なる語は郁々とか玉々となり、われわれ日本人にも抵抗を与える。同音代用なる原則は、わが国でも表外字の処理の一方法として行われているが、しかしこの原則は、漢字が今日なおも表意性の限界というものに制約される。ことに全く別義の字を用い人為的に行おうとする場合、然りである。

など、またその他の問題がある。また関連するものとして、学校教育や文盲一掃の識字教育における影響、人為的な簡略字の推行と過去の文学・文献との摩擦（すなわち簡略字の適用範囲）の問題、その他いくつかの問題がある。これらの整理探討も明年度に行われる予定である。

以上のように、本年度は簡略字の収集と問題点の調査に費された。

（村尾）

国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、次のような文献調査を行った。

I 刊行書の調査

国語学・国語問題・国語教育・言語学・言語技術・国語資料・辞典などの新刊書について、書名・著(編)者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べ、カード化した454点(1956年1月～12月)の分類目録を作った。

この目録は、下記の雑誌論文、および新聞記事の目録とともに、当研究所編「国語年鑑」(昭和32年版)に掲載された。

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌、ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの逐次刊行物から、関係論文を調査し、題目・筆者・誌名・発行年月・巻号数、およびページ数などを記載したカード3通を作り、分類別・雑誌別・筆者別のカード目録を作った。採録した論文の総数は2,272点(1956年1月～12月)に達した。

調査した逐次刊行物は、研究所に寄贈された分(後記、「昭和31年度に寄贈された図書の一覧(2)逐次刊行物」参照)のほか、下記のとおりである。

解釈と鑑賞 (至文堂)	芸術新潮 (新潮社)
ことば (日本話術ロータリー)	俳句 (角川書店)
民間伝承 (民間伝承刊行会)	教育 (国土社)
近代文学 (近代文学社)	教育心理学研究 (国土社)
文学 (岩波書店)	青年心理 (金子書房)
文学研究 (文学研究会)	心 (平凡社)
国語と国文学 (至文堂)	新潮 (新潮社)
NHK放送文化 (日本放送協会)	世界 (岩波書店)
新日本文学 (新日本文学会)	中央公論 (中央公論社)
文学界 (文芸春秋新社)	文芸春秋 (文芸春秋新社)
群像 (講談社)	科学読売 (読売新聞社)

人 生 手 帖 (文理書院)	リーダーズダイジェスト (同日本支社)
短 歌 研 究 (日本短歌社)	サンデー毎日 (毎日新聞社)
文 芸 首 都 (文芸首都社)	週刊サンケイ (産業経済新聞社)
教 育 心 理 (日本文化科学社)	暮らしの手帖 (暮らしの手帖社)
児 童 心 理 (金子書房)	婦 人 公 論 (中央公論社)
思 想 (岩波書店)	婦 人 之 友 (婦人之友社)
新 論 (新論社)	学 術 月 報 (日本学術振興会)
知 性 (河出書房)	週 刊 朝 日 (朝日新聞社)
日本及日本人 (日本新聞社)	週 刊 読 売 (読売新聞社)
理 想 (理想社)	主 婦 の 友 (主婦の友社)
社 会 学 評 論 (日本社会学会)	婦 人 生 活 (同志社)
ニューエイジ (ニューエイジ社)	

Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜き、その整理に当たるとともに、分類別および日付順のカード目録を作った。カードの記載形式は、見出し語・欄名だけで、見出し語のないものは、その内容によって、適宜に題名をつけた。・紙名・筆署名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。調査した紙名は次のとおりで、その切抜数は1,525点(昭和31年1月～12月)である。

- (1) 東京出版 (日刊) 朝日 毎日 読売 東京 東京タイムズ 産経時事 日本経済
(夕刊) 朝日 毎日 読売 東京 産経時事 日本経済
- (2) 地方出版 中部日本 同(夕刊)
なお、大阪の山田房一氏、富山の平岡伴一氏など、地方のかたがたから関係記事のあるごとに恵送されたものがある。
- (3) 特殊新聞 日本読書新聞 図書新聞 新聞協会報 その他
(高橋・有賀)

図書の収集と整理

前年度に引き続き、研究活動に必要と思われる研究書・参考書・調査資料・文献の類を収集し管理した。収集の方針、整理の方法等、すべて従来どおりである。

各方面からの寄贈図書も従来と同様、当所書庫の充実に大きな役割を果たして

いる。

昭和31年度に備えた図書の数 は次のとおりである。

単行本	購入	924冊
	寄贈	191冊
雑 誌	購入	1,835冊 (76種)
	寄贈	833冊 (267種)
新 聞	購入	15種
	寄贈	3種

本年度末の単行本の蔵書数は 22,020 冊である。

昭和31年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名 (敬称略)	図 書 名
(1) 単行本	() 内は編著者名。寄贈者と同じ場合は省く。
相沢正昭	「研究集録 (昭和31年度)」(千葉県君津町立貞元小学校編)
朝倉書店	「国語教育辞典」(西尾実ほか)
浅野建二	「田植草紙論」
明日香路社	「宇波伎(歌集)」
井上達二	「試視力集本」
岩波書店	「日本人のことば」(西尾実)
宇野義方	「敬語の使い方」
樺垣 実	「隠語辞典」
遠藤嘉基	「新版点本書目」(広浜文雄共編)
大田栄太郎	「郷語書誌稿第一冊 (関西篇)」
岡崎有郷	「高知県の中学一年生が使用している使役、可能、受身の助動詞の語法調査」
小川霊道	「史的仮名遣の根本原理と発音式謬妄論 (新井無二郎)」
開国百年記念文化事業会	「日米文化交渉史」1・3・6「明治文化史」8
加来敬一	「福岡県方言の語法」
門前真一	「古事記における「娶」字の訓」
金沢文庫	「金沢文庫古文書第七輯」「金沢文庫古文書第八輯」「金沢文庫古文書第九輯」
カルフォルニア大学	「MEXICO AND THE SPANISH REPUBLICANS」(LOIS ELWYN SMITH)「KOLAMI A DRAVIDIAN LANGUAGE」(M.B.EMENEAU)「THE IMPACT OF THE WEST ON GOVERNMENT IN THAILAND」(WALTER E. VELLA)

- 河出書房 「日本少年少女文学全集 9・11」
- 北村 学 「ことばのなりたち」
- 木村慶吉 「民謡と風俗方言（青森県津軽編）」「弘前を訪ねて」（弘前市）
- 京都市教育研究所 「こどもをみつめて」「幼稚園児の数量概念の調査(1955)」「道徳的問題点の調査(小学校編)」1956「道徳的問題点の調査(中学校編)」1956「中学生の悩みの調査」1956「中学生の道徳意識の調査」1956「中学校特別教育活動の実態」1956「中・高校生の生活意識」1956
- 京都大学人文科学研究所 「昭和二十八、九年度東洋史研究文献題目」
- 近畿方言学会 「方言論文集(一)」「方言論文集(二)」「問題の点を中心とした郷語書誌稿（関東篇、関西篇）」（大田栄太郎）
- 日下部文夫 「二月十日の“漢語撰音方式(草案)”を見て」
- 草島時介 「国語文の読みにおける可動性義眼、CONTACT—LENS 及眼珠の運動性に関する実験的研究」
- 楠 道隆 「かなづかい論争について」
- 宮内庁書陵部 「為兼卿和哥抄」
- 警察庁警務部教養課 「警察官の話し方」
- 見坊豪紀 「明解国語辞典」（金田一京助編）
- 甲南女子短期大学 「播州赤穂方言の研究（語法編）」（兵庫県方言学会編）「訂正版 韵鏡入門」（三沢諄治郎）「新訂韻鏡（修補版）」（三沢諄治郎）
- 国立教育研究所 「全国小・中学校児童生徒学力水準調査（昭和29年度）」
- 国立国会図書館 「明治の民衆と文化」（目録と解説）
- 国立国会図書館支部静嘉堂文庫 「静嘉堂文庫図書分類目録（再続）」
- 小嶋政一郎 「郷土ものがたり」上の巻・下の巻
- 此島正年 「古代の助詞“すら”について」「国語教育における文法指導」
- コロンビア大学図書館 「新書目録」（日本：41・42・43・44・45）（中華民国：14）
- 阪本一郎 「言語心理学」
- 作文の会 「全国作文教育研究協議会（研究要項）」
- 佐藤 茂 「福井県の言語調査(4)」
- 佐藤修一郎 「言語教育実践資料」（鶴岡市言語教育委員会編）
- 佐藤利男 「日本語子音の周波数スペクトル」
- 島田勇雄 「印南郡方言集第一集」（印南郡中学校国語科主任会編）
- 小学館 「第4回全国児童生徒作品コンクール入選作品集」
- 史料館 「史料館所蔵、史料目録」第五集
- 新村 出 「重山切抜帳」第一、第二
- 世古正昭 「細倉の言葉」
- 全国大学国語教育学会 「国語科教育」第三集
- 全日本活字工業会 「当用漢字部首整理案」（昭和31年10月議決）

- 総理府統計局 「人口地図」
- 大東急記念文庫 「財団法人大東急記念文庫小史」
- 高羽五郎 「譬喩尽」五「コンテンツスムンデ、原文1596年版」Ⅱ、Ⅲ「ロザリオの経」翻字篇Ⅲ
- 谷開石雄 「中津川を中心とした恵那ことばの研究」（中津高等学校郷土研究部言語班編）
- 中国科学院語言研究所 「現代漢語規範問題学术会談」（文件江編）
- 中等国語補修委員会 「漢字用語調査（中等国語，三訂版）」
- 塚原鉄雄 「一日一題国文法の研究」（谷山茂共著）
- 寺師忠夫 「奄美方言の研究第一編（音声について） 第三編（語法）」
- 電通 「広告研究」1955年版，1956年版
- 天理図書館 「古義堂文庫目録」「近代作家原稿集」「小泉八雲集」
- 東京書籍KK 「語い使用度数表（小学校用“新編新しい国語”昭和31年）（昭和32年）」「語い使用度数表“新しい国語”小学校用）」「東書『新編新しい国語』漢字の読み方と使用例（室蘭市教育研究会国語部）」
- 東京大学史料編纂所 「大日本史料」第二編之十・第三編之十三・第五編之十八・十九，第七編之十四・第九編之十一・第十一編之十・第十二編之三十八「大日本古文書」家わけ第十七・第二十「大日本古記録」後二条師通記上，中，江木鰐水日記，下，貞信公記「大日本近世史料」諸問屋再興調一，小倉藩人畜改帳一」
- 東京堂 「故事ことわざ辞典」（鈴木棠三編）「難訓辞典」（中山泰昌編）
- 東京都立教育研究所 「昭和30年度東京都理科学力調査報告書（小・中学校の部）」「昭和30年度聴力測定報告書（杉並区，新宿区）」「東京都社会科学力調査（小学校）・（中学校）」「精神検査による診断の指導法の研究」
- 東洋文化研究所 「新収図書目録」（昭和31年12月）（昭和32年1月）（洋書）」
- 栃木県教育委員会 「読解指導の手びき」
- 富田 博 「国語教育における聞くこと，話すことの指導」（仙台市立木町通小学校編）
- 富山市教育委員会 「富山市児童言語調査 第六集 名詞篇」「富山県方言文献目録」
- 内閣文庫 「内閣文庫漢籍分類目録」
- 内藤好文 「現代日本語における『ある』と『いる』の用法」
- 中田祝夫 「古本点図集二種」
- 新垣正雄 「琉球教育要覧1955」（琉球政府文教局編）
- 日本大学国語研究室 「漢数字の書法」（山田忠雄）
- 日本放送協会 「放送用語参考辞典（昭和31年版）」「農業用語のてびき（営農）」
- 日本ユネスコ国内委員会 「青少年の人権意識に関する調査」

日本ローマ字会 「名詞大文字、田丸式分ち書きによる生徒の書きの能力実態調査報告」

馬場 宏 「能登木郎方言考、四（植物語彙編）」

平井秀文 「成簀堂文庫本遊仙窟訳文稿」「成簀堂文庫本遊仙窟について」

福田孫多 「日本古代史の新しい見方」

藤原与一 「FORKLORE STUDIES VOL XV 1956」

文海中学校 「どの教科書も読めるようにするために」

ベンダ “NACHRICHTEN” (抜刷 78/1955) “BIBLIOGRAFIA DEL INSTITUTO LINGÜÍSTICO DE VERANO” (JUNIO 1955) “INTERNATIONAL JOURNAL OF AMERICAN LINGUISTICS” (抜刷) “LANGUAGE” (抜刷)

放送文化研究所 「音のライブラリー資料テスト」

前田 勇 「現代大阪弁の喜劇性」

松坂忠則 「ウタデオボエル現代かなづかい」

松田正義 「大分県方言の旅、第2巻」

三戸雄一 「動作主義言語と物理主義言語〔日本語と英(米)語〕」「商業英作文典(日本語と英語、比較の実際)」

民間放送連盟 「民間放送用語参考資料」(一)(二)

民俗学研究所 「総合日本民俗語彙」第4巻、第5巻

武蔵野書院 「更級日記総索引」(東節夫編)

文部省 「文部統計要覧」(昭和31年度版)「標準語と方言」「国語問題問答第4集」「国語教育と国語問題」「学術用語集」植字編「外国学術雑誌補充目録」「各国における初等・中等学校の教育課程」

柳田国男 「昔あったてんがな(宮内昔話集)」(水沢謙一)

矢野文博 「打消の助動詞の一系譜」「『現代のかなづかい』私案」

山口大学教育学部 「記念論文集1956」

山梨大学国語教室 「漢字への置き換へによる解釈方法をめぐって」(鈴木一彦)

弥吉光長 「明治前期出版界の動向(東京女子大論集7—1別刷)」

吉田金彦 「図書寮本類聚名義抄、和訓索引」

早稲田大学図書館 「此処やかしこ、そのほか」(早稲田大学国文学会編)「契丹製字の研究」(山路広明)

AMERICAN DIALECT SOCIETY “WASHINGTON WORDS” (CARROLL E. REED) “WA ‘N’ T” (JOHN S. KENYON) “THE ADS COLLECTIONS—ACTUALITY AND POSSIBILITY” (FREDERIC G. CASSIDY)

(2) 逐次刊行物(おもなもの)

愛知県立女子短期大学 「紀要」7輯

青山学院大学英文学会 「英文学思潮」29巻1号
 朝日新聞東京本社記事審査部用語課 「ことば」44号～51号
 明日香路社 「明日香路」8巻4号～12号・9巻1号～3号
 跡見学園 「国語科紀要」5号
 いずみ会 「IZUMI」17号～19号
 茨城大学文理学部 「紀要」6号
 岩手県教育調査研究所 「研究紀要」7集
 岩手大学学芸部附属中学校 「研究要録」2集
 印刷局研究所 「研究所時報」8巻2号～12号
 牛山初男 「信濃」8巻7号
 宇都宮大学学芸学部 「研究論集」1部6号
 宇和島市教育研究所 「紀要」3集
 愛媛国語国文学会 「愛媛国文研究」5号
 愛媛国語研究会 「国語研究」22号～24号
 愛媛県教育研究所 「紀要」21集
 大分県教育研究所 「研究報告」9輯・10輯
 大分大学学芸学部 「紀要」5号
 大蔵省印刷局 「政府刊行物目録」1巻1号・2号
 大阪学芸大学 「紀要」A・4号B・4号
 大阪市教育研究所 「教育研究紀要」23号～25号
 大阪市立大学文学会 「人文研究」7巻3号～11号, 8巻1号・2号
 大阪市立大学文学史研究会 「文学史研究」2号～5号
 大阪女子大学文学会 「女子大文学」8号・9号
 大谷大学 「大谷学報」35巻4号・36巻1号～3号
 岡山大学 「学術紀要」7号
 お茶の水女子大学 「人文科学紀要」8巻1号～3号
 お茶の水女子大学国語国文学会 「国文」5号・6号
 解釈学会 「解釈」1巻1・3・4・7・8号・2巻1号～3号
 香川県教育研究所 「教育研究」10号
 香川大学学芸学部 「研究報告 第1部」7号・8号
 神奈川県教育研究所 「研究叢書」7集・8集
 鹿児島大学教育研究所 「研究紀要」7巻
 鹿児島大学文理学部 「研究紀要」5号
 カナモジカイ 「カナノヒカリ」404号～417号
 関西学院大学人文学会 「人文論究」6巻6号・7巻1号～5号
 関西学院大学日本文学会 「日本文芸研究」7巻4号・8巻1号・2号
 関西大学国文学会 「国文学」15号・16号

観世会 「観世」23巻8号～12号・24巻1号～3号
 関東短期大学 「紀要」3集
 教育技術連盟 「教育技術」11巻2号～13号「教育技術・幼児と保育」2巻2号～
 13号「小一教育技術」10巻3号～14号「小二教育技術」9巻3号～14号
 「小三教育技術」10巻3号～14号「小四教育技術」9巻3号～14号「小
 五教育技術」10巻3号～14号「小六教育技術」9巻3号～14号「中学教
 育—教育技術」1巻2号～12号「社会科研究—教育技術」1巻2号～12
 号
 京都学芸大学 「学報」A8号、9号B8号、9号
 京都大学教育学部 「教育紀要」Ⅱ
 京都大学国文学会 「国語国文」259号～270号
 京都大学人文科学研究所 「紀要」15冊、16冊「調査報告」13号、14号
 京都市教育研究所 「京都の教育」5号～7号、9号
 岐阜大学学芸学部 「研究報告—人文科学—」4号
 九州大学文学部 「文学研究」54輯、55輯
 宮内庁書陵部 「紀要」2号～7号
 熊谷直孝 「みんなのコトバ」1号（滋賀コトバの会）
 熊本女子大学 「学術紀要」8巻1号
 熊本大学教育学部国文学会 「不知火」10号
 熊本大学法文学会 「法文論叢」8号
 クラブ尖塔 「尖塔」26号、28号
 訓点語学会 「訓点語と訓点資料」6輯、7輯
 群馬大学学芸学部 「紀要」（人文科学）5巻
 高知大学 「学術研究報告」3巻、4巻
 甲南女子短期大学 「論叢」1号
 神戸市外国語大学研究所 「神戸外大論叢」30号～31号・33号
 神戸市教育委員会 「研究小葉シリーズ」6号、7号
 神戸市教育研究所 「教育研究展望」19号～21号
 神戸女学院大学研究所 「論集」3巻1号～3号
 神戸大学国語国文学会 「国文論叢」5号
 神戸大学文学会 「研究」11号
 語学教育研究所 「語学教育」232号～235号
 国学院大学 「国学院雑誌」57巻1号～7号
 国学院大学国語研究会 「国語研究」4号・5号
 国語学会 「国語学」24輯～27輯
 国際基督教大学 「ICU教育研究」Ⅱ
 国立教育研究所 「所報」30号～35号「紀要」5—Ⅷ・6—Ⅶ

国立国会図書館 「公報」7巻12号・8巻1号～12号・9巻1号「国際交換通信」
 1号～8号(1956)1号・2号
 駒沢大学 「駒沢史学」5号「研究紀要」14号
 西京大学 「人文」7号
 佐賀大学教育学部 「研究論文集」6集
 作文の会 「小学さくぶん〔初級用〕」34号～39号・43号、44号、「小学作文〔中級用〕」34号～39号・43号、44号、「小学作文〔上級用〕」34号～39号・43号、44号、「中学作文」34号～39号・43号、44号「作文教育」21号～26号・30号、31号
 三省堂出版K・K 「文学・語学」1号、2号
 滋賀大学学芸学部 「紀要」6号
 静岡大学教育研究所 「文化と教育」76号～86号
 静岡大学文理学部 「研究報告—人文科学—」6号
 信濃教育会 「信濃教育」832号～844号
 鳥根大学 「論集」2号(社会)・6号(人文)(教育)
 昭和女子大学光葉会 「学苑」189号～202号
 初等教育研究会 「教育研究」11巻5号～12号・12巻2号～3号
 信州大学文理学部 「紀要」5号
 信州大学教育学部 「研究論集」6号・7号
 精神医学研究所 「業績集」3輯
 聖心女子大学 「論叢」7集、8集
 成城大学文学部 「成城文芸」7号、8号
 清泉女子大学 「紀要」3号
 総理府統計局 研究彙報
 大修館 「英語教育」5巻8号、9号、11号「国語教室」53号～63号「高等国語教室」6号、8号、10号
 千葉大学文理学部 「紀要(文科科学)」2巻1号
 中央大学文学部 「紀要」3号
 中央図書出版社(京都) 「国語教室」1巻3号
 中国語学研究会 「中国語学」49号～59号
 中国語友の会 「中国語文」43号～56号
 電通K・K 「電通広告論誌」Ⅶ号、Ⅷ号
 天理大学国文学研究室 「山辺道」2号
 天理大学宗教文化研究所 「日本文化」36号
 天理大学人文学会 「天理大学学報」18輯～21輯
 天理図書館 「ビブリア」6号、7号
 東京外国語大学 「論集」5号

東京教育大学国語国文学会 「国語」13号、14号
 東京教育大学教育学部 「紀要」1巻
 東京教育大学文学部 「紀要」Ⅷ号、Ⅸ号
 東京女子大学学会 「論集」6巻2号、7巻1号
 東京女子大学比較文化研究所 「紀要」2巻、3巻
 東京大学教育学部 「東大附属論集」2号
 東京大学社会科学研究所 「社会科学研究」8巻1号、2号
 東京大学新聞研究所 「紀要」5号
 東京都立教育研究所 「教科書研究」1号～6号(1956—3) 1号～5号(1956—10)
 「研究シリーズ」24号～27号・29号～33号
 東京都立大学人文学会 「人文学報」3号～15号
 統計数理研究所 「彙報」6号～8号
 同志社女子大学 「学術研究年報」7巻
 同志社大学研究所 「資料目録」3巻3号、4号
 東北学院大学文経学会 「論集」22号～27号
 東北大学教育学部 「研究年報」Ⅳ
 東北大学教育学部附属小学校 「研究紀要」1956
 東北大学文学部 「研究年報」6号
 東洋大学国語国文学会 「文学論叢」4号～6号
 東洋文化研究所 「紀要」8冊～11冊
 徳島県教育委員会 「徳島県教育月報」8巻75号、76号・改題「教育月報」8巻77
 号～80号、82号、83号・9巻84号～86号
 徳島大学学芸学部 「紀要」—人文科学—5巻
 徳島大学学芸学部附属小学校 「紀要」3集
 鳥取県教育研究所 「研究紀要」8集
 富山大学文理学部 「文学紀要」6号
 名古屋大学教育学部 「紀要」2巻
 名古屋大学文学部 「研究論集」5号
 奈良学芸大学 「紀要」5巻1号、3号
 新潟大学教育科学研究会 「教育科学」6巻1号
 日仏文化通信 「日仏文化通信」11号
 日本音声学会 「音声学会会報」90号～92号
 日本近世文学会 「近世文芸」2号・3号
 日本言語学会 「言語研究」29号・30号
 日本女子大学文学部 「紀要」5号
 日本書籍K・K 「教育手帖」59号～68号
 日本新聞インキK・K 「新聞印刷」25号・26号

日本新聞学会 「新聞学評論」 4号～6号
 日本大学芸術学会 「芸術学」 4号
 日本大学世田谷教養部 「紀要」 4輯・5輯
 日本読書学会 「読書科学」 1号
 日本のローマ字社 “ROMAZI NO NIPPON” NO. 50～59
 日本比較文学会 「会報」 5号・6号・8号
 日本文学協会 「日本文学」 5巻4号～12号
 日本文芸研究会(仙台) 「文芸研究」 23集・24集
 日本放送協会 「NHK教養放送」 7号～18号「NHK国語講座」 2巻2号～6号
 3巻1号「文研月報」 59号～70号(61号欠)
 日本民俗学会 「日本民俗学」 3巻4号・4巻1号～3号
 日本民族学協会 「民族学研究」 19巻3・4号, 20巻1・2号, 3号・4号
 日本ユネスコ協会連盟 「ユネスコ新聞」 155号～169号・171号～174号・176号～
 178号・180号
 日本ローマ字会 「ローマ字世界」 491号～501号
 野間教育研究所 「紀要」 11輯
 一橋大学経済研究所 「経済研究」 7巻2号～4号・8巻1号
 兵庫県方言学会 「兵庫方言」 1号～4号
 弘前大学人文社会学会 「人文社会」 10号
 広島女子短期大学 「研究紀要」 7集
 広島大学文学部 「紀要」 9号～11号「国文学攷」 15号・16号
 広島中世文芸研究会 「中世文芸」 8号～10号
 福岡大学国語国文学会 「国語国文学」 5号, 6号
 福岡学芸大学久留米分校教育研究所 「研究紀要」 7巻
 福岡大学学芸学部 「論集」 7集
 文学研究会 「文学研究」 13号, 14号
 米国大使館文化交換局 「アメリカーナ」 2巻4号～12号・3巻1号～3号
 方言研究同好会(高知県中村市) 「幡多方言」 2号
 法政大学日本文学研究会 「文学研究」 4巻8号
 北海道学芸大学 「人文論究」 15号
 穂波出版社 「実践国語」 17巻185号～194号・18巻195号～197号
 万葉学会 「万葉」 19号～22号
 三重県方言学会 「三重県方言」 2号・3号
 三重県立大学 「研究年報」 一第一部一 2巻2号
 武蔵大学学会 「武蔵大学論集」 5号～7号
 武蔵野文学会 「試論」 1号, 2号
 明治大学図書館 「増加書目録」 59号～64号

望月久貴 「東京学芸大学研究報告」7集
 文部省 「初等教育資料」71号～83号(75号欠)「中等教育資料」5卷4号～12号・
 6卷1号～3号「文部時報」944号～952号
 文部省調査局統計課 「教育統計」40号～45号「指定統計」13号・15号・83号「文
 部統計速報」78～81号
 山形県教育研究所 「山形教育」57号～60号
 山形大学 「紀要」—人文科学—3卷3号
 山口大学教育学部 「研究論叢」5卷2号・6卷1号・2号
 山口大学文学会 「文学会誌」7卷2号
 山梨大学学芸学部 「研究報告」7号
 立正大学文学部 「論叢」6号
 立命館大学人文学会 「立命館文学」129号～141号
 立命館大学日本文学会 「論究日本文学」5号
 竜谷大学竜谷学会 「論集」351号～353号
 ローマ字教育会 「ことばの教育」78号～86号
 和歌文学会 「和歌文学研究」1号、2号
 和歌山大学学芸学部 「紀要」—人文科学—6号
 早稲田大学教育学部 「学術研究」5号
 早稲田大学国文学会 「国文学研究」13輯・14輯
 SEVER POP “ORBIS” VOL V NO. 1～NO. 2
 UNIVERSITY OF WASHINGTON “MODERN LANGUAGE QUARTER-
 LY” VOL 17 NO. 1～NO. 4
 UNIVERSITY OF LONDON “BULLETIN OF THE SCHOOL OF ORIEN-
 TAL AND AFRICAN STUDIES VOL 18 NO. 1, NO. 2
 (高橋・芳賀)

庶務報告

A 庁舎および経費

(1) 庁舎

所在 東京都千代田区神田一ツ橋 1ノ1

木造モルタル塗, 2階建 建坪 本館 321.709坪

軽量不燃書庫 30.501坪 閲覧室 13.985坪 計 366.195坪

(2) 経費

昭和31年度予算 総 額 26,633,000円

人件費 17,788,000円

事業費 8,845,000円

B 評議員会

会長 { 柳田国男 (32. 2. 4会長ならび
に評議員を辞任) 副会長 { 山崎匡輔 (32. 3. 26副
土岐善曆 (32. 3. 26就任) 波多野完治 (32. 3. 26就任)

伊藤忠兵衛

円地文子(32. 2. 4就任) 金田一京助

倉石武四郎

桑原武夫

颯田 琴次

沢登 哲一

東条 操(32. 2. 4辞任) 時枝 誠記

土居 光知

中島健蔵

中島 文雄(32. 3. 16就任)

永田 清(32. 2. 4就任)服部四郎

古垣 鉄郎(31. 9. 18辞任)

松方 三郎

松坂忠則

宮沢 俊義(32. 3. 16就任)

山崎 匡輔

C 組織と職員

(1) 予算定員

教 官 32 事務職員 16 合計 48

(2) 組織および職員

	職名	氏名	備 考
国立国語研究所 第1研究部 話しことば研究室	所長	西尾 実	
	部長	岩淵悦太郎	
	主任	大石初太郎	
		飯豊 毅一	
		宮地 裕	31. 4. 1採用 西京大学から
		吉沢 典男	
	臨時筆生	樋口きよ子	
	"	染谷 佳子	31. 9. 14辞職（新姓井崎）
	"	栗原 徳子	31. 9. 1 採用 32. 3. 31辞職
書きことば研究室	主任	林 大	
		斎賀 秀夫	
		水谷 静夫	
		石綿 敏雄	
	臨時筆生	橋本 圭子	
	"	高木 翠	
	"	岡本美奈子	
	"	松垣 玲子	32. 3. 31辞職（新姓遠藤）
	"	広吉 玲子	31. 7. 12辞職（新姓近藤）
	"	西尾英美子	
方言言語研究室	主任	柴田 武	
		野元 菊雄	
		上村 幸雄	
		徳川 宗賢	
	臨時筆生	山下 道代	31. 9. 29辞職（新姓栗沢）
	"	石塚 房江	31. 9. 17採用 32. 3. 16辞職
第2研究部 国語教育研究室	部長	興水 実	
	主任(兼)	興水 実	32. 3. 31主任の併任を解除する
	主任	芦沢 節	32. 3. 31発令
		高橋 太郎	
		村石 昭三	
	臨時筆生	根本今朝男	
	"	川又瑠璃子	
	"	久保 陽	31. 10. 9辞職
言語効果研究室	主任	平井 昌夫	31. 4. 30共立女子大学に転出

	職名	氏名	備 考
第3研究部	主任	永野 賢 林 四郎 渡辺 友左	31. 5. 1発令
	臨時筆生	高森美保子	
	部長 (事務取扱)	西尾 実	31. 6. 1部長事務取扱を免ずる。
	部長心得	山田 巖	31. 6. 1部長心得を命ずる。
	主任(兼)	山田 巖	
		見坊 豪紀	32. 1. 1岩手大学から配置換
	(兼)	広浜 文雄	
	(兼)	市川 孝	
	(兼)	進藤 咲子	
	臨時筆生	上村 泰	
	"	田中 喜一	
	資料調査室	室長(併)	
	調 査 室	主任(兼)	
		主任	
		松尾 拾 村尾 力 広浜 文雄 市川 孝 進藤 咲子 大久保 愛	31. 6. 1文部省調査局国語課から配置換
	編 集 室	主任	
		上甲 幹一 高田 正治 織田 澄	
	臨時筆生	"	
	"	吉村 輝一	
	"	北脇 敦子	31. 4. 2採用 31. 4. 21辞職
文 献 室	主任	高橋 一夫 有賀 憲三 (兼) 芳賀清一郎	
	臨時筆生	樋口 三男	31. 6. 18辞職
	"	大塚 通子	
	"	寺尾 敏明	
	兼任所員	遠藤 嘉基	京都大学教授
	"	藤原 与一	広島大学助教授
	"	浅井 恵倫	金沢大学教授
	"	佐藤喜代治	東北大学教授

	職名	氏名	備 考		
庶 務 部 庶 務 課	部長 課長 課長	細井 勇夫			
		真取 正二	31.9.1国立教育研究所に配置換		
		三島 良兼	31.9.1文部省大学学術局学生課から配置換		
		名古屋恒太郎	32.3.26 文部省初等中等教育局保健課から配置換		
		鈴木 篁二			
	臨時筆生	芳賀清一郎			
		増山 治子			
		日吉 厚子			
		会 計 課	課長	黄木得二郎	
				伊藤 伸二	
鈴木 亨					
三浦 清伍					
渋谷 正則					
臨時筆生	斎藤 静志		32.3.26 文部省初等中等教育局保健課に配置換		
	西山 博				
	伏見 と志				
	江頭 健一				
	吉田芳太郎				
	金田 とよ				
	斎藤美智子	31.12.28辞職			
	加藤 雅子	32.1.26採用			

D 内地留学生受入れ

全国都道府県から内地留学生を迎えて、研究の便をはかっている。次にその氏名・研究題目などを掲げる。

氏名	学校	研究題目	期間
富田 博	東北大学教育学部	話しかたの指導段階と	昭和31.10.1から
	付属小学校教諭	指導法について	〃 32.3.15まで
相沢正昭	千葉県君津郡君津	作文教育における表現	昭和31.4.6から
	町立真元小学校教諭	文法について	〃 32.3.15まで
土屋 暢	千葉県木更津市立	小学校における文法指	昭和31.4.10から
	西清小学校教諭	導について	〃 32.3.15まで

布留川 実	千葉県東金市立東 金小学校教諭	読解指導における文法 指導をどのようにした らよいか	昭和31. 11. 1 から 〃 32. 3. 15まで
-------	--------------------	----------------------------------	---------------------------------

E 日 誌 抄

1956. 6. 7～8 第15回文部省直轄研究所並びに国立大学付置研究所長会議（日本学術会議で）
6. 12 ナポリ大学内東洋語学校長マルチェロ・ムッチョーリ氏研究所
見学
6. 19 第32回国立国語研究所評議員会
議事
1. 昭和31年度の研究計画の概要について報告
 2. 昭和31年度地方調査員の承認
 3. その他
9. 21 ミシガン大学フリース氏夫妻研究所見学
10. 11～12 第9回文部省直轄研究所並びに国立大学付置研究所事務協議会
（東京大学生産技術研究所で）
10. 18～19 文部省直轄研究所並びに国立大学付置研究所第3部所長会議
（神戸大学経済経営研究所で）
11. 12 第4回地方調査員全国協議会（一橋講堂で）
11. 20 桐生市教育会国語研究部員40名研究所見学
11. 22 文部省調査局長福田繁氏社会教育局長に転じ、後任として日本
ユネスコ国内委員会事務局次長北岡健二氏が就任
12. 8 第4回国立国語研究所講演会（宮城県教育委員会・仙台市教育
委員会と共催）
ところ 仙台市商工会議所
題目
ことばの生活と文化

国立国語研究所長 西尾 実

言語経験と国語教育

国立国語研究所員 興水 実

話しことばの構造

国立国語研究所員 大石初太郎

最近の国語研究

国立国語研究所兼任所員 佐藤喜代治

12.11 第33回国立国語研究所評議員会
議事

1. 研究事業の中間報告
2. その他

12.20 国立国語研究所創立記念講演会
ところ 国立国語研究所
題目
国語研究者に望む

評議員会長 柳田 国男

1957. 2. 21～23 昭和31年度文部省直轄研究所並びに国立大学付置研究所第3
部会事務協議会（東京大学史料編纂所で）

3.26 第34回国立国語研究所評議員会
議事

1. 評議員の半数改任および欠員補充の経過報告
2. 会長，副会長の選挙
（会長に土岐善麿氏，副会長に波多野完治氏が当選）
3. 新年度の事業計画

— 国立国語研究所刊行書 —

昭和24年度	国立国語研究所	年報	1	
昭和25年度	国立国語研究所	年報	2	
昭和26年度	国立国語研究所	年報	3	
昭和27年度	国立国語研究所	年報	4	
昭和28年度	国立国語研究所	年報	5	
昭和29年度	国立国語研究所	年報	6	
昭和30年度	国立国語研究所	年報	7	
国立国語研究所報告1	八丈島の言語調査			
国立国語研究所報告2	言語生活の実態 —白河市および付近の農村における—	(秀英出版刊)	¥ 300.00	
国立国語研究所報告3	現代語の助詞・助動詞 —用法と実例—			
国立国語研究所報告4	婦人雑誌の用語 —現代語の語彙調査—			
国立国語研究所報告5	地域社会の言語生活 —鶴岡における実態調査—	(秀英出版刊)	¥ 600.00	
国立国語研究所報告6	少年と新聞 —小学生・中学生の新聞への接近と理解—			
国立国語研究所報告7	入門期の言語能力			
国立国語研究所報告8	談話の実態			
国立国語研究所報告9	読みの実験的研究 —音読にあらわれた読みあやまりの分析—			
国立国語研究所報告10	低学年の読み書き能力			
国立国語研究所報告11	敬語と敬書意識			
国立国語研究所報告12	総合雑誌の用語(前編) —現代語の語彙調査—			
国立国語研究所資料集1	国語関係刊行書目(昭和17~24年)			
国立国語研究所資料集2	語彙調査 —現代新聞用語の一例—			
国立国語研究所資料集3	送り仮名法資料集			
国立国語研究所資料集4	明治以降国語学関係刊行書目	(秀英出版刊)	¥ 300.00	
国立国語研究所共著	高校生と新聞	(秀英出版刊)	¥ 280.00	
日本新聞協会共著	青年とマス・コミュニケーション	(金沢書店刊)	¥ 280.00	
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和29年版)	(秀英出版刊)	¥ 450.00	
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和30年版)	(秀英出版刊)	¥ 600.00	
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和31年版)	(秀英出版刊)	¥ 450.00	
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和32年版)	(秀英出版刊)	¥ 480.00	

昭和32年12月

国立国語研究所

東京都千代田区神田一ツ橋1—1

電話九段(33)代表4295

UDC 058:495.6
NDC 810.5

920

1956~1957

ANNUAL REPORT OF NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Research from April 1956 to March 1957

Research in Sentence Patterns of Colloquial Japanese

Research on Vocabulary in Cultural Reviews

Research on Vocabulary in the Various Magazines

Semantical Analysis of the Most Frequent 30 Verbs

Preparatory Survey for Linguistic Maps of Japan

Compilation of Dialect Dictionary of Syuri, Ryûkyû

Study of Language Development of School Children

Experimental Study on Readability of Chinese

Character used in Newspapers

Study on the Japanese Language of the Meizi Period

Research in Special Other Problems

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

KANDA-HITOTUBASI, TIYODA, TOKYO